

古 代 九 州 物 語

卑弥呼と台与の姿を求めて

伊 藤 久

平成二十二年一月十日

デジタル化：シニアネット久留米筑：筑後デジタルアーカイブ研究会

連絡先： snkpost@view.ocn.ne.jp

目 次

	はじめに	3
第一話、	福岡県三井郡「北野町史誌」より	5
第二話、	稲作の伝来と倭人の渡来	2 0
第三話、	徐福渡来と神仙思想の広まり	2 7
第四話、	天孫族の渡来	4 1
第五話、	出雲の国譲	5 5
第六話、	卑弥呼の邪馬台国	6 1
第七話	葛城氏の東遷	7 5
第八話、	ニギハヤヒ尊の東遷	8 2
第九話、	台与、宇佐・丹波を経てヤマトへ	9 1
第十話、	神武・神功東征神話とその実像	1 0 8
第十一話、	大和政権樹立後の北部九州	1 3 4
第十二話、	高良大社の歴史と役割	1 6 9
(附表)	古々代の動きとその推定年代	1 8 6
	あとがき	1 8 9
	引用参考文献	1 9 1

はじめに

私の故郷、九州の三井郡北野町が平成3年に「北野町史誌」を出版され、関係先に配布されたものの一部を、ごく最近入手しました（現在は久留米市です）。その最初の方に目を通していているうちに、オヤッと思い、すぐに引き込まれてしまいました。丁度そのころ、哲学者梅原猛氏の「天皇家のふるさと日向をゆく」や、西川正行氏の「卑弥呼はどこにいたのか」など古代九州の歴史探訪本を読んでいた頃で、北野町史誌の内容の一部とつながりがあるなとヒラメイタからです。

子供の頃の遺跡に対する意識はヒドイもので、たくさんある近所の遺跡も遊び道具の一つとしてしか思っていませんでした。生家の近くにある^{ひるお}日比生の「蚊田宮跡」碑だろうが、^{とよひめ}豊比咩神社だろうが、すべて格好の遊び道具・場所だったのです。今振り返ってみると子供だから当然だったとはいえ、その後も何の関心も示さなかったことに今になって少し後悔の念を感じています。

私自身、大学卒業後は九州をはなれ、東京、それから外国へと目が移り、次から次に新しい土地のことに気をとられ、故郷を振り返ることをしていませんでした。

似たようなことは多くの九州出身の人に当てはまると思われますが、このまま放っていてよいわけはありません。無関心の状態が今後もズーッと続き、誰も故郷の大切な歴史を振り返らなくなると、失ってしまったものを取り返すことは大変な仕事になります。

本文に記しているとおり、九州にも素晴らしい歴史がたくさんうずもれています。それを改めて思い起こし、古を今の人に、そして今からの人に伝えることを始めるべきだと思います。そのような気持ちからこの稿を立てることにしました。

私は歴史家でもないしその道の専門家でもありませんが、長く住んでいる千葉県の船橋市を中心に房総の古を追っかけ、一つの本に纏めたことがあります。今回はそれを故郷の九州に的を絞ってみました。

そんなわけで、本文は古代の九州の歴史を出来るだけ中立な立場で追っかけることにしました。内容についてのご批判は甘んじて受けます。なお、文の構成として時々横道にそれ私事に関する余計なことを書いているところがあります。本文にあまり関係のないそれらのことは余興であり、一つの息抜きです。

本文出だしの「北野町史誌」の項は、きっかけを作ってくれた資料ですので、第一部のみから抜粋して引用しています。北野町史誌そのものは膨大なもので、古代から現代にいたる細かな歴史上の事蹟の編集・編纂がなされた本格的な郷土史資です。その全部を紹介することは目的に反しますので省略しますが、我が郷土もなかなかしゃれたことをやるな

と感心している本です。機会があったら一度手にとって見て下さい。

この「北野町史誌」を手がかりに、古代九州についての物語を描いてみました。それは筑後あるいは九州の範囲を超え、日本各地に立ち入るものになりましたが、一つの夢物語としてお読みいただければ幸いです。

大まかなシナリオは、紀元前200年ごろ、中国から有明海經由佐賀に上陸した徐福一団数千名の子孫が、現在の佐賀県に拠点吉野ヶ里の集落を作るとともに、筑紫平野を取り巻く山々の裾野にいくつもの集落をつくり、稲作地陣取り合戦の先手を打っていったこと。そして、その子孫は秦の時代の道教の教えをもとに縄文人を従え、交婚しながら各地に稲作を広めて行き、筑紫平野内陸部のみならず現在の博多の地にも拠点をづくり、さらに海を越え出雲、丹波、紀伊半島にまで拡大していった。

一方、徐福渡来から100年ほどたった紀元前100年ごろからは、九州の玄界灘一帯、西は松浦半島から東は関門海峡にいたる北部九州、また関門海峡を回って周防灘の大分県にいたる地域に、朝鮮半島から騎馬民族系、あるいは中国内紛から押し出された民族が多数押し寄せてきた。その中の一つが物部族で遠賀川一帯に拠点を置き大勢力に成長する。それに引き続き宗像族が天皇家の祖先天孫族を擁立しながら博多湾の香椎から東の宗像の地にかけて上陸する。紀元前後のころである。

徐福一派の佐賀・筑紫平野の小国集団と、朝鮮よりの渡来団の二つの勢力の拡大に伴って、北九州各地で摩擦を引き起こすようになる。その最初の摩擦の原因となった動きは、遠賀川物部族と宗像族が、天孫族を擁して南の筑紫平野へ移動を開始したことであった。

彼らは、遠賀川を遡上し、その源流部の山を越え、筑後平野北東部の甘木に達し、さらに小石原川を下り筑後平野周辺部の耳納山麓、久留米、八女そして三潞へと進出を図った。つまり、先着の徐福集団がすでに定住している筑後平野の西南部一帯を避け、東側および南側を掠め取っていったのである。このときの摩擦が魏志倭人伝に最初の倭の乱として記録に残されている。その後、三潞に進出した宗像・物部族はさらに南へ侵攻しようとする。しかし、熊本地方に先住していた狗奴族の反撃・逆襲を受け、筑後平野南部一帯は戦争状態になる。これが次の時代の倭の大乱である。

この古代九州物語は上述のシナリオをベースにしながら、日本書紀・古事記にある神話を部分的に取り入れ、7世紀の白村江敗戦で九州勢力を含めた倭が完全に打ちのめされる頃までを取り上げたものです。内容は物語の域を出ないものですが、かさばるものとなりました。話の大筋のみを追われる方は、ここに表示しているように、青色で印刷した文章のみ拾い読みすれば大体の筋はわかるようになっています。また、最後につけた年代表や、「あとがき」に書いた「纏め」も参考になると思います。

第一話、福岡県三井郡「北野町史誌」より（第一部の抜粋）

1. 海水を湛えた筑紫の海

縄文前期の両筑平野は有明の海が深く湾入した入江であった。弥生時代には両筑平野は各所に水を湛え所々に沼沢があり、葦茂りその中に島が点々と散在してその島に原住民が次第に住み着くようになった。

郷土の地名に海にちなんだ名称が多い。高島、塚島、千代島、大島、中島、近隣では八丁島、勿体島、小郡市内には津古、干潟、乙隈、吹上、松崎、大崎があり筑紫の海に点在した古代の島々を連想するのである。小郡市内の海岸であった海辺の縁では昔の遺跡や貝塚が発掘され古代の海辺を示している。

赤司八幡宮の止菅比咩縁起には「ここ蚊田の宮は、その昔、柳川海より海水が連続して筑後と筑前を隔て当社の西まで侵入して北背に廻り、筑前上座郡（朝倉郡朝倉町付近）まで入海に御座候」との記録がある。

また小郡市上岩田の老松宮縁起には、神功皇后が山門の田油津媛を討伐の際、秋月から夜須を通り津古に出て舟で宝満川を下られ岩田の津に舟を着けられたのが老松宮の不動岩となっている。また赤司八幡宮の止菅比咩縁起には同じく神功皇后が田油津媛征伐のため、水沼の君が軍船を仕立て大城の蚊田行宮（蚊田は潟に通ず）に迎え山門に出向かれ目的を果たされたとなっている。蚊田行宮は神功皇后が筑紫西下の時の仮のご座所で今の行在所である。

古代の郷土三井平野は有明の海が侵入し、筑後川に沿う朝倉郡南部から耳納山脈北山麓の浮羽郡一帯の地域、北は筑紫野市西小田以南の立石、三国地区宝満川沿いの平野は海であった。

この内海は、久留米市篠山城高地と対岸三養基郡千栗高地によって狭隘な地峡をなしこれより以東の内海は毎年起こる洪水によって、筑後川上流日田盆地や宝満川上流など多量の土砂を流出して沖積層を作り次第に陸地と化し筑紫の海も筑紫平野に変わっていった。

毎年 5 月 7 日から 3 日間の久留米水天宮のお祭りは、一昔前まで近在農民にとっては年に一度の楽しみの日であり、老若男女ことごとくこれに参加するというのが慣わしになっていた。しかし、久留米市内の人ならいざ知らず、筆者の生家から水天宮まで直線距離で 10 キロ以上あり、どうやってそこまで行くか、その頃すでに西鉄甘木電車も走っており、これを利用するというのが大方であったが、極端な場合徒歩で水天宮におまいりする人もいたようである。

水天宮参りで今でも忘れられない思い出は、数家族一緒に船にのり筑後川を下り、水天宮近くで降り、お参りが終わればまたその船に乗って戻ってくる船旅のことである。

大人にはお酒の用意もされていたようだが、記憶しているのは自分のことばかりで大人のことは全く記憶に残っていない。とにかく、食べ物を一杯積み込んで、近所の子たちと一緒に、船旅をすることが楽しかったのである。

今振り返ってみると、その船は砂利運搬船だったようで、大きさは海に浮かぶ舢舨のように結構な大きさで、頑丈に出来た船だったと思う。筑後川は阿蘇や九重の山々の水を集め、山岳地帯を抜けた後、浮羽の地で筑後平野に顔を出し、そこからこの北野町辺りまでの流れは速く、その流れに乗った砂利が、辿りつき川底に一杯たまっていたのである。河船はその砂利を集め下流の久留米方面へ持ち運んでいたものであろう。

北野町辺りで急流が緩慢な流れに変わるのは、ここが低地だったからである。後述の地質学者の説明の通り、太古の昔ここは一大窪地の自然のダムがあったようなもので、長年かかって上流からの砂礫で埋め尽くされ、ダムが次第に陸化していった所なのである。そんな地形だから、流れはこのあたりで緩やかになり、砂利運搬船の発着所として最適だったのであろう。

水天宮の大祭の時には、筑後川の上流下流から河船で大勢の人が参拝したので、水天宮周辺の川辺には夥しい河船が停泊していた。神幸祭も船で、みこしは境内下の潮井場から御座舟に移され、供奉船十数艘を従えて瀬下町下浜（古くは筑後川河口の大川市榎津）にまで至っていたという。

水天宮社は水神で河童封じの靈験ありと信じられ、独特の護符「五文字」（原型は五大明王の種子で梵字）をひょうたん形の容器に入れ、子供たちの首にかけさせる風習があった。また、安産の信仰も厚く、神社から腹帯を授けることも多い。そして大変参詣人の多いお宮であった。東京の水天宮は有馬藩の守り神として江戸時代に久留米から招じられたものである。

2. 邪馬台国と高良山

高良山物語の中には、高良は大集落を意味する朝鮮語「コムラ」のなまりとしてある。その当時支那朝鮮と交通して文化の進んだ地域の名称と言われている。邪馬台国の付近には二十一国が存在し各々王の支配下にあった。中国の文献で国は郡や村を意味し王はその支配者である投馬国（ツマの国）上妻であろう。その王の所在地を高良山とする説もある。巴利国、御原とし躬臣国、櫛原等とする説もある。いずれも支配者の居所を決める条件としては、左右前後見張りがきき交通が至便であり、この条件にかなうとして高良山があがったことはうなずけるところである。

邪馬台国の女王卑弥呼、帯方郡に使いをおくり魏の明帝に朝献を求めたところ、239

年12月卑弥呼に対し「汝を以って、親魏倭王となし金印紫授をゆるす」と、詔書があった。卑弥呼が死去すると、直径百余歩の巨大な古墳墓が作られ、のち男王を立てたが国中服せず宗女壺与年13歳で王となり国中遂に定まると倭人伝には述べられている。

耳納山の名の由来

高良山は東西に長く伸びる耳納山脈の西端を形成する310メートルほどの山である。東の鷹取山のところは862メートルと、東にいくに従い高い地形となっている。

筑後平野のど真ん中に位置する筆者の生家から眺めれば、まるで屏風のように東西に立ちはだかっている。雄大で美しい眺めである。耳納山脈と呼んでいるが正式には耳納山地のことである。

私自身、時たま帰郷する時、まず、福岡空港から高速バスで久留米へ向かう。耳納山脈は二日市を過ぎるあたりから姿を現し始める。そして味坂あたりから見る姿が格別で、黒々と屏風のように連なる雄大なその姿をみると、「ホッ」とし、ようやく故郷へ帰りついたな一という実感がわく。

この耳納、即ち耳を納めるという語源であるが、誰の耳か？には、いくつかの伝説がある。

- ① 神功皇后が連れてこられた新羅人の耳を納めたという説。
- ② 山麓の石垣「観音寺」(田主丸)に夜ごと現れる化け物、顔は牛、体は鬼、を、和尚の念仏と村人の総力で退治し、その耳を納めたという説。
- ③ 遠い陸奥の国で、源義家と戦う安倍貞任の末っ子は、はるばるこの地で反旗を翻した。押し寄せてきた源氏の兵は「降伏せよ。貞任は死んだぞ!」と呼ばわった。「そんなことはない!あの父上が負けるはずはない」と降伏しない城主に、貞任の耳が届けられた。「今はこれまで・・・」と、自刃した城主を囲んで殉じた家臣が3000余騎というが、この貞任の耳を納めたので耳納山という説。

いずれにしても、山紫水明の筑後に秘められた伝説である。

この耳納山の中腹、それも実家の位置から真南の方向に曹洞宗観興寺がある。小さい頃から母親に連れられよくお参りしたものである。自分の生家は代々浄土宗の門徒であって曹洞宗ではない。筑後川沿いの善導寺町に浄土宗大本山「善導寺」があるせいか、筑後平野一円はほとんどが浄土宗門徒である。それなのに何故曹洞宗の寺にわざわざお参りしていたのか、今でも不思議である。

それにしても、観興寺まで登り、耳納山の中腹から眺める筑後平野は雄大であった。それが春の季節ともなると、一面が黄色の菜の花の海となり、壮観そのものであった。

3. 止誉比咩縁起に学ぶ

赤司八幡宮は醍醐天皇延喜二年（902）、豊比咩神社に八幡大神を合祀したことが止誉比咩縁起に述べられている。豊比咩神社について延喜式神名帳には次のように記されている。「筑後国四座（大二座、小二座）御井郡大二座小一座、高良玉垂命神社（名神大）豊比咩神社（名神大）」とあり、高良玉垂命神社と並び立つ名神大社であったことが述べられている。高良山文書には「嘉祥三年十二月奉授従五位下より昇進し寛平九年十二月奉授正四位上」となっている。

こうして平安時代には豊比咩神社は官社に列する名神となり、中央からもたびたび勅使の差遣がなされていた。また文徳神録に「白河院応徳二年五月左弁官下筑後豊比咩大神者九州二島惣鎮守不可混諸社者也 仍神領寄八十庄 宣祈聖廟安寧」「堀河院御宇長治二年勅使豊比咩神社官号与正一位」の記録がある。筑後国豊姫大明神の神託として「益人よ心徳は神徳の守るところにして万宝のよる所なり よく思へ なべての人は直き心の底清み誠の海の波もなく静かにあらんかしと思うなり」とあることから、筑後はおろか九州にかくれなき大神であった。

こうも盛んな豊比咩大神も中世に至って神社も衰微の運命にあった。近世に真鍋仲庵はその古跡すら忘れて祭祀も中絶していることを嘆き次のように述べている。「豊比咩神社につきて愚案するに世も移り人信ぜざるに至る。故に其所を失ひて故跡を存せず近国寺社の有司より人民をして此神の所在を尋ねしも其の神名を知る者なし、況んや神地に於いてをや」

また杉山正仲は筑後志に豊比咩神社のことを述べ、「今按ずるにこの神社も中世退転してその事蹟詳ならず。一説に御井郡上津荒木村に小祠あり乙姫社といふ 是即ち豊比咩なり云々。或人曰く 御井郡

塚島村に大石を以てて造築せし大塚あり 往古より里民これを止誉比咩宮と称すと。又同郡大城村の内、蛭尾（現在の日比生）と称する処に大石二個あり里俗これを豊比咩の神という 何れが是なるを知らず 豊比咩の社は正史に歴然たりといえども今其の蹤（足跡）考ふべきもの無きこと慨嘆に余りあり」とある。

近世に至っては神名の所在はわからなくなり、かつては高良玉垂宮と並び立った名神も「今いずこ」の有様であった。延喜二年（902）高良山僧正寂源によって高良山内に豊比咩神社再興の請願が藩に提出された。高良山古図に豊比咩神社の神域ありとし、また天安年間高良玉垂宮と豊比咩神社正殿が失火にあったことは二神が同所に祀られていたことを証明するものともなった（大城村郷土読本、止誉比咩縁起より）



注

- (一) 豊比咩神社は、延喜式神名帳の頭注に「豊姫一名淀姫は八幡宗廟（応神天皇）の叔母、神功皇后の妹也」といい、三代実録には貞観元年（859）豊比咩社は官社に列せられた。しかしこの神社も中世に退転しその間の実蹟は詳かではない。現在の豊比咩神社は村民の手によって再建されたものである。
- (二) 日比生の銅鉾は豊比咩神社境内から発掘され、筑後川沿岸には珍しい文化の資料である。

当時博多湾沿岸に本拠を持つ部族の最大の誇りは銅剣、銅鉾を所持することであった。大陸の文化をいち早く手にした部族や豪族の権威と地位の代名詞ともなっていた。神話につながる由緒伝説を秘める豊比咩神社の境内から銅鉾が発掘されたことは、誠に奇縁である。弥生時代にこの地方では、銅鉾を部族の権威の象徴として祭事に敬い信じ祭っていたことを想像しながら銅鉾を見るとき、懐古の情は二千有余年の昔にかえるのである。

日比生と赤司の豊比咩神社、そして高良山の豊比咩神社

話はややこしいが、三井郡内に三つの豊比咩神社があった。上述の通り「北野町史誌」に豊比咩神社と紹介されているのは、赤司八幡宮のことで日比生・豊比咩神社のことではない。さらに高良山にももう一つ豊比咩神社がある。表示は止^と誓^よ比^ひ咩^め神社であったり豊比咩神社で、これも紛らわしい。

赤司の八幡宮は西鉄甘木線大城（おおき）駅から北へ500mほど行ったところの三井郡大城村赤司にある。この地は、日比生と同じ大城村の一集落であり、一つの村の中に二つの豊比咩神社があることになる（今では赤司の方は八幡宮と呼ばれているが）。赤司運動広場の隣で、子供の遊び場としては最適のところ。東西の道路の西側から幾つかの鳥居が続き、参道を進むと、西向きの社殿がある。

一之鳥居らしき地点から境内入口までの距離を考えると、往時の広さがうかがえる。日比生の豊比咩神社の比ではない。現在はいずれも久留米市となっているが、もともとはこれらの地域には大城村、金島村、弓削村などがあり北野町と合併し、さらに、久留米市になったのであり、村名はなくなってしまったが、赤司も日比生も旧大城村の一集落だったのである。

赤司集落には平安時代、赤司城が築かれ、その城を中心に一帯は殷賑を極めていたという。城主は、草野氏を祖とする赤司氏である。もしかすると、この赤司氏が距離にして3ー4キロほどしか離れていないところに古くからある（銅剣の時代）日比生の豊比咩神社

を、自分の城の近くに招聘したのかもしれない。

その赤司神社の社伝によると、延長2年（924）11月の鎮座。配祀として、高良大神、『福岡県神社誌』では武内宿禰となっている。当時は同一神と考えられていた。赤司城主の崇敬篤かった神社だが、度々の災禍にあったと社伝にある。明治6年、村社となっている。

『赤司八幡宮縁起』には、元は豊比咩神社だったが、延長2年に八幡宮を合祀し、戦国時代の終わりに社名を八幡と変えたと記された。境内の右手から社殿の後方に境内社がいくつかある。天満神社、大三輪神社、水神社、少彦名神社、祇園社などなど。境内の中央、参道の横に、猿田彦大神の石碑や、恵比須像がある。

草野氏というのは、出自まちまちで、始祖を奥州の安倍氏とするもの、あるいは藤原氏とするものの二者がある。後者によると藤原鎌足15世の孫、文時が大宰府にくんだり、その子文貞は肥前守となり高木に居住して高木氏と称し、文時の子貞宗は筑後川北之荘（北野町）にあつて北野次郎兵衛尉を名乗り、永経は山本郡草野にあつて草野氏と称し、二条天皇長寛二年（1164）山本郡吉木に竹井城を築きそこに移った。

赤司八幡宮の豊比咩神社縁起によれば、草野守永の二男赤司新蔵人藤原永真が赤司姓を名乗り、赤司城を築いてここに拠り、赤司氏の祖となり七代赤司城を相続し、永明に至り天正年中大友宗麟のために敗北し、肥前に移ったとある。

戦国時代になると、大友氏の制圧するところとなったが、竜造寺氏が力をつけ、反大友の行動を起こすと、地元の小豪族の間にも影響して、所領の奪い合いが続き、その後の赤司城も赤司・高橋・戸次・筑紫・竜造寺・秋月氏と、領主がめまぐるしく交替した。

赤司の豊比咩神社は武士の信仰の厚いところで、草野氏は勿論、豊後（大分）の大守である大友氏の崇拝するところでもあった。大友氏はこの地の利、すなわち、豊後・筑前・筑後・肥前を見守る地として重視していた。豊比咩神社に戦勝祈願はもとより、境内に城郭を構え、堀を設け、鎮衛所として将を駐留させていたという。



銅鉾

残念ながら残っている記録は、以上のように近世の赤司豊比咩神社のことばかりで、日比生の豊比咩神社のことではない。しかし、なんと言っても日比生の神社には銅鉾が埋ま

っていたのが強い。

ひろおとよひめ 日比生の豊比咩神社

私が育った北野町宮司の集落は、その背後に筑後川が堤防一つ隔てて悠然と流れ、四周を山々に囲まれた大平野のど真ん中で、当時、特に冬の雪景色の朝など、平野一帯がキーンと静まり返る夜明けなど、耳納連山の麓、家から7-8キロは離れているところを走る久大線の汽車の響きがあたかも目の前に聞こえるという、大変静かでのどかな田舎でした。



日比生の豊比咩神社
と正面鳥居

そして裏の土手の上に立つと、はるか東の空にはひと際高くそびえる英彦山の頂、そのやや北方に小さなトンガリ帽子のような古処山が望めるといったところでした。

ところが、偶に帰る最近の田舎は、田圃にはビニールハウスがやたらと目につき、堤防上の道路は車で一杯と、なんとなく落ち着きがない景色に変わり果てています。

小さい頃よく泳いだ農業用水の小川は今では三面コンクリートの護岸に変わり、川の中には魚はおろか生き物の姿は何も見えない。泳ぎ場の一つであった「ひろんまえ」（日比生部落前のことを“ひろんまえ”と呼んでいた）には当時「蚊田宮」跡を示す石造りの記念碑が立っていたが、残念ながらこれも見当たらなくなってしまった。（その石碑は「北野町史誌」に写真入りで紹介されている。それが今は跡形もない！）



鳥居額の菊紋

宮司集落と日比生集落はともに約15軒、先ほどの農業用水の線で一応区切られているが、実態はほぼ一つの部落と言ってよいほどに寄り添った集落である。その日比生の「豊比咩神社」（止誉比咩神社）は宮司の私の生家から500メートルほどしか離れておらず田圃越しにはっきりと望むことができる。この神社こそ邪馬台国の台与に深くかかわる神社だと考えているのです。



今になってその住所を調べてみると、福岡県久留米市北野町大字大城字大屋敷1115で、神社の名は、式内社筑後國三井郡日比生 豊比咩神社とある。

周りには目印になるようなものは何もなく、その場所は部外者には判りにくい所ですが、西鉄甘木線「大城駅」から南に歩くと筑後川に至る。その筑後川にかかる「大城橋」を南へ渡った後すぐに左折れし、堤防上の道を東へ約2キロ行った地点にある。この堤防は筑後川の南岸にそっているが、この堤防に沿った部分の筑後川は戦後、新たに掘削して作られた近道の流れである。土手の上を走る道は81号線で2キロ歩いた地点から南へ曲がり100メートルほどのところに目指す豊比咩神社が鎮座している。曲がり角には「宮地嶽神社」も鎮座している。駅から約30分といったところであろうか。太古の筑後川は後述するように「宮地嶽神社」のところから南へ大きく蛇行し半円を描いたあと大城橋の少し下流のところに戻ってきていたものを、戦後その半円の両端を直線で結ぶ付け替え工事を行ったのである。



日比生豊比咩神社本殿

住所が^{おおき}大城となっているのは、太古の昔この場所に、有明海へ船出する一大軍港があったからで、匈奴国つまり熊本県のクマソとの長い長い戦いに、多くの兵士がこの船着場から船で出発し筑後川を下っていった。その拠点がここに置かれていたといい、それは甘木にあった邪馬台国本部の重要軍事拠点の一つだったのである。夜須（甘木）から流れ下ってくる小石原川は筑後川に合流するが、その合流点は日比生の豊比咩神社上流わずか1キロほどの地点である。兵士は小石原川を利用して大城に集合していたのであろう。豊比咩神社はその頃から軍事拠点の横に祀られていたのかもしれない。

神社の地下に埋まっていた銅鐸はそれらのことを象徴する一つの証拠品である。また、神功皇后が立ち寄られたとする「蚊田宮」跡記念碑は、先ほどの「ひろんまえ」にあることも気にかかる場所である。「蚊田宮」跡記念碑は豊比咩神社から直線距離にして約500メートルの位置にあった。

豊比咩神社は、それほど広くない境内に添付したような社殿が建っているが、境内横が土手となっているため、遠くからは見えにくい微妙な位置にある。昔は宝満宮と称していたらしい。天平時代の鎮座とする説もある。明治六年村社に指定されている。

鳥居の額に菊紋があり、拝殿の横に古い鬼瓦が置かれていたが、それにも菊紋がついていた、ということで、神紋は菊紋である。

なぜこんな低地に軍事拠点が置かれたか以前から不思議に思っていたが、それはここが低地であるが故に、船着場として絶好の場所だったからであろう。筑後川が山中の日田方面から急流として流れてきた後、この付近で急に速度を落とすのは、太古の昔、ここ一帯は低地で大きな湖があったところだからである。その後湖は堆積物で埋め尽くされ陸化す

るものの、川の流れはここで始めて淀みを見せるところとなる。蛇行する川は一般的に海水面と変わらぬほど低いところにある場合が多いが、それは北野町のここでも半円を描く蛇行の地だったのである。

古代の湖は次第に砂利・土砂で埋められ陸化がすすみ、川はその周囲を回る形で形成されていった。上流からの急流が宮地嶽神社・日比生の豊比咩神社のあるこの辺で急に蛇行を始めるので、急流の水は川岸に激しく衝突することになる。そして上流から運ばれてきた砂礫は永い間に大量に置き去りにされ、豊比咩神社の地にうずたかく積みあがり、天然の堤防と化していったと思われる。つまり微高地が形作られた場所である。

そうすると、この地は半円を描く筑後川に抱きこめられた自然の要塞にもなるし、有明海に出航する船着場として絶好の場所であったのだろう。そしてなんといってもここは甘木の高天原から近い。そのような理由から軍事拠点が設けられることになったのであろう。その軍事拠点の跡が豊比咩神社であり、近くの神功皇后の蚊田宮である。

江戸時代になり、この地域は久留米有馬藩の領土となる。年貢米が毎年豊比咩神社下の筑後川から舟で積み出されていたという。筆者の小さい頃、その積み出し船着場跡が残っていた。しかし、戦後すぐに筑後川の付け替え工事が進められ、半円の両端をつなぎ直線の川とした。その結果、蛇行していた半円形の旧筑後川の流路は豊比咩神社下あたりから下流は死に川に変わってしまった。そしてそれ以来、続けられている船着場跡の砂利採掘事業は未だに続いているようである。

(もう一つの豊比咩神社である高良山の神社については、本稿最後の高良大社の項で説明する)

なお、本稿では、卑弥呼＝天照大神あるいは神功皇后、そして台与＝豊比咩または豊受姫として話をすすめる。詳細についてはおいおい説明していきます。

4. 豪族の霊廟 塚島古墳と銅鐙

筑後川沿岸の沖積層にある塚島古墳は、千数百年前ごろの古墳時代のものとされている。当時北野平野は、沼沢地帯も終期に入り、葦茂り点々と島はだを見せ、筑後川の水は島影を左右に見ながら蛇行し静かに西へ流れていた時代であった。毎年やってくる洪水は、上流から土砂を押し流し沼地を埋め島を作り次第に台地を広げていった。耳納の山から住居を求めて下りてきた人々は島や台地に



塚島古墳

住みつき暮らしをしていた。福岡板付や比恵に伝来した稲作技術も、次第に南下して、小郡を通り北野平地でも稲作が行われていたであろう。歳月がたつにつれ住人の数も増して小家族も次第に大家族となり、農耕作業も共同でなされたと推察するのである。

塚島の地は別記の通り、大宰府政庁から松崎花立山麓地をさらに南に下り、耳納山麓地との中間に位置して、筑後川を越す関所であり、北野沼沢地帯を支配した有力な部族の重要な一大拠点であったことが想像される。あわせて、対岸日比生豊比咩神社社地では、先ごろ筑紫銅鉾が発掘された。弥生時代に使用された青銅製の鉾で長さ80センチ、祭礼や儀礼用とされたものといわれているが、銅剣や銅鉾を持ったことは豪族で、相当の権力者であったとされるのである。

注

古墳は古代部族、豪族の墳墓で、形も勢力の強弱によって決められた。形としては、円墳（丸型）方墳（四角型）前方後円墳、上円下方墳などがある。古墳は弥生時代から奈良時代に発達した。この時代を古墳時代という。

塚島古墳は円墳である。巨岩石の規模から豪族の古墳と推察される。

豊比咩縁起と関係付け豊比咩神社の祭神豊姫命の霊廟とも言われている。

昭和29年用水路の掘削工事が施行され三畝歩の塚島古墳域内から合甕が発掘されたが、こころなき人夫のため、粉々になったことは惜しみても余りあることである。ほかに石斧、石庖丁が出土した（金島専称寺蔵）

5. 三井の三泉 益影の井、または淳名井

益影の井が大城小学校校庭の東南の一隅にある。三井郡には名泉が三ヶ所ある。高良山の御手洗の井、朝妻の井（高良山麓の泉）、益影の井で三井の三泉といわれ、三井郡の郡名もこの名泉に起因するとされている。古歌にも次のように歌われている。

「汲みなれて 千代を留めつつ いつまでも
益影の井は汲みも つきせず」



大城小学校々庭にある益影の井

神話につながる古代から、益影の井が安産の祝水として用いられた霊水であったことは、古文書にもみえている。この益影の井は、天孫降臨の際、高天原より天の真名井（はじめ）

の水を、蚊田淳名井（ぬない）に移された霊泉といわれている。またの名を淳名井ともいわれ、神聖にして幽遠な由緒ふかい名泉とされている。

往古神功皇后が三韓の遠征から凱旋され、蚊田の行宮で皇子（応神天皇）を出産された折、水沼の君が産湯としてこの水を差し上げたと伝えられている。これ以来村人達は、産湯としてこの清水を使うと生れた子は見目麗しく、賢く長寿であるとして大変珍重された。

大城小学校校庭の「益影の井」と宇美八幡宮の「益影の井」

「北野町史誌」にある大城小学校校庭の「益影の井」のことを上述したが、その本家本元は宇美の八幡宮にある「益影の井」であるとも言われている。しかし、後述するように、大城小学校の「益影の井」は高天原（甘木）の「真名井」から分水してきたとの伝えが残り、近くには蚊田宮の伝説もあり、両者まったく同一与件で、いずれが本物か判然としない状態である。

「宇美八幡宮」は粕屋郡宇美町宇美にあり、安産の神様である。応神天皇、神功皇后、玉依姫、住吉三神、イザナギ命を祀る。由緒に、朝鮮出兵から帰られた神功皇后が筑紫の蚊田邑に産所を造営、エンジュの木に取りすがって応神天皇をお産みになったとある。よってこの地を宇美といい、このエンジュの木は、安産に幸いするとして子安の木と称し今も社殿横にある。

同宮の創建年代は従来から不詳とされてきたが、たまたま宇美宮別当 71 世留守良勝が書いた 1652 年の書、「傳子孫書」によると、「敏達天皇 3 年（574）^{きのえうま} 甲午筑紫蚊田邑始宮柱太敷建給う」とあって、その年代がほぼ明らかになった。^{はじめてみやばしらふとしくたてたまう} 境内末社の湯方殿は靈石信仰の子安の石で知られる。25 年に一度開帳する聖母宮神像は室町末期の作で県指定有形民族文化財。その縁起が「筑前国続風土記付録」にある。巨大なクスの木の湯蓋の森・衣掛の森を含めた大小 25 のクス群を蚊田の森という。また応神天皇出生にまつわる宇美八幡宮の安産信仰伝説地として、ここは県指定有形民俗文化財になっている。

宇美の「益影の井」

筑前名所図会（奥村玉欄）に紹介されている益影の井は次の通り。
峯の東に岩穴より湧出す天然の井泉なり。その水清潔にして常に増減なし。人この水に影をうつせば、老顔も少壮のごとし。故に益影の井という。

社家の説に昔、天の神出胎の時、この水を用いて浴したまうと言い伝う。
神功皇后は応神天皇を、新羅征伐の帰途に筑紫で生んだとされている。粕屋郡の蚊田（宇美）で生まれた誉田別皇子（応神天皇）は、この湧き水を蚊田邑の湯沸山で沸かし、お宮

の湧水を混ぜて産湯に浴したという伝承が宇美八幡宮の縁起にのこっている。

この井は影が若く健康に見える益影（ますかげ）の井「変若水（おちみず）」である。（万葉集：巻13）

そこに伝わる伝説によると、お爺さんは青年になったが、お婆さんは飲みすぎて赤ん坊になったという笑い話がある。

＊ 天の真名井＝古事記の中で、アマテラスとスサノオとが清く明るい心を示しあうための誓約をしたとき、アマテラスがスサノオの持つ十拳劍を三段に折り、「天の真名井」の水を吹き注いだ息吹の狭霧の中から三人の姫が生れる。それが宗像三神で玄海町にある辺津宮のタギツ姫、大島の中津宮のイチキシマ姫、そして沖の島の沖津宮のタギリ姫であるが、そこに出てくるのが「真名井」である。また、アマテラスがその子オシホミミを産まれた時にも使われた水で、高天原（甘木）にその「真名井」はあったとされている。

＊ 真名井伝説は「益影の井」伝説となって、筑前宇美に残り、また筑後・大城小学校の「益影の井」として残った。これらは応神天皇誕生のみに関係し、宗像三神の生誕には触れていない。

一方、「真名井」は、豊後日出地方に「日出の真那井」として、また、丹後比治地方に「比治の真奈井」として残り、高天原の場所の移動を示すもととして注目されている。それには、羽衣伝説が付随していて、その中に出てくる姫の名も無視できない。「丹後国風土記」によると「比治の真奈井」の池に舞い降りてきた七人の天女のうちの一人の羽衣を、土地の翁が隠した。そして、その女を養女として酒を作らせて稼いでいたが、ある日、老夫婦は女を家から追放した。という話であり、その女は泣く泣く丹後の哭木村に留まることになったとし、女の名は、トヨウカノメ（豊宇賀能売）であったとしている。豊受姫である。伊勢神宮の外宮には「豊受大神」が祀られている。

＊ 真名井の滝が宮崎県高千穂町の高千穂峡にある。神話上、ここはニニギ尊が降臨された高千穂の地で、真名井伝説はここにもつながっている。高千穂の谷は深く、切り立った断崖のあちこちから、豊富な湧水が滝となって流れ落ちている。

＊ 「蚊田宮」＝神功皇后が出産されたところは、日本書紀は「筑紫の蚊田邑」としている。伝説上、現在では次の三つの場所がその「蚊田宮」があったところという。糟屋郡宇美町、糸島郡前原町長野、それに三井郡北野町大城である。

6. 神功皇后の三韓征伐

大和朝廷は九州から関東にいたる広範囲にわたり豪族を従え大和朝廷の勢力も次第に強

いものになっていった。天皇はこうした中にあって、朝廷の指示に従わぬものに対しては徹底して討ちしずめた。

第十四代仲哀天皇の時、熊襲がさんざんそむいたので天皇はこれを討つため筑紫の宮にお出になったが病により崩御された。小郡市大保に御勢大霊石神社がある。同社の縁起によれば天皇はこの地でなくなられた。神功皇后は、軍の士気の落ちることを恐れて、天皇の喪をかくし、社前に立っている石に鎧を着せ、かがり火をたいて存命のように見せかけられた。その石は今なお残っている。そして皇后は自ら処々の賊を討伐された。

山門の田油津姫を討伐されるため夜須より船に乗り宝満川を下り大城（北野町）の蚊田行宮にお出になった。討伐の後大和朝廷の勢力は筑紫に行き渡ったが熊襲は中々服従するまでに至らなかった。いくどとなく朝廷にそむいた。

神功皇后は結局、朝鮮の新羅が後押しをしているからだと考えられた。この新羅を討つて禍根を断とうと考えられ、御懷妊の身でありながら男装して、船舶を集め、軍の準備をととのえ、橿日（香椎）の浜から討伐の途につかれた。新羅の王は、その勢いの余りに堂々としているのを見て「天兵至る」と恐れ戦わずして降参した。「太陽が西から出 鴨緑江の水が逆しまに流れ 川の石が天に上って星となるようなことがあっても決して再びそむくことはありません」と誓った。

神功皇后は凱旋された後皇子を御出産になった。この皇子が応神天皇である。後世になると応神天皇、神功皇后、武内宿禰は武神として八幡宮の祭神に合祀された。

赤司八幡宮豊比咩縁起によれば、神功皇后は有明海から筑後川をさかのぼって凱旋され大城に上陸された。ここで皇子（応神天皇）を御降誕「益影の井」（北野町）で産湯を使われた。益影の井戸の水で産湯をとれば子は健康に育つと産湯を汲み取る人が多かった。

日本書記には、九州の豪族は大和朝廷の勢力に組み入ってしまい、大和朝廷の威勢九州を包み日本は一つとなって歴史が展開することになったのである。

「蚊田宮」跡の縁起に触れる。

赤司八幡宮縁起によると、神功皇后が西征の途に於て中ツ海（有明海～当時の筑紫平野）を渡られるに際しては、水沼君は軍船をととのえて有明海を渡し、蚊田行宮を建ててこれに迎えたという。皇后三韓退治後ふたたび蚊田行宮に入らるや水沼君はこれを迎え、軍船の名残をとどめてその記念とした。遺卵の御船といって後世長くのこされたのはこれなのです、と。

つづけて、応神天皇の出産に関しても、「蚊田宮」と「止誉比咩神社」についても次のように記述している。

皇后が蚊田宮で応神天皇を分娩されるに際しては、水沼君は高天原（甘木）よりうつしたという渦の渟名井の霊水を産湯として奉った（真名井のことと思われる）。渦の渟名井は

道中の神井として神聖を保った霊泉でした。また、皇后は縁故ふかい道中の当神社に妹豊姫命（止誉比咩）を道主貴としてとどめられ、長く西海の鎮護として重要視されました。そのために当社を豊姫之宮と稱するようになったが、神名帳には止誉比咩神社とあります、と。（ここでトヨ姫は神功皇后の妹となっている。つまり卑弥呼を神功皇后に台与は妹としたのである）

少し横道にそれます。日比生の「蚊田宮」跡の石碑が立っていたところのすぐ後ろには、現在、古い墓地が残っていますが、その墓地と道一つ隔てて一軒の農家の屋敷があります。この屋敷一帯もほんのすこし微高地をなしている。「蚊田宮」はこの微高地の上に建てられていたのであろうと推測しています。そして同じ場所には江戸末期から明治にかけてこの微高地のところに「柳園塾」が置かれていた。井上知愚・昆江父子二代の私塾である。

井上氏は赤司城に居をおいた赤司氏の末裔で、永く日比生に住し久留米藩に致仕した藩士である。文政十年、日田の師、広瀬淡窓の許可を得て、この地に漢学の私塾を開く。苔むしたたくさんの墓は、その私塾の先生方のものだと聞いている。

日田は言わずと知れた江戸幕府天領の地、儒学者広瀬淡窓によってそこに開かれた私塾「威宜園」には約四千六百人の門下生が集まったといい、日本最大の私塾であった。その塾生の中には、明治新政府で活躍する大村益次郎の名もある。

そんな因縁からか、筆者が高校柔道部にいた頃、柔道の時間には、必ず広瀬淡窓の詩吟をうならされていた。

7. 筑紫平野の形成まで

縄文前期の両筑平野は有明の海が深く湾入した入江であった。弥生時代には両筑平野は各所に水を湛え所々に沼沢があり、葦茂りその中に島が点々と散在してその島に原住民が次第に住み着くようになった。

古代の郷土三井平野は有明の海が侵入し、筑後川に沿う朝倉郡南部から耳納山脈北山麓の浮羽郡一帯の地域、北は筑紫野市西小田以南の立石、三国地区宝満川沿いの平野は海であったという。

地質学者は、筑後平野を分析して次のように述べている。

平野には全面、沖積層が見られ、その層も深いところで300メートルにおよびこの地層の中には魚介類や火山灰が含まれている。沖積層も、太刀洗で90メートル、善導寺で200メートル、鳥栖で90メートルとなりそこで基盤岩の花崗岩に達しているという。久留米地峡部で20メートルである。

当時日田盆地から流れ出る筑後川の沖積作用は、北野盆窪地の埋没が主となっていた。

この沖積作用と隆起運動の進展につれて、久留米地峡部は、ただ盆窪地から流れ出る水の通路として存在していたものと思われる。筑後川に砂礫を供給した四周の山地とは、筑後川中流部の山地で、西北部の背振山地と北部三郡山地および南部の耳納山である。筑紫の海に砂礫を供給したのは、阿蘇山、九重山をはじめ古処山や耳納山である。

古処山の侵食作用によって小石原・佐田川による扇状地が出来て両筑平野に向かって進み土砂を堆積して盆地を作っていた。支流が東から桂川あり、佐田川、小石原川、太刀洗川があり、古処山山地の水を集めて、北から南へ、東北から南西へと傾斜も緩やかに土砂を流し広大な朝倉扇状地を形成していった。

耳納山北山麓一帯では山麓複合扇状地を作り耳納山から土砂を流し筑紫の海も次第に陸地化していった。耳納山北山麓は地盤沈下によって断層崖ができています。耳納の山脈は東端鷹取山（862）を基点とし西に発心山（697）耳納山（367）高良山（312）と続く断層山脈である。この断層崖に多くの小河川が北流している。草野、山本扇状地を見ると、堺川、発心川、三光川、草野川、大谷川等々各河川の集水面積も極めて狭い。各川とも1－2平方キロメートルである。

筑後川中流域は日田盆地から流れ出る砂礫や北部山地の土砂、耳納山麓から流れ出る土砂によって筑紫の海は陸地化していった。今から4000年前には、太刀洗町より北野町東部を経て、善導寺町にかけた地域が陸地化し、弥生時代には、久留米市笹山城高地より対岸千栗の高地を連ねる線以東の地は陸地化したと言われている。

第二話．稲作の伝来と倭人の渡来

1．稲作の伝来

太古の日本列島は寒冷の地であり、熱帯性植物である稲は太古の日本には存在していなかったという。

では何処からいつ頃その稲作が日本に伝来したのか。一般的には中国の雲南省が稲作発祥の地として長い間信じられていたが、その後の研究が示すものは雲南省からではない。雲南省の今日の稲作の状況をみると確かにここそ発祥の地と考えがちな状況証拠がたくさんある。山の斜面を開いて天まで届くように作られた棚田では、頂上付近と山麓付近の気温の差が大きく、異なった色々な種籾が使われており、それだけ種類の豊富な米が生産されている。市場には黒米も出回っている。また、その他農産物でも納豆、豆腐など日本文化を思わせる品々が同じ市場に出回っている。従って、雲南こそ日本稲作の発祥の地と考えられていたが、DNAによる追求によると、雲南から出土した太古の米は今から4000年前のものであることが分かった。ところが日本列島の稲の方が、これより古いのである。

島根県板屋遺跡で堆積していた地層を掘り起こし縄文時代の土を分析した結果、稲のミクロの結晶が発見された。大きさは40ミクロンという極小のプラントオパールである。稲科の植物には珪酸が多量に含まれている。このため、稲が枯れても珪酸の一部は細胞の形を保ったまま残る。中でもイチョウの葉のような形をした、稲の「機動細胞珪酸体」は特徴的で、その有無から稲作の存在を突き止めることができるのである。その理由は、日本の稲（オリザ属）には基本的に野生種が存在しない。だから、この機動細胞珪酸体が見つかれば、即、稲作が行われていた証拠となるのである。岡山県朝霧鼻貝塚からも同じようなプラントオパールが見つかった、これらはいずれも6000年前のものである。つまり縄文草期末から前期の初めごろの稲作の跡であることが判明したのである。

日本への稲作伝来は、弥生時代に入り隣の朝鮮半島から伝来したというのが今までの学説であったが、その前に、単発的ではあるが、稲作が日本の地に持ち込まれていたのである。それでは何処からいつ頃伝来したのか。これを解く鍵となる発見が中国長江中流域にある湖南省で1995年になされた。この地方には石灰岩の小山が方々に立ち並んだ平野であるが、その一つの山の洞窟から1万2000年前の遺跡が出土した。石灰に守られて腐敗せずに残っていたのである。地名をとって玉蟾岩遺跡^{ぎよくせんがん}と呼ばれているが、そこからは石器・土器と共に籾^{のぎ}が出土した。この籾は調査の結果、芒が退化しているので野生種ではないこともはっきりしている。

長江中流域で生産されていた稲は、時代が下るとともに下流域に伝わった模様で、玉蟾岩^{ぎよくせんがん}

遺跡から5000年後の今から7000年前ごろになると、東シナ海沿岸の浙江省・河姆渡^{かぼと}で数百人の人々が住んでいた住居跡とともに、稲の炭化したものが発見された。1973年の発見であるが、7000年前の米や粳が大量に150トンも出土した。洪水で埋まった農家と見られ、そこから稲穂の厚い層が出てきた。これは、収穫して積んであったものらしく、この炭化稲の分析を行った静岡大学の佐藤洋一郎教授によると、DNAの7Cと6Aの塩基配列の熱帯ジャポニカ種であることがはっきりした。そのほか、平成3年（1991）には、中流域の湖南省・ホウ頭山遺跡^{ほうとうざん}から約8500年前の米が、また湖南省・禮県からは8000年前の稲などの農作物が大量に発見されている。禮県で出土した米は1万2000粒もあり、保存状態も良く粒は大小さまざまで、大と小には4倍以上の差があったという。粳米などとは形が違い、野生の稲から栽培用の稲への過渡期に現れた品種とみられている。

長江流域で発見された数々の稲の遺跡のなかで河姆渡^{かぼと}で発見された遺跡は、日本への伝来との関連で極めて重要な意味を持っている。それは種類が熱帯ジャポニカであることと、場所が東シナ海に面した所という点であるが、熱帯ジャポニカ種は原始的なタイプの稲で、これが佐賀県の菜畑遺跡からも発見されている。河姆渡^{かぼと}から九州まで東シナ海を挟んで距離は800キロもある。しかも大海原である。7000年前、この大海原をどうやって越えたのか、この秘密を解く鍵は河姆渡^{かぼと}地区の漁撈民にあるようである。河姆渡^{かぼと}遺跡は稲の出土品のほか夥しい種類の遺物が発見されているが、たとえば動物の骨で作ったモリ、釣り針など漁撈に関わるものも多い。木製の舟のオールも見つかっている。農耕の跡を示す多数の遺物のほかに、これらの漁撈の遺物も多いのである。また、面白いものとして移動式のカマドも発見された。これは土製で、このカマドの上に土器を載せ炊飯に使っていたと見られており、この簡易カマドを舟に載せ、遠くまで漁に出かけていたと思われるのである。

現在の河姆渡^{かぼと}付近の漁村を調べてみると、いまだに竹で編んだ舟で漁に出ている魚民がいる。その人たちへの取材によると、台風とか荒波のときには今でも、九州へ流される人が時々出るという。一方、日本の対馬の遺跡の6000年前の人骨の調査結果によると、この人たちは稲作とともに漁撈を行っていたらしいことが分かっている。それは頭蓋骨の調査の結果であるが、それらの頭蓋骨には外耳道骨腫が発達していた。これは耳の骨の突起物で水に潜ることを繰り返す人の耳に、水圧の影響でできるものである。対馬の漁民は今でも潜水しサザエやアワビを取っている。方法は素もぐりである。この方法は東シナ海一帯でやられていた漁撈法で、中国沿岸部がその発祥の地とされている。

対馬で現在、素もぐりで生計を立てている主藤さんは、一方では小さな水田も持ち、稲作を行っているが、通常の水稲のほか、赤米も毎年植えている。これは昔から伝えられている古代米で、いつから始まったかははっきりしないが、信仰の対象物であり、この赤米を作らないと不幸に見舞われるような気がして必ず作るという。この米はDNA分析の結果、

熱帯ジャポニカであり、中国から入ってきたものであることが判明している。つまり、中国沿岸から赤い稲が縄文時代に漁撈民によって伝えられ、これが対馬の現在に引き継がれているのである。

日本での赤米（熱帯ジャポニカ）生産は、極く一部の例外を除き生産の対象から除外され、幻の稲と呼ばれているが、ラオス奥地のナムガー村では今もこの熱帯ジャポニカが生産されている。この村の人口は1000人程度で、種籾を見ると赤味を帯びている。人々が毎日食べている米は、粘り気が強いモチ米の感触がある。

4月の雨季に米作りが始まる。その前に耕作地に火をつけて畑を焼く。肥料はやらない。焼畑の灰が肥料となるのである。数日後に種をまく、発芽から5ヶ月すると実りの時期となる。この方式が日本の縄文時代に行われていた焼畑稲作の原型と言われている。

ラオスは暑いところである。熱帯ジャポニカの稲作はこのラオスには残っているが、日本を含む温帯地域ではなくなってしまった。プラントオパールによって日本に残された縄文時代の稲作の跡を調べると、面ではなく点として残っている。それは宮崎、岡山、島根などの地で、必ずしも全土に広がっていたわけではないことがはっきりしている。それにしても縄文時代に熱帯ジャポニカが日本で栽培されていたのは、気象変化と関係があるとされる。約6000年前の日本列島は、気温が現在より約3－4度高く、熱帯ジャポニカが根付く環境にあったのである。そして人々は稲と同時にヒエ、アワといった作物も一緒に作っていた。それによって人々は従来の森から採集する果実や、狩猟によって得る動物の代わりに米を食料の一部として利用していたのである。

中国本土での稲作はその後、劇的な変化を遂げる。

長江下流域の江蘇省で太古の土壌が残っている場所で土壌の分析調査が行われた。深さによって7000年前、6500年前、6000年前、5500年前の土壌があることが分かり、その中にそれぞれ含まれていた炭化米の比較調査が行われた。それによって稲の進化の具合がはっきりしたのである。

5500年前のものが現在の米の大きさになっている。それ以前のものは小さい。このことは人々が従来の焼畑農耕ではなく水田で管理的に稲作を始めたことによるとされる。人々は水田耕作により、生産性が飛躍的に増えることを発見し、6000年ほど前から水田を作り始めていたのである。そして熱帯ジャポニカが遺伝的に新しい「温帯ジャポニカ」に進化したのである。この変化は大きい。そしてこの水田耕作の方法は瞬く間に中国全土に広がることになる。そして3000年前ごろになると、水田耕作のこの新しい方法は、朝鮮半島南端にまで達する。

朝鮮半島からどのようにして日本列島にこの水田稲作が持ち込まれたか。これが次の課題であるが、それには二つの説がある。

- (1) 朝鮮中・南部に江南から逃避してきていた倭人（江南人）が九州へ大挙移動し稲作を伝えた。
- (2) 朝鮮中・南部には九州の縄文人が頻繁に往来しており、その縄文人たちが朝鮮の稲作技術を持ち帰った。

まず、(2) 縄文人説から説明する。

それは日本の縄文人によるものであることがはっきりした。朝鮮半島南端にサンチョンチョンという村があるが、ここは対馬から50キロしか離れていない場所で、そこに日本の縄文人の遺物が多数発見された。3000年前の縄文土器、それに炭化米も発見された。この頃の朝鮮の人たちは独自の特殊な土器を使っており、日本の縄文土器をわざわざ使うような状態ではなかった。つまり九州から対馬を経由して半島南端に達した縄文人は、ここに生活していたたわけで、彼らの生活を示す遺物が多数発見されている。

日本への稲作の伝来は渡来人によってもたらされたとするのが通説であったが、なんと日本の縄文人が自分で朝鮮から持ち帰っていたのである。そしてこれが九州北部に伝播し、広がっていった。唐津にその証拠が残っている。菜畑遺跡でそこには2600年前の最古の水田の跡があった。稲の種類は温帯ジャポニカで熱帯ジャポニカではない。熱帯ジャポニカは多く焼畑農地で作られたが、温帯ジャポニカは水田農耕で得られる稲である。これが弥生時代の始まりである。その後、朝鮮からは続々と新たに人々が渡来し、水田稲作を広めていった。そして300年というごく短い間に日本全土に広まっていった。

青森県の津軽平野の稲作は今から1000年ほど前の平安時代に始まったとされ、これが東北での最初の水田と見られていたが、青森県の田舎館村からは2000年前の稲作の跡が発見された。この場所は北緯41度とかなり寒冷的な地域である。西暦元年の頃にこの地に水田稲作が達していたことになる。中国では古代水田は北緯39度より以北には見当たらない。日本ではこれより遥か寒冷の地で稲作が始められていたのである。この謎を解く鍵は混植と雑種の誕生、早稲の誕生にあるらしい。田舎館村の古代稲作は温帯ジャポニカを使って行われていたと思われていたが、なんと熱帯ジャポニカの種の炭化米も発見されたのである。静岡大学の佐藤洋一郎教授によると、熱帯ジャポニカと温帯ジャポニカを混植し、雑種を誕生させ、その種を使って成長を観察すると、親種の温帯ジャポニカより1ヶ月も早い成長が見られた。早稲米の誕生である。これで比較的寒冷的の地にも稲作が可能となり、ほぼ日本全土に瞬く間に稲作が広まったのである。

今では北海道最北の地、遠別町でも水田が行われている。ここでの水田が開始されたのは1901年のことで北緯は44度43分である。

私の生家は農家で、田植えと田の草取りの手伝いは中学生頃まで、稲刈り、脱穀の手伝いは高校時代までやらされていたと思う。小学生の頃は、子供の仕事は苗配りが中心で、今思っても、大変楽しい仕事であった。というのは、その合間に思いっきり田んぼの中を

泥んこになって跳ねまわって仲間と遊ぶことが出来るからで、このことや秋の収穫期は、脱穀作業の合間に稲藁を積み上げて家の形を作り、その中に潜り込んで遊ぶなど、楽しい思い出が一杯詰まっている夢の時代でした。その頃の遊びのパターンが今の私の行動パターンになっているような気もするのです。

その頃の田植え作業は一つの集落全員の共同作業であった。泥んこになって遊びまわるのは集落の子供全員と一緒にだったからである。今はまったく変わってしまっている。田の草取りや稲刈り・脱穀作業はその頃も各家独自で、全体の共同作業ではなかった。

この村落共同作業のシステムは筑後平野のどこでも行われていたもので、血縁関係でない者同士の農業共同体が自然発生的に始まり、それが営々と続けられていたことの名残であろう。古き良き時代であった。

2. 倭人の渡来

次に（１）朝鮮南部に逃避してきていた江南の倭人たちが民族移動的に九州へ移動し、稲作を伝えたという説である。

先史時代、長江を下って雲南の地から移動した倭族の最古の遺跡として知られるのは、先述の河姆渡遺跡である。ここで約7000年前に水稻農耕民として高床式住居の生活をしていたことが判明している。また、杭州湾の北側にも同時代の桐郷の羅家角遺跡があり、ともに越が都をおいた紹興に近く、それら遺跡人の後裔が越人、いわゆる倭人であった。また呉の領域にあった上海市郊外の青浦県松沢遺跡は6000年前のもの、また、地理的に近い太湖の南側にも呉興邱城遺跡があり、太湖の東側の呉県草鞋山遺跡や北側の常州圩墩遺跡も、ともに6000年以前にさかのぼるものである。

長江の下流域に達したこれらの倭族の一部は、さらに山東半島に向けて北上し、今の安徽省・江蘇省・山東省にかけて分布した。文献の上では周代に徐・淮・邾・莒・奄・萊などの国々があったことが記されているが、漢族は彼らを異民族として「東夷」と呼んだが、それらの地域は倭族によって国が形成されていた。朝鮮半島に渡来した倭族が、ひとつの集団であったとは限らない。朝鮮半島中部に上陸し、先住の滅族・貊族を制しながら、倭族として最初の国を築いたのが辰国である。対外的にも認められる国に成長すると、民族としての呼称も生まれる。それが韓族である。

朝鮮南部の三韓の「韓」とよぶ由来については諸説ある。かつて中国山東半島奥地にあった韓人が移住してきたと見なされていたふしがある。この中国大陸の韓、朝鮮南端部の馬韓弁韓、日本西部は大陸中国からは一括して、倭という民族単位で見なされてきたのである。

その地域は後に呉の領域となり、その呉も春秋時代末の扶差王のとき、南の越王に討たれて滅びる。その呉の滅亡（紀元前473）を契機として、呉の遺民だけでなく、呉の領民となっていた上述の東夷諸国の民たちも、稲作文化を携えて朝鮮半島の中・南部に亡命し、さらにその一部が日本列島に渡来して、いわゆる弥生人の中心となったのである。

朝鮮半島の北部でなく、中・南部に逃れてきたのにはわけがある。呉の敵対国であった強大な燕が渤海湾から遼東半島にかけて領域とし、真番（鴨緑江以西）や朝鮮を攻略して服属させ、現在の平壤の近くまで伸びる要塞を築いていたためである。そのため中・南部へしか亡命できなかったのであるが、その倭族としての韓族が馬韓を軸とし、後に辰韓・弁韓に分立して建国することになる。

ここで隣国中国のことに触れるが、春秋・戦国時代と呼ばれた中国は、BC771年、周の第12代王「幽」の外交失策により西方異民族犬戎の侵入を許すことになる。これによって周王朝の権威は縮小、都を東遷する。これ以降を東周、以前を西周と呼ぶ。東周はさらに春秋時代と戦国時代に分かれる。春秋時代には齊の桓公、晋の文公、宗の襄公、秦の繆公、楚の荘王、呉の闔閭・扶差、越の勾践という有力な諸侯が現れ、これを春秋五覇という。

BC403年大国晋の卿であった韓・魏・趙が周から諸侯と認められて、晋は分裂、ここから戦国時代が始まる。この前後から、朝鮮半島への逃亡民多く、彼らはそこを南下したのである。

ところで、「後漢書」の馬韓の条に、「その南界は倭に近く、また文身する者あり」とあり、弁辰の条にも「その国は倭に近く、故に頗る文身する者あり」と記されている。ここで「倭」と呼ばれた者たちは朝鮮半島の南端、「三国志」や「後漢書」に見える「狗邪韓国」の住民のことで、東夷諸国の民の子孫たちである。

呉の滅亡で同じように亡命してきた同族の韓族は、中国に入朝して影響を受け、文身の習俗を早く廃したものと見られる。それに対し半島南端の狗邪韓国の住民はなお文身の因習を伝え、そのため同族の韓族から蔑視されて、「倭」という卑称で呼ばれたのである。その習俗のことは韓族から楽浪郡・帯方郡の役人にも話され、さらに後漢朝・魏朝・晋朝にも伝えられた。そのため各史書には、わが国のことが「倭」「倭人」「倭国」という卑称で記されることになったのであろう。

この倭人たちが紀元前320年ごろから、大挙九州に移住し稲作を広めていったのである。

話は違うが、中国は漢民族の国だと言われる。しかし今日の中国をみれば分かるとおり中国は多民族国家である。その中で漢民族が国の中心だとする考えから「中国は漢民族の国」という言い方が残っているのであろう。

その漢民族だが、アジア全域に広がるモンゴロイドとどこが違うのであろう。中国を含

め東アジアの種族の下地は全域「モンゴロイド」である。漢民族はどちらかというとその下地のモンゴロイドに西域の血が混血した特殊民族で、西域といわれる現在のイラン（ペルシャ）地方から大移動してきたいわゆる胡人とモンゴロイドが有史以前に混血して出来上がっていた民族なのである。

黄河文明の担い手として自負する現代の黄河中流域の人たちが（漢民族）、本来のモンゴロイド人種の体質を変容させているのは、他民族との混血によるものであろう。

古代黄河流域で栄えた文明のひとつに仰韶文化があるが、そこに埋葬されていた仰韶人は、すべて頭を西へ向けていた（原始漢民族）。長江下流域の河姆渡文化などの人たち（倭人を含むモンゴロイ系の人々）が、頭を東に向けて埋葬されるのとは対照的である。

また、言語でも、日本語を含むアルタイ語と漢語とでは周知のように語順が異なる。発声の面からも指摘できる。日本人は喉を用いるのに対し、西洋人は鼻腔を反響させる。漢族も鼻腔に反響させて発声するが、漢族の層の厚い北部ほど顕著である。

このように語法や発声を考えてみても、黄河中流域の民族が西方の民族の影響をいかに強く受けたかがわかる。

第三話、徐福渡来と神仙思想の広まり

1. 徐福渡来

われわれ日本人は日常的に「気」という道教で使われる言葉をふんだんに使っている。

無意識のうちに、「気がする」・「気になる」・「気がつく」・「気分が良い、悪い」と言うように「気」という言葉をやたらと使っている。また、「元気」・「天気」・「景気」など、日常生活上の会話にも学問的な表現にも、およそ「気」という語を使わずに物事を言い表すことはほとんど不可能なくらいである。それなのに、「気とは何か」と外国人に問われたとすると、ほとんどの人は答えに窮するといった状態である。

この「気」というのは、そもそも、人間の肉体の中には「魂」が宿り、それが意識活動をするとき、それを「心の動き」といい、「心の動き」はもともと自発的なものではなく、人間の外部にある「気」の作用によると言うことである。すなわち、「気」とは生命の根源であり、それが体内に入って「魂」となり、宇宙に満ち満ちている「気」のエネルギーが人に吸収されると「心の動き」が起こるのである。そういうふうに日本人は人間と宇宙の関係を捉えているため、個人的に「思う」と言う代わりに「気がする」といい、自分が「発見した」と言う代わりに「気がついた」と表現することになる。「その気になれない」と言うのは、宇宙からの指令が届かないからと言うことになる。つまり、宇宙と人との一体感を基礎として「心の動き」を捉えているのである。

道教思想の根本とは、宇宙万物の容れ物である「道（タオ）」があつて、それは森羅万象を動かすエネルギーである「気」によって満たされており、それが分かれて陰陽が生じる・・という玄妙深遠な哲理のことである。ところが、驚くべきことは、日本人ならどんなに教養の乏しい人でも、そもそもが道教の基本概念だった「気」という言葉をふんだんに日常語として使っている。このように、「気の哲学」の根本原理を民族の体質的なものとして受け継いでいることは、かなり古くから「気」という考えが民族的文化の最重要な要素になっており、大衆の心の底に深く定着し、今日に至るまで生き続けてきたと言うことである。

では、こういった道教の考え方が日本に伝えられたのはいつの時代か。それは常識的に考えれば、7世紀から8世紀にかけて中国との間を往復した遣隋使や遣唐使によってもたらされたと考えたくなる。しかし、一部の支配階級が趣味的に道教を取り入れたことの説明ならそれでよいし、秦氏の金属精錬関係者が道教系の神を祀った理由の説明ならそれで納得できるかもしれない。ところが、それが民衆の日常会話で不可欠な概念として定着しているとなると、そうはいかない。もっと古い時代に道教思想が強烈なインパクトを伴う形で日本列島に伝来し、普及していったと考えざるを得ない。では、それは何によるのだろうか？それで行きつくのが徐福伝説である。

先に縄文末期、北九州に上陸した倭人のことを記したが、その前後の時期に、背振山の南、現在の佐賀県有明海沿岸の地に中国より渡来した一団が住み着いた。それが徐福一団である。

「史記」は、紀元前209年に秦の始皇帝は不老不死の靈薬を求めていたが、道教の方士の徐福が皇帝の言葉に従い、数千人の童男童女を授かり、それらを連れて東海の蓬萊を目指して船出したが再び祖国に帰らなかったと記している。一方、日本では全国20ヶ所の地方に「徐福が到来した」という伝承が遺されている。紀元前209年というまだ縄文の時代が明けやらぬ頃の話であり、当時としては超高度の文明・文化を持った大集団がいきなり日本国に渡来したのである。これは朝鮮より小集団をなして騎馬民族系渡来人が次から次と日本に押し寄せてくる時より100年ほど前の話である。

徐福は始皇帝の天下統一の犠牲となった斉国のいわば亡国の民である。しかし、もし彼がいなかったら、日本の弥生文化の開花は別の展開を経たかもしれない。

黄海や東シナ海の暴風雨、それを大鯨魚に阻まれると表現しているが、この暴風雨を避け、早春から初夏にかけての南西風を利用して彼らは嵐山頭、琅邪、徐山、成山頭など山東半島の南端を北上し、^{チーフ}芝罘付近から黄海を渡れば、朝鮮半島西岸まで僅か200キロの行程である。そこから朝鮮半島の西海岸から南下する。済州島に「西市過比」、つまり徐市（徐福）がここを通ったという意味の地名があるというから、彼らは済州島に寄港したようである。

この船団はやがて対馬海流を横断し、北九州の沿岸に到着。さらに進んで有明海に入り、佐賀、宮崎に進んだ一族と、対馬海流に乗って日本海を北上、島根県出雲地方や丹後半島の久美浜に入った船団があろう。また、直接東シナ海から黒潮に乗って、九州の南岸もしくは西岸に漂着したり、太平洋を東進して土佐沖や熊野灘に上陸したものもあると推測できる。こうしてみると、徐福渡来の主要な伝承地は佐賀、宮崎、出雲、丹後、紀伊であることが浮き彫りになってくる。

弥生時代開始時期の日本全土の人口は推定7－8万人。それも北のマホロバ三内丸山遺跡がある青森・秋田などの東日本の方が人口稠密だったらしく、西日本は人口過疎地帯、まばらにしか人は住んでいなかったという。仮に全人口7－8万人のうち九州にその10分の1が住んでいたとしても、わずか7千人か八千人にすぎない。そのような過疎状態のなかに圧倒的な先進文化を持つ徐福集団、童男童女3000人と百工が来た。人口比率は2；1ないし3；1である。そのインパクトたるや大変なものであったに違いない。徐福が日本に王国を建設する意図を持っていたとすると、ある一定の条件下で十分に可能である。

因みに推定ではあるが、その後の日本の人口は西暦600年ごろで、500万から550万人、そして西暦750年ごろで600万人程度とされている。

そのような中で、徐福渡来から100年ほどたった紀元前一世紀末頃になると有明海沿岸の人口は爆発的に増加しているという。場所は今日の地名でいえば、佐賀県中原町、北茂安町、三根町、上峰村、東背振村、三田川町、千代田町、神埼町を合わせた地域で、人口増加の証拠としては、弥生中期・後期の遺跡がこの地域に極めて多く集中して出土していることである。

中原町の姫方遺跡、上峰村の切通遺跡、上峰村の二塚山遺跡、東背振村の永田遺跡といった有力な遺跡がまとまって出現している通りである。そして、切通遺跡、二塚山遺跡、三津長田遺跡からは、ゴボウラ製貝輪という南方にしかないものが出土している。また、吉野ヶ里遺跡からも、本格的発掘が始まる以前に、ゴボウラ製貝輪が出ていたという。

大学時代の友人に西山君がいるが、彼の生まれ故郷は中原町東寒水、周辺一帯からは土器がどこを掘っても出てきていた、という。



徐福像

始皇帝と徐福を結びつけたものは、当時一世を風靡した神仙思想である。この思想は、現世的な幸福をとく後の道教（中国三教の一つ）の基盤となるもので、長生不老の仙薬を得て、その願いをかなえようとする、いわば願望に似た信仰である。

当時、この信仰の導師は神仙方士と呼ばれ、徐福は齊を代表する高名な方士であり、始皇帝は最大のスポンサーであった。彼は徐福に10年の歳月と巨費を与え、この薬を求めさせたのである。

つい近年まで、徐福について日本や中国の学会では「架空の伝説的人物」とされていた。ところが、1982年、中国では「地名辞典」を編纂するため各地の地名を調査したところ、江蘇省の北西部の山東省との国境付近にある連雲港市贛榆県に徐阜という村があり、そこはかつて徐福村と呼ばれていたことが判明した。そこでは2000年以上に亘って郷土の英雄として徐福を祀っていたことが確認され、徐福の実在が証明された。

それによると、古代中国、夏、殷、周、済から秦と歴代の皇帝が興亡する中で、徐家は神仙の術、方術を行う方士としての地位、それももともと信頼の厚い一位の地位を保っていた。古代三皇、すなわち伏羲、神農、黄皇から五帝に仕えた初代顓頊、二代窮蟬、三代女修、四代大業、五代大費、六代若木と続き、二十九代が徐福だったのである。

では、徐福が本当に日本にやってきたとすると、上陸した土地はどこか。その候補地の

うちで、もっとも可能性が高いのは肥前佐賀郡の諸富村の浮盃^{ふばい}である。その地は有明海に面しており、中国の山東半島から船出して、仮に直行した場合に行き着く場所として最も適切である。そして、この地の金立町にある「金立神社」の由来書によると、保食神・罔象女神（水の神）とともに徐福神が祀られていることがあげられる。徐福は三千とも五千とも言われる人々を引き連れてやってきたというから、当然、多くの穀物の種を持参したに違いない。日本の陸稲の米づくりは紀元前209年徐福渡来以前にすでに倭人の渡来によって伝来していたとはいえ、徐福一団は最新の水田耕作技術を駆使し、田植えから稲刈りまでやったに違いない。以前にない形での耕作の仕方を引っさげての登場だったのである。そして記紀に見る穀物の神である保食神とは徐福のことかもしれない。



徐福を祀る佐賀の
「金立神社」

こうした技術、文化の移入は、徐福一族の上陸した各地において古代縄文文化を一変させ、弥生文化へと日本人の生活を一変させていった。

有明海に面した諸富村の地からそう遠くない吉野ヶ里遺跡からは弥生人骨を収めた2500基もの甕棺が出土しているが、それが徐福の教えによるものだとする指摘もある。甕棺とは道教の不老不死の思想によるものと考えられるからである。また、弥生中期の絹の布地は国産の蚕や朝鮮系の蚕の糸ではなく、中国の華中の蚕糸で織られていると指摘され、また、吉野ヶ里の墳丘墓の盛り土は朝鮮系の版築法ではなく、中国の江南の形式によっているとの指摘もある。

甕棺が証明する中国渡来人の子孫

弥生前期末、九州北部に須玖式土器という新しい土器が出現する。この土器は、福岡県春日市須玖岡本遺跡出土のものが標準土器すなわち標式とされている。「大陸文化の強い刺激による」「大陸よりの高い技術の伝来に負うこと無しには考えられない」といわれるもので、この土器の最大の特徴は、これによって大型の成人用甕棺が大量に生産されていることである。生産には回転台が使われ、土器作り専門の職人が作ったものと推定されている。

甕棺墓の主要分布圏は、玄界灘沿岸部では唐津平野から東は福岡平野までと、筑後平野

と佐賀平野がコア地域となる。つまり、福岡・佐賀県境をなす背振山地を「つ」の字形に取り巻く北・東・南の平野部が甕棺墓の主要分布圏である。久留米市誌によると、東櫛原町の北部高地と大石町字南崎の土中には多数の甕棺が埋まっているとされ、近在の小郡や、浮羽の船越、大石村、八女の水田村から甕棺が多数出土したという。

そして、鏡を二枚以上副葬する厚葬墓が、一例を除いてすべて甕棺墓にあり、また中国鏡や舶載青銅器が副葬されるのはほとんど甕棺墓である。

では、本国中国の甕棺葬の例はというと、中国黒陶文化時期に始まる小児甕棺がその源のようであるが、成人の甕棺葬は、漢代に洛陽や遼寧地方で行われた例があるものの、数はさほど多くはないという。本国中国で例が少ないのに、なぜ筑後・肥前地方に多いのか、この理由は次のように考えられている。

中国では、異郷で死んでも、なきがらを故郷へ運び、父祖の地へ埋葬する習慣があったことである。大陸から日本列島へ渡来した人たちの遺体を、やがて故郷へ持ち帰る日まで、甕に入れて保存を計ったと思われること。

また、神仙思想との関係である。漢代の中国では、人の死は仮の死であって、遺体を完全に保存できれば、必ず再生すると信じられていたから、甕棺は再生の日までの保存容器であったのであろう。

いつの日か、骨を中国本土に返してもらえる願いが込められていたのが、日本へ渡ってきた中国渡来人の墓だったのである。

吉野ヶ里からは2500基の甕棺が出土している。

なお、邪馬台国時代の墓制は箱式石棺である。「倭国の大乱」終結は紀元2世紀末ごろとみられているが、これを境として北九州、特に筑紫地方の墓制は、それ以前が、徐福集団により南方の古中国から持ち込まれた甕棺方式、そして以後は騎馬民族系の文化を持つ集団の箱式石棺へ移行することになる。

哲学者梅原猛氏も甕棺と徐福の関係を次のように捉えられている。

「始皇帝がいかに不死を求めていたかという証拠が彼の巨大な墓である。確かに始皇帝はこのみこのままが不死であることを求めてはいたけれど、やはり死ぬかも知れないと思っていた。そこで死んでもあの世ですっと生き続けようと考えて巨大な墓を作ったわけです。そしてまた蘇りの時があり、いつか必ず蘇りがある、そのときまで地下に無事眠っていようと、巨大な墓を作ったわけです。この巨大な墓の一部である兵馬俑が実際に発掘されました。これは真の軍隊を俑として作ったもので、すばらしいこの世の栄華の様をそのまま地下に作ろうとしたわけです。

始皇帝の思想がそういうものだとなれば、徐福も同じ思想だ、と考えられます。甕棺というものは、死んでも不死である、あるいはいつかまた甦ってくるという考え方を示しています。そういう地下の不死の世界を甕棺で表現しようとしたのではないかと私は考えるの

です。三千人の童男童女達がすべて不死に預かる、そのシンボルが甕棺ではないかというふうに私は思うわけです。こういうことを考えると、個人の不死ということが甕棺の思想であり、それがまた徐福伝説とつながってくるのではないかと思います」と。

養蚕と絹織物

私は徐福一行が日本に養蚕と絹織りの技術を持ち込んだと信じている。彼らが日本に到着したのが紀元前209年ごろ、それから400年ほどたった邪馬台国の時代、魏志倭人伝に当時の日本の状況が描きだされているが、その中に蚕を飼い、絹をおっている状態が描かれている。

ところで、中国の養蚕と絹織り技術は古来門外不出の秘伝で、厳しく外界への持ち出しは禁止されていた。それがどうして日本にやすやすと入ってきていたのか。古代中国は蚕の移動を厳禁していたために、西域・ヨーロッパへの蚕の移動は長い間起こらず、絹製品として移動するよりほかなかった。つまりシルクロードのラクダのキャラバン隊によって絹そのものが西洋へ運ばれたのである。それも極めて高価で値段で。この状態が七世紀ごろまで続く。そしてようやく蚕が移動するのは、中国の皇女を妃として迎えるある西域国の王が、皇女に蚕を持ち出すことを命じ、皇女は髪の中に蚕の種や桑の実を隠して嫁いだことにより、中国独占が崩れ、持ち出し禁止の禁が解けたと言われている。

そのように厳しい蚕鎖国の状態をかいくぐり、日本では養蚕が邪馬台国の時代に行われていたということは、それ以前に、中国の江南地区より中国人自身が一つの目的を持って行動することにより、蚕の移植・移動が実現できたという特筆すべき事業だったのである。

徐福一団は中国出発前にいろいろな穀物の種子や、進んだ中国の工芸技術、またいろいろな技術者を選んで船に乗り込ませたといわれており、蚕や桑の実などの絹作りまでの一連の準備もした上で有明海に到着していたのである。

吉野ヶ里遺跡の甕棺の中から三十片余りの布片が出土している。布はきわめて腐りやすいものであるが、弥生時代中期末から後期初頭のもものとされる。布片は最大のもので4センチ四方の断片に過ぎないが、布片の中に絹特有のロウ状の光沢のあるものが見つかっている。しかも、朱を塗って模様を描いた絹の布片があり、有力者の贅沢な晴れ着であったと思われる。

吉野ヶ里遺跡で発見された多くの絹布は、二世紀のものであるが、これの意味することは、少なくとも一世紀には養蚕技術が広まっていたこと、このことは、紀元前に有明海から上陸していた徐福集団が、その技術を江南から持ち込んでいたと思われるのである。

徐福一家のその後

中国の後周時代の「義楚六帖」という書物には、徐福の子孫は「今にいたりて子孫皆秦

氏という」とあるという。これは徐福の始皇帝に対する恐怖の表れで、出航後の一族への配慮の表れと見られている。すなわち、「出航後、残された一族については、如何にしたものか」を考えた末のことである。

始皇帝の神仙思想を利用し、不老不死薬を求めに蓬萊の国、日本へ向かうという欺きが発覚するや始皇帝は直ちに裏切り者を追ひ、遺族一同を皆殺しにするであろう。これを防ぐには徐福出航後は、残された一門は徐姓を捨て、中国各地に分住、転住するしかない。

しかし後世の一族のために何らかの系譜も必要である。日本に渡っても徐姓では始皇帝の追っ手に発見され、鏃や銅剣にて惨殺される恐れは十分にあるので、蓬萊の国においても姓については秦、羽田、畑、波多などにかえる必要があると判断していたのである。

また、徐福の家族としては妻の沭氏、長男福永（後に福岡と改める）、次男福島、三男徐仙（後に福山）、四男福寿（後に福田）、の男四、女三の子供を連れて渡航したが、蓬萊の国、日本でさらに三子を設け、住人の子供を持つことになった。これらの子供たちが後に社祠を建て、大神宮所在地および紀伊国の大神官に任じられ、子孫代々これを継承していくことになる。

徐福が親族ともっとも信頼できる部下を筑紫、出雲、紀州熊野など西日本各地に配置し、原住する土民、縄文人と平和的に渾然一体化することを図ったのは、始皇帝の行った人民に対するあの残虐な殺戮を繰り返してはならないと硬く決心したからであろう。徐福自身は筑紫平野の平原広沢に数年留まり、江蘇省より持ち来た米穀の種をもとに農耕を広めている。この地では後に徐福を保食神、穀物の神と呼び、さらに徐福は雨の予測が出来たので水の神、岡象売女神とあがめられている。また、織物の作り方も指導したようである。

秦の時代はすでに祖先を神として総括し、讃え祭る考え方があったので、徐福は自分自身や七人の同伴者、さらに日本で生れた三人の子供を含む親族が、将来子孫たちから神として祀られることに異存はなかった。徐福の子孫の時代になると、多数の多様な特色をもつ神々が日本に生れることになる。記紀にいう「国つ神」である。

泳ぎと河童

子供の頃の泳ぎは、水田の用水路が中心で、堤防一つ越えた大川（筑後川のことを大川または千歳川と呼んでいた）で泳げるようになったのは少し大きくなってからである。それでも一人では駄目で、大川で泳ぐ時は大人や長兄に必ず連れられていた。自由に泳げる用水路の方では、近所の悪童連と集まり、甲羅干しを合間に一日中泳いでいた。その場所のひとつが後述する「蚊田宮跡」石碑が建っていた「ひろんまえ」（日比生前のこと）の水路であった。

今思い出すと、子供は皆、1センチほどのひょうたん形の木製か竹製のお守りをつけた

紐を首につるしていたと思う。夏は一日中泳いでばかりの毎日であったが、真っ黒に日焼けした体に、少し不似合いのそのお守りが必ずついていて、自分自身がつけていたかどうか、記憶にあまりないが、多分つけていたと思う。それは河童に引かれておぼれないようにとのお守りである。毎年一回久留米の水天宮にお参りして札を貰い、それを小さなひょうたん形の竹筒に入れて、首に下げるのである。

筑後川の河童の親分は九千坊といった。なにしろ、9999匹の総大将であるから威張っていた。伝説によると、ある日久留米の水天宮からお使いが来て、お客として呼ばれた。

人間と一緒に座れると喜び勇んで出かけた。ご馳走の中にタケノコの煮しめが出た。人間たちはうまそうにパクパク食べている。ところが九千坊には硬くてかめない。涙を流してがんばったがダメである。「こんなに硬いものを、人間はよくかめるわい」と九千坊は、すごすごと帰っていった。それもそのはず人間に出たタケノコは普通の柔らかい品で、九千坊には、モウソウ竿を輪切りにして、色と味だけつけて困らせたのである。それからは九千坊がいくらかおとなしくなったという。今でも竹の管に水天宮のお守り札を入れて首にくくりつけていると、河童が近寄らぬという。

この水天宮は久留米の筑後川の川べりにあり、川向こうは佐賀県となる県境にある。その佐賀県には徐福伝説が数多く、したがっておまじないやたたり・河童伝説・お守り類の神仙思想を源とする伝えが豊富にのこる地域である。水天宮の地もその影響を強く受けていたと思われる。

2. 徐福集団のその後

紀元前209年ごろ、有明海から上陸した徐福一団は拠点を経済圏の吉野ヶ里の地に定めるとともに、直ちに稲作に適した筑紫平野への拡大を図り、また筑後川をさかのぼり、日田経由、現在の大分県豊後の国に達し、北方では春日原平原に小集落を形成すると共に、博多湾岸に出て、東支那海を渡る実力の航海術を活かした海人集団として山陰や紀州といった遠隔地まで勢力を伸ばし、定住していった。

縄文末期のこの頃の地面は、縄文海進がようやく終わりをつける頃のため、多くは湿地帯か、まだ湖水に覆われていた時代であり、農耕地はどうしても山麓の比較的高い場所に限定されていた。筑紫平野で言えば、脊振山脈の麓、耳納山脈の北麓、宝満山の南麓、それに古処山西麓の扇状地といった場所である。

徐福一団の子孫は、100年ほどの間に、山麓を中心に小国と称される地域集団をいくつかも形成していった。その主なものを筑紫と肥前に限って言えば、まず吉野ヶ里、同じ佐賀県の基肆（基山・紀氏の拠点）、三根（鳥栖市）に葛城氏、佐賀市に巨勢氏の国（なお、浮羽郡にも巨勢氏の別の一派が居た）、福岡県では筑紫野市・小郡町周辺に羽田氏（秦氏）

の国、背振山北麓室見川の上流に平群氏（早良国）、春日原から博多湾岸にかけて海族安曇氏などであった。そして春日原の安曇氏の集団が後に奴国に発展する。かれらは先住の縄文人と交婚し、次第にその人口を増加していった。なお、葛城氏が拠点とした三根は近世、養父郡、基肆郡と合併し、三養基郡となったが、郡都はいずれも鳥栖の地に置かれた。

かれら徐福集団の小国家群は、その後、朝鮮半島から騎馬民族系の渡来人が玄海灘から上陸するまではきわめて平和な時間をすごしていた。しかしその夢はすぐに打ち破られてしまう。徐福集団が中国人と江南人の混成部隊であったのに対し、騎馬民族系は北方大陸のツングース族が中心であった。

紀元前ツングース系の一つ高句麗族の一派が、北方より朝鮮半島西南部に南下する。朝鮮の「三国史記」は、高句麗の建国を漢の孝元帝の建昭2年、すなわち紀元前37年としているが、北九州に到来するのもこの一派の流れであるので、高句麗建国までの朝鮮北部の動きを一度レビューしておく。

かねてから東方進出を目指していた中国は、紀元前3世紀ごろの前漢の末期、朝鮮半島に郡縣制を敷いて中国官人の支配体制をつくりあげた。なかでも楽浪郡は、文化の中心地として大いに栄えた。しかし、その統治下の朝鮮人たちの生活は依然として貧しく民族の文化さえも弾圧された。郡縣の支配は、当初から反撥を買っていたのである。住民たちの抵抗運動は先ず中央の勢威が及びにくい辺境の高句麗部族から始まった。

高句麗族のもともとは満州にいた扶余族の一支族である。高句麗族は扶余の支配を受けていたが、その住地が北部の山谷地帯だったため支配が徹底しないのに乗じて絶えず反抗を続け、その首長は王と名乗るほどに成長する。

高句麗が台頭していった背景には鉄器製造を可能にした技術革新があった。当時中国の東方進出によって金属文明が流入し青銅から鋼鉄への転換が行われつつあった。高句麗はいち早く鋼鉄製造法のノウハウを開発した。これによって破壊力の強い鋼鉄製武具の製造が可能になり軍事力は飛躍的に強化された。農具の改良により、農業の生産性も著しく向上し国力は飛躍的に増大した。多くの部族が扶余を離れ高句麗についていった。

さて、高句麗人の朝鮮半島南下が始まると、以前よりの住民馬韓人はこれにより東南へ押しやられる。また西南の地に住んでいた辰韓（いわゆる倭人たちである）も追い払われる。半島西南部に進出したこの高句麗族一派は、勢いに乗って北九州へも一部進出する。その時期は紀元0年前後である。天孫族・物部氏・中臣氏・大伴氏・忌部氏などとして九州に入ってくる。山陰地方に入ったものもいた。

なお、朝鮮半島内に残った高句麗勢力は、後の時代の西暦350年ごろ百済国となっていく。もう一つの派は、朝鮮半島の東南部に進出する。それがやはり西暦350年ごろ新

羅の国を形成する。紀元ゼロ世紀の渡来人に次いで、4世紀に西日本を席卷する騎馬民族系の渡来人とは、これらの百済・新羅の子孫のことである。

朝鮮からの渡来人集団の中で最大のものは、遠賀川流域に定着した物部族、赤間の宗像族、それに糸島半島に上陸し後に伊都国を作りあげる天の日矛族で、これらの部族は共に天皇家の祖先天孫族を頭に頂く部族であった。神話のイザナギ・イザナミの時代である。

これらの集団が博多湾を避け、遠方の遠賀川河口の「神湊」に上陸したのは、博多の中心地、那珂川一帯にはすでに安曇族大集団が定住しており、そこを避けたのである。遠賀川流域に上陸した物部族と宗像族は、集団規模が大きく、農耕平野への進出が急務であった。特に物部族は規模が大きくすでに直方平野を埋め尽くしてしまい、すぐにでも他地域への拡散を計る必要に迫られていた。そこで彼らは、九州最大の平野、筑後平野への進出を図ろうとする。遠賀川の源流は嘉穂郡の古処山周辺である。さほど高くないその山の麓にある峠（八丁峠）を越せば筑後平野の甘木はすぐ手の届くところにある。しかし、事はそう簡単ではなかった。筑後平野は既にいたるところ徐福集団の小王国が埋め尽くしていたのである。しかし、手を拱いて筑後の様子を見ているだけでは仕方がない。そこで彼らが最初に手をつけたのが、一旦宗像へ戻り出雲へ進出することであった。出雲も無人の土地ではない。出雲族が古来から住み着いており、進出はある程度の戦闘と犠牲を覚悟しなければならなかったが、武将タケミカツチ尊を大将に出雲の大国主と交渉させ、見事、その地を確保していった。このことは後述の「出雲の国譲」の項で説明する。

次は当然、筑後平野への進出となる。このとき、天孫族と物部・宗像集団は、できるだけ摩擦を避け、友好裡にことを運ぶよう平和的進出を心がけたはずである。現に、既存勢力の一つ背振山の東麓に勢力を持つ葛城族は、その族王（高御産巢日尊）が意外と友好的で天孫族と友好条約を結ぶことを受諾したのである。そして高御産巢日尊は以後天孫族に協力するだけでなく、自らが筑紫平野全体の連盟関係を作り上げることを目指して積極的に活動していくことになる。しかし、中には進出を喜ばない既存の小国家のいくつかと戦闘を開始せざるを得ないケースがあった。その一つが奴国（春日原の安曇族）との戦いである。

その戦いの様子は神話の中に述べられている。

奴国は、徐福集団の一員である大綿津見神を頭領とする安曇族と大山津見神を頭領とする二つの集団が合体して出来た国で、前者が博多湾海岸部に集落を作り、後者が内陸部の春日原を中心に集落を作り、それぞれが発展して一つの奴国に成長したという海陸両翼の大集団であった。

そこへ甘木を通り抜けてきた天孫族と物部族が顔を出し始める。最初の動きはスサノオ尊である。天孫族が甘木に高天原の拠点を設け、西や南への拡張に動きはじめる時、尖兵

の役を担っていた天孫族の中の変わり者、スサノオ尊は、イザナギに「海原を治らせ」と命じられ出陣するものの、そのとき根の堅州国がわからず（安曇族の小国の地域）、長い間「青山は枯れ山の如くなき枯らし、河海はことごとくに泣き乾し」、かなり暴れたようで「悪しき神の音は、さ蠅なす皆満ち、よろずの災いことごとくおこりき」とあるように、無茶なことをして回ったようである。この根の堅州国は奴の瀧州国のことで、博多駅横の瀧州町交差点付近である。スサノオはしかし、結果的には奴の国の海岸部を自分の支配下に入れてしまう。つまり大綿津見神を配下にしてしまうのである。スサノオ尊のこの行為はよそ者の隣国荒らしであるが、この段階ではしかし問題はさほど大きくはなかった。

スサノオ尊は博多での暴挙により高天原より追放され、母の出身地出雲へ一旦逃れる。スサノオ尊はその後再び以前手ににれていた奴国に戻ってくる。このときの話が神話に次のように述べられている。

スサノオ尊は帰国挨拶を兼ね高天原（甘木）の天照大神に事情説明に伺おうとした。これを聞いた天照大神はビックリし、国中が震動したので「わが弟がくるは必ず善き心ならじ、わが国を奪わむと欲うこそあれ」と男装をして主権のしるしの勾玉を全身に巻きつけ弓矢を持って仁王立ちになって敵対する。これは主権争いの表現であり単なる兄弟喧嘩ではない。高天原（陸の王者天照大神）と今や海の王者となったスサノオ尊の対決である。

結果的にスサノオ尊が負け、再び奴国を追放される。この戦いの時、春日原の地にあった奴国の内陸部の都は破壊される。これが「倭国の乱」の一つである。

一方、大綿津見神を祀っていた海辺の安曇族一派はスサノオに海岸部を相当に荒らされはしたが、春日原が破壊されたほどには影響されず、その後も博多湾沿いを中心に活躍を続ける。一方の大山津見神も春日原は破壊されたものの、その後は天孫族に協力する姿勢に変わる。そこで天孫族は大綿津見神と大山津見神の部族の長とそれぞれ後婚姻関係を結び、和睦を進めることとなる。

筑後平野には奴国のほか、佐賀市周辺（および浮羽郡）の巨勢族、小室川上流の平群族など、まだまだ多くの集団がいた。天孫族側は、出来るだけ戦闘による侵略を避け、講和の手段でこれらの一団に対処した。地元側も、奴国の都、春日原が戦闘で廃墟にされた事実を見て、すすんで講和に応じていった。さらに天孫族は婚姻関係を結ぶことでこれに応えた。

婚姻関係がどのように進められたか。まず葛城族であるが、先述したように、天孫族はいち早く友好関係を樹立していた。

葛城族の王は高御巢日尊である。一族は肥前三根郡の地に拠点を据えていたが、そこは筑後川の西北に広がる筑後平野の扇状地で、水田農耕にもっとも適し、早くから富を蓄積していた。現在も鳥栖周辺を発掘するといたるところから古代の陶器類が出て来るところとして有名である。

天孫族はこの高御巢日尊の知力、財力に感服し、すすんで彼に協力を求めていったのである。高御巢日尊の娘、万幡豊秋津師姫が後に天忍穗耳尊と結婚し、天皇家の一員となり、高御巢日尊は「神」の称号を得て「高木の神」となり、天孫族の一員に加えられるが、もともとは「国つ神」の一人である。

婚姻関係についてはかつて戦闘し合った大山津見尊家、それに大綿津見尊家とも進められた。

天孫族の進出に対し大綿津見神と大山津見神の間で意見が対立した。国を取られることに我慢できず、最初は大山津見神（春日原）が高天原（甘木）に対して戦争を仕掛ける。しかし最新武器を持つ騎馬民族系天孫族の敵ではなく、都の中心春日原は焼け野原になる。それによって講和の機運がでて、大山津見神の娘が天孫族の皇子と結婚することとなり、また、大綿津見神の娘も天孫族と婚姻関係を結ぶことになって、ようやく平和が訪れ、甘木と福岡は一体となり、その子孫は後の天皇家につながるわけである。

なお、古事記は大綿津見神社の神について、イザナギが黄泉から帰って禊をした時に、ソコツワタツミ（底津綿津見神）、ナカツワタツミ（中津綿津見神）、ウツワタツミ（上津綿津見神）の三神が生まれ、この三神を総称して綿津見神と呼んだとある。そうすると大綿津見神も天孫族ということになるが、他のところでの大綿津見神の扱いは明らかに国つ神、つまり地元神である。そして、大綿津見神の子のウツシヒカナサク（宇都志日金析命）が安曇族の祖神であるとされている。

三神誕生の時、ソコツツノオノミコト(底筒男命)、ナカツツノオノミコト(中筒男命)、ウツツノオノミコト(表筒男命)の住吉三神(住吉大神)も生まれている。住吉神も海の神であり、住吉神を祭る住吉大社の奉祭氏族の津守氏の氏神が大海神社(おおわたつみじんじゃ)であることは、綿津見神と住吉神との関係の消息を暗示している。

後述する「高良大社」では祭神「玉垂神」の左右に鎮座されているのが「八幡神」と「住吉神」で、八幡神は言わずと知れた道教の神、住吉神は上述の通り、徐福集団の一つ綿津見氏の海の神である。

住吉三神は、綿津見三神と共に生まれ元は同じ神だったのかもしれない。それが、古代王権（邪馬台国）が九州から畿内（近畿）に東遷する時、重要な役割をしたのが住吉三神であったため、近畿へ移ったのが住吉三神ではないかと言われ、九州に留まったのが綿津見三神であったと言われているのである。

山幸彦と海幸彦の段では、ホデリ（海幸彦）の釣針をなくして困っていたホオリ（山幸彦）が、シオツチノオジ（塩土老翁）の助言に従って大綿津見神の元を訪れ、大綿津見神の娘であるトヨタマヒメ（豊玉姫）と結婚している。二神の間の子であるウガヤフキアエズはトヨタマヒメの妹であるタマヨリヒメ（玉依姫）に育てられ、後に結婚してカムヤマトイワレヒコらを生んでいる。この辺の系図は後に示す。

古事記では、この大綿津見神は先述の通りイザナギが筑紫でミソギをしたとき天照大神が現れる前に出現している。すなわち天孫族以前に存在していたとされている。国つ神であり、徐福集団の一員であったのである。

なお、古代王権の東方への移動について、「ニギハヤヒ尊の東遷」「神武の東征」「神功皇后の東征」などの神話が残されている。実態は必ずしもこれら神話と合致しないが、九州からの移動は事実としてあったと考えている。具体的には次の四つの大きな移動があったと見る。

- ① 佐賀鳥栖地区を拠点とした葛城族の奈良盆地への最初の東遷（巨勢氏随行）
- ② 遠賀川周辺の物部族をつれたニギハヤヒ尊の東遷。ほぼ同じころ周防灘に面する豊前地区から天日矛族や海部氏を従えた台与（豊受姫）の東遷。
- ③ 神話「神武の東征」。これの実態はのちに崇神天皇になる水沼君の畿内葛城王朝への婿入。大伴・久米氏などが従った。すなわち「崇神の東征」である。
- ④ 九州で神功皇后の子として生まれた応神天皇が、母親とともに東征する。「神功皇后の東征」である。

「奴国」のことに再度触れる。

奴国の地理的位置はだいたい博多湾沿岸の福岡平野にあったが、しかしその領域は必ずしもはっきりしていない。

日本の学者は、福岡県春日市須玖岡本にある巨石墓が奴国王の墓だと見ている。その巨石墓からは、前漢鏡が30面前後、銅剣・銅戈が17, 8本、さらにガラス玉・管玉などが出土した。

須玖地方は、弥生時代遺跡の珍しい密集地で、「弥生銀座」と呼ばれている。ここでは数百の「甕棺」が発見され、奴国の中心であったとされている。それらの遺跡から大量の前漢鏡と銅利器のみならず、青銅器の鋳型とガラス玉勾玉の鋳型が出土し、さらに鉄器も発見されたと言うことは、建国後さほど時間が経過しない段階から奴国が楽浪郡と密接な交渉を行い、生活水準が比較的に高かったということを示している。

その墓葬形態は、甕棺葬や共同墓地であるが、巨石厚葬墓、単なる青銅器副葬墓と副葬品のない墓との区別が現れている。

これは奴国ではすでに階級分化が行われ、巨石墓に埋葬され、当時最も貴重な無上の宝器＝鏡を副葬品とした奴国王が共同体を凌駕する階級支配者へと転身していく様子を示したものである。奴国王が漢都に使いを遣わしたのは、こうゆう変化を反映したものであった。換言すると、楽浪郡が置かれて後、漢文化の直接の影響の下で、倭人社会の発展がアンバランスとなり、そして一世紀半たってから、100余の国の中で、博多湾沿岸に拠っ

て海上交通の要路を守っている奴国が、その有利な位置を利用して、進んだ漢文化を積極的に取り入れ、さらにより高い文明水準に達したのである。したがって奴国の王は他国のように楽浪郡に献見するだけでは満足できず、さらに直接、後漢朝廷へ使者を遣わし、中国の皇帝から賜る爵位を獲得しようとしたのである。

奴国の領土だったと思われる福岡市志賀島からは「漢委奴国王」の金印が発見されている。

ここで吉野ヶ里についても触れておかねばならない。

東京・国分寺市に住む古代医学の研究者、槇佐知子氏は「日本にも明堂があったはずだ」と考え探していた人であるが、吉野ヶ里の北内郭と呼ばれる遺構を見て、これこそ明堂だと確信したという。

明堂というのは、古代中国の皇帝が政治の中心にすえた建物で、内部に九つの部屋がある。それぞれの部屋で太陽や月、先祖などを祭り、臣下の服属儀礼も行っていた。槇さんの専門である古代医学や針灸の世界では、国家の大事な九つの祭りを身体に置き換え、大事なツボを「明堂」と呼ぶらしい。彼女は、「明堂」という言葉が現在に伝わっている限り、その基になった遺構（建物）もどこかにあるはずと、探していたのである。

北内郭の中心に立てられた建物は、柱穴が東西四本、南北四本ずつというきわめて珍しい柱立てをしている。ほぼ四角形の建物で、柱穴も直径約50センチと大きい。この柱を結ぶとちょうど九つの角部屋が出来る。しかも、北内郭は二重の堀と柵列で厳重に守られ、外部と隔絶された「聖なる空間」である。要するにこの建物と「北内郭」は、南北と太陽の運行をきっちりふまえて設置する場所をきめていたのである。

第四話、天孫降臨神話とその実態

1. 降臨神話

まず、渡来した天孫族の神話を「古事記」で見てみよう（要約）。

天地のはじめ

多くの民族神話がそうであるように、『古事記』も天地開闢から神代の物語を始めている。天と地とが初めて分かれたとき、高天原（たかまがはら、天上界）に先ず三柱の単独神が出現した。アメノミナカヌシノカミ（天之御中主神）、タカミムスビノカミ（高御産巢日神）、そしてカムムスビノカミ（神産巢日神）である。アメノミナカヌシは、天の中央にあって、天地を主催する神であり、タカミムスビとカムムスビはいずれも万物の生産・生成を掌（つかさど）る神であるが、前者は高天原系（皇室系）、後者は出雲系の神とされている。

次いで、国土がまだ若くて固まらず、水に浮いた油のような状態のとき、葦の芽が泥沼から萌えいずる力が神となり、さらに天の永遠性を神格化したアメノトコタチノカミ（天之常立神）が出現した。その後も、大地が次第に整うまでにクニノトコタチノカミ（国之常立神）をはじめとして様々な神々が生じ、最後にイザナギノカミ（伊邪那岐神）と女神のイザナミノカミ（伊邪那美神）が出現した。クニノトコタチノカミからイザナミノカミまでを合わせて神代七代という。

オノゴロ島

天つ神一同は、イザナギ・イザナミの二神に対して、「この漂っている国土をよく整えて作り固めよ」と仰せになり、神聖な矛を授けられた。そこで、イザナギ・イザナミの二神は天地の間にかかった梯子の上に立って、矛先で潮をごろごろとかき回した。矛を引き上げると、その先から潮水がしたたり落ち、積もって島となった。これをオノゴロ島という。

二神はオノゴロ島に天下り、神聖な柱を立て、広い御殿を建てた。そして、神聖な柱を回り、出会ったところで結婚することにした。イザナギは左から回り、イザナミは右から回って、二神が出会うと、イザナミが先ず「ああ、なんとすばらしい男性でしょう」と言い、その後にイザナギは「ああ、なんとすばらしい少女だろう」と言った。その場所で結婚して、イザナミは不具の子・水蛙子（ひるこ）を生んだ。この子は葦船に乗せて流して捨てた。次に、淡島を生んだ。この生み損じた島も御子の数には入れなかった。

国生み

自分たちが生んだ子が不吉だったので、二神は高天原に上って、天つ神にその理由を尋ねた。天つ神は、「女が先に言葉を発したので良くなかった。帰り降って、改めて言い直す

ように」と諭した。二神はオノゴロ島に戻るとまた前回と同じように天の御柱を回り、こんどはイザナギが「ああ、なんと可愛い少女だろう」と先に声をかけ、イザナミが「ああ、なんとすばらしい男性でしょう」と答えた。

このように言い終わって結婚して最初に生まれた子が淡路島である。次に、身体は一つで顔が4つある四国を生んだ。次に三つ子の隠岐島を生んだ。次に築紫島（九州）を生んだ。次に壱岐を生んだ。次に対馬を生んだ。次に佐渡島を生んだ。次に大倭豊秋津島（おおやまととよあきつしま）を生んだ。我が国を大八島国（おおやしまのくに）というのは、これらの8つの島を先に生んだためである。

大八島を生んで帰られるとき、吉備児島を生んだ。次に小豆島を生んだ。次に大島を生んだ。次に女島を生んだ。次に知訶島（ちかのしま）を生んだ、次に両児島（ふたごのしま）を生んだ。

神生み

国を生み終えて、イザナギ・イザナミの二神はさらに神々を生み出した。オオコトオシヲノカミ（大事忍男神）を筆頭に、ヒノカグツチノカミ（火之迦具土神）まで多くの神々を生んだ。しかし、ヒノカグツチノカミを生んだとき陰部が焼けて病に伏し、ついに亡くなってしまった。イザナミが生んだ神々の総数は35柱である。

イザナギは亡くなった愛妻のイザナミを、出雲国と伯耆国との境にある比婆（ひば）の山に葬った。その後、十拳剣（とつかつるぎ）を抜いてカグツチノカミの首を斬った。すると、剣の先や剣の本、柄に付いた血から8柱の神が生まれた。その中には、後に国譲りで活躍するタケミカヅチノヲノカミ（建御雷之男神）がいる。

黄泉（よみ）の国

イザナギは女神のイザナミに会いたいと思い、後を追って黄泉国（よみのくに）へ行った。出迎えたイザナミに対して、イザナギは「愛しい妻よ、二人で作った国はまだ作り終わっていない。だから現世に戻ってほしい」と懇願した。しかし、イザナミは「私はすでに黄泉国の食物を食べてしまいました。しかし、愛しい夫が訪ねてきてくれたので、黄泉国の神に相談してみましよう。その間、私の姿を見てはなりません」と答えた。

長く待たされたイザナギは、ついに待ちきれなくなって髪に挿していた爪櫛の太い歯を一本折って、それに火をともして御殿の中に入った。すると、女神の身体にはウジがたかり、ゴロゴロ鳴って頭や胸などから8種の雷神が出現していた。イザナギは驚き恐れて逃げ帰ると、イザナミは「よくも恥をかかせてくれた」と、ただちに黄泉国の醜女（しこめ）に追いかけさせた。イザナギは髪につけていた黒い鬘（かずら）を取って投げ捨てると、それがヤマブドウの実に変わった。また、爪櫛の歯を折って投げると、タケノコが生えた。醜女たちがそれを食べている間に、イザナギは逃げ延びた。

さらに、8種の雷神が1500人もの黄泉国の軍勢を従えて追跡してきた。イザナギは

十拳劍（とつかつるぎ）をうしろ手に振りながら逃げた。現世と黄泉国との境の黄泉比良坂（よもつひらさか）のふもとまで逃げのびて来たとき、その木になっていた桃の実を3つとって投げつけた。それで、黄泉国の軍勢はことごとく退散した。

最後に、妻だったイザナミ自身が追いかけてきた。イザナギは千引（ちびき）の岩を黄泉比良坂に引き据えた。その岩を間に挟んで二神は離別の言葉を交わした。イザナミは「あなたがこんなことをなさるなら、私はあなたの国の人間を一日に千人絞め殺そう」と言った。イザナギは、「お前がそうするなら、私は一日に千五百の産屋を建てよう」と答えた。黄泉比良坂は今の出雲国の伊賦夜坂（いうやさか）という坂である。

禊ぎ祓いと三貴子

汚らしい国へ行ってきたため、イザナギは身体を清め禊ぎをすることにした。そして、筑紫の日向の橘の小門（おど）の阿波岐原（あわきはら）に出向いて禊ぎ祓えを行なった。先ず身につけていたものを次々と脱ぎ捨てると、全部で十二柱の神々が生じた。

次いで、流れの速い中流の瀬に場所を移し、水に潜って身の穢れを洗い清めると、また様々な神が生まれた。このとき、安曇連らが祖先神としてあがめ祭っている三柱のワタツミの神も生まれた。

さらに、左の眼を洗うとアマテラスオオミカミ（天照大御神）が生まれた。右の眼をあらうとツクヨミノミコト（月読命）が生まれた。鼻を洗うとタケハヤスサノオノミコト（建速須佐之男命）が生まれた。

イザナギは最後に三柱の貴い子を得たことを大いに喜び、首飾りの玉の緒をアマテラスに渡して、高天原の統治を委任した。同様に、ツクヨミには夜の世界を、スサノオには海原をそれぞれ治めるように言い渡した。

2. 当時の朝鮮と九州での出来事

紀元前200年ごろの中国大陸北東部には、鮮卑、匈奴、烏桓、扶余族などがおり、朝鮮半島には北西部に中国系の箕氏、南部には江南から倭人が渡来し建国した辰国があり、それが発展し、三韓と呼ばれる国があった。古朝鮮と呼ばれる時代である。

中国ではBC202年に劉邦が帝位につき漢王朝（前漢）が始まっていた。大陸北東部の諸族の中で、日本に直接影響を与えたのは「騎馬民族」文化の持ち主の「扶余」であり、その後裔たる高句麗の一派である。彼らは中央アジアに住む騎馬民族の鮮卑・匈奴・烏桓やモンゴル人とは仲間ではあったが、一線を画した東アジアの住人であった。また、西方に住む同じ騎馬民族のスキタイ人とも一線を画していた。ただ、馬具・乗馬の発見はスキタイ人であり、東アジアの扶余、高句麗族も早くから乗馬を始めている。新しい騎馬文化の誕生である。

紀元前200年ごろ、中国の燕王国副官衛氏が北西部に逃げ込み、紀元前194年、当地を支配していた殷の王族箕氏を倒し、半島北部に衛氏朝鮮を樹立した。そして、前漢が、紀元前108年に衛氏朝鮮を倒して、楽浪郡を設置した。これで古朝鮮は滅びた。ところが前漢の衰退により、楽浪郡の勢力はすぐに低下する。紀元前37年、東北部（満州）に扶余族系の高句麗という騎馬民族国家が樹立された。彼らは急激に拡大を始める。

衛氏に敗れた箕氏は中国人である。彼は中国の春秋戦国の動乱の時代、戦乱を逃れて朝鮮半島北西部に移動していた集団の長である。それが同じ中国人の衛氏に追い払われる。

その衛氏もBC108年には漢王朝に追い払われる。そして楽浪郡が設置される。さらにBC37年には騎馬民族の高句麗国が樹立される。このように朝鮮半島のこの時期は大騒乱の時期であり、多数の避難・逃避民がいた。この頃、朝鮮から逃避した箕氏あるいは衛氏などの中国人集団、あるいは馬韓、辰韓、弁韓の前の時代にいた濊族が九州へ大挙移動したとも思われる。想像をたくましくすれば、その中に後に日本で天孫族と称されることになる一団、その同伴者物部氏、宗像族なども含まれていたのであろう。あるいは、新しく建国した高句麗が、急激に膨張し、その一翼が九州まで張り出したきたとも考えられる。本稿ではこの扶余族・高句麗族などの騎馬民族系人種の移動・渡來說をもとに話をすすめることにする。

扶余や高句麗の人々は、中央アジアの遊牧民（匈奴）と異なり、もとは原始的な農耕や狩猟で生活していた。彼らの居住地は草原や砂漠ではなく、雨に恵まれた森林地帯だったのである。しかし、匈奴が強大化したとき、彼らはその遊牧生活は真似なかったが、騎馬の風習とそれに伴う文化を受け入れている。

中央アジアの匈奴は、より豊かな中国に関心を抱き、東北地方（満州）にはあまり興味を示さなかった。そのため、扶余や高句麗は「騎馬民族」の興亡の影響を受けずにすんだ。そして、騎馬軍団を作って武力を蓄えた高句麗は、匈奴や鮮卑の動きとかかわりなく、豊かな土地を求めて南下していったのである。

なお、扶余族（高麗族）のほかには、漢江以南の地域には韓族がいた。そこには馬韓・弁韓・辰韓の三韓がいた。この三韓は古朝鮮の頃の辰国であり、馬韓から出た辰王を盟主としていた。辰国の三韓は後に分立して、馬韓が百済に、弁韓が伽耶に、辰韓が新羅となる。

甘木の天高原に拠点を置いた天孫族と物部・宗像族は、農耕地確保のため、早々に筑後平野への進出を意図するが、条件の良いところにはすでに徐福集団の子孫が作った小勢力圏がいくつも形成されており、それら勢力との関係をすっきりさせておかないと、各地で小競り合いを繰り返すことになることは目に見えていた。その愚を避けるために最初に動いたのが、当地最大の勢力である奴国との友好関係樹立であった。最初は征服という強硬

手段で、そして最終的には平和的に婚姻関係を結ぶことにより一体化する方策をとる。すでに述べた通りである。

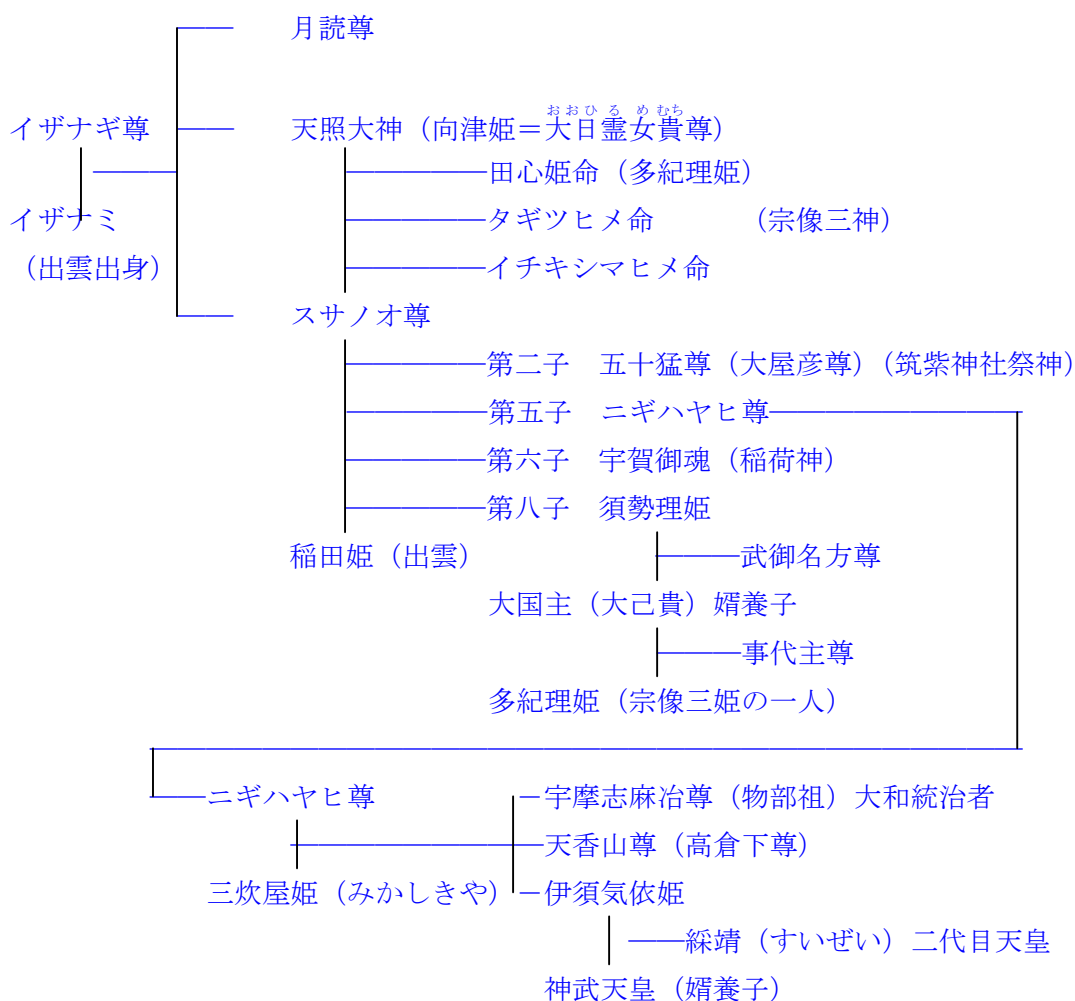
「奴国」の海運の実力、つまり博多湾から我が物顔に外海を往復している力をみて、協力関係樹立の方が得策と考えたからであろう。

博多湾の海人とは、神話にある安曇族あるいは後の時代に海部・尾張族として知られるが、元はといえば徐福集団の一派である。かれらは中国時代から守ってきた航海術を余すところなくここで発揮していたのである。

そして甘木の天孫族と奴国の王族との婚姻関係、出雲国からの国譲り、また、後で述べるように伊都国王族との婚姻関係もでき、邪馬台国連合の中核が形成されていく。

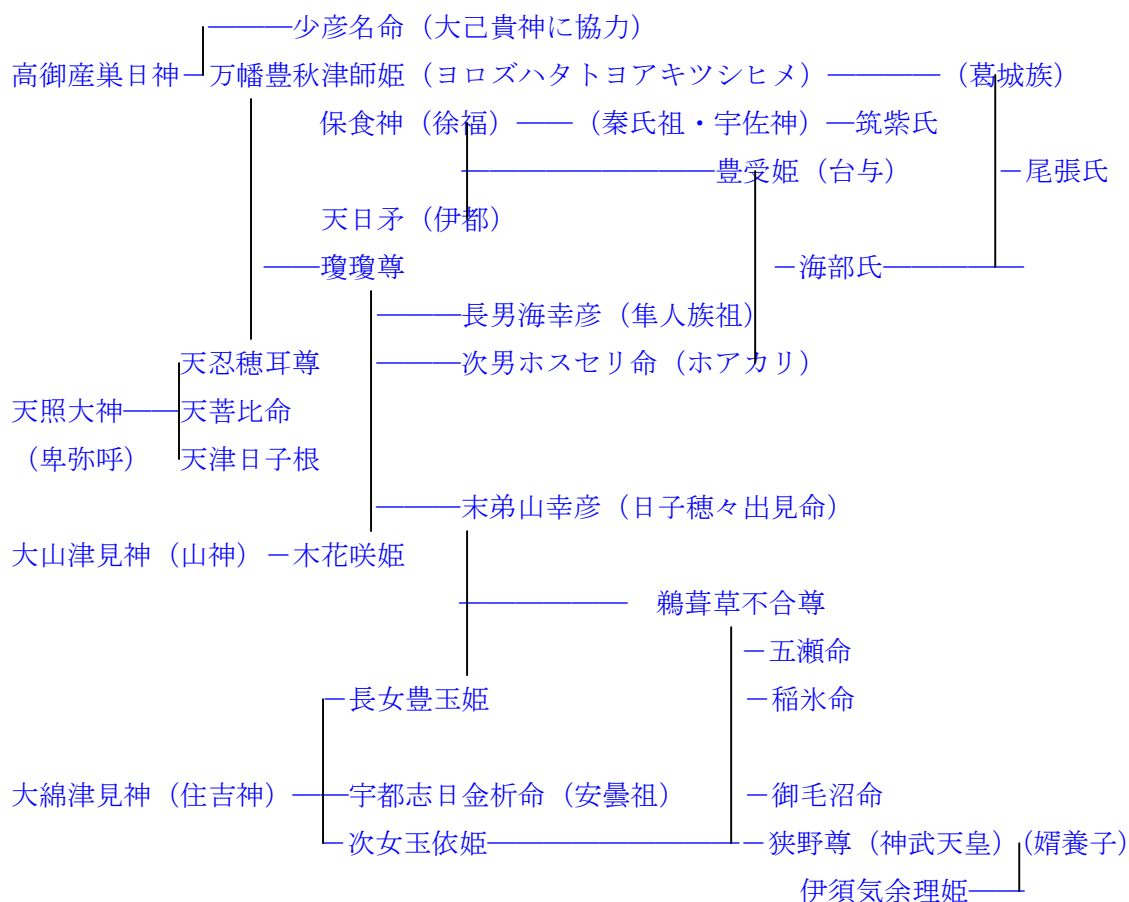
神話の天孫降臨にある系図と「先代旧事本紀」を使って、その婚姻関係を図示すると次のようになる。

スサノオ出雲系系図



(注) 天照大神・月読神・スサノオ尊の三貴子の誕生は、イザナミの死後のこととされている。上述神話の通り、出雲の黄泉の国にイザナミの亡がらを見に行ったイザナギ尊がホウホウの態で筑紫〔日向〕に逃げ帰り、禊の時に生まれた子達である。つまり、母親はイザナミではない、とされているので、上記系図とは矛盾する。しかしスサノオだけは母の里出雲に帰りたく泣き叫ぶ場面があり、イザナミの子であるとされている。

天孫系系図



天孫族はイザナギ尊を祖とし、その子に天照大神、月読尊、スサノオ尊がいて、このスサノオ尊には天照大神とのウケイで田心姫命、瑞津姫命、市杵島姫命の所謂宗像三神がいる。

ここで天孫族の近隣王国との関係をレビューしておく。まず、奴国との関係である。

高天原の天孫族は奴国と当初は戦闘によって接し壊滅的打撃を与えるが、それが終わると通婚し親戚づきあいとなり、甘木と博多は言ってみれば一体化する。当初の戦闘というのは、奴国内での山神と海神の意見が対立したのが原因である。天孫族に対して「和」で挑むか、「争」で挑むかの意見の違いで、交戦派の山神の勢いが強く、結果的に大きな戦争

となった。それはしかし、最新の武器と戦術を朝鮮から持ち込んでいた騎馬民族・天孫族にかなうものではなかった。そして春日原を中心とした都の大部分は天孫族によって焼き払われた。これによって奴国側も「講和」で一致し、天孫族から申し込まれた婚姻関係を具体化したのである。その結果は上の系図に示したとおりである。

「国つ神」とあがめられる大綿津見神（海神）と大山津見神（山神）の二神によって治められる奴国は、海岸線が大綿津見神、内陸部（春日原）が大山津見神と分担されていた。大綿津見神の本拠地は志賀島（志賀海神社）、一方、大山津見神は生活の中心は春日原で、彼はその後、大宰府近く筑紫野市柚須原の大山祇神社に祀られる。

大山津見神（山神）には二人の娘があり、妹のコノハナサクヤヒメが三輪（甘木）の天高原の天孫族三代目ニニギ尊と結婚する。コノハナサクヤ姫はその後、大宰府の裏山「宝満山」登山口にある竈門神社（かまど）の祭神として祀られるが、二人の間にできた三人の子供が長男海幸彦（ホスセリ）、次男ホデリノミコト（またはホアカリ）、末弟が天皇家の祖の山幸彦（またはヒコホホデミ）で、山幸彦の息子が鵜葺草葺不合尊（ウガヤフキアエズ）、そしてその息子が神武天皇となる。

福岡の博多湾にある志賀島は、現在では「海の中道」通称「向浜」によって地続きになっているが、古代には独立した島で、そこが安曇海人族の根拠地であった。この島には、志賀海神社があり、安曇族が崇拝するワタツミ（綿津見・海神）の神が祀られている。

その後、安曇海人族は船運力を利用して日本列島の各地に展開して行った。近江の安曇川、三河の渥美半島、信濃の安曇野、岩代（福島県中部）の安積など、行く先々に同族の名前を地名に残している。注目すべきことは、その行動範囲は海岸に留まらず、河川を利用して内陸にまで及んでいることである。安曇野の西の北アルプスの穂高岳の名前も安曇族の祖先の穂高彦の名前によっている。

それはともかく、ここで注目すべきことは、海部氏はその名の通り海人であり、博多湾にも海部卿があることから安曇氏とは同系の海人族であり、それに対して天皇家の祖先は「山幸」にたとえられていることから、この両者は系統としてはまったく別のものであるにもかかわらず、何度も姻戚関係を結んでいるということである。しかも常に海部氏のほうから女がでている。この二神はしかし、もともとは地方神に過ぎぬ系列で、旧はといえば、中国からはるばる佐賀の地に渡来していた徐福集団の一子孫だったのである。

では、後の時代にヤマトで大活躍する海部・尾張氏の共通の祖先の直接の源卿はどこであらうか。それは豊後（大分県南部）地方である。全国には20ヶ所ほど海部という地名がある。尾張もその一つであるが、豊後と丹後の間には一致する地名が極めて多い。大野・三重・八坂・海原・蛭子・竹野などの地名がどちらにもある。それだけではなく、豊後の

日出町には真那井という字があるが、丹後にも比治の真名井（この地名については後述するが、北野町とも関係がある）があるのだから、かつて豊後に居た人たちが丹後に大量に移住して来たことは間違いないとされる。

それはそうと、海部・尾張氏の系図には、天皇家との密接関係がほかにも示されている。その三代目のアメのオシヒト（天忍人）命は「古語拾遺」によると、日向でヒコホホデミの子のヒコナギサタケ・ウガヤフキアエズに仕えたとある。その妹のヨソタラシ（世襲足）姫は孝昭天皇の皇后になっている。また、崇神天皇の妃の大海媛も海部氏からでているし、ヤマトタケル（日本武尊）が東征の帰路に結婚したミヤズ（宮簀）媛の名前さえこの系図に出てくる。

また、崇神記に、出雲征服の使者として名を連ねるタケモロスミ（建諸隅）だとか、神功皇后の下で活躍し、後に飛驒の怪人・両面宿禰を討ったという英雄のタケフルクマ（建振熊）の名前までこの系図には顔を出している。

次に忘れてならないのが高御産巢日神一族である。神話のなかで高御産巢日神は「天孫降臨」「国譲り」「神武東征」などの場面にしばしば登場。天照大神とともに高天原の政治の司令神として種々の命令を発動したりして、行動はなかなか活発である。その活動ぶりを見ると、大変に政治色が強く、長老的な政治手腕に長けており、いってみれば得意技は巧みな根回しの術ということになる。

また、のちに大和に進攻した神武天皇のもとに神剣を下し、八咫鳥を派遣するなどしてその大和政権樹立の偉業達成を援助している。このように、高御産巢日神は高天原の司令神として祭事、政治、軍事を司る実力者である。

高御産巢日神はしかし、天孫家系ではない。鳥栖市周辺を源郷とする葛城族の祖とされる。このことの意味するところは、実力者で、天孫族を指導した政治家ではあるが、国つ神に過ぎなかったといえるようである。

葛城氏一族については改めて後述する。

最後に、天孫族の伊都国との関係について触れる。この国への対処の仕方は奴国に対するものとは根本的に違っていた。それは安曇族がまったく異なる人種であったのに対し、伊都国の祖先は天孫族と同じ朝鮮半島出身の一派だったからである。言ってみれば天孫族と同族といってもよい関係である。それに三貴土が生まれたのもこの地の日向の橘の小門（おど）の阿波岐原（あわきはら）であり、天孫族にとってはかけがえのない聖地である。それでも、この伊都国に触手を伸ばした理由は、既に伊都国が楽浪郡との外交交渉も頻繁に行い、安定した大国に成長していること、神湊（遠賀川河口）の地より、糸島郡のほうが朝鮮半島へ近く渡航がより便利なことなどであった。

高天原の天孫族は、ここでは戦闘ではなく友好関係樹立から始まり、天孫族の世継ぎを

伊都国へ移住させるという手段をとる。神話のいう「ニニギ尊」の日向への天降りである。高天原に集まった神々の合議結果、ニニギ尊は天照大神の命令で高祖山の近くヒムカ（日向）の山道を越え（櫛触山の横）、家族と供をつれて伊都国入りを果たしていたのである。「ニニギ尊」はその前に既述の通り博多のコノハナサクヤ媛と結婚し家族もいた。したがって、あらためて伊都国で妃を取ることはできなかった。そこで次善の策として、保食神（徐福宗家）の子孫で筑紫平野の雄となっていた羽田（秦）氏と伊都国ヒボコ王家との間に生まれていた豊受姫をニニギ尊の次男ホアカリの妃とする縁結びをさせることとなった。国王「天日矛」の娘豊受姫（台与）がホアカリに嫁いだのである。これで天皇家との縁戚関係が始まる。

本稿では、この豊受姫を「台与」と見做している。北野町史誌で取り上げた「豊比咩」も「台与」であり、豊受姫＝豊比咩である。父親は天日矛王の王子であり、母親は「保食神」として祀られている徐福その人の息子、秦氏一族の娘であった。

ニニギ尊が日向三代の第一代目でその妻が木花咲姫、この妃は細石神社に祀られている。二人の間の子供に長男海幸彦、次男ホアカリ、末弟日子穂々出見がいて、ホアカリが豊受姫と結婚したことは先述の通り、末弟の日子穂々出見が日向二代目で、彼の生誕地とされるのが八竜の森、大綿津見神の娘豊玉姫（志登神社祭神）と結婚して三代目鵜葺草不合尊（ウガヤフキアエズ）をもうける。日子穂々出見の墓は井原鎚溝遺跡にある。三代目鵜葺草不合尊は玉依姫（高祖神社祭神）と結婚し後に神武天皇となる狭野尊を産む。

この伊都国が邪馬台国（高天原）にとり、いかに重要であったかは、「天子直轄の軍隊」である「一大率」が、「常に伊都国に置かれた」、そして伊都国だけには「世々王あり」と倭人伝に記している通りである。

倭人伝によれば女王国の卑弥呼の前は男王で大乱で乱れていたと記載され、伊都は「世有王、皆統属女王国」と記載されているが、これは伊都が卑弥呼の前の時代にも代々女王国（そのときは男王国）に統属すということで、卑弥呼の前から両国は強い関係にあったということである。倭国大乱の時も友好国であったとはよっぽど強い結びつきがあったことになる。これは伊都が邪馬台国の分国であったことの証明である。

さらに邪馬台国は伊都から遠くないところにあることを意味する。すなわち、大乱の最中、両国の間に互いに攻め合う多くの国があれば、友好を保つのも難しく、友好を保つ意味もなくなる。隣国であってこそ大乱に対処できる。八咫の鏡出土の平原遺跡は卑弥呼出現直前の遺跡である。おそらく卑弥呼の親の墓であろう〔イザナギ尊？〕。一般に鏡はそのまま埋葬されているのにこの大鏡は四面とも割って埋葬されている。鏡は個人に所属する下賜品である。八咫の鏡は卑弥呼の鏡であって親には下賜ではなく奉納である。従って卑弥呼がこれを先祖の王の墓に奉納品として納めるには割って捧げなければならない。

なお、ついでながら、伊都国の東に高祖山を主峰とした山脈が南北に走っており、これが東の筑紫平野と西の糸島平野とを分断している。ところが山脈の一部が低くなったところがあり、それが東と西を結ぶ格好の峠となっている。この峠の山道の所を「日向」というが、これはヒュウガと読むのではなく、ヒムカと読む。理由は原田大六氏によると次の通りである。

平原の王墓からは一の鳥居、二の鳥居といった不思議な遺構が見つかった。一の鳥居は埋葬された巫女王の頭部に置かれ、亡骸と共に伊都国の日出る山並み、高祖連峰の日向峠を遥拝する場所にあった。

また、二の鳥居は、古代の聖地といわれる高祖山に向けられているという。「一の鳥居を観測点にして、冬至から夏至までの、太陽の移動区間が、古代では『日迎い』山として、『ヒムカ』といわれたのであろう」。高祖連峰から朝日が昇る位置、それは農業を営むための暦であったと原田氏は述べる。

高天原（甘木）の天孫族は伊都国を重要な出先機関として永く友好関係を保持するとともに、外交の前線基地として活用する。さらに、「羽田（秦）」家は徐福集団の中で宗家として集団の要であったが、天孫族はこの羽田家とも婚姻関係を結んだことになる。羽田家は徐福以来「保食神」として崇められていたが、その娘の一人「豊受姫」（台与）が天孫族のホアカリに嫁いだ。これが後の海部・尾張氏の祖先となる。これによって玄界灘一帯から筑紫平野まで一応の安定連合体の形成に成功する。邪馬台国連合の成立である。なお、海部氏の発生地は大綿津見一族と同じ博多湾一帯であるが、後に豊後へ、さらに丹後へ移動し、その過程で葛城族と血縁関係が成立し、そこから尾張氏が誕生する。



高祖山と右奥は博多湾遠景（点線内が高祖山城域）
左手、平野部が伊都国領域で日向の地である

伊都国の誕生は、天日矛王族がこの地に降臨したことから始まったとされるが、そのことを裏付ける説話がある。日本書紀は筑紫の伊都県主五十迹手（イトテ）のことに触れており、また、「筑前国風土記」には、「五十迹手は天皇がくると聞いて、穴門の彦島まで迎

えに行くと、天皇が「君は誰なのか」と聞かれたので、「私は高麗国意呂山から天降ってきた天日矛の後孫である五十迹手です」と答えた、と伝えている。ここで言う意呂山は朝鮮慶尚北道清道郡にある烏禮山のことと言われる。清道郡は伊西国を称していた小国だが、新羅に討たれ新羅国の版図に入り、その遺民が糸島半島に渡来、故国の名をとって伊西国、変じて伊蘇国、そして伊都国に落ち着いたのだろうと言われている。

この頃、半島よりの渡来人には次のような人がいる。

都怒我阿羅叱等〔ツヌガアラシト〕＝于斯岐阿利叱智于岐（ウシキアリシチカンキ）＝大加羅国（任那）王子、福井県敦賀（角鹿）に至るが、後帰国する。

天日矛（ヒボコ）、また、その子孫の五十迹手（イトテ）も高麗国から伊都国へ渡来。

五十猛神（イタケ）＝スサノオの子。筑紫神社の祭神。韓国の神に伊太氏（イタテ）がいるが、（五十猛）と同音異写。同一人物とも見られている。

伊都都比古（イツツヒコ）——楽浪郡滅亡の313年前後、混乱から逃れて伊都に逃れ来る。

なお、ヒボコについては、後述する「台与、豊前・丹波を経てヤマトへ」の「香春神社」の項で再述するが、国東半島の東にある姫島に祀られているヒメコソ神は、天の日矛が朝鮮から追いかけてきた姫とされている。同じ神社が福岡県の小郡市にもある。

小郡市大崎の神社は、地元では七夕さんと言われるひめこそ媛社神社である。磐船神社が併設されていて、そこにはニギハヤヒが祀られている。近くの鳥栖市の姫方町にもヒメコソ神社があり、ヒメコソが祀られている。その近くに曽根崎という地名がある。これらの地は伊都国から近い。ヒボコと何らかの関係がありそうである。

『古事記』では、ヒボコについて以下のように伝える。昔、新羅のアグヌマ（阿具奴摩、阿具沼）という沼で女が昼寝をしていると、その陰部に日の光が虹のようになって当たった。すると女はたちまち娠んで、赤い玉を産んだ。その様子を見ていた男は乞い願ってその玉を貰い受け、肌身離さず持ち歩いていた。ある日、男が牛で食べ物を山に運んでいる途中、アメノヒボコと出会った。ヒボコは、男が牛を殺して食べるつもりだと勘違いして捕えて牢獄に入れようとした。男が釈明をしてもヒボコは許さなかったので、男はいつも持ち歩いていた赤い玉を差し出して、ようやく許してもらえた。ヒボコがその玉を持ち帰って床に置くと、玉は美しい娘になった。

ヒボコは娘を正妻とし、娘は毎日美味しい料理を出していた。しかし、ある日奢り高ぶったヒボコが妻を罵ったので、親の国に帰ると言って小舟に乗って難波の津の比売碁曾神社に逃げた。ヒボコは反省して、妻を追って日本へ来た。この妻の名は阿加流比売神（アカルヒメ）である。しかし、難波の海峡を支配する神が遮って妻の元へ行くことができなかった。但馬国に上陸し、そこで現地の娘・前津見と結婚したとしている。

都怒我阿羅斯等については『日本書紀』では、アメノヒボコの渡来前に意富加羅国王の子の都怒我阿羅斯等（つぬがあらしと）が渡来し、この説話の前半部分、アカルヒメが日本に渡りそれを追いかける部分の主人公である。都怒我阿羅斯等は 3 年後に帰国したという。

3. ニギハヤヒ尊の筑後巡察

ニギハヤヒ尊の生い立ちは、スサノオ尊と出雲族の娘、稲田姫との混血で、生まれは出雲である。成人に達した頃、ニギハヤヒは九州へ転出した。出雲より出航し祖先が祀る日本海の沖の島の神に航海の安全を祈願し、宗像の神湊の地に上陸している。父スサノオの故地奴国はすでに高天原一族が支配しており、あえて博多の地は選ばなかった。

宗像や遠賀川流域は、ニギハヤヒ尊が出雲より転入してくるずっと以前より、朝鮮からの渡来人、特に物部族が大勢到来している地域であった。狭いところに多くの部族が入り乱れて雑居する状態が一時的には見られたが、高天原（甘木）の指令で、大勢の物部族が奴国との戦いに参戦、勝利し、筑後平野にまで勢力を広め、わが世の春を謳歌していた。しかしよく聞いてみると、筑後平野よりさらに南には、高天原に追随しない狗奴国があり、時には筑後平野へ攻め込んでくることもあるという。

ニギハヤヒ尊は自分自身の目でそれを確かめて見たく、宗像から遠賀川を遡り甘木の高天原に出て、高御産巢日神や天照大神など諸神の意見を聞いた上、物部・宗像の小規模な軍勢を引き連れて筑後平野への巡察に出かけた。夜須（甘木）から船で小石原川を下り筑後平野を斜めに横切り、北野、田主丸、善導寺、御井など、加えて葛城族の領地である脊振山麓の鳥栖一帯も廻ってみた。ここは高木神の故地だからである。さらに、八女の矢部川を渡り山門に至ったが、その南にそびえる筑肥山地より先には狗奴国の大軍勢が集結しているのが見え、巡察をそこで打ち切ってしまった。



伊勢天照御祖神社・久留米

ニギハヤヒ尊の足跡を示す神社が鞍手郡と久留米市に神社としてはっきり残っている。両神社の神は「天照」であるが、同じ「天照」でも女性神の天照大神ではないのである。

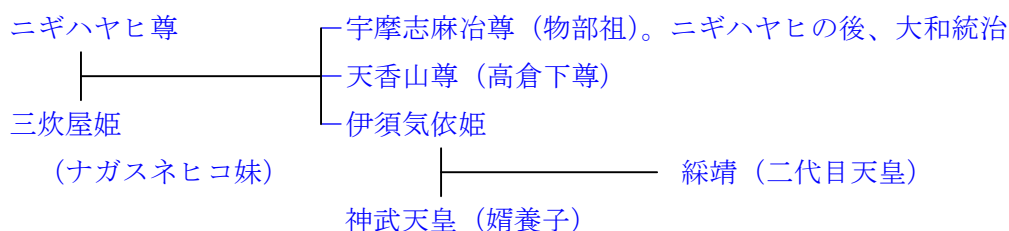
場所は鞍手郡宮田町大字磯光 2 6 7 「天照神社」(祭神；ニギハヤヒ尊)、それと久留米市大石町字速水 1 3 2 (筑後川沿いの水天宮近く)「伊勢天照御祖神社」(祭神；天照国照彦天火明尊、ニギハヤヒ尊)である。久留米の伊勢天照御祖神は「水天宮」の氏神様でもある。

久留米にある二つの天照神社、高良山中に座する天照神社と水天宮の氏神様としての天照神社は、どちらが本家なのであろう。祭神はともに天照国照彦天火明尊で明らかに饒速日命(ニギハヤヒ尊)である。

延喜式の記述には筑後国三井郡に「伊勢天照国照^{みおや}御祖神社」ありと記すだけで、高良山か大石町かはっきりしていない。古代の郡の界が不明のため本来の所在地は定めがたいとされている。

ところが、矢野一貞氏は大石町の方が式内社とされていること、また、考古学上の出土物があることなどから大石町の神社が本家だろうとしている。

その後、ニギハヤヒ尊は北部九州のその他地域も探索しているが、それらの地への進出は後続部隊に任せ、自身は畿内に心を動かし、早々と物部族を連れて畿内へ移動することになる。畿内への東遷には相当の時間を要したようである。一説に十数年とも言う。畿内に落ち着いたニギハヤヒ尊はナガスネ彦の妹、三炊屋姫と結婚し三子を設ける。詳しくは後述するが、系図を示せば次の通りである。



ニギハヤヒ尊の筑後巡察に同行した宗像族は、三潅に稲作に適した広大な農地を発見し、ここを当面の本拠地とする。そしてこの地が後の「神武東征」神話で重要な役割を果たすことになる。その萌芽はニギハヤヒ尊の巡幸のときにすでに芽生えていた。というのは、三潅に残ることになった宗像族の首長の子が、ニギハヤヒ尊の東遷事業にひどく感激し、「いずれ自分も尊のあとを追いきつと東の都に向かう」ことをニギハヤヒ尊に誓ったのである。成人して「水沼君」と呼ばれるようになる少年である。

ニギハヤヒ尊の上述筑後巡察ルートは、神功皇后の北部九州制圧の話に重なるところが

多い。記紀の筆者はこれで何かを著わそうとしたものに違いない。神話に語られる神功皇后は時には卑弥呼を投影し、またあるときには台与を投影したと思われるが、北九州制圧の話は卑弥呼を表したものと考えられる。そのルートは次の通りである。

荷持田村（甘木のこと？）に羽白熊驚なるものがいた。体に羽が生えていて、空を自在に飛び回り、乱暴狼藉を繰り返し、手に負えないということなので、神功はこれを討とうと橿日宮（香椎宮）から松峽宮（朝倉郡三輪町）に移り退治した。

さらに神功皇后は、山門郡（福岡県山門郡山川村）の土蜘蛛・田油津媛を討伐に筑後平野を南下した。そのルートは「北野町史誌」にあるとおりで、「秋月から夜須を通り津古に出て舟で宝満川を下られ岩田の津に舟を着けられたのが老松宮の不動岩となっている。一方、赤司八幡宮の止誉比咩縁起には神功皇后が田油津媛征伐のため、水沼の君が軍船を仕立て大城の蚊田行宮（蚊田は瀉に通ず）に迎え山門に出向かれ目的を果たされた」となっている。

このとき田油津媛の兄・夏羽は、軍勢を整え妹の救援に向かったが、既に殺されたと知り、逃げ去ったという。

この後、神功皇后は香椎の宮へいったん帰り、軍船を整え新羅征伐に出かけることになる。その後ヤマトへ向かう。ニギハヤヒ尊が畿内へ向かうが如くである。

新羅征伐の話は別にして、神功皇后の筑後征伐譚主人公は卑弥呼ではないか、と考えている。古事記にある卑弥呼の姿は宮殿にこもり、外界との接触が薄い女性に描かれているが、乱世の中、そんなはずはないのである。そして、筑後征伐が終わった後、日比生の蚊田宮には、台与がその父親の一族とともに要塞の守りとして駐在を始めたのではないか。まだ、少女の頃である。

第五話、出雲の国譲

天孫族を中心とした渡来人が九州に上陸し、地域の小国を制圧ないし懐柔していくことにより、次第に九州北部の統治の形が固まり始める。

そのような中、出雲の国譲りと葛城氏の九州からの東遷は、近畿以西の西日本のその後の統治の原型を形作る重要な動きとなった。

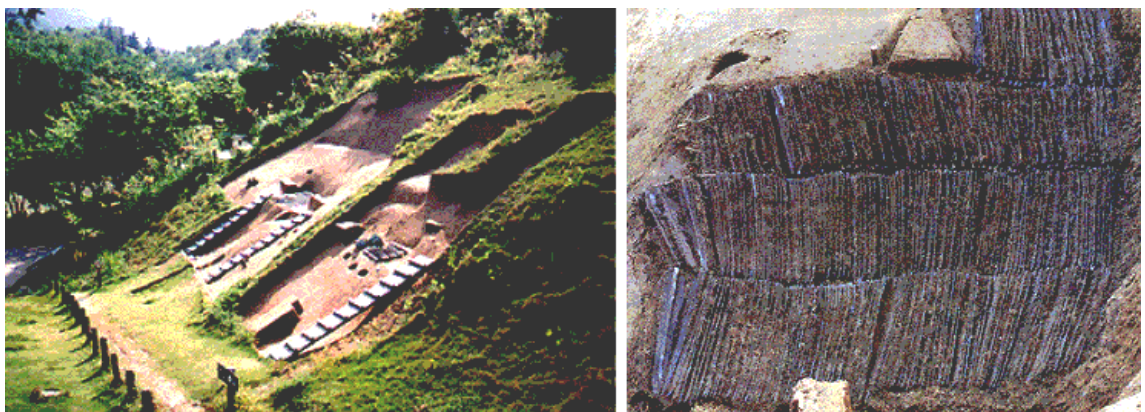
出雲の国譲りは、以前から近畿から北陸にかけて強大な勢力を保持していた出雲族が、その勢力を削がれ、出雲地方の一勢力に成り下がったことを意味し、一方、葛城氏の東遷は、九州を制圧した渡来人集団が、その後近畿へ進出する魁となったからである。

1. 因幡の白兔

大和政権が本格的に出雲を占領し領土の一部とし支配し始めるのは、早くても6世紀後半である。一方「国譲り」神話の内容は、時間的には卑弥呼の時代つまり西暦200-260年代の話でなければならず、両者は合致しない。

さらに、出雲の国譲り神話としては「タケミカツチ」尊による出雲征服物語とともに、それ以前のスサノオ尊の出雲（根の国）への天下り、そして服属させる神話もある。

ここでは、6世紀の国譲りではなく、神話を基にして、現実にかきたであろう3世紀ごろの征服の話として取り上げることにする。下に掲げる写真は1984年に発掘された神庭荒神谷遺跡の発掘現場と358本の銅剣である。これらが埋納されたのは西暦200-250年ごろだろうと推定されている。神話の「国譲り」話と内容的に一致する。



かんばこうじんだに
神庭荒神谷遺跡の発掘現場と358本の銅剣

そもそも出雲の国は、縄文時代にツングース族が築き上げていた国である。出雲族は縄文以来の海の大族である。司馬遼太郎の「歴史の中の日本」の中で、生きてい

る出雲王朝と言う章節があるが、出雲族は西村真次博士の著書「大和時代」の中で、黒竜江あたりのツングース（女真族）がBC1800～1000年頃、船で日本海を南下して来、樺太—小樽—陸奥—出羽さらに出雲に進出した。そして出雲の地が良質な砂鉄が取れる為、ここに大きな王朝を作ったとある。それぞれの地名は今も生き、その支族のオロチョンが鉄を作ったと言う。（オロチョンはやはりツングースの一派で、興安嶺の山中にあって狩猟生活をしていた民族である）

弥生時代の初め、北九州の遠賀川周辺に物部族が朝鮮半島より大規模に移住してくる。そしてこの大集団は、四方八方に拡散膨張を続けていくが、その一部が出雲国へと出張る。神話の「タケミカツチ」の出雲の国譲りである。「タケミカツチ」以前に高天原から爪弾きされたスサノオ尊の小部隊が、出雲に張り出し、その時点で北九州と出雲の接点ができていた。

出雲族の一員である奇稲田姫（くしなだひめ、または くしいなだひめ、出雲風土記には久志伊奈太美等与麻奴良比売命としてある、クシイナダミトヨマヌラヒメ）が新羅からの渡来人スサノオの妻となり、八人の子供を生み、その第五子がニギハヤヒ尊、第六子 稲荷明神の宇賀神、第八子が須世理姫となる。したがって新しい出雲国は先住民の出雲族の子孫と新羅渡来の新人との混血集団とみなすことが出来る。この混血集団が祀ったのが大穴持神（おおあなもち）の出雲の大神である。現在でも宍道湖（しんじこ）が島根県に横たわっているが、この字を良く見ると、穴は穴、つまり あなみち（穴道）、ひいては あなもちとも読める。神々の国引きで出来上がった宍道湖を出雲の人々は神として崇めたのである。

大国主のことを大己貴命、おほなむち あるいは大物主（おおものぬし）と呼ぶことがあるが、このおほなむちと上記の大穴持は完全に別である。無理に大国主にオオアナムチ（大己貴）を当てはめたとしか思えない。

大国主も出雲族の一人として出雲の地に誕生していたが、彼は若い頃は奈良盆地の開発に汗水を流した人である。そして年頃になった大国主は高志（越、新潟県の糸魚川）にヒスイを求めて行き来するうちに、その地の姫、沼河姫に恋をし結婚し息子建御名方神（諏訪神社）をもうけている。なお、彼がスサノオ尊の娘須勢理姫（上記第八子）の婿養子となり出雲国を引き継ぐのはその後のことである。大国主が越国の沼河姫と結婚する前、若造の頃の物語が、かの有名な「因幡の白兔」の話である。その寓話の中に出てくる「沖の島」は、先祖の出雲族が渡来する時、航海の安全を祈願した由緒ある島だったのである。

なお、大国主は宗像女神タギリヒメとも結婚し、息子アジスキタカヒコネ神を設けている。このように見てくると、大国主の出雲国は北の新潟から九州北部まで日本海側に勢力をはる一大強国であったことがわかる。

2. 出雲の国譲り神話

天孫降臨の話は基本的には高天原（甘木）の天孫族の神々がその直系の神を地上の支配神として降ろし、すでに地上を支配していた大国主神をはじめ諸々の地方神（国つ神）から国土を譲り受ける話である。出雲に関しては次のように進行する。

天照大神は地上の国は自分の子供の天之忍穂耳命（オシホミミ）が治めるべき国である、と言ってオシホミミを地上に降ろそうとするが、オシホミミは地上が騒がしくて手に負えないと言って帰って来た。

そこで高天原の神々の合議の結果、オシホミミの弟の天菩比神（ホヒノカミ）が地上の国を従わせる為に派遣されることになるが、天菩比神は大国主神の家来になってしまい、3年たっても戻って来ない。

そこでまた合議の結果、今度は天若日子（ワカヒコ）が派遣されることになる。ところがワカヒコは地上に降りると美濃の国で大国主神の娘の下照姫と結婚し自分がこの国の王になってやろうと考え、8年たっても戻ってこない。

ここで高天原の神々はワカヒコ（天若日子）の所へ使いとして雉鳴女を遣わす。雉鳴女が「あなたの使命はどうしたのです？」とワカヒコを問いただすと、ワカヒコは弓矢で雉鳴女を射殺してしまう。この時雉鳴女を射抜いた矢が高天原にまで達し、その矢を高産巢日神（高木神）が拾う。見るとそれは自分がワカヒコに渡した矢であった。

そこで高産巢日神は「ワカヒコが使命を忘れておらずこの矢は誰か悪者が放ったものであればワカヒコには当るな。もしワカヒコの邪心があればこの矢に当れ」と言って矢を下に落すと、見事にワカヒコの胸を射抜いた。

ワカヒコの死を嘆く下照姫の泣き声が天上まで響くと、ワカヒコの父は哀れんで地上におり、馬鹿なわが子の為に葬儀の手配をしてやった。また友人（というか下照姫の兄）の味鋤高日子根神も弔いに訪れたが、高日子根神がワカヒコとよく似た風貌であったため、まだ地上にいたワカヒコの父が「私の息子が生き



想像上の最初の出雲大社

ていた」と言って抱きついた。すると味鋤高日子根神は「間違えるな」と怒って、剣を抜いて切り倒すという一幕もあった。

激怒した天照大神は、タケミカツチ（建御雷神）を差し向けることにする。タケミカツチの名には「天」がつかない。つまり、天孫族でないという意味があるようだ。軟弱な天孫族の若者では、硬軟取り混ぜた出雲の抵抗にあって出雲を屈服させることは出来ない。天孫族以外からの武勇に優れた軍人を探し出して任命したということであろう。建御雷神が経津主神（フツヌシノカミ）とともに派遣されることになる。

先に派遣された神様たちに比べ、建御雷神と経津主神は任務に忠実であった。神は大国主神の前にズカズカと進み寄り、剣を抜いて地面に突き刺し「この国は天照大神の子が治めるべき国である。そなたの意向はどうか」と言う。すると、大国主神は、自分が答える前に息子の事代主神に尋ねるようと言う。

そこで建御雷神は美保ヶ崎に行き事代主神に国譲りを迫ると、事代主神はあっさりと「承知しました」と言って家に引き籠ってしまう。そこで建御雷神は再び大国主神に「他に何か言う奴はいるか？」と聞くと、大国主神は「もう一人の息子、建御名方神^{たけみなかた}にも聞いてみしてくれ」と言う。

建御名方神は事代主神に比べると荒っぽい神様であった。建御雷神が国譲りを迫ると、建御名方神は巨大な岩を抱えて来て、力比べを挑む。そして「どれお前の手をつかんでやる」と言って建御雷神の手を握ろうとすると、建御雷神の手はたちまち剣の刃に変化する。建御名方神は慌てて手を引っ込める。そして今度は建御雷神が「では今度は俺の番だ」と言って建御名方神の手を握ると、建御名方神の手は草のようにぎゅっと握りつぶされてしまう。

慌てて建御名方神は逃げ出すが、建御雷神も追いかけて行く。二人は追いかけてこをして、とうとう諏訪湖までやってきた。そしてもう逃げ切れないとみた建御名方神は、俺はもうこの地から出ないから殺さないでくれ、と嘆願する。建御雷神もこれで目的を達したとして、その言葉を信じ、再び大国主神の所に行つて、さあどうすると尋ねる。

すると大国主神は「二人の子供が高天原の神に従うというのであれば私も逆ら



わないことにしましょう。その代わり私の住む所として天の子が暮らすのと同じくらい大きな宮殿を建てて下さい。私はそこで幽界の支配者になりましょう。現世のことはあなたたちにお任せします。私の180人の子供たちも事代主神に従って貴方たちには抵抗しないでしょ」と言った。そこで建御雷神はそのような立派な宮殿を建てさせ、高天原に復命した。

上述神話の内容を現実の問題として考えてみるが、九州に上陸した天孫族は甘木の地に高天原（邪馬台国）の本拠地を置く。その天孫族の手足となって現実の世界を動かしていたのは、実力 No1 の物部族であり、また天孫族の構成員でもある宗像族であった。そしてこの出雲国譲り物語では、遠賀川周辺の物部一族の中にタケミカツチ（建御雷神）という武将がいて、彼が国譲りを強力に推し進めたという話がメインテーマになっている。しかし、神話には書かれていないが、裏に何かの意図が隠されているように思われる。それは「鉄の確保」である。

古事記の出雲併合は邪馬台国の東方移動の前提に行われたものとなっている。

高天原、つまり邪馬台国は、出雲に異常な関心を持っていた。それはしかし領土的野心ではなさそうである。もし侵攻の目的が領土的野心だけであれば、何も困難な航海を必要とする出雲に限る必要はなく、航海を必要としない他のいかなる土地でもよかったはずである。領土的野心ではなく、鉄資源を求めての関心だったと思われる。230年ごろの邪馬台国は、その前の卑弥呼擁立（210年）によって邪馬台国連合政権を発足させ、国力がようやく充実して来た頃である。九州の地で覇権が確立されると、後世、「あおによし」と歌われた生産力豊かな畿内が、邪馬台国連合の膨張の最終目標になってくる。

本格的な畿内制圧作戦には、何としても圧倒的な武力が必要であり、鉄の量が必要であった。ところが、北九州の小河川の砂鉄は取り尽くされており、多くは期待できない状況であった。あるいは、九州の砂鉄はチタン含有量が多いため溶融点が高く古代では製鉄が困難であったとも考えられる。良質の砂鉄が出て、精錬に必要な木材も豊富だという出雲は、邪馬台国の生命線に見えたことであろう。

出雲の古代史は「出雲国風土記」を措いては語れない。大和朝廷が作った「古事記」に書かれている「因幡の白兔」や、スサノオ尊のヤマタノオロチ退治の話は、一切含まれていない。風土記の圧巻は勇壮な国引き（国作り）神話である。主人公の八束水臣津野命は、“出雲国は小さな布のように細長く、しかもまだまだ未完成”として国土の拡大を目指す。そして新たに国土を引いてきて縫い合わせることを決意し、遠くから余った土地を引き寄せて縫いつけたのが島根半島域の島根・秋鹿・楯縫・出雲地域であり、これで出雲国の国土を形成したとする。

注目に値するのは、引き寄せた島が壱岐島や能登半島からであることのほかに、朝鮮の新羅の国（志羅紀の三崎）からが含まれていることで、その島が現在の出雲大社の近く杵

築御塚地区である点である。出雲には一般的に朝鮮の匂いが濃い。製鉄文化は朝鮮の布都族によってもたらされてとされるし、スサノオ尊は何回となく朝鮮と行き来をしている。つまり、国作りの段階から朝鮮との関係が暗示されているのである。

「出雲風土記」の第二の特徴は、杵築大社（出雲大社）の祭神は「大穴持神」であるとする点である。大国主神ではない。「大穴持」の「オオアナモチ」を「大己貴」に当て無理やりに「おおなむち」と読ませ大国主の別名だとしているが、これは大和政権側が無理に作った話のように思われる。ただし現在の出雲大社では境内に大国主の像を立て、あたかも祭神のごとき扱いをしているが。

第六話、卑弥呼の邪馬台国

卑弥呼が生きていたのは西暦200年前後で、一説に死亡は248年という。

徐福集団の一氏族「葛城族」のみは筑紫三根より近畿を目指し早々にこの地域から去ってしまったが、天照大神と呼ばれる卑弥呼を筆頭に天孫族それに物部族ほかほとんどの邪馬台国連合のメンバーは甘木の高天原や周辺地域に残った。高天原とは、狭義には甘木の三輪山山頂のことであるが、この三輪山の地から西南の方向を望むとき、目の前に広がる広大な平野、筑後平野のことを高天原と現したものでもある。のどかな田園風景が広がっている。そこを中心に邪馬台国連合が形成されていた。

その頃の筑後平野と博多湾一带の小国群を下に列記するが、これらが卑弥呼の邪馬台国連合のメンバーである。朝鮮からの渡来系と中国からの徐福集団の子孫が作る小国がない交ぜになった連合体である。

魏志倭人伝には卑弥呼の時代に倭には約100余りの国があり、そのうち30近くが漢に遣いを出しているとされているが、九州にあったとされる小国が、次のものである。(地名または国名を示すが一部氏族名を示す)

筑紫平野		博多湾周辺	
福岡県朝倉郡（高天原）	安（天孫族）	福岡市	奴国（安曇氏）
々	朝倉	福岡市（室見川）	早良国（平群氏）
福岡県筑紫郡	御笠（秦氏）	福岡県（糸島）	伊都国（日矛氏）
福岡県浮羽郡	（巨勢氏）（的）	福岡県（粕屋郡）	不弥国
福岡県小郡市	御原（日矛氏）		
福岡県久留米市	御井（葛城氏）		
福岡県三潆郡	弥奴国（宗像氏）	北部九州地域	
福岡県八女郡	（物部氏）	宗像市	胸肩（宗像氏）
福岡県山門郡	山門	嘉穂町	穂波
福岡県大牟田市	御木	遠賀町	崗（物部氏）
		田川市	田河（日矛氏）
佐賀県基山町	基肆（紀氏）	鞍手郡	鞍手（物部氏）
佐賀県鳥栖市	養父（葛城氏）	行橋・中津	投馬国（秦氏）
佐賀県三根町	（物部氏）		
佐賀県神埼郡	吉野ヶ里（秦氏）		
佐賀県佐嘉郡	（巨勢氏）		

佐賀県小城町	小城
佐賀県唐津市	末盧国

これらの小国群が邪馬台国連合の主要メンバーであったことはほぼ間違いない。これらの内、次の小国は特に注目を要する。繰り返しになるが、羽田邑（筑紫神社のある筑紫野市周辺）、平群早良邑（室見川周辺）、葛城邑（脊振山の麓、鳥栖地区）、巨勢邑（佐賀平野、佐賀市周辺および浮羽郡巨瀬川周辺）、安曇邑（福岡市住吉神社周辺）、紀または基肆邑（佐賀県基山）である。なお、葛城邑は佐賀県武雄市周辺にもあったらしい。

これらは小さな部族集団の邑に過ぎなかったが、後の時代に急速に成長しヤマト時代の主役となる由緒ある集団であった。

すなわち、これらの氏族の部落の名が古墳時代の大和奈良地方にそのままそっくり残っていることに示されているが、羽田氏は畝傍山の南山麓、葛城氏は葛城山の東山麓、巨勢氏も葛城山の東方、そして平群氏は生駒山の南方、大和川の右岸と言った按配である。（ただ、紀氏は紀州、安曇は丹波・尾張などの外地へ転出した）



上の写真で邪馬台国の本拠地に近づいてみるが、「三輪山」以南の場所が古事記や日本書紀の神話で語られる「高天原」の場所である。左上には「大宰府」も見える。

「其の国、本亦、男子を以って王となる。住ること七、八十年、倭国乱れ、相攻伐すること歴年、乃ち一女子を共立して王となす。名は卑弥呼と曰う。鬼道を事とし、能く衆を惑わす。年、日に長大なるも、夫壻無し。男弟有りて国を佐け治む。王となりて自り以来、見ること有る者少なし。婢千人を以って自ら侍らしむ。唯、男子一人有りて、飲食を給し、辞を伝えて居処に出入す。宮室、楼観、城柵、嚴かに設け、常に人有りて兵を持ちて守衛す。」

有名な魏志倭人伝の一説である。卑弥呼の姿が描かれている。この卑弥呼が高天原の女王「天照大神」である。その高天原の場所は上に示した航空写真の現在の朝倉郡一帯である。卑弥呼は幼少のころは伊都（糸島郡）ですごしたが、成人して朝倉の松狭宮に館を構えたと見られる。

松狭宮（神社）の場所は上に掲げた航空写真の中央下の部分にある。目前には雄大な筑後平野が広がる見晴らしのよい場所であるが、航空写真でわかるように観光地として有名な秋月城のすぐ近くにある。なお参考までに秋月城横を通過して裏山の八丁峠を越えれば遠賀川の源流部につながり、現在の国道322号線で小倉に出ることが出来る。この松狭宮には神功皇后が滞在したことが古事記に示されている。この辺の地理を高天原との関係でもう少し詳しく覗いてみよう。

1. 高天原

高天原の地名が残る不思議の地、甘木・朝倉。「古事記」「日本書紀」の伝える「天孫降臨」神話に反映されている日本国発祥の地甘木・夜須地区である。

甘木市街地のやや北方を国道322号線が北東から西南に向かって走っている。その322号線に沿うように現在小石原川が秋月城あたりから流れ下ってきている。この川が別名夜須川（安川）であり、その川を挟むように比較的小さな平地が広がっているが、ここが古事記で、天照大神が天の岩戸に隠れた時、八百万の神々が「天の安の河原に神集いて」評議したとある地である。

平地の西側にある小高い山が三輪山で、地元の人は今でも三輪山と呼んでい



大塚墳墓

るようであるが、奈良時代からか、目配山と山の名は変えさせられている。その山の東麓には大己貴神社がある。もっとも鳥居には「大神神宮」の額が掲げられているが。縁起によると、神社名は最初大三輪神社、それから大神大明神、そして大己貴神社へと移ったとある。この神社のご神体は奈良の三輪神社と同じく裏にある三輪山そのものである。ニギハヤヒ尊が宗像の地から当地に行幸してきた事跡を記念して創建された神社のはずである。この大神神社の反対側、三輪山の西麓にあるのが卑弥呼（神功皇后）ゆかりの松狭宮である（現在の松尾八幡宮）。



真名井？大塚の井戸

安川（夜須川）の右岸を大神神宮から400メートルほど下ると、大塚の集落につく。文字どおりの大塚がある。

卑弥呼の墓と言われたこともあるようだが、残念ながら時代が全然違う。古墳時代後期（6世紀後半）に築かれた、直径30メートル・高さ4メートルの円墳。既に盗掘されており、石室の天井石10トンが露出している。卑弥呼の墓でなくて、これは艶消しであったが、大塚の集落には、もっと興味深いものがある。

それは「大塚の一つ井戸」で、「昔、一人の僧が白馬に乗って大塚を通っていた時、誤って天神様の井戸に落ちて死んだので、その井戸は埋めて蓋をしたと伝えられ、以後部落内に井戸を掘ると神罰があるといって、明治末年まではこの井戸だけを使用していた。」との説明書きが立っている。この井戸が「真名井」であるらしい。

「古事記」には、「ここに、天の安の河をあいだにおいて、神にうかがいをたてた。天照大御神は、まず、建速須佐の男の命（スサノオ）の帯びていた十拳（とつか）の剣を乞いうけて、三段に打ち折り、玉の音もさやかに、天の真名井（まない）の水に振りそそいだ。

そして、嘔みに嘔んで、吐き出した息吹の霧によって成った神の名は、多紀理毘売の命（タキリヒメノミコト、田



安川・夜須川

心姫)、多岐都比売(市杵島姫)、狭依毘売(瑞津姫)という。」とある。後に、地上に君臨する邇々芸(ニニギ)の父、ホシホミミもこの時生まれた。

「大塚の一つ井戸」は、もしかしたら、高天原(邪馬台国)の「天の真名井(まない)」の伝承を形を変えたかたちで、千数百年間、守り伝えてきたのかもしれない。そのほか、記紀に出てくる物語が断片的ながら多くこの地に言い伝えられている。たとえば、「ここに、高御産巢日の神(タカムスビノカミ)と天照大神とのおことばによって、天の安河の河原に、八百万の神を集めて、思金(オモイカネ)の神に思わせてのべられた。」「その矢は、雉の胸を貫いて、さかさまに射上げられて、天の安河の河原にいる天照大神、高木の神のところへいたった。」

「天の安河の河上の、天の岩屋にいる、伊都の尾羽張の神をつかわしなさい。」

「その伊都の尾羽張の神は、天の安河の水を、さかさまに塞きあげて、道をふさいでいるので、他の神は、行くことが出来ないであろう。」などなどである。

高天原(邪馬台国)を流れる天の安河の河原に、八百万の神が集まって会議を開いたとか、天の真名井(マナイ)と言う井戸があるとか、石があり、家がある。そして、地上と同じ地名がそこにある。凄くリアルである。



安川村は、昭和29年に甘木市の一部になるまで、村の中央を流れる「天の安川」にちなんで、村名を安川村と呼んでいた。現在は、朝倉郡の2町(甘木・秋月)、八村(安川・上秋月・立石・美奈木・金川・蜷城・福田・馬田)が合併して、甘木市になっている。

高天原の故地

日本最古の神社、三輪町弥永(イヤナガ)の大己貴神社(オオナムチ)は、近在では最も格式の高い神社で、土地の古老たちは、「日本最古の神社だ」と言い伝えている。土地の古老たちの言い伝えに多少の郷土自慢が含まれているのは確かだろうが、まるで根拠のない話でもなさそうである。

周辺の人々は昔から、この神社を「おんがさま」と呼んでいるが、それは「おおがみさま」という言葉の訛りである。

また、大己貴神社は別称を大三輪神社ともいい、一部の古書には「大神神社オオミワ」とも表記されている。[\(実はこの別称が曲者であるが、このことは後述する。\)](#)

大神社には、本殿とそのすぐ横に遥拝所がある、そこから、御神体の大神山(オオミワ

ザン・三輪山)を参拝する。大和の大神神社も、これと同じ型を取り、三輪山を御神体として参拝する。三輪町弥永の大神神社と三輪山が、大和の大神神社と三輪山の祖型ではないかといわれている。

この他にも、いろいろな共通点がある。たとえば、「和名抄高山寺本」に書かれている多くの郷名のある内、「雲梯うなで郷」と言う地名は、大和の高市郡と筑前夜須郡(三輪町)の二ヶ所だけだそうである。

三輪弥永の地は、その昔ニギハヤヒ尊が出雲から九州に移り、鞍手郡から始めて筑後平野を巡幸された時、最初に滞在したのが夜須の地で、安在所が置かれていた。そのことを記念するためにつけた夜須の山の名が三輪山であった。後世、神功皇后(台与)が三輪山の麓にニギハヤヒ尊を祀って大神神宮を創建した。しかし、大和時代にニギハヤヒ尊の名は消失し、大穴牟遲神(大己貴命)を祀る神社にされたのである。



大神神宮の石額を掲げる鳥居

従って、この神社はオオナムチ(大己貴または於保奈牟智神)神社であるべきなのに、写真に示したように、鳥居にはナント「大神神宮」と書かれている。大神はニギハヤヒ尊に纏わる呼称で倭国魂大神、大歳御祖大神に由来する。

このように今だにニギハヤヒを表す大神神宮と大国主を表す大己貴神社とが混乱しているのである。この現象は奈良の大神神社にも表れている。

この混乱の原因については後述の「ニギハヤヒ尊の東遷」の中の「ニギハヤヒ尊の奉斎」の項で述べるが、「日本書紀」編者による歴史の改竄が影響を及ぼしたものと考えている。

ニギハヤヒ尊は九州と奈良で活躍した王である。つまり奈良の大神神社、そして夜須の大神神宮ともにニギハヤヒ尊の事跡を追慕して建立された神社である。ところが、持統天皇のころの取り巻き貴族にとって、ニギハヤヒ尊を祀ることは氏族争いの最中、きわめて不利で、大切なこの神の跡を抹殺することに躍起になっていたのである。そして求めた身代わりが大国主だったのである。都合よく大国主は出雲の国主になる前、辺境の近畿地方も統括していたことがあった。日本書紀にそれらの事実を使って奈良三輪山の祭神は大国主・大物主・大己貴神などとする神話を残したのである。その内容は後ほど紹介するが、

神話とは言え、いかにも作り話的筋書きが多い。

このようにして、日本書記の編者によって無理やり三輪山の祭神は大国主に改竄された。そのことが原因で、大神神社、大己貴神社、大物神社などの異なった意味の神の呼び名でいまだに混乱したまま残っているのである。それがここ弥永の大神神宮にも当てはまるのである。

目配山（三輪山）の頂上に立てば筑後平野は一望である。ここにある山頂盆地は大野城跡の数分の一の大きさのよく似た地形で山城に最適の狭義の高天原とも考えられる。なお広義での高天原は筑後平野一帯のことである。ここは卑弥呼の館の条件をすべて満足している。

この谷間入り口両サイドの出っ張りの岡の上に社があるがここの展望も良い。博多・二日市方面からの侵入者は遠くから見通せる。おそらく当時、見張り所があった跡であろう。

邪馬台国の本拠はこのV字形谷間平野であろう。前面平野は大塚の辺りまで親衛隊の駐屯地に絶好である。そして平塚川添遺跡の場所に巨大な環濠集落を造り、そこを民衆の生活の場とした。

高天原は天上の事とされ、地上の遺跡や言い伝えは記紀成立の頃、故意に消されまた改葬されていると思われるが、これを地上に求めれば、この地が最も相応しい。平塚川添遺跡は平成4年に発掘されている。

邪馬台連合国は福岡、佐賀および大分県の北部の範囲の中にある。東に海を50キロ渡って国（四国）があり、その南の国（朱儒は土佐の須崎）まで200キロである。

倭人伝に記載されている里程は渡海または国横断の距離であり、中心間距離ではない。

長さは地図上から明らかに一里50メートルである。従って卑弥呼の館は福岡の日向峠（伊都国）から東南35キロの地点である。それは秋月の入りの甘木の丘である。その前に広がるV字形の平野は卑弥呼を守る軍団（親衛隊）の駐屯地だったのであろう。

吉野ヶ里は邪馬台連合国の西端の入りの駐屯地の砦である。有明海への出入り口であり、南の球磨国との接点である。伊都は北西の大陸に対する玄関であり、さらに宇佐に東の砦、岡垣あたりに北の砦があったはずである。



三輪の大神山遥拝所

卑弥呼の外交政策は成功し、2世紀後半から3世紀初頭にいたる倭国の第三国に対する権威も高く、中国の威力を盾に東夷にその盟主的地位を保ってきたが、3世紀初頭中頃より国内事情に変化が見え、卑弥呼の年齢とともに霊力の衰えが徐々に国内に影響が出始め、権力の衰退に従い不協和音が聞かれるようになった。最も悪影響を及ぼしている卑近な問題は、特に南の隣国狗奴国との外交亀裂であった。狗奴国の邪馬台国への越境が続き、その真意は測りかねるが小競り合いが絶えず、その打撃が大きく両国の確執はとけそうもなかった。狗奴国の真意は邪馬台国を含む、北部九州の国との文化の交流を望んでいたのかもしれない。卑弥呼は敗戦に近い状態を挽回すべく中国へ救援を求めたが、救援はなく激を受けただけであった。248年高齢の卑弥呼は悶々の日々心労も重なり、戦いの痛手を受けたまま静かに息を引き取った。

後漢書には、「桓帝（147－167）霊帝（168－189）の時、倭国大乱」と、九州地方が乱れて内乱があったということが書かれている。梁書には、「霊帝の光和（178－183）の年間倭国乱」と書いている。どちらにしても西暦180年ごろ、九州で大乱があったという記録である。また、240－250年ごろにも大乱があったことが記録されている。

一方、「魏志倭人伝」に、卑弥呼女王のことを「年長大にして見る者少なし」とある。とにかく80才か90才になっていて、会っている人が少ない。見た人が少ないということが書いてある。この倭人伝の筆者陳寿が歴史編纂官をしていた285年から290年ごろに書いたと推定されるこの倭人伝に、「往、（いまを去る）7－80年。倭国乱れ相攻伐すること暦年、乃ちともに一女子を立てて王と為す。名を卑弥呼と曰う」と書いてある。その陳寿の書いた290年ごろから7－80年さかのぼると、大体210年から220年ごろ、九州で相当な内乱があつて、そのとき女王を作ったということになる。

また、「もこの国男子を以て王と為す」という言葉もある。もと九州は男子が統治していたのを、210年から220年ごろ、みんなで一女子を立てて王と為して九州を統治したというのである。

平和だったのは卑弥呼の時までで、彼女が死ぬと筑後地方の小国家連合群は南の狗奴国から侵略を受け再び大乱の時代に入る。熊本の狗奴国からの侵攻は、陸路を北上してくるルートではなく、船で有明海を北上し筑後川に入り、この河を遡上する形で行われたようで、このルートは徐福一団が一昔前に築きあげた小国が分散している場所である。したがって狗奴国の侵攻で最も被害を受けたのは、これらの国々で「吉野ヶ里」もその一つであった。

2. 邪馬台国の生産拠点、平塚川添遺跡の概要

「高天原」は、先述の通り福岡県の甘木市、夜須町の地域にあったと見られる。この一帯は1万年前の太古の時代、筑紫の海がすぐ近くまで迫っていた場所であるが、その後、海は後退し、弥生時代になるとそこから広大な筑紫平野に生まれ変わり、稲作の中心地となる場所でもある。

平塚川添遺跡は、筑後川の支流、小石原川の扇状地として開かれた、比較的低い平地に立地している。今から約2000年前の弥生時代中期から、約1700年前、古墳時代前期までの約300年間にわたって人々が住み続けた集落の跡である。特に弥生時代後期（2～3世紀頃）には、集落を濠で囲んだ大集落になっていた。

1992年の12月に、甘木市の平塚川添遺跡が、弥生時代後期の大環濠集落として発掘された。全国で初めての六重（場所によっては七重）の環濠を持つ遺跡であった。

福岡県教育庁文化課の柳田康男文化財保護室長は、東側の一ツ木・小田台地に、同時代の集落がいくつもあることを強調し、全体的には「吉野ヶ里よりも大きな集落群」と述べている。



復元された平塚川添邑（低地のみ）

「五重環濠（のちに、六重環濠であることが判明）のうち一番内側は、この中規模集落を囲んでいるが、外側の環濠は規模から見て、他の集落も含めて取り囲み、共同防衛の役割を担っていたのではないかと推測される。拠点集落は別だと思うが、全体としては吉野ヶ里よりもずっと大きな集落群と見るべきだ」

国立歴史民族博物館館長の佐原真氏は、「学術的には吉野ヶ里に匹敵する遺跡」と述べ、九州大学の西谷正教授も、「吉野ヶ里遺跡と同列の発見」と述べている。

環濠

この遺跡の一番の特徴は、集落を幾重にも取り囲んだ濠（環濠）と、その環濠に区画された集落群である。環濠は河川の氾濫原につくられているため、断面はV字形にならずに緩やかな傾斜をしている。環濠の周りには柵がたてられ、橋も架けられていた。

環濠には水がたたえてあったという。発掘調査では、この環濠の中からは土器や木製品が見つかったほか、多量の樹木



環溝集落の跡

の葉が発見された。当時はきっと緑の生い茂った集落だったのであろう。

集落

環濠で囲まれた集落の中央からは、4棟の掘立柱建物跡が並んで発見された。これは他の建物よりも群を抜いて大きく立派である。首長がまつりごとを行なった「祭殿」ではないかと言われている。集落の北端には、大型の掘立柱建物跡が1棟発見された。これは「首長の居館」ではないかと言われている。これらを取りまくように、竪穴住居跡が数多く発見された。

集落が見つかった中央の区画とは別の、南側の区画からは、小型の掘立柱建物跡が幾つか発見された。恐らく高床式倉庫が建ち並んでいたのであろう。ここからは、柱の沈下や腐食を防止するための、「礎板」と呼ばれるものも発見されている。

中央の集落からは遠く離れた北側の一区画からは、装飾品や木製品を作った「工房跡」と思われる区画も発見されている。

出土品

竪穴住居跡の中からは、当時の人々が日常生活に使った土器が多量に発見された。甕や壺、高坏、鉢などがあつた。

面白いものでは、巴形銅器のような絵を描いた甕も発見された。巴形銅器とは、弥生時代や古墳時代の遺跡から発見される銅製品で、呪術的な意味合いを持つものである。この甕もおまじないに使われたのであろうか。

環濠からは、木の道具や建築部材などが数多く見つかった。木の道具にはスキやクワ、タモと呼ばれる魚取り用の網の枠がある。

建築部材で目を引くのが、「ネズミ返し」と呼ばれるもので、これは高床式倉庫の柱に取り付けられ、名前のとおりネズミが倉庫に上がってくるのを防ぐためのものである。

この他、平塚川添遺跡からは青銅製品のほか、首長館付近から中国製の小形仿製鏡や日本で作られた小型の鏡、銅矛の耳部や銅製のヤジリなどが出土している。また、「貨泉」と呼ばれる、今から2000年ほど前に中国で作られた貨幣も出土している。「貨泉」は、漢王朝と後漢王朝の間に成立した短命（西暦9年から23年まで）の「新」王朝の王莽^{おうもう}が鑄造した銅銭で、その通用期間はごく短かった。この貨泉がここに存在することは、近隣の小国家、例えば「吉野ヶ里」や伊都国から、持ち込まれたものかもしれない。



卑弥呼の館のある「松狭宮」から、徒歩でも30分前後のこの平塚・川添環濠村落は（大分自動車道甘木ICのすぐ南）、高天原の天孫族を頂く農民たちの居住地であり、周辺の農地からの米や五穀を保管する食料備蓄基地であったのであろう。農業村落共同体で極めて低地に作られていた。注意してみると、この環濠跡のすぐ横は5メートルほどの落差のある高台が広がっている。そこには現在でも農家があちこちに散らばる畑作の場所の一つ木・小田台地である。この台地も意味あり気であるが、残念ながらまだ発掘調査をするような状況ではない。

3. 邪馬台国の別都「伊都国」

ある年の二月、冷たい雨が降る中を福岡の天神町からバスに乗り、糸島郡を訪れたことがある。目的の一つは、伊都国歴史博物館を訪問することであった。卑弥呼の生れ故郷を一度見ておきたかったからである。JR波多江駅から博物館までタクシーを利用したが、その運転手さんから、「日向」の読み方は「ひゅうが」ではなく、「ひむか」であることを教わりながら、10分ぐらいでたどり着く。寒い雨の中の訪問で、他には一人として訪問客はいない。

受付を済ますと、「もしご希望でしたら、ボランティアの説明者をつけますが？」と言われ、お願いすることとした。専門家ではないとのことだが、どうしてどうして中々のものである。館の中は立派な出土物ばかりでまさに恐れいったが、彼の説明の中の二つのことが印象に残った。一つは春日原「須玖岡本遺跡」の鏡と、ここ伊都の鏡を比べれば、伊都の方は明らかに「王墓」であることを証明するものであるとのこと。もう一つは、小生がこれらの鏡はもしかしたら中国から直接、その王たちが持参したものではないか？と無意味な質問をしたのに対し、彼はわざわざ館内に駐在する別の専門家に確かめに行って、そんなことはありえないと強く否定されたことである。

伊都国はイザナギ尊が禊をした場所で、禊の時に三貴子（天照大神、月読尊、スサノオ）を得ており、天照大神〔卑弥呼〕の生誕地である。さらに、天日矛王やニギ尊、そしてその子孫が居住した地であり、絢爛豪華な遺跡物の意味も納得がいく。以下、伊都国の遺跡出土状況などをおさらいしておく。

平原遺跡の調査研究をされた地元の原田大六氏(故人)によると、平原遺跡の付近には天孫降臨や日向三代にまつわる多くの口碑（こうひ；言い伝え・伝説）があるという。氏の著書に接し、天孫降臨とは実話であり、その場所はこの地に違いないと考えるようになった。それを以下に引用する。：『実在した神話（発掘された平原弥生古墳）』原田大六著（学生社）

伊都の口碑

福岡市から西へ向って唐津市へ出る中間が糸島郡であるが、この郡は、古くは南部の怡土と、北部の志摩の二郡が合併して糸島になったところである。その南部の旧怡土郡はあの有名な中国の歴史書「魏志倭人伝」に出てくる「伊都国」に相当するのを疑う人はいない。

雷山系（筑紫山系の一部）を南に、東に高祖山、西の曾根の洪積段丘に三方をかこまれ、北に志摩の山々をのぞむところが、旧怡土郡（あるいは旧伊都国）の中心部であり、戦後の町村合併で前原町となるまでは、怡土村といていた。南に近く山なみが迫って、あまり水量は豊富ではないが、川原川と瑞梅寺川の二川が北に向って流れ下り、そのもとは合わさって博多湾に流入している。

この川原川と瑞梅寺川の二つの川にはさまれた平野の中央に、三雲という部落がある。部落の南端に、こんもり繁った森、ここに細石神社が、社殿を東に向けて建てられている。祭神は、日向第一代ニギノミコトの妃になった木花開耶姫と、みにくいために帰されたという姉の磐長姫の二柱である。この神社の小字名を鍵溝という。木花開耶姫や磐長姫を祭神としている神社は、日本全国に沢山あることだし、細石神社の祭神も、別に何ということはない。しかしである。ことは、伊都国の中央の、そのまた中心地区に当る三雲部落に、この二女神を祭っているのに疑念はおこるまいか。なにかわけがありそうな気がする。

元禄八（1695）年、村山正貞があらわした『細石神社御縁起』（大神氏蔵）に「天正十五（1587）年豊臣秀吉公九州の乱をしづめ給ふ折から、故なく当社の神田をも没収し給ひ」と記し、それ以前は「広麗なる御社にて、神事祭礼もことにいかめしかりけると述べている。だが、それ以前のことは皆目わからない。現在は三雲部落の氏神としてあがめられているだけで、他地方の人が足を向け参拝にくることは、ほとんどない。

細石神社の東二百メートルばかりのところに、八竜の森というところがあり、そこに野石が一個立っていた。三雲部落の人は、木花開耶姫の子であり、日向第二代のヒコホホデミノミコトの生誕地と伝えている。惜しいことに、この森は伐採されて二三本の樹木をのこすのみとなり、立っていた野石はそのとき細石神社の境内に移されてしまった。しかし部落民は、その石を神聖視している。

細石神社の社殿が向いている東方の、川原川を渡り、奈良時代に築かれた怡土城の土塁内の森の中深くに鎮座しているのが高祖神社である。古くから怡土郡の惣社とされ、あるいは怡土庄の一の宮と称されてきた。祭神は三柱で、中座に日向第二代のヒコホホデミノミコト、左座に玉依姫、右座に気長足姫（神功皇后）を祭っている。『三代実録』の元慶元（877）年に高祖比メ神とあるのが、この神社と考えられている。ヒメガミといったのは、左座の玉依姫を指したのか、右座の神功皇后をいつているのか、どちらかはつきりしない。とにかく、昔は、祭日の九月二十六日（旧暦）には、神輿が三雲の細石神社に渡っ

たという。細石神社の南側は、高祖宮御幸祉といって不浄のものを置くことを忌みきらった。

高祖神社の背後にそびえる山を高祖山という。高祖神社にせよ高祖山にせよ「高祖」という文字を使用しているのには、いわれ因縁がありそうに思われる。元禄年間貝原好古がものした高祖神社の伝記には歴代の天皇は、みなこの神社の祭神ヒコホホデミノミコトの子孫であるから「高祖」と書くといっている。高祖山の南の峯をくしふる山という。この名称で思い当るのは、日向第一代のニニギノミコトが高天原から降臨してきたという山を、高千穂のくしふるの峯といい、またその山を二上山ともいったということである。二上山とは、ひとつの山のいただきが二つの峯になっているのをいう。高祖山とクシフル山は、おあつらえむきに、ひとつの山で峯が二つになっているし、「タカスのクシフルヤマ」というのと「タカチホのクシフルタケ」というのも語呂が近い。

高祖山クシフル山と、その南約五軒の韓国山との中間に、V字形に凹んだ大きな谷間があるが、ここを日向峠という。この名称は大昔、この糸島地方が日向といわれたなごりとどめているのだという人があった。

三雲の細石神社の北方千二百メートルの、平地つづきの井田部落に、御子守神社というのがあった。祭神は玉依姫で、ここも女神である。境内に「御子守石」という花崗岩の巨石があり、それに口碑がのこっている。日向二代のヒコホホデミノミコトが休憩された石であるとか、玉依姫が御子を御子守された石であるとかいっている。現在この巨石は、井田部落にあった三つの神社の合祀によって、三社神社に移動されている。御子守石は、加工しない自然の方形を呈した巨石であるが、場所としては自然の岩層が露頭するところではない。東の高祖山方面から、いつの時代にか運ばれてきたものだろうと部落の人はいっている。

瑞梅寺川は東の博多湾へそそぐが、曾根段丘の西を流れる雷山川は、西の唐津湾に流れ入る。この二川が東西に分かれる海拔四メートルの低地中央に、延喜式内社の志登神社がある。神社関係の古文書も、『中村文書』として平安末以来のものを多く伝えている。祭神は豊玉姫である。古くは、博多湾と唐津湾からの入江が、恰土と志摩の二郡を南北に分けるように割りこみ、この志登神社をはさむようにせまっていたらしいが、江戸時代の干拓で現在は水田の中央になっている。

ところで、この神社の社殿は、唐津湾の方向に西面して建てられ、入江であったころは、海上から参拝するようになっていたらしい。口碑によるとこの社地は、ヒコホホデミノミコト（山幸彦）が海神国へ行って先に帰ってきたのを、その妃豊玉姫があとを追ってここに上陸した霊地として、豊玉姫を祭っているのだといっている。

神社の南側、水田の間に、岩鏡という巨石があるが、これは豊玉姫がその石の上に立って髪をけずったと伝えている。この巨石も、加工しない自然の花崗岩で、ある時代に、西北にそびえる可也山方面から運搬してきたものらしい。

王墓と遺跡の平原

1974年、文政五年から150年ぶりに、福岡県教育委員会によって三雲南小路が発掘調査された。この発掘で、二基の甕棺墓は、溝で隅丸方形に区画された墓域を持っていた墳丘墓であったことが判明した。三雲南小路墓は、一基の墳丘墓を二基の甕棺で占有し、前漢鏡計57面や、漢から下賜された葬祭具であるガラス璧と金銅四葉座飾金具など、質・量共に卓越した副葬品を持つことから、日本列島で最初に出現した「王墓」とであると見られている。

もう一つの遺跡、「平原遺跡」からの出土品も特徴的である。剣は1世紀ごろから鉄刀となり、鏡は後漢鏡となっていたが、2世紀の平原では、剣は素環頭太刀となり、玉は勾玉、管玉、小玉多数となる。これを糸で通すと、古事記に記載される天照大神の首に懸かっていた「八尺の勾玉の五百個の御統の珠」にそっくりである。古事記の記載が正しいことを証明する。

鏡の出土も37面と多いが、従来の10数センチの漢の鏡よりずば抜けて大きい、径46.5センチの円周は146センチでこれは八咫尺（咫尺は曲がった長さ、円周を測る単位）で、掌の長さの八倍の円周を持つ大きさの鏡である。八咫尺鏡は天照大神の「八咫の鏡」に同じである。「八尺の勾玉」の天照大神のネックレスも146センチあったのではなかろうかといわれる。

古事記に十拳剣とある銅の剣も、刀も、銅合金であるから焼き入れができず刃が付かないので草を刈ったり首切ったりはできない。片手で掴んで殴ったり突いたりする道具である。三種の神器の剣は「クサナギ」「ツムガリ」という名が付いており、草薙ぎ切りであり、頭（ツム）刈りである。これは太刀と表現され、またスサノオがこれを手に入れるとき自分の十拳剣が欠けたとあることから、明らかに銅より堅い、当時の鉄製素環頭太刀である。古事記では十掬剣と表現される。両手で握って構えて相手を切る刀である。

筑紫が出雲工作をしているとき、出雲のアジスキタカヒコネが持っていた剣は大量（おおはかり）といい、筑紫の十拳剣に対し十掬剣で、「その大刀」と特に表現されている。この大量は太刀刈りが本当の表現であろうという。出雲は大きな刃のついた鉄の刀を筑紫に先行して持っていたことになる。

三種の神器と全く同じ概念のものが2世紀末ごろに平原に出現している。これは時期的に卑弥呼の出現の頃となる。古事記の中ではいつ三種の神器の概念が確定するのであろうか。天照大神の天の岩戸隠れの時、天照大神の再来を願う神事で、鏡を作り玉の首飾りを作って木に架けてアメノウズメが踊ったとされるが、このときは未だ剣は祭りに登場しない。三種の神器として確定するのは、出雲平定後の天孫降臨の儀式の時である。日本全土を天照大神の国、邪馬台国に統一しようと決まったときである。年代を確定すれば、これは台与の時代となるとされている。

第七話 葛城族の東遷

出雲の国譲りは終わり、氏族間の争いも終結し、邪馬台国は安定期に入るが、南の狗奴国からの侵略は相変わらず続いていた。卑弥呼は次のステップとして邪馬台国の東国への移動を考え始める。戦略的に見て九州では朝鮮から侵略を受ける可能性が高いこと、東国にはまだ未開の広大な地が残されており、食料供給の面からも、移動が望ましいと判断していた。

それを立案遂行できるのは高御産巢日神（高木神）をおいて他にない。台与がいずれその実行者となり東遷することを想定の上、準備を進めてもらうことにした。ただし、台与が東遷するのは最後の最後で、卑弥呼の大事な跡継ぎとして当面は九州に残ってもらはねばならない。

高御産巢日神自身はこの東遷の動き（220年ごろ）に加わり、彼の配下の葛城一族を統率して移動していくこととなる。彼自身が邪馬台国本隊の露払いの役割を果たしたのである。加えて、秦氏には九州の出口である豊前の地まで同行させ、そこに新たな前線基地を築かせることにした。

それから260－65年ごろ台与が実際に豊前経由、奈良へ移動することになるが、それは高木神の葛城族東遷から40年ほどたっていた。台与の東遷時期は、ニギハヤヒ尊が東遷する時期とほぼ同じである。ただし、同行者はニギハヤヒ尊一行ではなく、伊都国の天日矛末裔と豊前に事前に集結していた海部一族であった。

葛城族の筑紫での拠点の拠点は現在の鳥栖市養父町一帯である。古代地名の養父郡は後に三養基郡に変更となるが、三根郡、養父郡、基肄郡の三郡を合併して出来た合成語で、その場合の中心地も現在の鳥栖市であった。背振山東南麓で筑後一帯の交通の要であり、一大水田地帯である。

養父という地名の由来について「肥前国風土記」に次のように記されている。

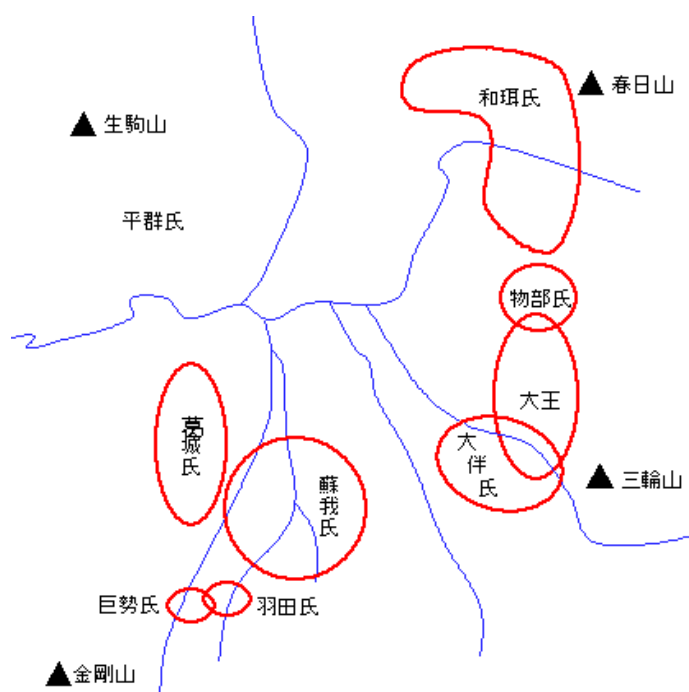
「天皇が狩にお出かけになったとき、この郡の百姓達が集落をあげて参集したところ、犬が出てきて吠えた。このとき一人の産婦が犬をじっと見つめていると、すぐに犬は吠えるのを止めた。それによって犬の声止む（やむ）の国と言った。今は、それがなまって養父（やぶ）の郡という」と。このことの意味は次のように解釈されている。

出産は新しい生命の誕生で、それは大昔、新生児の靈魂を異界の神との交渉によってこの世へ引き移すことだと考えられていた。そのため産婦は、この世ではない別の世界にあるとされ、産屋が設けられて、そこで出産前後、家族とは竈を別にする生活、つまり「同じ釜の飯を食べない生活」をしていた。そういう産婦と新生児を護ってくれるのが「産神」といわれる神であった。そして「箒」が産神の依代（よりしろ）と考えられた。というのは、箒というのは、掃きだしたり掃き集めたりするもので、新しい生命をこの世にもたら

すための呪術的な道具と考えられていたのである。

だから犬が吠え止めたのは、産婦と箒に目に見えない神の姿、或いは匂いを強く感じとったからであろう。神の嫌うことをすれば、必ずその報い、祟りがあるからである。

現在、鳥栖市では毎年3月の最終日曜日に田代公園で「とす弥生まつり」を行っている。鳥栖の歴史と自然を再発見するという趣旨のお祭りで、満開の桜の下、弥生時代の装束を身に着けた若人たちが武人舞と巫女舞を披露する。



話を戻して、この鳥栖から葛城氏一族は220年ごろ奈良へ出発し、彼らを選んだ落ち着き場所は、現在の御所市（ごせし）周辺であった。この辺の事情は改めて説明するが、奈良盆地のもっともよい場所である。

古代の奈良において、金剛山と葛城山をあわせて「葛木山」と呼んだらしいが、その葛木山を仰ぎ見る地域がかつての南葛木郡、いまの御所市である。そして、その葛城山の麓に転々と連なる古社寺や遺跡をつなぐ古道を、いつの頃からか「葛城古道」とか「葛城の道」と呼んで、多くの古代史ファンやハイカーらが訪れるようになっている。その場所である。

葛城族の東遷隊は、ニギハヤヒ尊の東遷隊や神武東征（崇神）よりずっと早目の220―240年頃のこと、これが九州からの東遷隊の先鞭となる。そしてこの一族が樹立した御所市の王国の歴代王が記紀にある神武天皇以下九代までの天皇、いわゆる欠史八代の王のことである。記紀神話に示されている歴代天皇は神武天皇より始まるが、神武の次の第二代綏靖天皇ほか八代は、学会では実在性が低いとされている。神武天皇も不審視され

ている。本論では欠史ではなく葛城王朝の歴代王の事跡が記紀に遺されたと見ている。

物部族もニギハヤヒ尊とともに260-265年ごろ九州遠賀川周辺から東遷していくが、奈良盆地では葛城族の御所市に対し、三輪山麓に王国を樹立し（上図の位置関係図を参照）、両族東西の地域を統治していった。それらのことについては後述する。

初代天皇からのちの数代までは、まだ葛城の地域における部族国家であった。第六代までの各天皇の都は、葛城山麓から畝傍山のあたりにかけて定められた。それが都を大和平野の中原に進出させたのは、第七代の孝霊天皇からである。この天皇からのちは后（正室）妃（側室）に葛城山麓の地域外の女を娶ったのである。葛城山麓にあった一部族国家が、このとき大和の他の部族を統治下に入れ、それらを制圧する目的で大和の中原に都をうつしたのである。古事記をみると、孝霊天皇の皇子の二人によって、吉備国が討たれ服属したと記している。第八代の孝元天皇は、后と妃の三人とも、大和北部ならびに河内国を統べていた物部氏の女を娶っている。つまり葛城の血に物部が入り込むのがこの時である。この御代には、大和の地域から外の河内国も、統治下に入ったものとみられる。第九代の開化天皇になると、大和平野の北のはしに都をおいている。大和平野の北端に都を設けたのは、さらに山城国の南部を流れる木津川を利用するためであろう。山城国への政治的進出を企画して、大和平野の北端に都が設けられた。開化天皇は物部氏の女を后とし、丹波の女を妃としている。開化天皇の御代には山城・丹波両国に対しても、政治的制圧が果たされた。丹波の国は、新羅系天日矛の王国が勢力を張っていた地域であった。

第七代の孝霊天皇から第九代の開化天皇にいたる急速な政治的な発展は注意しなければならない。それまで大和地域に分布する各部族が一応の均衡を保って、それぞれの地域に部族国家をつくっていたのが、この時期になって勢力の均衡を破った。そして争乱のすえ、最後に大和平野の覇者を生み出した。しかも大和一国にかぎらず、少なくとも河内・山城・丹波の外域へまで、政治的進出を果たした王朝が出現した。この王朝が葛城王朝である。

ここで初代神武天皇から十代崇神天皇までの宮を見ておきたい。

- | | |
|--------|-----------------|
| 1. 神武 | 畝傍橿原宮〔橿原市久米町〕 |
| 2. 綏靖 | 葛城高岡宮（御所市森脇） |
| 3. 安寧 | 片塩浮穴宮（大和高田市片塩町） |
| 4. 懿徳 | 輕曲狭宮（橿原市大軽町） |
| 5. 孝昭 | 掖上池心宮〔御所市池ノ内〕 |
| 6. 孝安 | 室秋津島宮（御所市室） |
| 7. 孝霊 | 黒田盧戸宮（磯城郡田原本町） |
| 8. 孝元 | 輕境原宮（橿原市大軽町） |
| 9. 開化 | 春日率川町（奈良市奥子守町） |
| 10. 崇神 | 磯城端籬宮（桜井市金屋） |

葛城王朝から崇神王朝へ

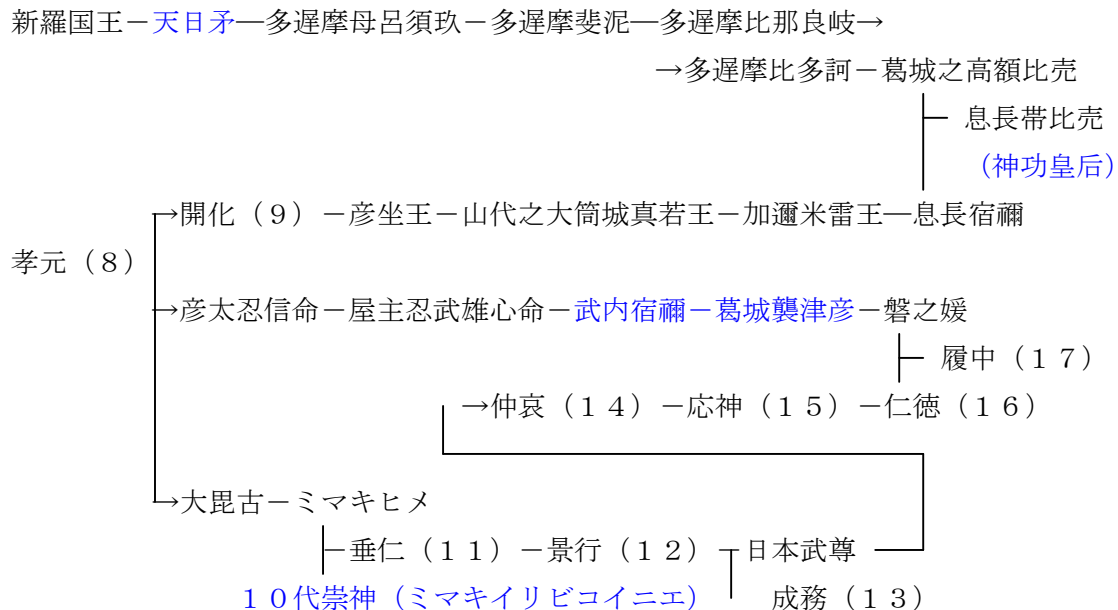
葛城王朝の第八代孝元天皇の頃になると、葛城王朝・ニギハヤヒの物部王朝とは別に、三輪山麓を中心に第三勢力が登場し新しい大和朝廷が誕生することになる。神話「神武東征」に語られている一団の登場であるが、実体は「崇神東征」で、280－285年ごろ九州から東征してくる。その統率者崇神は、最初葛城王朝に婿入りするが、程なくして天皇となる。婚姻関係は下の系図通りである。「御肇国天皇」（はつくにしらすすめらみこと）と呼ばれた。この新王朝が平和裡に前王朝の実権を授受したものでないことだけは明らかである。というのは、大和朝廷初期の崇神・垂仁の二代にわたって、葛城王朝の血縁者の手で、皇位を奪還しようとする謀反がつづけられたからである。崇神天皇を殺そうとしたのは、前王朝の最後の王となった開化天皇の異母弟武埴安彦（たけはにやすひこ）である。垂仁天皇のときも、開化天皇の孫の狭穗彦王（さほひこのきみ）が、天皇を殺して帝位を奪おうとする事件が起こった。二回にもおよぶ謀反がくりかえされたことからみても、葛城王朝はなんらかの反逆にあって倒れ、それに代わって新しい実権者として崇神天皇が出現したことは、認めないわけにはいかない。そして葛城氏本家は一旦途絶えてしまうが、傍系葛城氏が細々と命脈を保持することになる。

その傍系葛城族から後世に歴史的人物が多く排出した。第八代孝元天皇の皇子である彦太忍信命の孫、武内宿禰がそれで、彼は俗に天皇五代に仕えたといわれ、明治時代の日本紙幣にその顔が見えて、国民に広く親しまれている人物である。本稿最後の「高良大社」で改めて武内宿禰を取り上げるが、ここでも少し詳しく立ち入ってみる。

葛城族を復活させた武内宿禰（後代）

崇神天皇の大和王朝が成立する以前の3世紀の奈良には諸豪族が藩居、その中の一つに葛城族もいた。中心には天孫族が君臨していたが、その天孫族とは九州から東遷してきたニギハヤヒ尊の系統であった。葛城族はいち早くその天皇家へ娘を嫁がせ、外戚関係を樹立する。生まれ来る代々の皇子は「大王」を名乗った。それが綏靖（2）、安寧（3）、懿徳（4）、孝昭（5）、孝安（6）、孝霊（7）、孝元（8）、開化（9）である。ただし、第八代孝元、第九代開化については、葛城族というより物部族の血が多く混じっているようである。

崇神天皇の頃の4世紀はじめには葛城氏は勢力衰微し、本家は歴史の中から消えていくことになる。しかし、一旦大王家に注入され始めた葛城氏の血は脈々と続き、4世紀末から5世紀ごろに息を吹き返す。それが武内宿禰であり、その子葛城襲津彦である。この二人が葛城氏の中興の祖となる。前後関係は次の通である。



武内宿禰には葛城襲津彦を含め次の九人の子供があったとされる。久留米高良大社の玉垂神には九人の子があったとされ、境内「御子社」には九人の王子が祀られている。武内宿禰の九人の子供とは次の諸子である。

羽田矢代宿禰(はたのやしらのすくね)・波多臣、林臣、波美臣、星川臣、淡海臣、長谷部臣の祖

巨勢小柄宿禰(こせのおからのすくね)・巨勢臣、雀部臣、軽部臣の祖

蘇我石川宿禰(そがのいしかわのすくね)・蘇我臣、川辺臣、田中臣、高向臣、小治田臣、桜井臣、岸田臣の祖

平群木菟宿禰(へぐりのつくのすくね)・平群臣、佐和良臣(福岡市早良?)、馬御織連の祖

紀角宿禰(きのつめのすくね)・紀臣、都奴臣、坂本臣の祖

葛城襲津彦(かづらきのそつびこ)・玉手臣、的臣、生江臣、阿藝那臣の祖

若子宿禰(わくごのすくね)・江野財臣の祖

(女性) 葛城野伊姫 [応神天皇后]

久米能摩伊刀比売

上に記述した九名のうち七名の名をみて、面白いことに気が付かれたのではないだろうか。

本稿の最初のところに、中国から有明海經由、佐賀平野に上陸した徐福集団は、いくつかの小集団に分かれ、主に筑後平野に分散居住したこと、それぞれの集団の名が秦(羽田・波多)・巨勢・平群・紀・葛城、などであったこと、このうち葛城氏は早々に畿内へ移動したことを述べましたが、武内宿禰という葛城族の子孫の一人が自分の子供達の名に、そっ

くり徐福集団の名と同じものを付けたのではないかということです。

あるいは、推察に過ぎませんが、記紀の編者達が記紀を編纂するにあたって徐福集団の渡来の事跡や、天皇家との深い関係の事実を隠そうとした、しかし全部を抹消するわけにもいかず、上のように、武内宿禰の息子の名として後の時代のこととしておぼろげながら浮き上がらせ、痕跡を残そうとしたのではないだろうか、という点です。つまり、「先祖返り」を武内宿禰に負わせたのではないか、あるいは武内宿禰自身が「先祖返り」を考え、子供の名前に徐福集団の名前を付けたのか、そのいずれかではなかろうかと考えています。

武内宿禰誕生の地の有力な候補地は、和歌山と佐賀にある。

和歌山市安原には誕生の産湯の水を汲んだ井戸と言われる武内宿禰誕生井と武内神社があり、佐賀県の武雄温泉で有名な武雄市に武雄神社が鎮座、やはり武内宿禰誕生の地との伝承が残っている。

奈良のことはさて置き、九州との関係で見ると、武内宿禰は神功皇后とともに朝鮮征伐で大活躍をする人物である。特に久留米の高良大社との関係が深い。葛城氏が以前奈良へ移動する前、佐賀の鳥栖一帯に拠点をおいたことは先述したが、子孫の一人武内宿禰が再び祖先の故地に活躍の場を見出すのである。

崇神王朝の出現によって、一度、断絶しかかった葛城一族はこの時、武内宿禰親子によって、息を吹き返したわけであるが、武内宿禰の源である皇子の彦太忍信命は第三子であって、葛城族の本宗ではない。古く、葛城の地域に栄えていた葛城族の本宗とその流れは、雲の中に消えて、つかむことができなくなっている。このようにして葛城氏の本宗は数代にして亡び、それに代わって一族の蘇我氏が後に台頭する。

葛城襲津彦は武内宿禰の子である。彼は朝鮮との戦闘に活躍する人物で、その様子は朝鮮の古書「百済三書」の一つ{百済記}の中に実名が残されている。彼のこの活躍が、神功皇后の朝鮮征伐の原本となった可能性が強い。

葛城襲津彦ゆかりの室宮山古墳（御所市室字ミヤ山 109）

平安時代に作られた「帝王編年記」には「室破賀（むろはか）」は武内宿禰の墓だという記述がある。また、日本書紀の允恭天皇のところに、反正天皇が亡くなったときの記事として、葛城の玉田宿禰の話があって、玉田宿禰が罪の追求を逃れるため武内宿禰の墓域に逃れたとある。その武内宿禰の墓と伝えられるのは室宮山古墳であり、それが後に「室破賀」と呼ばれ、葛上郡の牟婁郷（むろ）にある墓、ということになったとも言われる。当時の天皇陵墓にも比肩する全国で第 18 位の大きさを誇り、一般的には葛城襲津彦（そつひ

こ)の墓といわれているこの古墳が、武内宿禰の墓とする説も有る。葛城族の長の墓であることは間違いないようである。

襲津彦は第 16 代 仁徳天皇の皇后となった磐之媛（いわのひめ）の父にあたる人物でもある。

応神・仁徳期の事情については、改めて取り上げます。



高鴨神社の池越しに見る葛城の山々。左が金剛山
で後ろが葛城山

第八話、ニギハヤヒ尊の東遷

1. 古代のヤマト

ニギハヤヒ尊が大和へ降臨する前、畿内ヤマトの地は、出雲族大国主の勢力圏に入っていた。その大国主の国譲りの結果、根拠地出雲には以前から大国主説得のために派遣されていた天の^ほ比神が引き続き滞在することとなり、事代主神と共に出雲の統治に当たる。一方、やはり大国主の勢力圏であった畿内にはニギハヤヒ尊が九州から下ったのである。

スサノオが大国主に与えた言葉、

「お前は、大国主の神となり、俺の娘の須世理姫を正妻として、宇迦の山（出雲の国宇賀郷の地）の麓に宮殿をつくって、そこに居住せよ」を守り、大国主の根拠地は出雲に置かれた。

ニギハヤヒ尊は畿内に下って王となり、長髓彦がそれに仕えていた。日本書紀の「神武天皇記」に、長髓彦が、「私は、ニギハヤヒ尊を君としてお仕えしていました」といっているとおりである。

ニギハヤヒ尊を王と頂く一団は物部族で三輪山の山麓、山之辺の道周辺を拠点とした。奈良盆地の東南に位置するこの地で対し、西南の地の葛城山の東麓一帯には、それより40年ほど前に九州から東遷してきていた葛城族が勢力を張り歴代の王を頂いていた。

後の時代になり、神武天皇（実態は崇神天皇）が東征し奈良盆地に入った時、長髓彦は抵抗したが、ニギハヤヒ尊の系列の勢力（物部族）は、神武天皇軍（崇神天皇）に呼応し、長髓彦を滅ぼした。そしてニギハヤヒ尊の系列物部氏は以前の主権者大国主の系列の大三輪氏とともに、神武天皇に始まる（実態は崇神天皇）初期の大和朝廷の政治を支えることになる。しかし、崇神が天皇として大和を代表する天皇になるのは少し後のことである。葛城王朝がこの地にはまだ勢力を保ち、九州から東遷してきた台与を女王とする近畿邪馬台国が隠然たる勢力を保っていたからである。崇神が妃に選んだのは葛城族のミマキ姫で、そこに婿入りすることにより葛城王統を継承するが、葛城族からの反目は相当なものだったようで、すんなりとは立ち上げられなかったようである。

2. 物部族の移動

ニギハヤヒ尊は『日本書紀』などの記述には、神武東征（実態は崇神天皇、280年ごろ）に先立ち、天照大神から十種の神宝を授かり、天磐船に乗って河内国(大阪府交野市)

の河上の地に天降り、その後大和国(奈良県)に移ったとされている。これらは、ニギハヤヒ尊の天孫降臨説話とは別系統の説話と考えられている。また、有力な氏族、特に祭祀を司どる物部氏の祖神とされていることや、神武天皇（崇神天皇）より先に大和に鎮座していることが神話に明記されていることなど、ニギハヤヒの存在には多くの重要な問題が含まれている。大和地方に神武天皇の前に出雲系の王権が存在したことを示すとする説や、大和地方に存在した何らかの勢力と物部氏に結びつきがあったとする説などもある。本稿はこれらの説に従うものである。

にぎはやひ みこと あまつかみ みおや みことのり う あめのいわふね たけるがみね
 饒速日尊、天神の御祖の詔を稟へ、天磐船に乗りて、河内国の河上の哮峯に天降り
 まし、即ち大倭国の鳥見の白庭山に遷り坐す。所謂天磐船に乗りて大虚空を翔行りて、是
 の郷を巡り睨りて天降り坐す。即ち「虚空見つ日本国」と謂うは是か。

上に引用したのは「旧事本紀」天神本紀にある降臨神話の一部であるが、ニギハヤヒ尊が「五部人、五部造、天物部ら二十五部人を副え従として天下り供奉る」ことを述べたもので、これら各氏族の定住した地の調査では、遠賀川式土器が多数出土することが明らかになっている。このことは東遷が遠賀川流域を出発点とし、時期は弥生時代で、この移動が畿内に実質的稲作をもたらした最初でもあったようである。

ニギハヤヒ尊は天神の中で、誰よりも早く九州を出て大和へ東遷された。それは大国主が天孫族に「国譲り」をした後のことである。ニギハヤヒ尊の東遷が、後に神武天皇（実質は崇神天皇）東遷の呼び水となり、「神武東征」の物語となっていく。

「旧事紀」によれば、ニギハヤヒ一団は、32神と25部の物部氏からなるとし、全員の名前が列記されているが、その一部は次のとおり。東遷した物部族の移動先と共に列記する。

五部人を副え従として天降り供奉る

物部造らの祖、天津麻良	河内
笠縫部らの祖、天曾蘇	大和
為奈部らの祖、天津赤占	摂津
十市部首らの祖、富富侶	大和
筑紫弦田物部らの祖、天津赤星	筑紫（居残り）

五部造は供領として、天物部を率いて天降り供奉る。

二田造	和泉
大庭造	和泉
舎人造	河内

曾蘇造	大和
坂戸造	大和

天物部ら二十五部人、同じく兵杖を帯びて天降り供奉る。

二田物部	筑前	当麻物部	大和
芹田物部	大和	馬見物部	大和
横田物部	大和	嶋戸物部	筑前
浮田物部	大和	菴宜物部	伊勢
疋田物部	大和	酒人物部	摂津
田尻物部	大和	赤間物部	長門
久米物部	摂津	狭竹物部	大和
大豆物部	大和	肩野物部	河内
羽束物部	山城	尋津物部	河内
布都留物部	淡路	住道物部	摂津
讃岐三野物部	讃岐	相槻物部	大和
筑紫間物部	豊前	播磨物部	播磨
筑紫贄田物部	筑前		

遠賀川が流れる鞍手郡内にニギハヤヒ尊を祭神とする天照神社があることは先述したが（注；女性神天照大神を祀る神社ではない）、その周辺には物部25部の居住地と見られる地名が残されている。

それは若宮町の芹田（芹田物部）、都地（十市物部）、小竹町の小竹（狭竹物部）、鞍手町の新北（贄田物部）、飯塚市の新多（二田物部）、遠賀町の島門（嶋戸物部）、宗像市の赤間（赤間物部）などである。

九州には、それ以外にも物部氏が根拠地としていた所がたくさんあった。

筑後の生葉郡（浮羽郡）と肥前の三根郡には物部郷があった。そして、筑後の御井郡（三井郡）にある筑後国一宮の高良（高麗玉垂）神社の厨預や祝の職は、中世以前から代々、物部氏が努めていた。そして、筑後の三潆郡（水沼）には物部神社・物部山国神が祀られており、その南の山門郡にも物部系の神社がある。



宗像大社

高良大社がある地域内に「赤星神社」がある。祭神は天津赤星。この祭神については、ニギハヤヒ尊に伴奉した5部人の一人で、弦田物部の祖先である。高良内には古くから、

高良大社の大祝を務めた物部氏の末裔の鏡山・神代などの諸家が居住していたという。また、高良内の谷間の奥には、金・銀・銅・鉄を産出した高良鉱山が江戸時代まで稼動していたことが見られ、この谷間を支配していた物部氏の氏族が古くからその採掘にかかわっていたことも知られている。

さらに久留米市大石町というところには、「伊勢天照御祖神社」がある。主祭神はニギハヤヒ尊である。この地にニギハヤヒ尊を祀る神社があるということは、やはり久留米市周辺も物部氏の根拠地だったことを証明している。

物部氏の九州内での痕跡は遠賀川流域と久留米周辺に著しいが、本貫地はやはり遠賀川周辺だと筆者は見ている。久留米周辺は磐井の反乱を鎮めた物部麿鹿火以降、新たに勢力を移入したものと見ている。

ニギハヤヒ尊が天上界よりヤマトに天降ったことや、ニギハヤヒ尊を指して天つ神としている「日本書紀」の記述から、識者は、ニギハヤヒ尊のヤマト降臨には、つまるところ、神武東征（崇神天皇）の尖兵的な役割があったとし、遠賀川流域から物部一族が東征した事実が伝書として残り、「日本書紀」の記事になったのだろうとしている。しかも、物部氏の一族が金属冶金にかかわっていたらしいところから、物部一族を渡来系の金属工人集団とみなし、また、ヤマトにおける銅鐸などの青銅器の鑄造技術は自生したはずがなく、とすれば、1世紀か2世紀、金属工人の統率者としての物部一族がヤマトに移り、そのずっと後、これを追うように、神武天皇（崇神）の東征があったのだろうと推理している。

3. ニギハヤヒ尊の奉斎

神武天皇（実態は崇神天皇）が大和に東征された時には、ニギハヤヒ尊はすでに崩ぜられていたが、その子宇摩志麻治命はニギハヤヒ尊の大和の統治権を神武天皇に奉献され、神武天皇はニギハヤヒ尊の娘・伊須氣余理比売を皇后に立てられて初めて大和朝廷が創建された。（これは神話の世界での神武天皇系図であるが、実態である崇神天皇の妃はミマキ姫を妃にする。）

現在、皇祖神としては神武天皇の祖母に当たる天照大神（卑弥呼）のみを皇祖神であるとされているが、ニギハヤヒ尊は神武の皇后（伊須氣余理姫）の父であり、ニギハヤヒ尊は神武天皇からすると義父にあたり、大和朝廷としては女系の皇祖神である。

そのニギハヤヒ尊は何処に奉斎されているか。

それは大神神社の本殿となっている。大和の神奈備の三輪山である。神奈備とは神の宿る場所の意味である。現在、三輪山は禁足地となっており、そこの頂上に奥津磐座という巨岩があるが、これこそニギハヤヒ尊の墓である。当時はまだ古墳など出来ていなかったもので、山そのものを御陵とした。なお、ニギハヤヒ尊の諡は「天照国照彦天火明奇甕玉饒

速日尊」であり、別称としては次の通り多数ある。

大物主櫛甕玉尊、賀茂別雷大神、日本大国魂大神、事解之男尊、大歳御祖大神。

三輪山の裾をめぐる道を山辺の道といい、その起点となっているのが大神神社である。木立の参道を抜けて神社の境内に入る。まず、神域を区分する入り口の鳥居の異様さに驚く。それは二本の杉柱に簡単な注連縄^{しめなわ}が結ばれているだけのものである。しかも、目の前に広がる重厚な建物は本殿ではなく、拝殿だという。この神社には本殿がないのである。

では、本殿はどこかといえば、拝殿の奥にある独特の三ッ鳥居の、さらにその奥の三輪山全体が本殿となっているのである。これは古代信仰の名残と言われる。

素朴な疑問として、なぜ「大神」と書いて「おおみわ」と読ませるかという点であるが、本来なら三輪に住む神の意味なので、「三輪神」と書くべきところだが、崇神天皇はそれにあえて「大神」の尊称を与えた。それは、古代の昔から「三輪の大神」として人々に祭られていたからである。つまり「原大和王国」の偉大なる大王であったニギハヤヒ尊の御陵として、人々が尊崇していたからである。

また、石上神社は物部氏の神社として有名であるが、ここはニギハヤヒ尊の宮殿があった場所であろうとされている。石上神社には物部一族の祖神四代を祀っており、それは布留、布都斯、布都（ニギハヤヒ）、宇摩志麻治命である。古代、国家の重大事には天皇が行幸し、国家鎮護を祈った場所である。

「記・紀」にある崇神天皇の項の記述に、この時代国内に疫病が蔓延し、死亡する民が多く、百姓は流離し、あるいは背反するものが続出した。これらの凶事は皇祖神天照大神（卑弥呼）と大国魂神（ニギハヤヒ尊）の二神を崇神天皇の大殿の中に並祭し、ともに祭祀したためと考えられた。そこで、二神の勢いを畏れて、天照大神（女性神）には豊鍬入姫命を託けて、ヤマトの笠縫邑^{かさぬいむら}（現・奈良県桜井市宮字桧原）に祭祀し、大国魂神には淳名城入姫命をつけて祭祀した。ところが淳名城入姫命は髪が落ち身体がやせて奉斎することが出来ず、改めて市城長尾市を祭主として祭祀したと記述されている。

現在、笠縫邑（かさぬいむら）と称する桜井市三輪字桧原に天照大神を祭神とする桧原神社があり、奈良県天理市新泉町星山にはニギハヤヒ尊を祭神とする大和神社がある。

大和神社は「延喜式」の神名帳によれば、「大和坐大国魂神社」となっている。勿論最高の格式をもつ旧官幣大社である。古代において天皇の行幸が一番多かったのは、「大和の三大神社」として尊崇された「大神神社」と「石上神宮」そしてこの「大和神社」であった。主祭神は中央に祀られている大和^{ひばら}大国魂大神である。これがニギハヤヒ尊である。

以上見たとおり、何の変哲もない経歴であるが、日本書紀・古事記でのニギハヤヒ尊の取り扱いについて、哲学者梅原猛氏がこれは史実を改竄・偽作したものとして痛烈な指摘

をされている。古事記・日本書紀の真相を糺した梅原猛氏はその著、「神々の流竄^{るぎん}」で、おおよそ次のように述べられている。

「成り上がり者の藤原不比等は、自らの永続性を確保するために天皇家（当時は持統女帝）に取り入り、記紀の編纂に当たって、古代に遡って女帝統治の既成事実を作る必要があった」。

さらに、「古代に大和朝廷誕生以前に栄えた出雲系王朝（スサノオやニギハヤヒ）の痕跡を抹殺することだった。日向系のイザナギ・イザナミを天神とし、その娘・向津姫を皇祖神・天照大神に、またその甥の磐余彦尊を初代神武天皇に据えた。したがって、それ以外の系譜は改竄・抹殺する必要があり、出雲は抹殺した神々の流竄の地にしたのでだろう」と。

この指摘はきわめて重要なもので、日本古代史の読み方が180度違ってくる重要な指摘なので、さらにそれを追いかけてみる。邪馬台国の場所を考えるとときにも影響してくるからである。

日本書紀の編纂をすすめていた当時の天皇は、天智天皇の娘・宝姫（持統女帝）である。それを監修していた藤原不比等は、女帝・□持統を持ち上げ媚びて、女帝統治の正統性を強調するために皇祖神を女神・アマテラスに据え換えたのであろう。

本来の皇祖神・天照御魂大神は、男性神でスサノオ尊の御子・ニギハヤヒ尊であった。「天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊」という立派な諡号で各地の古神社、天照御魂神社に祀られている神である。

記紀の天孫降臨神話は高天原を舞台にしている。高天原とはどこだったかの詮索は無意味であって、これは全くのお伽話だった。強いて云えば8世紀の飛鳥朝廷における持統女帝を天孫と見立てた百済系皇族の居た宮殿とみることができる。

史実を改竄・偽作した日本書紀の編纂途中で、持統天皇は、日本書紀に都合よく整合させるため、古代から由緒ある神社の古文書や豪族の系図を没収し、抹殺してしまった。つまり、日本書紀第十卷、応神天皇までを書き上げた691年、記紀の記述と矛盾するものとして、以下の古文書、関連する氏族の系図を没収したという。

- 石上神宮（現在の天理市布留町）の古文書（須佐之男尊、大歳（饒速日）尊一族、その末裔である物部氏＝出雲系）
- 饒速日大王の陵墓で、三輪山（桜井市三輪）を御神体として祀る大神神社（斎主・三輪氏）の古文書。
- 以下、豪族十六氏の系図 ・春日氏 ・大伴氏 ・佐伯氏 ・雀部氏 ・阿部氏 ・膳部氏 ・穂積氏 ・采女氏 ・羽田氏 ・巨勢氏 ・石川氏 ・平群氏 ・木（紀）角氏 ・阿積氏 ・藤原氏 ・上毛野氏の系図である。

ニギハヤヒ尊の陵墓・大神神社を祀っていた大神（おおみわ：大三輪）朝臣高市麻呂は、大宝二（702）年二月十七日、左遷されて長門守に下ったが四年後に没している。また、同年八月十六日、石上神宮（饒速日尊一族）を祀る石上朝臣麻呂も太宰府に左遷されている（続日本紀）。朝廷と権力者・藤原氏は記紀で史実を改竄してそれが発覚・指摘されるのを恐れたのであろう。

繰り返しになるが、残されている「古事記」「日本書紀」を見ると、わが国成立に最も関係ある神武天皇の皇后伊須氣余理姫の父、すなわち女系の皇祖神ニギハヤヒ伝承が記紀から故意に削除されている節がある。また、天武天皇による歴史編纂事業の執筆者・中臣大嶋と、「記・紀」完成時の神祇伯・中臣意美麿、それに当時の最高権力者・藤原不比等たちの自家高揚のため、古代の史実が故意に変えられたのではないかと見られる部分がある。

ニギハヤヒ尊は大和朝廷の女系皇祖神であり、当時の大和の豪族である物部氏をはじめほとんどの豪族の祖神でもあった。しかしそれはあくまで女系の皇祖神であったことがポイントである。このため大和の既存の豪族たちと関係のない神武天皇の祖母にあたる天照大神（卑弥呼女王）を皇祖神として、ニギハヤヒ尊の存在を故意に抹消する必要があったようである。それは下記するように、そこには氏族間の死に物狂いの生存競争が見え隠れしている。

中臣（藤原）氏の祖神天児屋根命は対馬のト部の出自と伝えられているが、物部氏などの祖神ニギハヤヒ尊が筑紫より大和に遷都した際に従えてきた32人の従者の一人である。いわば中臣（藤原）氏はニギハヤヒ尊を祖神とする大和の豪族たちからすれば従者の立場の氏族にすぎない。また、中臣氏はもともと物部連が主祭する朝廷祭祀に対してト部として祭祀に携わることを世襲としていた氏族である。

中臣氏が朝廷の重臣として頭角を現すようになるのは、後代の大化の改新（645）の功績による中臣（藤原）鎌足によってである。それ以後、朝廷の祭祀の主導権は中臣氏にとって代われ、政治は天智天皇から藤原の姓を頂いた中臣鎌足の子・藤原不比等の子孫によって掌握されるようになる。いわば、大化の改新以後の中臣氏はそれまでの物部氏の従者的な立場からいきなり主導者となったようなものである。中臣氏が他氏族を抑え優位な立場に立つためには他氏族が祖神と仰ぐニギハヤヒ尊が皇祖神であっては大変都合が悪かったのである。そのためニギハヤヒ伝承を隠滅する歴史改竄が行われたと見られる。

この改竄した歴史を正当化するために編纂されたものが「記・紀」の神代巻である。そのため、史実として編纂することが出来ず曖昧な神話として歴史を偽造せざるを得なかったのである、と。

奈良三輪山の祭神はニギハヤヒ尊ではなく、大国主・大物主・大己貴神などとする神話が多く残っている。その内容を以下に紹介するが、神話とは言え、いかにも作り話的筋書きが多い。ニギハヤヒ尊にまつわる本来の話との整合性も考えざるを得なかったためであ

ろう。

(例；その一) 大三輪神社は、大国主の子孫の大三輪氏が祀った。大三輪神社は日本最古の神社と言われる。記紀によれば、大三輪社は、神武天皇東征以前の神代の時代に祀られたことになっている。

まず、古事記では、神代の巻で、次のように述べている。

大国主が憂えて述べた。「私一人だけでは、どうしてこの国をよく造りえようか、どの神が、私と一緒に、この国を作ってくれるであろうか」。このとき、海を照らして、よってくる神がいた。その神が言った。

「私をよく鎮め祀ったならば、私は一緒によく国を作りましょう。そうしなければ、国を作るのは、難しいでしょう」。そこで、大国主が述べた。

「とすれば、どのように鎮め祀ったならばよいでしょうか」、よって来た神が述べた。

「私を大和の地の、青垣のように囲む山々のうちに、東の山の上に祀れ」。この神は、御諸山（三輪山）の上に鎮座している神である、と。

(例；その二) 日本書紀は次のように記す。

大己貴の神（大国主の神）は、出雲の国で述べた。「今、この国を治めているのは、私一人である。私と一緒に、天下を治めるべきものは、いるであろうか」。このとき、あやしい光が海を照らして、たちまち浮かび来るものがいた。

「もし、私がいなければ、お前は どうしてこの国を、平定することができようか。私がいるので、お前は、大いに国をつることができたのである」。大己貴が尋ねた。「お前はだれか」、それに答えていう。「私は、お前の幸魂・奇魂である」。大己貴の神が言った。「わかった。お前は、私の幸魂・奇魂である。いま、どこに住みたいと思うか」、答えていう。「私は、日本の国の三諸山（三輪山）に住みたいと思う」。そこで、その地に宮を造って、そこに鎮座させた。これが大三輪山の神（大三輪神社）である、と。

日本書紀では、大三輪山の神は、大国主の神の幸魂・奇魂であるという。また、「出雲の国の造の神賀詞」によれば、大御和の神は、大穴持の命(大国主の神)の和魂であるという。

三輪山論争に加担するのはこのくらいにしておこう。いずれにせよ、甘木にも三輪山があり大神社が現存するということである。

その九州朝倉夜須の地にある「大神神宮」「オオミワ神宮」の今日の姿を見てみよう。「卑弥呼の邪馬台国」の項の写真に示したとおり、鳥居には「大神神宮」と懸かっているにもかかわらず、本殿横の説明版には、祭神は「大己貴神」（おほなむち）として、その説明がなされている。いかにもチクハグな感じである。

三輪弥永の地は、その昔ニギハヤヒ尊が出雲から宗像に移り、しばらく九州を巡察するために、夜須の地を拠点にした場所である。出雲族として始めて足跡を残したところであった。後世、卑弥呼（神功皇后）が夜須の山裾にニギハヤヒ尊を祀って大神神社を創建し、山の名を三輪山とした。しかし今日、三輪弥永の神社はオオナムチ（大己貴または於保奈牟^{おほほなむ}智神）神社と呼ばれている。これは大和と同じく「日本書紀」編纂の時に歴史が改竄され、ニギハヤヒ尊の名は消失させられ、この神社も奈良に倣って大穴牟遲神（大己貴命）を祀る神社とされたのである。

写真に示したように、鳥居には「大神神宮」と書かれている。この大神とはニギハヤヒ尊の呼称であり、倭国魂大神（やまとくにたまのおおかみ）、大歳御祖大神^{みおや}に由来する。にもかかわらず大穴牟遲神（大己貴命）を祀る神社と説明されているのである。大国主を表す大己貴神社とニギハヤヒを表す大神神社が混用されている。この現象は奈良の大神神社、三輪弥永の神社ともに同じである。

大穴持神（大己貴命）は出雲大社で奉祭される出雲国に固有の国つ神である。現在出雲大社では主祭神を大国主神と唱えているが、古代の文献、とりわけ出雲にかかわる文献では大国主神と記すものは一つもないという。出雲風土記にははっきりと「出雲大社祭神は大穴持」と書いている。

大国主はスサノオの婿養子になった人である。その彼は若い頃に辺境の大和の地の統治に参画していたことがある。婿養子になった後、出雲の国を本格的に統治する。それは事実であるが、その頃の出雲の祭神は「大穴持」であった。それが「日本書紀」「古事記」の編纂が行われる頃より、大国主が祭神となり、その読み方をオオナムチ「大己貴」としたのである。

「日本書紀」は、「大国主」に「ニギハヤヒ尊」の身代わりになってもらったのである。その結果、祭神が大国主・大物主・大己貴神などとする神話が多く残されることになった。

このようにして、日本書記の編者によって無理やりに大国主に改竄された。そのことが原因で、大神神社、大己貴神社、大物神社などの異なった神の呼び名でいまだに混乱したまま残っているのである。

第九話、台与、豊前・丹波を経てヤマトへ

九州から畿内へ、民族の大移動にも似た現象が卑弥呼の死後に起こる。第八話で述べた「ニギハヤヒ尊の東遷」がそれであるが、ほぼ同じ頃もう一つ重要な移動があった。それは台与のヤマトへの遷都である。台与は邪馬台国の中心を九州から奈良へ移すべく、早くからその準備を進めていたが、248年卑弥呼が亡くなった後、南の狗奴国との諍いはまだ継続中であったが、ようやく実行の時が来たと判断し腰を上げたのである。物理的に台与の移動を支援したのは伊都国の天日矛一族と母方の秦氏一族であった。台与は勢力の中心をまず豊前へ移した。ニギハヤヒ尊が物部族を引き連れ北九州の遠賀川周辺から出発したのに対し、台与は豊国を出港地を選んだ。筑紫の人間がいったん宇佐や香春、京都、中津などの周防灘周辺に集結し、そこから移動したのである。なぜ豊国なのか？ 北の玄界灘や響灘は航海の難所だからだろうか？ そうではないらしい。豊国からの航海の利便性のほか、豊前一带が天日矛一族や秦氏一族の拠点の一つであったからである。詳しくは以下に述べる。

一旦豊前に移動した後、ただちに彼女は天日矛一族に護られるようにして丹波へ、そして奈良へ移動する。260－65年の頃である。その後、大部隊を連れた神武東征（崇神）が行われたのは、20年ほど後のことである。ここではまず台与と豊国の係わりから探ってみることとする。

1. 現人神社と香春神社

宇佐といえばすぐに「宇佐八幡」となるが、邪馬台国時代の台与（豊受姫）にとっては、先祖の天日矛を祀る香春町の「現人神社」が最も大切であると同時に、母方「秦氏」が祀る宇佐八幡の宇佐地区も離れがたい土地であった。今日の「宇佐八幡」が本格的に建立されるのは、西暦700年ごろのことで、台与時代はまだ山奥に中国系秦氏が先祖を祀る原始宗教と思われる八幡神を斎祀していたに過ぎない場所であった。



香春神社の本殿と拝殿

香春町を地図で示すと、福岡市と宇佐市を結ぶ直線の間差点、田川市近くにあり、その隣町である。そこから東の海岸まで進むと行橋市がある。天然の良港がある場所である。一方、田川市はかつて炭鉱景気でにぎわった町である。宇佐神宮は更に東南の地で国東半島の付け根に位置する。

香春町には香春岳がある。香春岳は筑豊県立自然公園となっているが、同山は石灰石鉱業、銅鉱床、スカルン鉱物の産地として古くから全国的に知られ、またニホンザルの生息地、炭坑節の歌われた山でもある。



現人神社

南から北へ一の岳、二の岳、三の岳と連なり、ともにほぼ独立した標高500メートル前後の山で、上半部は結晶質石灰岩、下半は花崗閃緑岩で覆われている。三の岳では奈良時代より銅を採掘し仏像や銅鏡の鑄造に使っており採銅所の地名が今に残っている。この地域の金属鉱物としては黄銅鉱、方鉛鉱のほか、黄鉄鉱、磁鉄鉱、含金石英脈、自然銅、輝安鉱、閃亜鉛鉱など、またスカルン鉱物として方解石、ザクロ石、透輝石、灰鉄輝石、緑廉石、珪灰石、灰重石、孔雀石など多くの鉱物があり全国的に有名である。

ここで産出する銅は、古代より宇佐八幡に奉納される鏡を作るのに使われていた。香春岳の近くには香春神社があるが、この神社が宇佐八幡への橋渡し役の神社だったのである。鏡の奉納は香春神社から豊日別神の坐する京都（行橋市）を經由して宇佐に届けられた。

香春町にある「香春神社」の祭神は辛国息長大姫大目命、忍骨命、それに豊姫で、台与の先祖神の天日矛ではない。台与の先祖神である天日矛は、香春町の三ノ岳北麓の採銅所にある現人神社（あらひと）（田川郡香春町大字採銅所）祀られ、祭神ツヌガアラシトこそが天日矛と同一神と見られている。

「香春神社縁起」によると、採銅所現人神社の祭神は、「角鹿現人」としている。この「角鹿現人」とは、越前敦賀市の気比神宮祭神「都怒我阿羅斯等」と同一神である。このツヌガアラシトこそ、記紀が伝える人物「天の日矛^{ひぼこ}」と同じ伝説説話（ともに姫アカルヒメを追いかけて日本に渡った）を持つ神であり、同一神と見られている神である。

天日矛（ヒボコ）について「古事記」は、応神天皇の条の最後に「昔、新羅の国王の子、名は天の日矛といふあり」としており、「日本書紀」では垂神三年紀に「新羅王の子天日槍来帰あり」と述べられている。そしてヒボコが率いていた集団は金属精錬技術を持つ者た

ちであったという。さらに、「古事記」にはヒボコの系図を次のように伝えている。

ヒボコは日光に感じて生れた赤い玉が阿加留^{あかろひめ}毘売という女の姿に変わったので、それを追って日本まで来たことになっている。そして子孫は、

ヒボコータジマ・モロスクータジマ・ヒネータジマ・ヒナラギータジマ・スガヒコースガカマ・ユラドミーカツラギ・タカヌカ姫（葛城高額姫）、と続き、最後のタカヌカ姫はオキナガ・スクネ（息長宿禰王）と結ばれて、オキナガ・タラシ姫すなわち神功皇后が生れたということになる。79頁の系図を参照願いたい。（本稿での台与は天日矛族と秦氏の間の娘とするが、一方の神功皇后は天日矛族と息長族の子ということになっている）

「日本書紀」には、これと似た話として大加羅の王子のツヌガアラシト（都怒我阿羅斯等）の渡来を記している。これは崇神天皇の時代のこととして、「白石が変じて女になったのを追って越前（福井県東部）の角賀（敦賀）の筥飯浦にやってきた」としている。

このツヌガアラシトは、越前に来る前に、穴戸（長門）でイツツヒコ（伊都都比古）という男に会ったという。また、ヒボコの子孫の「神功皇后」は新羅に出かける前に崗（遠賀川の近く）の港で伊都県主の祖の五十迹手（イトデ）の出迎えを受けている。そして、「筑前国風土記」では、これと同じ記事があり、そこには、「高麗の国の伊呂山に、天より降りましし日矛の苗裔、五十迹手是なり」と名乗っている。

上述のとおり、オキナガ・タラシ姫（神功皇后）はヒボコの子孫であることがわかり、彼女を出迎えたという五十迹手が伊都県主の祖であり、しかもヒボコの子孫であることが出ている。そして、ヒボコと同一人物と思われるツヌガアラシトも伊都都彦という人物に会っていることが記録されている。そうすると「魏志倭人伝」の伊都国は、やはりヒボコの国のこととなりそうである。つまり「ヒボコが大勢力の軍団を率いて九州北部に渡来した時、そこに伊都国を建て息子を国王に据えてから東方に進出した」ということである。

ツヌガアラシトを祭神とする現人神社の存在は、伊都国の他にこの地にも早くから渡来系民族が居住し、銅の採掘・精錬を行っていたことを示すものであろう。

なお、福岡県の北西部、糸島郡からさほど離れていない筑紫郡那珂川町の地にも「現人神社」がある。博多の東中洲を河口とする那珂川の上流山間部であるが、現人神社のほか、安徳の裂田神社、山田の伏見神社、井尻別所の乙子神社がある。

「郷土史那珂川」や社記によると、三韓遠征から帰還した神功皇后が、お陰をこうむった大神の所在を占ってみると、香椎から西南の方の聖なる地、現在の現人宮におられることがわかった。

そこで神功はこの地を訪れ、現人宮の神田に水を引くため、那珂川に一の井堰を築き、裂田の溝を通して水を引き、五穀豊穰の誠を捧げ、現人大明神の尊号を授けた。また、神功はこの折、村々に田神社（地祇神社）を建てて埴安神（はにやす）をお祀りした、と。

国東半島の東の姫島には、天日矛の妻とされる「比賣許曾神」が祭られている。豊の国での天日矛集団の生々しい足跡である。これらは、この金属精錬集団が筑紫は伊都國から豊の国を通過し、豊穰の海である瀬戸内海への拠点を立てていった跡なのである。比賣許曾神が祀られている神社を九州から難波に向かって拾っていくと、次のようになる。

筑前国怡土郡の高祖神社、豊前国田川郡の香春神社、豊後国国東（前）郡の比売許曾神社、摂津国東生郡の比売許曾神社、同国住吉郡の赤留比売神社である。

ヒボコが最後に落ち着いたとされる^{いづし}出石は、生野鉾山の北、福知山の西にあたり精銅の地であった。その周辺にはヒボコ族を祀る神社が多い。例えば、

^{いづし} 出石神社	（ ^{いづし} 伊豆志八前大神、ヒボコのこと？）兵庫県豊岡市出石町宮内 9 9
比売神社	（ヒボコの妻の麻多烏）
諸杉神社	（ヒボコの子の多遲摩母呂須玖）
御出石神社	（伊豆志袁登売。ヒボコの姉妹）
日出神社・比遅神社	（ヒボコの孫）
須賀神社	（五代孫のスガカマ・ユラドミ）

いずれにせよ、日矛の名前には「天」がつき、皇室の祖先に深く関係する神（例；高天原の神々）並みの表記であり、他国の王子の名としては「天」の漢字がついた名は、他に類例がない。それだけ意味深長な人物である。

「香春神社」の祭神の一人は「トヨヒメ」であることは先述したが、このトヨヒメは豊姫＝豊比咩であり、北野町日比生と同じ祭神である。そして豊姫は宗像神社の記録によると神功皇后の妹とされている。そのことは次に述べるとして、神功皇后（卑弥呼）は宇佐八幡第三殿に祀られ、豊姫（台与）は香春神社にと別々に祀られている。あるいは、宇佐八幡第二殿のヒメ大神も豊姫つまり、台与なのかもしれない。

神功皇后の妹が「トヨヒメ」であることは、宗像大社の伝承「宗像大菩薩御縁起」の中に記されている。

それによれば、神功皇后の三韓征伐に際し、皇后は大きな鈴を榊の枝にくくりつけ、天神地祇や海神・水神に祈念した。

すると、竜宮城から妹の豊姫が現れたという。途中、対馬に差し掛かったところで、神功皇后は豊姫を竜宮城に遣わし、次のように述べさせた。

「昔、竜宮城の竜神と私（神功皇后）は、親子の契りで結ばれていました。そのよしみで、乾（干）珠・満珠をお貸しいただき、力を合わせたく存じます」

こうして乾珠・満珠を得た神功皇后は、女人大將軍となって、新羅を難なく屈服させて

しまった、というのである。

そして、石清水八幡宮の伝承「八幡愚童訓」には、三韓征伐の凱旋後、トヨヒメが乾珠・満珠を筑後川（高良大社）に祀ったとある。この縁起から豊姫は神功皇后の妹との説が始まったという。しかし後述するように「神功皇后」は年代合わせのために記紀で使われたキライがあり、トヨヒメとの関係は度外視したほうがよさそうである。

豊姫と豊受姫（台与）の関係は、九州の豊姫が丹後に移動した時、穀物の女神を表す「豊宇賀神」に変身させられたものと想定している。この変身が両者を混乱させる原因であるが、台与は豊後經由丹後へ移動する。それには博多出自の海部氏が深く関わっていた。九州では海部氏は徐福一団と深い関係があり徐福を保食神として崇めていたが、その徐福の末裔である台与にも同じように食物の神としての性格を与えたのであろうと見ている。そして「豊宇賀神」が最終的には「豊受神」へとつながっていくのである。

肝心の台与に話を移そう。

台与はまず、秋月から北上し田川經由香春の地に向かう。そこで日矛一族の人々の歓迎を受けしばらく滞在する。その間に、京都（行橋市）に司令部の館を新築してもらう。また、宇佐の地も訪れ秦氏のもてなしを受け、ここにしばらく滞在しいよいよ東遷の準備にかかった。

2. 宇佐神宮と秦氏

豊の國は秦氏の国でもあった。ただ、同じ秦氏といっても、4－5世紀ごろ新羅から渡来した新しい秦氏（当初は弓月君と称した）とは別種で、紀元前200年ごろ渡来した徐福の子孫が後世、秦、羽田、畑、波多などを称したとされる秦氏と混同しているようである。ただし、新羅から渡来した秦氏も中国に出自があると言われ、そうになると両者は同じ中国系ということになり、区別は付けにくい。

中津市の大貞の地に「薦神社」がある。宇佐神宮の元宮である。内宮は「三角池」の池そのもので、太古の昔、三方から流れ込む小川を堰止め作った農業用人工池である。このような灌漑工事を行えたのは、既に当地に進出していた秦氏だろうと言われている。なお、薦神社と呼ばれる由縁は、三角池の薦で作った藁人形ならぬ薦枕を、宇佐神宮のご神体としたことによるという。

この国で豊はホウ、梟であり、秦氏は梟の如く、力はあるが目立たない種族であった。ひたすらお上を大切にした日本人の原点のような渡来人であった。有名な宇佐八幡の託宣

がある。『我が国は開闢以来、君と臣との別は定まっている。臣を以て君となした事はいまだない。皇位には皇緒をたてよ。』和気清麻呂が聞き、弓削道鏡の野望を挫いた物語がある。この託宣には秦氏の忠勤ぶりをうかがわせるものが入っているようである。

八幡とは諸葛孔明の四頭八尾の八陣図戦法の武勲を象徴する軍旗である。

八幡宇佐宮御託宣集に「古（イニシヘ）吾れは震旦（シンタン）国の靈神なりしが、今は日域鎮守の大神なるぞ」とある。震旦国とはチャイナを西方から呼ぶ名である。日域は日本のことである。震旦国の靈神とは道教の最高神太一神、大元神を指す。大神とは道教の太上老君の意である。これは祭神に秦の始皇帝を模したと思われる久留米高良大社の玉垂神のケースに似ている。高良大社の祭祀氏族は徐福一団の葛城氏系の紀氏である。

宇佐八幡は当初地方神（国つ神）に過ぎなかったことは、繰り返し述べたところである。それは秦氏の子孫が豊国に祀った先祖神を起源とするからである。宇佐亀山の背後（南側）の御許山山頂には三つの巨石があり、御許山神社があるが、ここが宇佐八幡の起源地とされる。筆者はこの巨石こそ秦氏の祖先墓ではないかと見ているのであるが、このように地方の国つ神に過ぎなかった宇佐の神を大社神に変貌させたのは、騎馬民族系の辛島氏、大神氏、宇佐氏などの祭祀者が8世紀頃、盛んに啓蒙活動をして広めたからで、ずっと後の時代のことである。

なお、御許山（または大元山）の周りには「宇佐三山」と称される山がある。大尾山、小椋山〔亀山〕、宮山であり、三山を称して菱形山とも、亀山ともいう。小椋山の北麓に菱形池がる。古くから霊地として知られ、池の畔に霊泉がある。

神域の西端を寄藻川が流れる。大元山の南に源を発し、和間の浜で周防灘に注いでいる。さらに神域にはもう一つ、下宮の西の谷に源を発して、小椋山の南から東へ流れ、寄藻川へ注ぐ御食川（御物川）が流れている。

一地方神たる八幡神（国つ神）が大和朝廷によって全国神へと飛躍させられる直接の契機は、この神が薩摩隼人の反乱を押さえ込んだことである。それほど当時の朝廷は地方の反乱を恐れていたのである。反乱鎮圧に当たった時の様子を伝えるものとして、次のような伝承がある。先述した薦枕がここで再登場する。

8世紀初頭に鹿児島で隼人の反乱がおきる。大和朝廷は大隈半島に植民地をつくるために、この豊の国の住人を入植させる。このことがかえって隼人との軋轢になり、大規模な武装蜂起がおきる。入植地の辛国城は攻撃の的となる。大和朝廷も大伴旅人を将軍とする軍隊をおくるが、豊の国からも救援隊が鹿児島にはいる。この救援隊の兵士たちは、薦枕を御神体として神輿にのせ、辛島スグリハズメがこれを先導する。

それに先立ち、豊の国の兵士たちの安全のために、宇佐八幡宮の神官の大神諸男が八幡

神の託宣をうけて、野中の宝池に向かった。そこの宇佐池守という 300 歳になる老人が池のなかから顔をだして「大貞や 三角の池の真薦草 なにを縁に、天胎（ハラ）み生むらん」といったという。池の不思議さに大神諸男は一心にいのっている、「我 薦を枕として守護の誓いをした。凶賊を降伏させることができる」という声がきこえた。そこで薦の枕をつくったそうだ。

この起源の話を裏付けるように、今日、薦が三角池から刈り取られて、宇佐八幡宮で枕にされると、4 日をかけて 8 社を巡行する。日程は、7 月初午の日に本宮から薦社にいて、薦を刈り取り、下宮で枕に 17 日かけてつくる。

新しい枕が本宮に入れられると、古い枕は下ろされて、来縄郷、田染郷、田原別府をへて豊予水道の奈多宮で移る。ちょうど国東半島の西斜面を巡行してゆく。奈多宮で沖の厳島という小島から海中に流される。竜宮城に返すという神事がおこなわれる。

11 月にはいて、初午の日に薦枕は豊後高田市の田笛社にゆく。もどってきて八幡宮の西の鷹居瀬社にはいりここで一泊。翌日郷瀬社に向かい、次に酒井泉社、その北の乙咩社、そして西へいって大根川社へ。ここから巡行にもってきている銚のみが薦社へ。その日は郷瀬社にもどって一泊。翌日はずっと南の安心院町の妻垣社へ。ここから東、山香町の辛川社へ銚のみ巡行。薦枕は妻垣社で一泊。翌日小山田社を経由、宇佐八幡宮に帰還となる。

いろいろな解釈がこの薦枕の巡行にはあるようだが、宇佐八幡神が朝廷にとり、かけがえない神となった経緯を伝えるものであろう。

3. 宇佐八幡の興隆と祭神

興隆

宇佐神宮の由緒書きにも「宇佐の地方神であった八幡神が八世紀には朝廷と結びつき、国家神にまでになった」と記されている様に、突如として躍り出た神である。これは祭祀に関わった大神、辛嶋、宇佐氏の内渡来系とされる大神、辛嶋両氏のいち早い仏教との繋がりが奏功しているようだ。加えて、九州南部の平定、大仏の造営に大きい寄与を果たした



宇佐八幡、第一殿

事によるものである。

聖武天皇が大仏建立を決断しかねている時、宇佐八幡は託宣を下し、天神地祇を率い誘いて建立を成就せしめるであろうと、神々の先頭に立ったのである。宇佐の地方神から南九州制圧で徐々に重きを持ってきたであろうが、多くの神々の先頭に立てたのは、仏教に帰依した最初の神であり、各神社も迷っていた事があったからであろう。迷いのないものは強いのである。それに加えて香春の銅と鑄造技術の提供と云う現実的手段を持ち合わせていたのがこの宇佐神宮であった。伊勢神宮と云えども銅を産するすべはなかった。

祭神

宇佐八幡宮の祭神については諸説多様で、帰するところを知らぬ有り様であるが、現在その第一殿が応神天皇、中央の第二殿がヒメ大神、第三殿が神功皇后を祀るものであることは周知の通り。問題となるのはヒメ大神で、以下の諸説がある。

- a. 太古よりの鎮座、地主神説
- b. 豊姫説（または豊比咩）
- c. 豊玉姫説
- d. 天照大神説
- e. 天照大神の御子説
- f. 宗像三女神の異名同体説
- g. 三女神説
- h. 玉依姫説（＝豊玉姫の妹）
- i. 淀姫説

以上のように、ヒメ大神の神名は、謎の神ということになっており、宗像三女神説はその有力説の一つにしか過ぎない。

ヒメ大神が応神天皇との関係で第二殿に祭られたと言うことは、731年時点でのヒメ大神は太古よりの卑弥呼・台与と、応神天皇の母后としての神功皇后の三人のイメージを帯びていたものなのであろう。

すなわち、731年時点でのヒメ大神の実際の祭神は三人の女神であって、
ヒメ大神＝卑弥呼＋台与＋神功皇



宇佐八幡、第二殿

后＝三女神、であった。

ところが720年選上の「日本書紀」が神功皇后＝卑弥呼・台与の虚像として作成していたため、ヒメ大神＝卑弥呼・台与・神功皇后＝三女神との関係が混乱しはじめた。

そしてこのヒメ大神＝卑弥呼・台与・神功皇后と言う三女神が、別の宗像三女神（多岐津姫・市杵嶋姫・多紀理姫）に徐々に変化して行った。この橋渡しをしたのが日本書紀の一書の「三女神を宇佐嶋に降り居さしむ、いま海北道中に在り」であった。

これらの一連の流れの中で、神功皇后＝卑弥呼・台与のイメージが定着し、また比売大神＝宗像三女神の異名同体説が有力になった平安時代の823年に、神功皇后が改めて第三殿に祀られたのであると見られている。

元々、この宇佐の地には徐福集団の宗家秦氏が筑紫から持ち込んだ原始的八幡神が地方神として祀られていた。祀っていたのは、徐福集団の羽田氏（秦）であった。

その後、河内王朝の創始者応神天皇による日本統一および朝鮮進出の頃、天照大神神話が逆に九州に持ち込まれた。

720年の日本書紀の成立を受けて、河内王朝の応神王朝を正当化するため、宇佐の亀山に、725年に応神天皇が第一殿に祀られた。そして、応神天皇は母後の神功皇后（卑弥呼・台与の虚像）を通じて邪馬台国に結びつけられ、応神王朝は邪馬台国の流れをくむ正統王朝の位置づけがなされたのであろう。

その直後の731年に、今度はヒメ大神が第二殿に祭られた。ヒメ大神は応神天皇との関係で改めて正式に祀られたのである。そして、応神天皇より一段と高い形式で祭ることにより、ヒメ大神に天皇より高い神格を朝廷は公式に認めたのである。



4. 宇佐八幡の祭祀氏族

辛嶋氏

『辛嶋勝姓系図』によれば辛嶋氏はスサノオを祖とし、その子五十猛命を奉載し、新羅を経由し筑前国筑紫神社に五十猛命を祀り、次に香春岳で新羅の神を祀り、さらに宇佐郡に入ったと言う。

辛嶋氏は伽耶国亀茲峯に酷似した宇佐郡稻積山を「宇佐郡辛国宇豆高島」と称したらしく、ここに辛国神が降臨したとして、のちこの神は乙(オトメ)、泉社、瀬社、崇峻(スシュン)天皇(588～592)の御代蘇我馬子の時代に鷹居社、改新後の天智天皇(662～671)の御代に小山田社を祀ったという伝承がある。更に、天智天皇以後に小倉山(現在の亀山)に入り宇佐氏と共同して北辰社を設けたらしい。北辰社は宇佐氏の比売神と民間道教的シャマニズムの融合を現したようである。

大神氏

大神氏は大和三輪の大神氏の出と渡来系とする二説がある。

弘仁12年の官符、「承和縁起」には欽明天皇の御代(540～571)馬城峯に太上天皇(応神)の御霊が現れ、同29年(568)大神比義(オオガノヒギ)が鷹居社を建てたという。

更に別の説では『託宣集』五巻一書に欽明朝に菱形池辺小倉山の麓に鍛冶翁が現れ、大神比義が応神八幡神として祀った。また同五巻一書では和銅2年まで社殿なし、同5年大神比義と辛嶋勝乙目が鷹居瀬社に社殿を造ったとある。

宇佐氏

宇佐平野でも川部高森古墳群は、地域での傑出した首長の存在を示している。しかも、ここでは少なくとも2世紀半以上の長い間、1か所に集中して古墳がつくられている。この古墳群の被葬者たちは、ある特定一族であった可能性が考えられ、かれらの宇佐地方を代表する首長としての地位は、半ば譜代化して永く継承されたと思われる。したがってこの川部高森古墳群の被葬者の一族からやがて宇佐国造が出た可能性は十分考えられる。

要するに宇佐氏の齋祀る比賣神のいます国に、辛嶋氏がもちこんだ外来信仰は道仏習合の信仰であったようである。その上にのっかり応神信仰を同化させ官社にしたのが大神比義であったということになる。このように八幡神と大神比義は切っても切れない関係があったが、小倉山(現在の亀山)に八幡宮が移ると直ちに天平5年(733)比売神の第二殿ができる。比売神の神殿の建立は宇佐氏の力によるものであり、第二殿ができ宇佐氏の勢力が表に現れると、宇佐氏と辛嶋氏は共同して、大神氏と対峙する運動を起こし、道鏡の事件(769年)を境にして、宇佐氏は官社八幡宮に登場し一時宮司に任じられた。数百年ぶりの宇佐氏の表舞台への再登場である。

5. 台与(豊受姫)は、豊後から丹後そしてヤマトへ

丹波(丹後)王国は古い王国である。日本各地に有力な地方王国が成立する時、例えば出雲王国、筑紫王国、吉備王国などと同じように、この丹波王国も実力ある王国として成立していた。

この丹波は新羅との関係が深い。韓国の「三国史記」「三国遺事」によると、新羅第四代王、脱解王（タルヘ）は丹波から移住してきたと思わせる記述があるという。脱解王は丹波から玉や生口（奴隸）を新羅に輸出し、鉄を輸入するなどの交易を行っていたようだが、自身が新羅へ渡り、そこで巨万の富を築き、第四代新羅王に就任したというのである。脱解王が新羅に到着したのは、新羅第二代の南解王の時といわれ、その後、脱解王が新羅第四代王として即位するのは、紀元57年と伝えられている。

三韓の概略については既に触れたが、古代新羅を振り返ってみると、次のようになる。

初期新羅王の年代は、赫居世(BC57-AC4) ②南解(4-24) ③儒理(24-57) ④脱解(57-80) ⑤婆娑(80-112) ⑥祗摩(112-134)・・・⑩奈勿(356-402)・・・である。

新羅の建国は、紀元前57年、辰韓諸国の中の慶州平野にあった斯蘆国から始まっている。始祖には朴・昔・金の三氏が絡んでおり、諸勢力の集団が連合して国であったため、国家的統合は比較的小さかった。新羅が中央集権国家の姿を整えたのは、4世紀後半の奈勿王のときであった。この王国の揺籃期に丹波と人や物の行き来があったというのである。

一方、丹後とは若狭湾を挟んで対岸の地ではあるが、敦賀地方にも朝鮮半島からの渡来人が多かったことが伝説として残されている。ツヌガアラヒト王の渡来伝説である。

既に述べたツヌガアラヒトは意富加羅国の王子で、出身地は伽耶諸国北部の大伽耶国（慶尚南道高靈）、弁辰の弥鳥邪馬国（ミオヤマ）の地である。敦賀の元の名は「角鹿」であるが、これはツヌガアラヒトの名前から来ているという。アラヒトは、敦賀の気比神宮（ケヒ）の祭祀と敦賀地方の政治を司ったというのである。

台与の話に戻ろう。

九州豊前の京都の湊を離れた台与（豊受姫）は、天日矛の子孫や海部族の人々、つまり身内一族に護られながら、海路一族の拠点となっている丹後出石に向け瀬戸内海を東へ向かう。本来ならすでに樹立されている葛城政権の奈良御所市へ直行すべきところであるが、ここは回り道することとした。

姫路に上陸した一行は（姫路の名の由来は「豊受姫」の「姫」にあると言われる）、北上し「朝来」を通過、豊岡盆地の出石に向かった。到着したところは東に丹後山地を仰ぐ、風光明媚な出石の地であった。一行が通った道筋の町や村には現在次のような神社（豊受姫に関係する）が残っている。

高野神社	（姫路市田野）	稲岡神社	（姫路市青山）
姫大神社	（市川町奥）	姫宮神社	（市川町坂杜）
櫃倉神社	（香寺町恒屋）	姫宮神社	（神崎町寺野）
姫宮神社	（生野町口銀谷）	姫宮神社	（朝来町囊）
姫宮神社	（八鹿町三谷）		

ここで一月近く滞留した後、奈良へ向かうことにしたが、途中さらに寄り道をした。出

石の東にある丹後山地は左程急峻な山ではない、ここを越せば天橋立で有名な宮津湾に出ることが出来る。ここは豊後から移住してきた海部一族の拠点であり、籠神社があり、羽衣伝説で有名な「比治の真奈井」がある。ここでもしばらく滞在した後、若狭湾を東へ向かった。大波を避けるため湾岸沿いを敦賀へ向かったのである。この敦賀に上陸した後は、琵琶湖の水運を利用しつつ、極めて楽な路を選んで奈良へむかったのである。

比沼麻奈為神社のある京丹後市峰山町には、豊受大神が丹波で稲作をはじめられた半月形の月の輪田、粃種をつけた清水戸（せいすいど）がある。これがこの地が田庭と呼ばれるようになった起源とされ、名は田場、丹波へと変遷し、丹波、但馬の地名の起源となったという説がある。また、鳥取市卯垣（ぼうがき）にも古苗代、大苗代がかつてあり、そこには半月形の苗代があった。これは稲葉大明神が、稲作を伝授されたことに由来すると言うが、おそらく丹後の豊受大神が、当地に降臨されたことを示すものと考えられている。つまり、稲葉（稲場・因幡）の地名由来も豊受大神と関連するのである。

南北に伸びる天の橋立の北側「江尻」の地には、現在「天橋立ケーブルカー」が走っているが、その駅の東側すぐのところに「籠神社」があり、さらに200メートルほど東北には比治の「真奈井」跡がある。「天真奈井神社」はここよりさらに300メートルほど北へ行ったところとなる。籠神社の奥宮としての真奈井神社である。以下まず「羽衣」伝説をここに取り上げる。

奈具の社（比治の真奈井）「天の羽衣」伝説

（小学館版「風土記」より）

この里の比治の山の頂に井あり。その名を麻奈井と云ふ。今は既に沼と成れり。

この井に天つ女八人降り来て浴水む。時に老夫婦あり。その名を和奈佐老夫・和奈佐老婦と曰ふ。この老らこの井に至り、窃かに天つ女一人の衣と裳を取蔵しつ。即ち衣と裳あるは皆天に飛び上がり、ただ衣も裳もなき女娘一人留まりぬ。身を水に隠して独懷愧ぢ居り。

ここに老夫、天つ女に謂りて曰はく「吾に児なし、請はくは天つ女娘、汝、児とならむや」といふ。天つ女、答へて曰はく「妾独人間に留まりぬ。何か従はずあらむ。請はくは衣と裳を許したまへ」といふ。老夫、曰はく「天つ女娘、何にそ欺く心を存てる」といふ。天つ女、云はく「それ、天つ人の志は信を以ちてもとせり。何そ疑ひの心多くして衣と裳を許さざる」といふ。老夫、答へて曰はく「疑多く信なきは率土の常なり。故、この心を以ちて許さずあり」といひ遂に許せり。即ち相副ひて宅に往き、即ち相住むこと十余歳になりき。

ここに天つ女、善く酒を醸せり。一坏飲めば吉く万の病除かる。その一坏の直の財、車

に積みて送れり。時にその家豊かにして土形も富みき。故、土形の里と云ふ。これ中間より今時に至るまで便ち比治の里と云へり。

後に老夫婦ら、天つ女に謂りて曰はく「汝は吾が児に非ず、暫く借りて住めり。宜早く出で去きぬ」といふ。ここに天つ女、天を仰ぎて哭慟き、地に俯して哀吟き、即ち老夫らに謂りて曰はく「妾は私意を以ちて来れるには非らじ。こは老夫らが願へるなり。何にそ厭惡の心を發し忽に出去之痛あらむ」といふ。老夫、増發瞋りて去くことを願ふ。

天つ女涙を流し微門の外に退きぬ。郷人に謂りて曰はく「久しく人間に沈みしに天にえ還らず。また親もなき故、由る所知らず。吾や何哉、何哉」といふ。涙を拭ひて嗟歎き、天を仰ぎて歌ひて曰ふ、

天の原 振り放け見れば 霞立ち 家路惑ひて 行方知らずも

遂に退り去きて荒塩の村に至りぬ。即ち村人らに謂りて云はく「老夫老婦の意を思ふに、我が心は荒塩に異なることなし」といふ。仍ち比治の里なる荒塩の村と云ふ。また丹波の里なる哭木の村に至り、槻の木に抛りて哭きき。故、哭木の村と云ふ。

また竹野の郡船木の里なる奈具の村に至りぬ。即ち村人らに謂りて云はく「此処に我が心なぐしく成りぬ。古事に平けく善きことを奈具志と曰ふ」といふ。乃ちこの村に留まりつ。こは謂ゆる竹野の郡の奈具の社に坐す豊宇加能売の命そ。(原漢文)

この伝説の主役は天女の豊受姫であるが、天女達が泳いでいた池が「真奈井」であり、その真奈井伝説は、豊国から海部氏によって丹後国へもたらされ、それに天女の伝説が加えられたものであろう。

しかし、それだけのことであれば、豊受大神は天皇家とあまり脈絡がないことになる。その女神を、なぜ伊勢神宮で祀ったというのであろう。

安本美典氏は、鎮魂祭で歌われる歌の中に、「豊日靈（とよひるめ）」なる女神が登場していることに注目し、この女神は、邪馬台国の卑弥呼と同一と目される「大日靈貴（おおひるめのむち）＝天照大神」と対になっているのではないかと指摘されている。すなわち、「魏志倭人伝」に登場する邪馬台国の二人の女王、卑弥呼と台与が、大日靈貴と豊日靈に他ならない、としたのである。

この指摘はまことに重要で、大日靈貴と豊日靈の関係は、伊勢神宮の天照大神と豊受大神にそのまま当てはまるからである。天照大神は、「日本書紀」のなかで大日靈貴と呼ばれ、かたや豊受大神の名の「豊」は、豊日靈の「豊」であり、邪馬台国の女王「台与」であった可能性が出てくるからである。つまり、伊勢神宮では、邪馬台国の二人の女王を神格化して祀ったともいえる、とする考え方である。

元伊勢宮（籠神社）とその奥宮、天真奈井神社の祀る祭神

丹後半島の付け根にある天橋立は、日本三景の一つに数えられる観光の名所だが、天橋

立を渡ったところにある丹後一の宮、籠（この）神社はまた、古代史ファンには有名な神社である。奥宮として天真奈井神社を持つ籠神社の祭神はいったい誰か？豊受姫である。

もともと、豊受大神は天真奈井神社（現在は籠神社の奥宮）に鎮座していたが、崇神天皇の頃、天照大神が大和笠縫邑から遷座されてこられたのを機会に、本殿（籠神社のこと）を與佐宮と呼んで両大神をここに一緒にお祭りしていた。その後、天照皇大神は垂仁天皇の頃、また豊受大神は21代雄略天皇の御代にそれぞれ伊勢におうつりになった。それによって残された與佐宮は社名を籠宮（このみや）と改め、元伊勢宮とよばれるようになった。そして籠神社には、あらためて彦火明命を主祭神として祀られるようになったという。

彦火明命は別名を、天火明命・天照御魂神・天照国照彦火明命・饒速日命・彦火火出見命などとも呼ばれ、籠にのって雪の中に現れたという伝承により、籠宮の社号となった。この籠神社には、「籠名神社祝部海部直氏系図」なるものが残されている。

暴れん坊天皇として知られる雄略天皇の時代、豊受姫が伊勢神宮の外宮に祭られるようになった理由は社伝によると、雄略天皇の夢枕に天照大神が現れて、安心して食事がしたので豊受大神を真奈井からこちらに呼び寄せよというお告げを受け、伊勢に移したとされている。そのため、籠神社は元伊勢という別名でも知られているのである。

なお豊受姫は籠神社相殿に祭神の一人として相変わらず祀られている。この神は伊勢外宮の祭神豊受大神のことである。上述の天の羽衣の天女、豊宇加能売と同一神である。このように、丹後には伊勢内宮の天照大神、伊勢外宮の豊受大神が仲良く鎮座されていたことがあり、しかも豊受神の羽衣伝説には真奈井という高天原（甘木）から、豊国の日出の真名井へと続いた池の名が付随しているのである。



籠神社奥宮真名井神社

もともと豊受大神を天真奈井神社に祀ったのは葛城一族だと伝えられている。その経緯はどうもはっきりしないが、葛城王朝はヤマト王権によって滅ぼされた王国である。それは奈良盆地での出来事であるが、どうして丹後の地に葛城族が豊受大神を祀ったのか、一つの推測ではあるが、葛城氏と天孫家の両者は遠縁の関係にあったからであろうか。すな

わち高木神から始まる葛城族、その娘万幡豊秋津師姫の子孫は、豊受姫（台与）とニニギ尊の息子ホアカリと結婚し、子孫海部氏を残し、海部氏と葛城氏の間尾張氏が誕生したという関係にあるからである。

この葛城一族は雄略天皇によって滅ぼされてしまうが、その後、天照のお告げを受けた雄略天皇によって、天照に並んで、豊受姫が伊勢に祭られるようになったのであろう。御霊信仰のように、大切に祭る事で、罪滅ぼしのような意味合いがあったのかも知れない。

現在の籠神社の祭神は彦火明命（ホアカリ）、別名天照御魂神である。そして相殿に豊受姫が祀られている。元々日本でも古くは太陽神には男性神が割り当てられていた事を考えると、食の女神を並べて祭る事で、代々天皇家との婚姻関係を象徴しているのではないかとと思われる。

籠神社に残る海部氏系図

1975年、神社に代々極秘で伝えられていた系図が公表され、関係者の大きな注目を集めた。台与（豊受姫）に関する系図ではないが、「箸塚の主」という意味で台与にも無関係ではない。現存する日本最古の系図として、また、従来になかった古代史の新史料として、思いがけないものだったからである。翌年にはさっそく国宝の指定を受けたのも異例のスピードであった。



この系図には、なんと奈良県・纏向遺跡にある箸墓古墳、その被葬者とされる倭迹迹日百襲姫（やまとととひももそひめ）の名が載っているのである。これをもって、倭迹迹日百襲姫＝卑弥呼と見做している「邪馬台国近畿説」の人々は、邪馬台国は近畿にあったのだとの説を強めている。

系図によると、始祖の彦火明命（ひこほあかりのみこと）から9代目の孫のところに、「日女命（ひめのみこと）」と出てくる。この「日女命」の脇に、「またの名を倭迹迹日百襲姫命」、「またの名を神大市姫命」、「日神ともいう」などと記されている。

それに、「神大市姫命」の「大市」。これは『日本書紀』のなかで箸墓について、「倭迹迹

日百襲姫が死んで、大市に葬る。時の人はこの墓を名づけて箸墓という」とある記述に完全に一致する。宮内庁による箸墓の呼び名「倭迹迹日百襲姫の大市墓」の「大市」である。

箸墓に葬られた百襲姫という女性は、丹後の籠神社の系図にある「日女命」と同一人物で、彼女が卑弥呼で、卑弥呼は「日女命」と考えてよいというのである。

この系図は、5世紀に丹波国造となった海部氏が、籠神社の神主となって代々伝えてきたものである。主祭神の彦火明命を丹波国造の祖として、以後、今日まで海部氏が代々続いており、現在は82代目の海部光彦さんである。

「海部氏系図」と呼ばれるこの系図には、始祖の彦火明命についての驚くべき伝承も伝えられている。

彦火明命は、「天火明命（あまのほあかりのみこと）」、「饒速日命（にぎはやひのみこと）」など、いくつかの名前があるが、天皇家の祖先と同じ天照大神の孫で、やはり天孫として天降っている。しかも、丹後に天降っているというのである。

天孫降臨というと、普通、天皇家の祖先のニニギノミコトが九州の日向の高千穂に天降ったといわれるが、「海部氏系図」はもうひとつの天孫降臨伝説を伝えており、海部家と天皇家は同じ天照大神の孫で、兄弟の間柄になるというのである。

しかし、この系図が歴史の事実を伝える真正のものか、まだ判断はついていないようである。

6. 箸墓古墳は台与の墓？

上述の海部氏系図にも出てくる「箸墓」について、その被葬者は「崇神記」でも、崇神天皇の叔母にあたる倭迹迹日百襲姫やまとととひもそひめと伝えている。崇神記は次のような話を伝えている。

○『日本書紀』崇神紀十年九月条

倭迹迹日百襲姫命（ヤマトトヒモソヒメノミコト）は、大物主神の妻となったが、夜のみ訪問なので姿が見えないと訴えた。神はそれも道理だとして、「明朝お前の櫛入れの中に入っている。但し姿を見て驚くな」と言った。翌朝姫が櫛入れを開けたら「小蛇」がいた。驚きの声を上げたら、たちまち人の姿になって妻に、「お前は我慢できずに私に恥をかかせた。今度は逆にお前に恥をかかせてやろう」と言った。そして、天空を踏みとどろかせて三輪山に登って行った。そこで倭迹迹日百襲姫命は天空を去っていく神を仰ぎ見て後悔し、床にどすんと尻餅をついた。そして箸でホト（陰部）を突いて亡くなられた。人は埋葬された墓を「箸墓」と命名した。この箸墓は昼は人が造り、夜は神が造った。大坂山の石を運んで造ったが、それは山から墓まで人民が立ち並び石を手から手へ渡して運んだ。

大物主の妻となった倭迹迹日百襲媛命は孝霊天皇の皇女とされている。孝霊天皇は葛城

族の王の一人で欠史八代の第七代天皇のことである。葛城族については先述の通り、九州から御所市周辺に移住してきて王国を建国した一族であり、始祖は高木の神である。

一方、大物主は出雲族の大国主を指すとする説、ニギハヤヒ尊だとする説があって確定していない。ここでは先ず、大国主としてとらえて見るが、大国主が出雲の国譲りで主権放棄するのは西暦200年代の早い時期で、葛城族が奈良で活躍を始める時期よりずっと早い。したがって大国主がこの主人公とは思えない。

ニギハヤヒ尊であればどうか。時間的にはピッタリである。孝霊天皇が活躍する時期は250年前後で、仮にその皇女の倭迹迹日百襲姫命がそれより20年ないし30年くらい後に婚期を迎えるとすれば、西暦270-280年ごろとなる。ニギハヤヒ尊が東遷して奈良へ来るのは260-265年で時間的には合致する。

本稿ではしかし箸墓の主人公は台与と考えている。



三輪山裾の箸墓古墳

次話で理由を述べるが、台与が奈良へ移動したのは260-65年ごろの話である。そして、台与はニギハヤヒ尊すなわち本来の大物主の妻になったと考えられるのである。九州から奈良へ遷都してきたのは、ニギハヤヒ尊、台与ほぼ同時期である。ニギハヤヒ尊とは年齢に隔たりがありすぎる嫌いはあるが、二人は奈良で結婚し、死後ニギハヤヒ尊が三輪山に祀られ、その麓の箸墓に台与が祀られたと考えるのも一興かもしれない。

実は小椋一葉氏がこの説を取られている。箸墓は台与の墓で三輪山にニギハヤヒ尊が祀られているというのである。倭迹迹日百襲媛命は身代わりに持ち込まれた筋書きに過ぎず、箸墓の本当の当人は台与だというのである。

第十話．神武・神功東征神話とその実像

記紀には二つの東征神話が語られている。

一つは「神武天皇の東征」であり、他の一つは「神功皇后の東征」である。

最初の神武天皇神話は紀元前660頃、九州の宮崎（日向）から後に神武天皇になる狭野尊が東征に向かう有名な神話であり、二つ目はそれほど有名ではないが、やはり九州からヤマトに向かう神功皇后・応神親子の征伐物語である。紀元前660年ごろの縄文時代にこのような史実があったとは誰も信じないであろうが、ひとまず神話の成り行きに従いながら様子を眺めてみることにしましょう。

神話では、神武が東征する以前に、畿内には、物部氏を引き連れたニギハヤヒ尊という天皇家血統を中心に、一つの王朝が樹立されていた。一方、九州では天皇宗本家のニニギ尊から、その子ヒコホホデミ、その子ウガヤフキアエズと続き、いまや狭野尊（神武天皇）が王朝を磐石のものとしていた。神話で語られるその場所とは日向である。この狭野尊はある時、九州から近畿に天下ったニギハヤヒ尊が大成功し王朝を樹立していることを翁から聞く。そして兄と相談し、天下の政治を司るのに適当な土地を求めて東征することにした。有名な「神武の東征」である。「記紀」に詳しく述べられているものを後で略述するが、「記紀」で説明されている年代を中国暦に当てはめれば、なんと紀元前660年ごろのことになる。この年代の問題をどう考えるか、それに神武天皇に相当する人物は確かに天皇家系図の中に狭野尊として存在するが、紀元前660年ごろのこととなると、とてもその狭野尊を当てはめることはできない。このように東征の主役の大事な部分がぼかされているのである。また、そのシナリオは「神功皇后紀」の東征譚とほとんど同じである。このことからいろんな疑問が湧いてくる。背景は次の通りであろう。

「記紀」の作者たちは、歴史をありのままに述べず、外交上の体面にこだわり日本の歴史を中国と同じように古いものに見せかけるため、あるいは著作時の政権担当豪族におもねるためか、歴史にいろいろな歪曲を加えたシナリオを作り出している。たとえば卑弥呼が歴史上存在したことは作者たちは中国史書で十分に承知しておきながら、一言もそれに触れようとはしなかったのも、その一つである。また、神武東征の出発地を日向（宮崎）にせざるを得なかったことにも現れている。日向には有名な西都原古墳群がある。それをもって日向こそニニギ尊の高天原からの降臨から始まる天孫王朝成立の場とし、神武東征の出発点も日向からとしたのであろう。しかし残念ながら古墳群の考古学上の年代は若すぎて合わない。西都原古墳は4－5世紀ごろのもので、卑弥呼や台与あるいは崇神天皇が活躍した3世紀とは時代が違うのである。このように無理に日向に設定せざるを得なかったのは、シナリオが最初から歪曲されていた為、このような辻褄あわせを行わざると得な

かったためと見ている。

しかし、神話がすべて嘘だというわけではない。背後には隠された似たような実態があったようである。

九州より畿内への東遷、あるいは東征といわれる大規模な集団の移動は、古代のこの時期少なくとも四回あったのではないだろうか。まず、第一は葛城族の東遷である。そして二回目はニギハヤヒ尊の東遷、これらについては既に述べてきた。第三回目が「神武の東征」であるが、その実態は崇神天皇の東遷と見る。そして第四回目が九州生まれの応神天皇が母神功皇后と共に畿内に攻め上り、政権を奪取する動きである。この三回目の崇神東征譚が「神武の東征」神話として語られたものとする。本稿では神武＝「崇神天皇の生涯前半」事蹟として話をすすめる。その崇神天皇とは水沼君のことである。一方、台与の畿内への移動の時期は崇神の東征より若干早く、ニギハヤヒ尊の東遷の時期に近い。畿内に移った台与はそこで大和邪馬台国の女王を改めて宣言し、対外（中国・朝鮮）活動を行った。つまり、邪馬台国は九州から大和へ移動したのである。

卑弥呼の死後、筑紫平野周辺の徐福集団および天孫族の小国家連合群は筑紫平野からの脱出を計画する。総指揮を執ったのは、宗像族の弥奴国王水沼君で、脱出行の具体案を練る。この水沼君については、最初の「北野町史誌」の項で若干説明したが、神功皇后が三韓征伐から帰国したとき、その軍船を用意し「蚊田の宮」にお迎えしたり、また、神功皇后が応神天皇を出産されたときには、「益影の井」から産湯を用意させた仁である。後に奈良で葛城王朝に婿入り、「崇神天皇」となる人でもある。

連合国メンバー構成員のうち筑前甘木の高天原の天孫族一団は京都（行橋市）へ、伊都国王家やヒボコの子孫の大半は台与とともに既に奈良へ移動済みであるが、残りの者が豊前の糸田（香春）へ、安曇氏や海部氏は博多から豊国（佐賀関半島の北面と南面一帯）へ移動した。一時的に彼らはこの周防灘や豊後水道一帯の豊国に居を構えるが、程なくしてそのほとんどが奈良盆地を目指し再移動することになる。神話の語る「神武の東征」である。その移動のための海運は遠賀川に残存勢力を持つ物部族・赤間宗像族の海運力と、博多の安曇族（海部・尾張氏）の海運力、それに伊都国の水軍がおおいにものを使うことになる。

1. 「神武東征」物語

「古事記」は、上巻を神話の時代にあて、神武天皇（カムヤマトイワレビコ）から中巻とし、「日本書紀」も、神武天皇以前を神代としているところから見て、記紀の編纂者は、神武天皇以前を神々の時代、神武天皇以後を歴史時代と考えていたことがわかる。

歴史時代の記述は、神武天皇の東征物語から始まるので、まずその粗筋を見てみる。

東征物語は、第一部東征の動機、第二部東征の経路、第三部戦闘、第四部建国に分けることができるから、それぞれについて、「古事記＝古」と「日本書紀＝日」の粗筋を対比しながら見てみる。

第一部 東征の動機

「古」＝古事記のこと

イワレビコと兄のイツセは、高千穂宮で相談し、天下の政治をとるのに適当な土地を求めて東征することにした。

「日」＝日本書紀のこと

(相談の段階では、兄のイツセは登場しない)。イワレビコが皇子たちに、「シオツツという翁のいうことには、「東にいい国があり、先にニギハヤヒという者が、天磐船に乗って行っている」ということだ。そこへ行って、都をつくろう」と話したところ、皇子たちが賛成した。

注； <神武天皇の同母兄弟構成>

長男 五瀬命イツセノミコト (東征中に戦死)

次男 稲氷命イナヒノミコト (海原へ)

三男 御毛沼命ミケヌノミコト (常世国へ)

四男 神倭伊波礼毘古命カムヤマトイワレビコノミコト (神武天皇)

第二部 東征の経路

「古」

イワレビコたちは、「日向」を出発、豊の国の宇沙を経て、筑紫に一年、安芸に七年、さらに吉備に八年滞在してから、速吸の門で、亀に乗った釣人を道案内とし、浪速の渡を経て、白肩の津に停泊した。

「日」

(遠征の出発地の記録はない。「日向」との関係は、イワレビコが「日向国の吾田邑」のアヒラツ姫を妃とした、とあるだけである)

イワレビコは、水軍を率いて東征の途につく。速吸之門で、舟に乗った釣人を道案内とし、筑紫国から安芸国に行き、さらに吉備国に三年滞在してから、浪速岬を経て、河内国草香邑の白肩之津に至った。

第三部 戦闘

「古」

遠征軍は白肩の津へ上陸し、大和に向かい、ナカスネビコと戦ったところ、兄のイツセが矢傷を負った。イワレビコは「日の神の御子が、日に向かって戦うのはよくない。目を背にして戦おう」といって撤退し、南へ迂回した。兄イツセは戦没する。

イワレビコが紀伊半島の熊野から北上すると、大熊が現れ、一行はその怪気のために戦意を失ったが、そのとき、熊野のタカクラジが、天の神の下した一振りの太刀を献じたので、一行は元気を回復した。また、天の神が遣わした「八咫鳥」の道案内で、大和の吉野川のほとりにたどり着いた。

大和では、国つ神のエウカシや土ぐものヤソタケル、エシキ、オトシキなどを降し、大和を平定した。

「日」

イワレビコの一行は、河内から大和に入ろうとする（以下、ナカスネビコとの戦い、兄イツセの負傷、撤退、兄の死など、「古事記」の記事と同じである）

熊野の沖で暴風にあったとき、次兄のイナヒが海神を鎮めるために、海に身を投じた。イワレビコは進軍するが、神の毒気に当たり、進めなくなった（以下、タカクラジが剣を献じ、一行が元気を回復する。また、「頭八咫鳥」の話など、「古事記」と同じである。

大和では、ヤソタケルやエシキを討つ。ナカスネビコと戦った時、飛んできた金色のトビに助けられ、ナカスネビコに打ち勝った。

第四部 建国

「古」

イワレビコは大和を平定し、畝火の白禰宮で、天下を治めることになった。

「日」

（橿原宮で即位する記事は、「古事記」と同じ）。なお、「日本書記」は、イワレビコをハツクニシラススメラミコトと呼んでいる。

「記紀」物語の再演

神武（＝崇神）東征は五瀬（倭人伝では伊声耆）を総司令官とし、末弟の神倭伊波礼毘古命（神武）を副官とした。次男の稲氷命は景初2年の遣魏太夫であり外務大臣、三男の御毛沼命（弥馬升）で卑弥呼のかつての官内務大臣である。伊支馬は伊久米で垂仁天皇であり、弥馬獲支は御真木で崇神天皇である。奴住鞆は額田である。神武も崇神も同時代となる。

東征に先立ち、軍備調達に神武は宮崎・鹿児島にあたり、美美津の浜（宮崎）に隼人軍の軍船団を集結させる。宇佐は元邪馬台国の東の駐屯地砦であり、ここで交歓会をし、軍

を整え、集合出発地点の豊前箕島（行橋市、昔は京都と呼ばれた、今川河口に簑島神社があり神武天皇を祀る）に向かう。五瀬命は伊都の軍を率い元邪馬台国の北の駐屯地砦、遠賀川河口の芦屋に立ち寄り、そこで実戦部隊の物部一族と合流して箕島に向かう。

伊都にはそれを支える海陸の主力軍がいた。対馬は大陸に「対する島」であり、壱岐は「役・軍事」に備える島である。名の通りである。吉野ヶ里は筑後平野の有明海への出口としての砦であり佐賀平野部の租税貯蔵所であった。また宇佐は周防灘、瀬戸内海に対する重要拠点で、姫島はその前進基地で宇佐にも砦があるはずである。さらに遠賀川下流地域に響灘方面に対する拠点があり、それを支えるのはその上流の飯塚地区の弥生集落である。飯塚は春日原に次ぐ弥生遺跡の多いところで、古事記にある「逆に天の安の河の水を塞き上げて、道を塞ぎて居る」（甘木の小石原川の上流の水の流れが逆の川——遠賀川——の上流に住む）伊都之尾羽張神と建御雷之神の地に相応しい。

元邪馬台国の軍の主力、特に海軍は伊都である。出雲に物部族とともに出撃したアメノトリフネは天族の伊都の船団と思われる。陸軍は出雲に出陣したタケミカツチ神の飯塚物部部隊であるが、東征にはまだ不足する。

五瀬命は吉野ヶ里、伊都、飯塚の部隊をまとめ、神武は元邪馬台国の農民だけでは戦えないとして、九州南部の山野の跋涉、小舟の操船に強い薩摩隼人軍の編成のため、南の隼人国に行った。全軍は京都郡の浜、蓑島に集結したのである。

（以下に記す東征の様子は先述した神功皇后の東征の様子とほぼ同一となる）。

五瀬は総司令官として軍を率い、すべての遠征隊は豊前京都郡の浜に集結し、箕島から東征する。瀬戸内海を東進し、安芸（広島県）や高島（岡山県）の各所で人、物の充足を行い出雲軍と合流する。十分な機を見て攻撃に移るが、明石海峡は大倭の玄関にあたり、用意万端守られている。

近畿地方はナガスネヒコに率いられる銅鐸文化圏の人々である。当時倭でも一番大きな国であり大倭といわれていた。その大倭の国の入り路に横たわる島——大倭路島——淡路島が防衛線で、両側は明石、鳴門の海峡である。ここの突破が第一関門である。

作戦として「よもや」と考えられている鳴門海峡を強行突破して、明石海峡の守備軍の裏に廻り大阪湾に直行した。この上陸作戦で五瀬はナガスネヒコ軍の矢を受けて戦死する。司令官を失った東征軍は、敗退を余儀なくされ、神武を司令官とし南へ転進する。

強力なナガスネヒコ軍との正面きつての戦いは不利であると判断した東征軍は、宮崎・鹿児島で集めた山岳に強い隼人兵の利点を活かし、紀伊半島の南から山越えで各集落国の各個撃破の作戦を取る。苦戦の末、故ニギハヤヒ尊の親衛部隊の寝返りの協力を得て勝利を得る。

鏡をかざし、銅鐸を祀るものはナガスネヒコに従うものとみなして抹殺し、あるいは面前で銅鐸を打ち砕いて神罰の当たらぬことを示した。恐怖を感じた大倭の人々は一斉に銅鐸を地に埋め隠した。これにより銅鐸は3世紀末急速に消し人々の記憶からも消え去る。

征圧を終わった神武はその区域の王——のち天皇と呼ばれる——になり、崇神^{すじん}が王——後天皇と呼ばれる——となる。つまり、神武＝崇神の同一人物の東征談である。

九州邪馬台国が近畿に移りヤマトとして成立するのは晋王朝の成立と時期を同じくしている。古事記上つ巻は弥生時代までのことを記載している。太安万侶も弥生時代末を歴史の区切りと認識していたようである。

2. 神功皇后の東征

「記紀」によると、神功皇后は「新羅征伐」の時に身ごもって出産しようとして、石を御裳の腰に巻いてそれを鎮め、筑紫に帰るとすぐ皇子、後の応神天皇を生んだ、とされ、応神天皇が九州生まれであることをまずはっきりしている。

そして、神功皇后と応神天皇が東進して畿内に入ったのは、血生臭い征服戦争であったことを物語っている。神功皇后と応神天皇が大和に帰る途中、大和国の香坂王と忍熊王（この二人は仲哀天皇の正室の王子、なお応神天皇は神功皇后の子すなわち違腹の子ということになる）の抵抗にあった。香坂王と忍熊王は、「東国の兵を興し」、石を切って古墳を作ると偽りながら進軍してくる。香坂王は不意に勢いのある猪に食われ、忍熊王はその状態をも怖れず、依然として堅陣をしいて待ち構えた。そして神功皇后と応神天皇の方では「数万の兵士を率いて」行軍し、さらに「人の心疑わしきに拠って」、母子は異なる道に別れて進み、応神天皇は南海から出て紀伊水門に入り、神功皇后は直接難波を目指す。

途中風は激しく、波静かではなく、始めは神功皇后の船体は海上を回って進むことができず、紀伊で合流してから、また、「昼夜別なく」悪天候にあった。

双方が接戦してから、前後四回にわたって激戦があった。第一回は、忍熊王が応神天皇の船隊を攻め、第二回目は、山代で、双方応戦し、第三回目は、応神天皇軍は逢坂で忍熊王軍を破り、第四回目は、応神天皇軍は、沙沙那美で忍熊王を殲滅させ、忍熊王と將軍伊佐比宿祢は近江の琵琶湖に身をなげ死んだ。

さらに詳しくみると、第一回緒戦において、応神天皇はすでに死んだと見せかけて、喪船一艘を置き、兵士をその船の中に潜ませ、忍熊王は空船と見誤って、不意に喪船の中の軍がこれを攻めたので、忍熊王は急襲に防ぐ暇もなく退却し、敗れている。

第二回目は、応神天皇はまた、帰順と見せかけ実際には、伸びた髻の中に弦をひそませ、忍熊王が兵を解き、弦を切るのを待った後、総攻撃をかけ一挙にこれを破った。

このように、開戦後、忍熊王は繰り返しだまされた。応神天皇が総攻撃をかけたとき、「今、兵のそなえなく」予備隊の準備もなく、ただ逃げ惑うだけで、その戦略、戦術も相当拙劣であったことを物語っている。

そして最後に、応神天皇は本拠を河内に置いたが、旧勢力を制御するために、大和にも拠点を設立した、と。

3. 東征実行者は誰

以上二つの東征譚を併記したが、東征の内容は似たり寄ったりで大差はない。一番大きな違いは主役が違うというだけである。二つの物語からそれぞれの主役を推定してみる。

神武＝^{すじん}崇神が、以下の理由で成立すると考える。
神武東征の実態は紀元前660年ではなく、3世紀末～4世紀初と推定されている。一方、崇神天皇の没年を古事記の干支により推定すれば、318年とするのが通説である。したがって、崇神天皇の活躍時期は、神武東征の3世紀末～4世紀初と重なり合う。すなわち、年代論からは神武＝崇神説は成立しうる。

日本書紀では、「ハツクニシラス スメラミコト」すなわち初めて国を統治した天皇が二人存在する。一人は第一代の神武天皇（始駆天下之天皇-----ハツクニシラス スメラ ミコト）、もう一人は第十代の崇神天皇（御肇国天皇-----ハツクニシラス スメラミコト）である。ところが、古事記では崇神天皇だけが初代天皇すなわち「初国所知之御真木天皇-----ハツクニシラス ミマキスメラミコト」、としている。

しかし初代天皇が二人も存在するはずがない。古事記が崇神天皇だけを初代天皇と認定していることから考えると、崇神天皇が本来の神話・伝承での初代天皇で、この崇神天皇が「東征」を実行した主人公だと考える。ただし、初代天皇の即位を意図的に紀元前660年とするために、崇神天皇の治績のうち「東征」までを分割し、これを神武天皇としたのである。神武天皇と称される人物は天皇家系図の中に狭野尊として厳然と存在する。この狭野尊を紀元前660年の人物として神話史の中に送り込み初代天皇としたのである。実態は崇神天皇の事跡である。

「神功皇后の東征」の実行者

後にも触れるとおり神話の中で六面はつひの活躍をする「神功皇后」を額面どおり受け取ることはできない。この皇后も天皇家系図の中に確かに存在する。しかしそれだけのことであつて、神話通りの活躍をしたとは考えられない。彼女も現実の誰かの身代わりに使われたと見做す。つまり「台与」（二代目卑弥呼）の身代わりである。

248年ごろ卑弥呼が死ぬまでは天孫族は漢式鏡の多い九州にいたと思われる。また卑弥呼は狗奴国との争いの時に死んでいる。天孫族の東方移動はその後であり、台与の時代となり、最も早期の前方後円墳の前ごろと考えられている。

266年、台与は新しく興った晋に朝貢しているが、その意味が、東方移動（東征）の時期を決めるカギとなる。移動後の晋への報告のためか、移動前の新しい統治権に関する了解取り付けかの問題である。

卑弥呼は238年、魏に倭の統治権を金印の受領と言うことで認められ、倭国制覇のスタートをきるが10年後に没する。狗奴国とはまだ交戦中である。卑弥呼死後の大仕事の遂行は、高木の神により、男王が指名され遂行に当たった。水沼君である。男王水沼君の活躍で狗奴国との戦争は一応終結の目処はついたが、世の中はまだ混沌としていた。

それを受け継ぐのが台与である。そして、晋に朝貢の266年までに東方制覇（移動）が終わっていたとすれば卑弥呼死後18年で台与30台初めの頃のこととなる。崇神の古事記の没年記載の戊寅が318年84才とすれば台与は266年32歳、248年卑弥呼の死の時は台与が14才となる。卑弥呼が金印を受領した頃は4歳となる。255年ごろは、崇神24才、神武40半ば、五瀬命50過ぎ、台与は22才となる。いずれも最適の年頃である。神武（＝崇神）東征は280－285年ごろと見られる。一方、台与はそれより一足先に九州を出て奈良へ移動したと思われる。266年より前でニギハヤヒ尊の東遷の時期とほぼ同じ頃である。二代目卑弥呼の台与は、卑弥呼の意思を継ぎ東方への拡大を実現したのである。卑弥呼の時代に魏から金印を与えられたことにより伊都の中国に対する守りを固める必要がなく、心置きなく東遷事業を進めることができた。

4. 神功皇后の不思議について

卑弥呼の邪馬台国について、「日本書紀」はある程度の知識を持っていたはずなのに、あえて多くを語ろうとせず、肝心なことについては口を塞いでいるこの不思議な現象について突っ込んでみる。

「日本書紀」には、第十四代仲哀天皇の皇后で第十五代応神天皇の母、神功皇后の摂政紀39年とその翌年のこととして、「魏志に曰く、明帝の景初の3年の6月、倭の女王、大夫難斗米等^{たいふなとめら}を遣して、郡に詣りて、天子に詣らむことを求めて朝献す。太守鄧夏、吏を遣して将を送りて、京都に詣らしむ。40年、魏志に曰く、正始の元年に、建忠校尉梯携等^{けんちゅうこういていけい}を遣して、詔書印授を奉りて、倭国に詣らしむ。」

と、ほぼ「魏志」倭人伝の記述を正確に記録している。つまり、「日本書紀」の編者は、「魏志倭人伝」を熟知していたことは明らかで、神功皇后という女傑の時代に記事を挿入したということは、邪馬台国を畿内のヤマトに、ヒミコを神功皇后に比定し、それを暗示したことになる。

しかし不審なのは、中国大陸から倭国王と正式に認められた「正統な卑弥呼」を、「日本書記」は大いに喧伝するどころか、その名を伏せ、神功皇后という微妙な立場の人物に当てはめてしまったことである。

神功皇后は、天皇家としては血が薄い。「日本書記」によれば、第九代開化天皇の曾孫・気長宿禰王の娘であったとされているし、この女人に新羅系の血が入っていたことは、つとに名高い。しかも、夫仲哀天皇亡きあと、即位することなく息子^{ほむたわけみこ}菅田別皇子（のちの応神天皇）の成長を待ち、この間摂政として活躍したに過ぎない。

卑弥呼が倭の女王であったことは確かなのに「日本書記」のなかで彼女を暗示しているはずの神功皇后の即位が認められなかったのが、どうにも腑に落ちない。

日本最古の官撰正史『日本書紀』は、編纂に約40年を費やしている。『日本書紀』天武天皇十年（681年）の条に、天皇が川島皇子以下12人の皇族貴族を大極殿に集めて、「帝紀と上古諸事の記定」を命じたとあり、これが『日本書紀』の編纂のスタートであろう。天武天皇が亡くなった後、編纂の事業を引き継いだのが天武天皇皇后で、次の天皇となられた持統天皇とその臣藤原不比等であることは先述した。そして完成は、元正天皇の養老四年（720年）である。

この約40年間の編纂の過程で、舎人親王を中心とする編者たちが中国の歴史書に目を向けたのは当然である。小島憲之氏の日本書紀研究の成果によれば、日本書紀の本文は、史記・漢書・後漢書・三国志魏志・三国志呉志・梁書・隋書・文選・芸文類聚・最勝王経・北堂書鈔から3191字の章句を借用している。

卑弥呼が三輪・甘木を本拠地としたことは、「日本書記」の分析からも明らかにできるという。「日本書記」は仲哀9年（西暦200年）の3月、神功皇后が現・三輪町栗田の松狭宮に赴いたとする記事がある。

「^{またのとりたのふれ}且荷持田村に、^{はしろくまわし}羽白熊鷲という者有り。其の為人^{ひととなり}、強く健し、亦身



に翼有りて、能く飛びて高く翔る。是を以って、皇命に従わず。毎に人民を^{かす}略盗む。戊子（17日）に、皇后、熊鷲を撃たんと欲して、樞日宮（香椎の宮）より^{まつをのみや}松狭宮に遷りたもう。時に^{つむじかぜたちま}瓢風忽ちに起こりて、御笠^{ふけおと}墮風されぬ。故、時人、其の処を号けて御笠と曰う。^{かのとのうのひ}辛卯（20日）に、層増岐野に到りて、即ち兵を挙りて羽白熊鷲を撃ちて滅しつ。左右に謂りて曰く、「熊鷲を取り得つ。我が心即ち安し」とのたまう。故、其の処を号けて安と曰う」

「日本書記」は、天皇または天皇に準ずる皇后・摂政が各地に赴くときは、通常そこに行宮を建てるように書く場合が多い。たとえば、景行天皇は「日向国に到りて、行宮を起てて居します。是を高屋宮と謂う」といったようにである。

従って、神功皇后が香椎宮や松峽宮に入るという書き方は、すでにあった宮処に入ったという意味がある。

神功皇后の69年の活躍は、九州の松浦から朝鮮半島への出兵、瀬戸内海を縦横に航海し滋賀の瀬田、奈良の磐余若桜宮にまで及ぶ。滋賀の長浜あたりを本貫地とする息長氏一族の娘にしては破格の大活躍なのである。神功皇后の本名は、オキナガタラシヒメ（気長足姫尊）であった。

一体これは何を意味するのか。「日本書記」の作者は、仲哀天皇の皇后として僅かな足跡しかなかった神功皇后を次の二つの目的で、神功皇后の実像とはかけ離れた八面六臂の活躍をする大女王の役割を割り振って活用したのであろう。

一つには、高句麗の広開土王碑から明らかな、倭国の4世紀末から5世紀初にかけての朝鮮半島出兵の軍事作戦を、畿内の大和朝廷のものとする作為をするためである。

広開土王碑によれば、倭国は数次にわたって万を数えるような遠征軍を半島に派遣し、新羅や高句麗と激しく戦っている。しかし、この遠征軍は、当時既に畿内の奈良に成立していた大和朝廷が派遣したものであろうか。260年ほど後の663年の白村江の戦いでは、倭国は阿倍比羅夫など6人の将軍と2万7千人の軍勢を派遣し、唐・新羅連合軍に大敗した戦闘模様までを記録している。5世紀の朝鮮半島出兵は、派遣軍の編成の記録がないこと、畿内の豪族の協力があった様子もないことなどから考えて、どうやら畿内の大和朝廷の正規軍の行動ではないようである。

とすれば、この倭国の朝鮮半島出兵作戦は、全国的な統治体制を整えつつあった5世紀の大和朝廷から見て、許しがたい北部九州勢力の単独軍事行動であった可能性が強い。5世紀の大和朝廷には、それをとがめる力はなかったとしても、8世紀の大和朝廷にとっては我慢のできない事実であった。

中国と張り合うような国の正史を編纂していた大和朝廷である。中央政権の面子にかけても、司令官は大和朝廷の最高位の人間でなければならなかった。そのため5世紀の出兵よりもさらに200年さかのぼって、神功皇后を朝鮮出兵作戦最高司令官としたのではなかったのか。これが有名な「三韓征伐」譚である。



香椎宮

二つには、卑弥呼こと天照大神の地上の痕跡を消すために、神功皇后のキャラクターが必要になったのである。「日本書紀」の作者は、239年の卑弥呼、266年の台与の魏への朝貢を明記しているから、「魏志倭人伝」を熟知していたと考えられる。

「日本書紀」の記す神功皇后の九州に置ける事跡は、次の9つである。

①橿日宮（香椎）に進駐し、仲哀天皇の逝去。②安（夜須）の隣の松峽宮に来て羽白熊鷲を討つ。③山門に田油津姫を討つ。④松浦に鮎を釣る。⑤那の河に溝（裂田溝）を掘る。⑥大三輪の神を祀る。⑦伊都に鎮懐石を置く。⑧和珥津（対馬）より新羅に渡る。⑨宇美で出産。

「魏志倭人伝」で所在が明らかな国は、対馬、一岐（壱岐）、末盧（松浦）、伊都、奴、不弥（宇美）の6ヶ国である。つまり、「魏志倭人伝」の時代に神功皇后が活躍していたということを印象づけたいのである。

③のヤマトの田油津姫は、ヤマトの地名を気にして取り入れた可能性がある。台与擁立後の邪馬台国は、久留米・八女地方に邪馬台国の分国を作った。それが現在の八女郡の広川町で、かつては甘木と言われ、現・広川も甘木川といわれていた。3世紀後半の頃、久留米・八女は、ヤマトと言われ、それが山門郡の地名として8世紀以降まで残ってしまった。それを気にして、邪馬台国・大和国関連の地名が北部九州にある理由を神功皇后にかこつけようとしたのではないか。

残った三つ、香椎宮、松峽宮と大三輪社（現・大巳貴神社）は、もともと天照大神の事跡と関係していた。それをカモフラージュするため、神功皇后の事跡にすり替えようとしたものであろう。

三輪・甘木周辺には異常とも思えるほどに神功皇后にまつわる伝承・地名が多い。夜須町（安野、砥上、勝山、中津屋、陣の内、お手洗ヶ滝、砥上神社）、三輪（依井、目配山、お化粧川、松尾、腰掛け石、鞍掛け石、舟繫石、大三輪社、松峽八幡宮）、甘木市（野鳥、七つ森、車寄、矢ノ竹、角枝、丈競石、三奈木、蜷城、鬼ヶ城、すすき原、もすそ飯、腰掛け石、陣屋ノ滝、お手洗い川、熊鷲塚、矢峰山、盾岩山、美奈宜神社、宮園八幡宮、矢野竹神社）。

これらの伝承は、元来、天照大神に拘わるものであったが、「日本書紀」が神功皇后の事跡にすり替えたため、地元でもいつの間にか、神功皇后にまつわるものとなっていったと思われる。

8世紀大和朝廷の官人たちや実質的な構想者、7世紀の聖徳太子は、恐らく筑紫までは実地の検証はしていないはずである。それだけに、地元に残っているであろうと思われる土地の伝承を恐れたと考えられる。

さらに10世紀の平安時代の官人も「日本書紀」の作者の意図を尊重した。当時の神社、神名を克明に記載した「延喜式」から、香椎宮と松峽宮が除かれている。筑前19座の中には、宗像神社、箱崎宮、美奈宜神社、大巳貴神社は入っているが、香椎宮と松峽宮は入られていない。「日本書紀」にこれほど重く取り扱われながら、特に香椎宮は、平安期か

ら中世にかけて朝廷から別格の扱いを受けていたにも拘わらず、「延喜式」に取り入れられていないのである。

松峽宮を神功皇后のかかわりとし、「延喜式」から落とすという作為が、逆に天照大神の松峽宮を証拠付けていると思われるが、最近の考古学的知見もそれを裏付けるものがあるという。

松峽宮の南300メートルに栗田遺跡があり、見事な朱塗りの器台がかなりの数、発見されている。天照大神（卑弥呼）にだけ許された朱を使った土器と考えられている。

5. 神代の年代検証

平成20年、2008年を基準に古代の年代を検証してみる。

以下、例を示しながら干支の年代をどうやって西暦に読みかえるか、古代の年代検証の仕方を説明する。西暦720年に日本書紀が完成した当時、西暦の思想はなかったが、お隣中国の紀年法で自分の国の位置づけは出来ていたのである。

日本書紀においては、巻一の神代上、巻二の神代下に続く巻三の神武紀のところで、初代天皇となる神倭伊波礼比古命（かむやまといわれひこのみこと）（後の神武天皇のこと）が日向を出立して東征に向かう年を、干支を用いて「甲寅」（コウイン）の年と表現している。ここに干支を使った年代の表し方が登場したことになる。

そして東征後、畝傍（うねび）のカシハラで即位した年は「辛酉」（シンユウ）の年であり、また、この年を「元年とする」と書いている。

日本は2月11日を「建国記念の日」としている。なぜ、この日が「建国記念の日」なのか？

『日本書紀』にある神武天皇即位の日である。正確に言うと、その即位年の1月1日に即位とあるのだが、これは旧暦であって、現行の新暦（グレゴリオ暦）に換算すると、この2月11日になるのである。とにかく、この日から、天皇陛下を中心とした日本が始まったことになる。だから昔は、日本と天皇の紀元の日として、紀元節と呼んでお祝いした。

戦後は、マッカーサーの占領政策により禁止されたが、講和条約締結後は、各界の熱望もあり、ついに昭和41年、「建国記念の日」として復活した。

その神武天皇が即位してから、平成20年現在で、2668年目になる。したがって平成20年は、皇紀2668年となる。

神武天皇の即位の年からどのようにして平成20年を2668年目と計算するのか。

この研究は本居宣長から始まり、その弟子の伴信友^{ばんのぶとも}によって確立された。

十干^{じっかん}と十二支から組み合わされる干支においては、同じ干支がめぐってくる一巡分が60年となるが（還暦）、60年を「一元」として、その21元の1260年（ $60 \times 21 = 1260$ ）を「一部^{いちほう}」といい、「辛酉」の年には政体が改まって革命があるとする「辛酉革命」の思想がある。

このことは、『易緯』（えきい）という本に書かれている。緯と呼ばれる本に書かれた予言思想＝讖（しん）だから、讖緯説（しんいせつ）とも呼ばれている。

神武元年の紀元前660年は、ちょうど辛酉の年に当たるために、「書記」は西暦601年（推古9年）の辛酉^{しんゆう}の時点から「一部^{いちほう}」の1260年を引いた紀元前660年を「神武元年」に当てたと伴信友は指摘したのである。

十干十二支（じゅっかんじゅうにし）

	甲④	乙⑤	丙⑥	丁⑦	戊⑧	己⑨	庚⑩	辛①	壬②	癸③
十干	コウ	オツ	ヘイ	テイ	ボ	キ	コウ	シン	ジン	キ
	きのえ	きのと	ひのえ	ひ	の	つ	ち	の	つ	ち
				と	え	と	え	と	え	と

（例）2006年だと1位数字6だから丙の年となる
 の が 年 となる

	子④	牛⑤	寅⑥	卯⑦	辰⑧	巳⑨	午⑩	未⑪	申⑫	酉①	戌②	亥③
十二支	シ	チュウ	イン	ボウ	シン	シ	ゴ	ビ	シン	ユウ	ジュツ	ガイ
	ね	うし	とら	う	たつ	み	うま	ひつじ	さる	とり	いぬ	い

（例）西暦紀年から12年の最大倍数を引き去り、残った数でみると2006年だと
 残数は2で戌（犬）の年となる。つまり、2006年は丙戌（ひのえいぬ）となる

干支表 十干と十二支の組み合わせで60通り 還暦とは60通りが一周したこと。

甲子 1884	甲戌 1994	甲申 2004	甲午 1954	甲辰 1964	甲寅 1974
乙牛 1885	乙亥 1995	乙酉 2005	乙未 1955	乙巳 1965	乙卯 1975
丙寅 1886	丙子 1996	丙戌 2006	丙申 1956	丙午 1966	丙辰 1976

丁卯 1887	丁午 1997	丁亥 2007	丁酉 1957	丁未 1967	丁巳 1977
戊辰 1888	戊寅 1998	戊子 2008	戊戌 1958	戊申 1968	戊午 1978
己巳 1889	己卯 1999	己牛 2009	己亥 1959	己酉 1969	己未 1979
庚午 1990	庚辰 2000	庚寅 2010	庚子 1960	庚戌 1970	庚申 1980
辛未 1991	辛巳 2001	辛卯 1951	辛牛 1961	辛亥 1971	辛酉 1981
壬申 1992	壬午 2002	壬辰 1952	壬寅 1962	壬子 1972	壬戌 1982
癸酉 1993	癸未 2003	癸巳 1953	癸卯 1963	癸牛 1973	癸亥 1983

どうして、神武天皇の即位年を大幅にさかのぼらせねばならなかったのか？

日本書紀は大和朝廷の起源と発展を国内外に知らしめ、また後世に残すために国家的事業として作られた歴史書である。このような政治的意図にもとづき、日本建国の時期を中国に劣らず古い時代に設定する必要から、初代神武天皇の即位を、推古天皇 9 年辛酉（紀元 601 年）から 1260 年を溯った紀元前 660 年としたのである。

それによって神武天皇の即位年は紀元前 660 年 1 月 1 日、退位（死亡）が紀元前 585 年 3 月 11 日とされた。このように干支を西暦年に換算することにより 41 代持統天皇までの即位退位の年月が割り出せることになる。（別表参照）しかし、書かれている治績と年代がその通りかどうか、それは別で、これについては後述する。

ここで一つ実験をしてみる。

「壬申の乱」は皆さんご存知の有名な事件。大海人皇子^{おおあまのみこ}、後の天武天皇になる皇子が、反乱を起こし大友皇子が戦死する。ここで使われている干支の壬申は西暦では 672 年です。これは壬申であって、先ほどの辛酉^{しんゆう}とは関係なく、革命の年ではない。しかし、一例として過去の壬申の年にどうゆうことがあったか、調べてみることにします。

一番最近の壬申の年は上表にあるとおり、1992 年。バブル崩壊が始まった年ではあ

るが、革命があったわけではない。この1992年から壬申の乱の年672年を差し引くと1320年となる。そこで1320年を一元の60年で割ってみると、22という数字になる。

21回転して初めて^{いちほう}一部の1260年ですから、1320年というのは22回転で半端な数字である。ではもう一巡前の21回転目の1932年はどうであったかを見ると、この年の2月に上海で「爆弾三勇士」が爆弾を抱いて爆死している。そして5月には第一次上海事変が起きている。革命ではないが、壬申の年もあまり穏やかではないようです。

この例は単なる偶然でしょうが、干支もこのようにしてみると、少し面白い面もあります。

政体革命が起こるという辛酉思想は中国よりもたらされたものである。これが日本に本
当に当てはまるのか？推古天皇9年の辛酉の年から^{いちほう}一部（1260年）後の辛酉の年はどうでしょう。1861年が辛酉の年となりますが、大政奉還そして王政復古の明治維新は1867年です。ぴったりとはいきませんが、当たらずとも遠からずと言ったところです。

さて、日本書紀の編纂にあたっては、初代神武天皇と皇祖天照大神をどう位置づけるかが最大のポイントであったことは言うまでもない。神武天皇については上に見てきたとおりである。

ところが、数多くの漢籍を見た日本書紀の編者達は、漢籍に頻出する著名な女帝卑弥呼が、皇祖天照大神の人物像と一致し、同一人物であると認識せざるを得なかったようである。

ここで、日本書紀の編纂に二点の重大な障害が生じた。

第一の障害は、卑弥呼＝皇祖天照大神とすると、天照大神が3世紀の人物となる。しかし日本建国を太古の時代と設定したい大和朝廷にとって、これは是認しがたいことであった。日本書紀は大和朝廷＝天皇家による日本支配を正当化し、大和朝廷の起源と発展を国内外に知らしめ、また後世に残すために国家的事業として作られた歴史書である。

そして、神武天皇の即位を紀元前660年に設定すると、皇祖天照大神すなわち卑弥呼は、それ以前の人としなければならない。ところが三国志をはじめとする中国側歴史書群には卑弥呼・邪馬台が頻出し、卑弥呼が3世紀の女帝であることが歴然としている。このように、中国側であまりに有名な女帝卑弥呼を無視できず、日本書紀の作成にあたっては、中国側歴史書群との整合性を意識せざるを得なくなったのである。

第二の障害は、卑弥呼と中国魏王朝との地位関係である。

卑弥呼は日本神話・伝承では皇祖天照大神として、神聖不可侵の存在であった。ところ

が魏志倭人伝は卑弥呼と魏王朝を対等の関係に扱っていない。もちろん、3世紀邪馬台国時代の倭国は中国魏王朝の従属国ではなかった。卑弥呼は魏王朝から親魏倭王に制せられている。これは、同時代に中央アジアからインドにまたがる大国の大月氏の国王波調が、同じく明帝より230年に授与された親魏大月氏王と同格であって、倭国は実質的には魏王朝の友好国であった。

しかし魏の明帝から卑弥呼への詔書は、中国の天子が臣下に与える内容で、たとえば卑弥呼を「汝」と呼び捨てにするのが13ヶ所も現われる。また、「是れ汝の忠孝にして我甚だ汝を哀れむ」「勉めて孝順を為せ」「国家の汝を哀れむを知らしむべし」「汝に好物を賜うなり」とある。このような表現は、対等な国家間の国書とは到底言いがたい。

このことを後の7～8世紀の日中関係と比較すると大きな差がある。

たとえば、聖徳太子が607年に隋の煬帝に送った国書の「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す、つつがなきや、云々」の表現は全く対等である。また663年の朝鮮・白村江の戦いでは唐帝国と正面から戦戈を交えている。つまり7～8世紀の大和朝廷にとっては、日本と中国はまったく対等との意識であって、このような状況下で日本書紀が編纂されたのである。

従って、卑弥呼が親魏倭王に制せられ魏の友好国としても、日本書紀の編者すなわち大和朝廷は、卑弥呼・邪馬台国を正面きって認めることができなかった。以上の二点の障害から、日本書紀の編者は邪馬台国・卑弥呼の取り扱いに苦慮したと推定される。

日本書紀はこれをどう解決したのか。

そこで考案されたのが架空の人物「神功皇后」である。天照大神の実体は卑弥呼・台与であるが、これを実像とすれば、日本書紀はこの実像を神武天皇以前――すなわち紀元前660年以前の神代に送った。さらに虚像・神功皇后を3世紀邪馬台国時代に設定するとともに、神功紀に魏志および晋起居注（下記注）を引用して、神功皇后を卑弥呼・台与に見せかけて、中国側歴史書と年代の整合性をとったのである。

もう一つ注目すべき点は、日本書紀は神功皇后をあくまで皇后とし、天皇（女帝）とは扱っていないことである。神功皇后は仲哀天皇の皇后であったが、仲哀天皇の崩御後201年に摂政となり269年まで続く（日本書紀による年代）。この69年間は天架空位の神功による摂政の時代である。従って、神功を第15代の天皇とする学説があるくらいである。

しかし、日本書紀は神功をあえて天皇としなかった。その理由は何か。日本書紀は神功皇后を卑弥呼・台与に見せかけようとした。しかし、神功を第15代天皇の女帝と設定す

ると、後世の歴史家が神功と卑弥呼・台与を完全な同一人物と断定する危険性が生じる。その場合は、第15代神功天皇が中国魏王朝に臣従していたことになる。このような事態を避けるため、日本書紀の編者は二つの細工をした。

一つ目の細工は、日本書紀は神功紀に魏志と晋起居注（中国の日記体官選記録）を引用しながら、卑弥呼・台与・邪馬台国との表現を一切避けて、単に年代を合わせるにとどめたことである。そして神功皇后の人物像と治績は卑弥呼・台与とまったく異なる。このようにしておけば、神功が卑弥呼・台与であるような無いような微妙になって、あいまいにしておけるからである。日本書紀は、神功皇后が卑弥呼・台与とは断定していない。また魏志および晋起居注を引用しながら、卑弥呼・台与・邪馬台国との文字を一切使用していない。ここに秘密が隠されている。

二つ目の細工は、神功を天皇とはせず、あえて皇后にとどめ、後世の歴史家がまんいち神功＝卑弥呼・台与と断定しても、日本の最高指導者・天皇は中国に臣従していない、との伏線を張ったのである。

日本書紀の編者は、後世の歴史家が神功紀と魏志などの漢籍を比較考証することを想定していたと考えられる。そのため、神功皇后の人物像と治績を卑弥呼・台与とはまったく異なるものとし、神功皇后＝卑弥呼・台与と断定できないようにした。そうすると、卑弥呼・台与は時代こそ神功皇后と同じ3世紀であっても神功皇后とは別人で、それこそ九州の女酋が中国魏王朝に臣従していたことになり、大和朝廷の権威を守ることができる。

「天皇家による大和朝廷は、中国の歴代王朝に決して臣従していない、対等の関係である」というのは、日本書紀をつらぬく根本思想である。すなわち、「大和朝廷が中国の歴代王朝に臣従していたという過去の事実関係は認めない」ということである。

もう一つ付け加えておく。1260年も日本の歴史を遡らせたことのほかに、日本書紀は神代以降、西暦601年推古天皇9年辛酉の年との間の歴史事跡についても年代修正をおこなったと見られることである。その場合も「一元」の60年を使い、あるときには「二元」分の120年を使ったり、あるいは四元の240年を使ったりしている。それは神武の元年をいきなり1260年も遡らせたために、続くところの天皇の事跡の年代をそれぞれ調整しないと辻褄が合わなくなるからであろう。ただし、雄略天皇死亡479年以降の年代については辻褄合わせがなされておらず、治績は西暦の年代と不都合をきたさないようになる。問題はそれ以前がどのように手を加えられているかである。

欠史八代の問題

さて、崇神天皇により大和王朝の基盤が作られたが、崇神＝神武としてしまうと、神武と崇神との間に記紀が示した八代の天皇の名が宙に浮いてしまう。これはどう考えたらよいのだろう。これが所謂「欠史八代」天皇問題である。

「日本書紀」の編年における歴代天皇の在位期間

1. 神武 BC660-585 =75	15. 応神 270-310=40	30. 敏達 572-585=13
2. 綏靖 BC581-549 =32	16. 仁徳 313-399=86	31. 用明 586-587=1
3. 安寧 BC548-511 =37	17. 履中 400-405=5	32. 崇俊 588-592=4
4. 懿徳 BC510-477 =33	18. 反正 406-410=4	33. 推古 593-628=35
5. 孝昭 BC475-393 =82	19. 允恭 412-453=41	34. 舒明 629-641
6. 孝安 BC392-291 =101	20. 安康 454-456=2	35. 皇極 642-644
7. 孝霊 BC290-215 =75	21. 雄略 457-479=22	36. 孝徳 645-649 (大化)
8. 孝元 BC214-158 =56	22. 清寧 480-484=4	650-654 (白雉 ^{はくち})
9. 開化 BC157-98 =59	23. 顕宗 485-487=2	37. 斉明 655-661
10. 崇神 BC97-BC30=67	24. 仁賢 488-498=10	38. 天智 662-671
11. 垂仁 BC29-AD70=99	25. 武烈 499-506=7	39. 引文 672-686
12. 景行 AD71-130 =59	26. 継体 507-531=24	686 (朱鳥 ^{あかみどり})
13. 成務 AD131-190 =59	27. 安閑 534-535=1	40. 天武 686-697
14. 仲哀 AD192-200 =8	28. 宣化 536-539=3	41. 持統 687-697
神功 AD201-269=68	29. 欽明 540-571=31	42. 文武 697-707

(注) 白鳳は寺社の縁起や地方の地誌や歴史書などに多数散見される私年号(日本書紀に表れない元号)の一つ。

通説では白雉(650-654)の別称とも言われる。

一般には、綏靖^{すいぜい}・安寧^{いとく}・懿徳^{いとく}・孝昭・孝安・孝霊・孝元・開化の八代の天皇は、「記・紀」に名前だけが載っている実態の無い「欠史八代」であり、幻の存在だということになっている。しかし、そういう架空の天皇の名前を「記・紀」はなぜに創作しなければならなかったのかについて納得のいく説明はなされていない。

では真相はどうなっているのだろうか。それは、「崇神東征」を迎え入れた「葛城王朝」「物部王朝」が事前に奈良に存在していたことを考えれば、決して架空のものとして退けていいということにはならない。つまり、「欠史八代」の天皇というのは、畿内ですでに王朝として栄えていた「葛城王朝」(高木神の子孫)と「物部王朝」(ニギハヤヒ尊の子孫)の大王的人物の名前を父子相続の形で綴ったものであろうと考える。

繰り返せば、「欠史八代」には次のような事情があったのだと考える。

神武天皇と称される神倭伊波礼毘古命（かむやまといわれひこのみこと）は勿論、崇神天皇も実在の人物であったはず。この二人に邪馬台国二代目女王台与の豊受姫も加わり（神話では神功皇后と呼ばれることもある）、北九州から大和にむかって数年かけて東征事業を行う。第一次は260―265年ごろ、第二次は280―285年ごろのことで、すでに述べたとおりである。

その大和にはそれより以前、西暦220年から230年ごろ筑紫平野の佐賀県鳥栖・基山から移動してきた葛城一族が葛城王国を樹立していた。そしてその歴代の王が綏靖・安寧・懿徳・孝昭・孝安・孝霊として六代にわたり葛城王国を継いでいた。一方、葛城族の奈良到着から50年ほど遅れた260―265年ごろ、九州遠賀川物部を引き連れたニギハヤヒ尊が東遷してきて、奈良盆地の東方に同じように王国を樹立した。その様な状態のなかに、280年から285年にかけて九州から新たに神武東征軍（実態は崇神）が大和に乗り込んできたのである。

日本書紀の編纂完了は720年で、東征から既に500年近い年月を経ていた。隣国朝鮮や中国の情勢、それに大和国の支配層も大きく変化していた。それにいろいろな部族間の思惑が編纂にあたり絡んでいた。結論として日本の歴史を中国と同じように古いものにするために聖徳太子が創作した（「天皇記」や「国記」）1260年も歴史を遡らせる基本構想はそのまま踏襲された。そこで神倭伊波礼毘古命（かむやまといわれひこのみこと）に神武天皇の称号をつけ、神代の時代に差し入れ、その神武に「東征」事業の遂行者の榮譽をつけ、神武より前に実在していた葛城王朝と物部王朝の大王を神武の後の天皇として挿入し時間の空白を埋めたのだと考える。つまり、欠史八代の天皇は神武の後の天皇ではなく、その前に実在していた大王達であったということである。

また、神武天皇を紀元前660年の天皇としたため、天照大神をはじめニギハヤヒ尊など、多くの神々は実在性の薄い神代の世界の空想的な存在になってしまっているが、これらの神々も本当は実存されていた神々だと考える。残念ながらそれらの神の年代を捜査することは、もはや無意味だと思われます。

6. 筑紫から大和への移住者

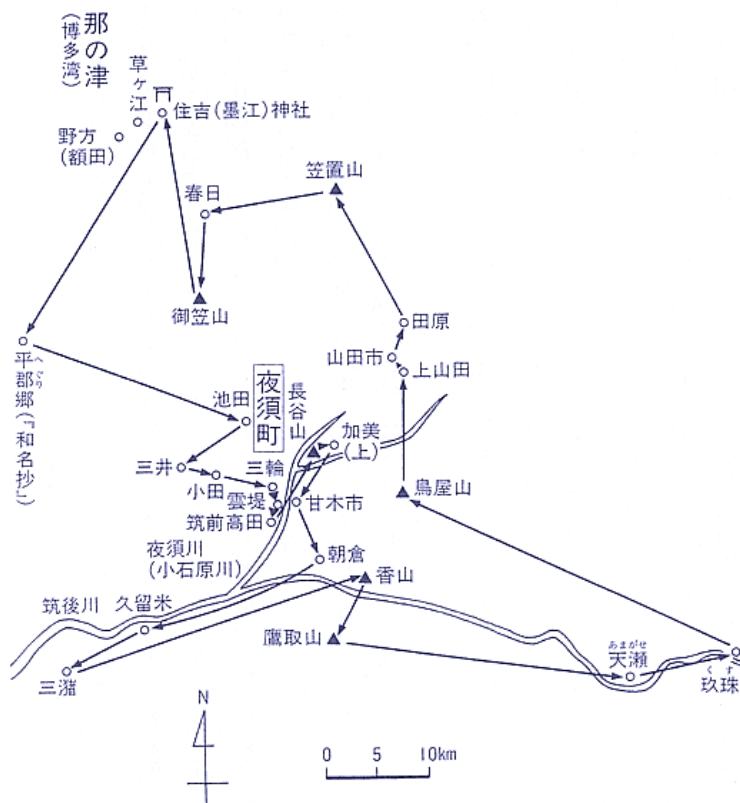
吉野ヶ里で有名な佐賀平野から筑紫平野一帯に、古代渡来人が小集団をなして居住していたと見られているが、史書にある武内宿禰の子とされる羽田（筑紫神社のある筑紫野町

周辺)、葛城(筑後川を挟んで久留米の対岸、佐賀県三養基地方・鳥栖)、巨勢(佐賀平野、筑後川河口付近)、平群(福岡市西方、背振山の北山麓)、蘇我(福岡市住吉神社周辺)、紀または基肆(佐賀県基山)などが、それぞれの地に集団で居住していた。その中の「羽田氏」は注目に値する。徐福の子孫は秦、羽田、畑、波多などの姓を名乗ったとされておりこの秦氏が徐福の子孫である可能性が強い。

秦氏以外の氏族も記紀では武内宿禰の子としているが、この集団の祖は徐福であり、武内宿禰ではありえない。武内宿禰は葛城氏後裔で4世紀末の人物である(佐賀県武雄市が生誕地との説もある)。記紀があえて武内宿禰の名を使ったのは、徐福という渡来人の祖を隠そうとしたのではなかろうか。

それはさて置き、これら氏族の名がそのままそっくり大和地方に残っていることは注目に値する。すなわち蘇我氏は畝傍山の北山麓、羽田氏は畝傍山の南山麓、葛城氏は葛城山の北山麓、巨勢氏は葛城山の東方、そして平群氏は生駒山の南方、大和川の右岸と言った按配である。なお、武内宿禰一族ではないが、物部氏、大伴氏も九州に祖地があり、物部氏は遠賀川流域から、大伴氏は豊国から移動したものであろう。

これだけみごとにグループ名が両方の地域にそろってあることは、これらの地名を背負った氏族群が九州から大和方面に集団移動したものとしか考えられない。

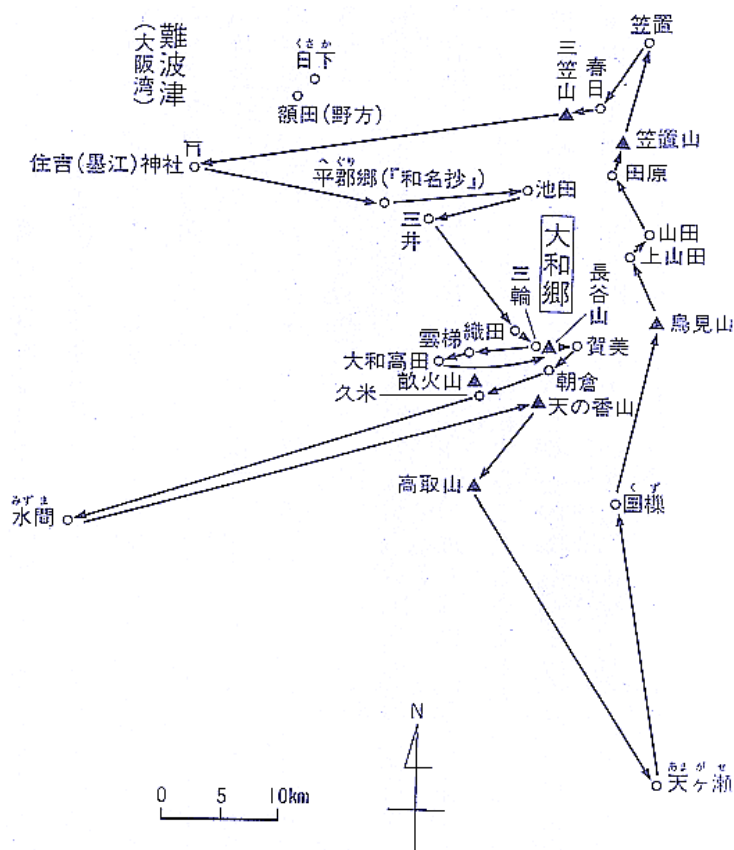


地名学者、鏡味完二氏は、著書「日本の地名」(角川書店刊)のなかで、およそ次のようなことを指摘されている。——九州と近畿との間で、地名の名付け方が、実によく一致している。11組の似た地名を取り出すことが出来るが、これらの地名はいずれも、ヤマトを中心としている。海の方へ、怡土→志摩(九州)、伊勢→志摩(近畿)となっている。山の方へ、耳納→日田→熊(九州)、美濃→飛騨→熊野(近畿)となっている。これらの対の地名は、位置や地形までが大体一致している。

鏡味完二氏の指摘は、非常に興味のあるものである。北九州と奈良県との地図を開いて、モットくわしくみてみよう。すると、私たちは次のようなことに気がつく。それは、北九州の夜須町と、大和の国大和郷に、驚くほどの地名の一致を見出すことである。

(北の笠置山からはじまって、時計の針の方向と逆に一周すれば) 笠置山→春日→御笠山→住吉(墨江)神社→平群→池田→三井→小田→三輪→雲^{うなで}堤→筑前高田→長谷山→加美(上)→朝倉→久留米→三潨→香山(高山)→鷹取山→天瀬→玖珠→鳥屋山→上山田→山田市→田原→笠置山。

(北の笠置から始まって、同じく時計の針の方向と逆に一周すれば) 笠置 (笠置山) → 春日 → 三笠山 → 住吉 (墨江) 神社 → 平群 → 池田 → 三井 → 織田 → 三輪 → 雲梯 → 大和高田 → 長谷山 → 賀美 (上) → 朝倉 → 久米 → 水間 → 天の香山 (高山) → 高取山 → 天ヶ瀬 → 国樺 → 鳥見山 → 上山田 → 山田 → 田原 → 笠置山



これら 24 個の地名は、発音がほとんど一致している。24 個の地の相対的位置も大体同じである。驚くほどの一致といってよい。

128

的な位置を無視すれば、以上のほかに、奈良、出雲、八幡、芦屋、大津、怡土（または伊都）、那珂（または名賀、那賀）、曾我（蘇我）、広瀬などの地名が、九州と関西の双方にある。

また、鏡味完二氏は、著書「日本地名学 科学編」で、「民団が移住する場合には、その地名がもって選ばれた。日本の地名には割合に同種の古代地名が多く、その多い原因が偶然でなく、必然に歴史的に順序があつて持ち運ばれてきた結果となったものと解せられる」という折口信夫博士の見解を引用し、次のように述べている。

「著者はここで、上代の二大文化地域であつた、北九州と近畿との間に、地名の相通ずるものが、著しく目立って存在する事実を指摘し、伝うところの神武天皇御東征の暗示する、民団の大きい移動に、その起因を求めようとする」

朝倉平野の中心部、甘木市、夜須町の近くには、高天原神話の伝える「安川（夜須川）」「香山」の地名が、セットで存在することを考えると、高天原、すなわち、耶馬台国は、この地域に存在したものと言える、と。

7. 崇神王朝から応神王朝へ

「天皇（応神天皇）、皇后（神功皇后）の新羅を討ちたまひし年、歳次庚辰の冬十二月を以って、筑紫の蚊田に生れませり」（日本書紀）

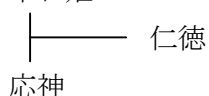
「北野町史誌」で述べたとおり、この「蚊田」は北野町の蚊田であり、新羅攻撃というのは、4世紀中に何回かあるが、神功皇后がもっとも中心にかかわったのは、364年のものである。したがって応神天皇の生年は、360年代後半と考えられる。

そして応神天皇のヤマト征伐（神功皇后の東征）は「新羅を伐ちたまふ明年」に畿内に帰ろうとしたが、仲哀天皇の異腹の王子たちが叛心を抱いて帰路を遮った、という。

王子たちを打ち破った応神はヤマト王朝の本家に婿入りし王統を継ぐことになるが、「新羅を伐ちたまふ明年」と記されている朝鮮との戦争に、上述した武内宿禰の息子葛城襲津彦の名前が登場するので、その経緯を述べることにする。その前に応神の婿入り先は中日姫であり、年代はサチヒコの遠征382年の翌年、383年である。

おそらく大和王家は、崇神、垂仁の盛時を過ぎて衰退期に入り、振興の応神側の武力に対抗すべくもなかったのである。

景行—五百木之入日子命—品陀真若王—中日姫



日本書紀、神功皇后摂政六十二年条に引用の「百濟記」に沙至比跪（さちひこ）なる人物が壬午年に新羅に遣わされた、という記事があるが、この沙至比跪が葛城襲津彦であり新羅が朝貢しなかったので、壬午年の 382 年に遣わされ、討たせたとされ、没後は郷里の御所の室の地に葬られたとされる。背景をもう少し調べてみると、次のような事情であったらしい。

倭軍は 364 年に一度新羅に侵入したものの、新羅の策にかかり「大敗走」した。ところがこれに懲りず、再度の新羅攻撃で、またも策略にはめられてやられている。「日本書紀」の記録では、それは神功皇后 62 年（382 年）のこととなっている。

百濟記に曰く、任午年に、新羅、貴国に奉らず。貴国、沙至比跪（さちひこ）を遣わして討たしむ。新羅人、美女二人を莊飾りて、津に迎え誘る。沙至比跪、その美女を受けて、反りて加羅国を伐つ。

新羅が朝貢を怠ったことが、382 年の攻撃の発端だったという。新羅としては 364 年に首尾よく撃退した。ところが、日本側では逆に新羅を撃破したと「日本書紀」に書かれている。経緯からして新羅から「朝貢」の使者が当然くるものと思っていたのに、さっぱりそれらしいものは現れない。騙された。新羅は嘘つきだ。今度こそ徹底的に叩いてその傲慢な鼻をへし折ってくれよう、と兵を挙げたのが 382 年である。

ところが、沙至比跪將軍は、百濟王か將軍の木羅斤資なのか、いずれかの謀略にかかり、新羅を討ったのではなく、加羅を攻め落としてしまった。その結果、「日本書紀」には、サチヒコはひそかに逃げ帰り、倭王が彼を許さないと知って自殺した、とある。

この將軍が葛城襲津彦である。

8. 応神・仁徳期の中国遺民受入れとヤマト政権の強化

大和政権が最も関心をしめし、新羅や百濟などに求めたのが、先進技術や中国文化であった。とくに製鉄技術が遅れていたので、良質な鉄の産地であった新羅や百濟から鉄の延板（鉄鋌）を大量に輸入しなければならなかった。当時は鉄製の武器が戦争を有利にみちびき、鉄製の農具が著しく農業生産を高めたことを考えれば、政権がその原料を強く新羅に要求したことは明らかである。

「神功皇后紀」四十七年の条にも、百濟の肖古王が五色の綵絹と、角弓箭と、鉄鋌四十枚を献じたとあるが、この鉄鋌の一部に当たると言われる遺物が奈良県の宇和奈辺古墳の陪冢ばいちょうから出土している。また、大型の鉄鋌 280 個以上、小型の鉄鋌も 600 個近く出土したと言われる。

大和政権にとっては中国の先進文化を取り入れることも緊急課題であった。文化国家としての体面を保ちつつ中国や朝鮮諸国と接することは、外交上、欠くことできない重要な要素であった。そのために、早くから百済や新羅に中国文化を身につけた人物の派遣を求めたのである。

「応神紀」十五年の条には、百済の王が阿直岐を遣わして良馬二頭を送ってきたところ、阿直岐が「能く経典を読む」ことを知った応神天皇が、皇子菟道稚郎子の学問の師に任じた。そして阿直岐に命じて優れた学者を招請せしめている。その人物が王仁である。王仁は「王」姓であるから、中国遺民の可能性が強い。百済はかつて中国の植民地の拠点であった帯方郡を中心とした地域から興って建国したから、百済の領内には少なからぬ中国遺民が残存しており、代々中国の文化遺産を伝えていた。

王仁は書首らの祖である西文氏の始祖といわれるが、文字通り王仁の子孫は朝廷の文書作成や管理にかかわっていた。国家の体制が整えられていくに連れて政治・外交・経済関係の文書の作成が必要となり、大和朝廷は漢文に習熟した人物がぜひとも欲しかったのである。

王仁だけでなく、応神天皇の時代の前後に「漢氏」や「秦氏」などが日本に渡来し、その後、文化面だけでなく政治面にも大きな影響を与えたことは注目されるべき事実である。なぜなら、国家が大きく飛躍する時期に、大量の中国遺民が渡来するという現象が起きているからである。その大きな波の一つがこの応神・仁徳朝である。

「漢氏」は4、5世紀の頃に朝鮮半島の帯方郡のあたりから日本に集団で移民した中国系の一族だったようである。帯方郡は後漢の建安年間（196－220）から西晋の建興元年（313）まで中国による朝鮮支配の政治的拠点で、多くの官人やその家族が居住していた。だが、建興元年に北の楽浪郡が高句麗の手に落ち、それと前後して帯方郡も韓族の支配下に入る。百済は扶余族という騎馬民族の一族が農民を支配して帯方郡に建国した国である。その都がどこに置かれたいたのかについては定説がないが、一説では現在のソウル市付近の漢江流域としている。

百済の古都は「漢城」と称し、ソウル市を流れる河川を「漢江」と呼ぶことから、この地域こそ百済の中心地の一画であったと思われる。そして、この地域には中国遺民が少なからず居住し、百済の建国にも大きな影響を与えていたのではないだろうか。

しかし、高句麗の勢力が拡大し、漢江北岸近くまで迫ってくると、百済は必然的に高句麗の脅威にさらされる。百済の王族は扶余族という騎馬民族の一族であったが、民衆の多くは韓民族である。ほとんどが農民であったから、その兵力は農民兵であり、歩兵を主体とする者であった。そのため、機動性に優れた馬を駆使して集団で戦う高句麗軍にしばしば敗れ、苦戦する。このような状況下に、百済も急いで騎兵の養成につとめ、対抗しようとしたが、十分に成果を上げるにはいたらなかった。

一方、高句麗との戦いの苦い経験から、大和政権も朝鮮半島から駿馬を輸入し、各地に牧をもうけて繁殖させる必要性に迫られたのである。それでもヤマトでは馬は依然として高貴なもので、軍馬に用いることもままならない有様であった。当時の馬は一種のステータスシンボルだったようである。

豪族の墳墓から出土する埴輪の多くは「飾り馬」である。

話を戻すと、ついに百済は高句麗に圧倒されて漢城を放棄せざるを得なくなり、南遷して白馬江流域に後退し、公州や扶余に都を遷すのである。長期にわたって戦場となった漢江流域の人々は家を焼かれ、田畑を荒されて、命からがら南へ逃れなければならなかった。そして、その一部の集団が安住の地を求めてヤマトに渡ったのである。彼らは中国遺民の系統であり、百済の「漢」と呼ばれる地域の住民であったことからヤマトに渡来して「漢氏」と自称したのである。

「新撰姓氏録」の逸文にも、応神天皇の時代に「本国の乱を避け」て一族の者が他氏族を率いて帰化したと記されている。

「秦氏」は、「応神記」によれば弓月君が百二十県の民を率いて来朝した部族集団とされている。「漢氏」が漢の高祖を祖先に担ぎ出しているのと同じように、秦氏は自ら秦の始皇帝の子孫だと主張している。両氏とも中国の有力な朝廷の始祖を自らの血統の源としているのは、お互いに対抗する意図があったからであろう。

「太秦公宿禰」について、「新撰姓氏録」左京諸蕃上には、応神天皇の十四年に融通王（弓月君）が二十七県の百姓をひきいて帰化し、天皇に金・銀・玉帛^{ぎよくほく}などを献上したという記述がある。ここでいう百姓は多くの姓を持つ人々をさし、現在の農民の意味ではない。

仁徳天皇の時代には二十七県の秦氏を日本の各地にすまわせ、特に養蚕を司らせて、蚕の繭からつむいだ絹糸で絹織物を生産させたという。天皇は秦氏が貢納する絹布が大変しなやかで暖かく、あたかも肌膚^{はだ}のようだと褒められ、「波多」の姓を与えたという。

雄略天皇の時代に秦公酒は美しく織れた絹布をうず高く山のように積んで天皇に献じた。そこで、天皇は秦公酒に「兔都方佐^{うづまき}」の姓を与えた。「ウヅマサ」は、「太秦」とも表記されるが、「ウヅ」は「うづ高し」を現し、「マサ」は「勝る」で、優れた品質と技能をしめす。秦公酒は秦氏の本宗としてしだいに力を蓄えていったが、彼の本拠は現在の京都市太秦を中心とする地域である。

この一族からは聖徳太子のブレーンとして活躍した秦造河勝が出るが、彼は太子から弥勒菩薩像をさずかり、太秦の地に蜂岡寺を建立した。この寺が広隆寺の前身であり、この仏像こそ、わが国の国宝第一号として選ばれた半跏思惟^{はんかしいうい}像と見られている。

『漢氏』が百済系とされるのに対して、この「秦氏」は新羅から来朝した一族であったようである。かつて、新羅の北東部に辰（秦）韓と呼ばれる地域があった。「魏志倭人伝」に

よれば、辰韓は馬韓の東にあったが、この地の古老たちは、秦の始皇帝の時代に過酷な労役にたえかねて亡命した人々の一部が、朝鮮半島に逃れてこの地に来たと伝えている。そこで馬韓は東側の土地を彼らに割譲したが、その地には柵がめぐらされ、長い間隔離されていたという。そのため、彼らはながい間、韓族とは異なる風俗を保っていた。話す言葉も韓族の言葉とはきわめて異なっていたようである。

だが、秦韓も安住の地ではなかった。「三国史記」「雑志」に、辰韓は馬韓の東にあって海に面し、北は濊^{わい}に接していると記されているように、この地は国境に近いところにあった。現在の地名では蔚珍^{うるちん}付近と言われるが、濊^{わい}や高句麗が大挙して押し寄せたために、秦韓の人々は再び故郷を失うことになったのである。四世紀後半にいたって新羅と高句麗の友好関係が破れ、高句麗が新羅に兵を進めて国境地帯を蹂躪したからである。

一般的に、農民は土地への愛着がきわめて強く、よほどのことがない限り生活の糧を得ていた農地を放棄し、祖父の地を捨てることはない。その土地が天災や戦乱によって復興できないほど荒廃したり、敵兵に蹂躪されて追われるような緊急事態が起こらない限り、彼らは故郷を離れることはないのである。しかし、現実は一筋縄ではなかったであろう。

そして中国遺民が集団で海を渡ってヤマトへ赴いたのは、ヤマトが中国の先進技術や文化を身につけた人々を積極的に受け入れていることを耳にしたからであろう。朝鮮からの渡航は、太古からのルートである北九州経由を選ばず、ヤマトへの近道として冬の西風に乗り一気に敦賀湾に到達、琵琶湖畔を通りヤマトに達するルートを取るようになる。この大動脈の変化が九州のその後の発展にますます影響し、地盤沈下をまねくことになるのである。

このように、大和は朝鮮半島から中国遺民と称する人々を集め、事務官僚として積極的に登用して国家の支配体制を整えていく一方、日本列島に割拠している豪族を服属させていくのである。

このようにして、六世紀以後に開花する飛鳥・白鳳そして奈良時代の文化の素地は、五世紀の前後に渡来した海外文化を担った人々の手で育まれ後世に受け継がれていったのである。われわれが無意識に「日本風」と考えている衣食住の習慣や冠婚葬祭の風習なども一つひとつそのルーツを探ると、意外なほど多くの物が5世紀から7、8世紀ごろに渡来人によって伝えられた文化から発していることが分かる。

第十一話、大和政権樹立後の北部九州

1. 九州王朝説

崇神天皇となる水沼君一行が筑後の国を離れ、また、台与一団もその前に宇佐から丹波經由畿内へ移ってしまっており、残された北九州一帯はどのようなになったのであろうか。まったく人が居ない蛻の殻になったわけではなかろう。それまで朝鮮や中国と華々しい外交交渉を行っていた北部九州は、その後一体どうなったのであろう。

奈良では、たしかにしっかりした政権が成立し、従来の小国家連合的な体制から、天孫族の王が権力を握り、汎国家的なものが出来つつあった。しかし一方の残された北九州はどうであろう。中心となる人物がおらず、誰も政を行わない空虚な地域となってしまったのであろうか。そうではないであろう。

この点について古田氏が「九州王朝説」を唱え、奈良の王朝とは別に九州には邪馬台国時代から続いた王朝が存続し、中国史書に残るその後の外交も、その九州政権が行っていたのであると主張されている。その九州王朝が倒れたのは、朝鮮の白村江での敗戦の時であるという。

古田武彦氏の「九州王朝説」は、高良大社に残る伝承とも合致する点が多い。しかし残念ながら、同氏の説は全面的には受け入れられていないようである。

筆者個人は、「筑紫王国」的なものは、他地域の出雲王国、吉備王国、丹後王国、畿内王国などと同じように、奈良に律令制国家が成立するまで存続したと考えている。ただし、その筑紫王国が「九州王朝」として倭国の覇権を握り、朝鮮・中国などとの外交を主導していたかについては、確たる証拠もなく、意見保留といったところである。

「魏志」倭人伝のなかで、邪馬台国は、「邪馬台」ではなく、「邪馬壱」と記されているところから、古田氏は、いわゆる「邪馬台国」など何処にもなく、本当は「邪馬壱国」であったという。そして、畿内のヤマト朝廷は邪馬壱国の分流にすぎず、4－7世紀の間、邪馬壱国は北部九州で強大な権力を持ち続け、朝鮮半島に大軍を送り続けていた、と結論付けている。

古田説は、ヤマト中心のこれまでの史学界の常識に対して「一元的な皇国史観への反発」という大義名分を振りかざし、市民による歴史構築を称し、根強い支持者を獲得していった。たしかに、「魏志」倭人伝には邪馬壱国とあり、この事実を誰もそれほど問題視してこなかった。仮に、古田氏の言うとおり邪馬台国ではなく邪馬壱国が真実なら、従来の邪馬台＝ヤマト説の線は消え、さらに邪馬台が東遷してヤマトになったとする従来の邪馬台国九州説・東遷説の線も消えてなくなることになるという重大な説なのである。

「魏志」倭人伝に邪馬壱と記してあったにもかかわらず邪馬台と改めて呼び慣わしてきたのは、ひとつに、卑弥呼の邪馬壱国と畿内のヤマト朝廷が連続していたという先入観から、「壱」は「台」の誤記に過ぎぬとタカをくくっていたからだとする古田氏の指摘は鋭い。

3世紀後半から4世紀、ヤマトを中心に巨大な前方後円墳が造営されていったことについて古田氏は、前方後円墳の方部が、九州王朝への遥拝・服属儀礼の場であるとして、次のように述べる。

わたしの新しい仮説に立つとき、いわゆる「巨大さくらべ」に悩む必要はまったくない。「大いに儀礼の場を設け、“血縁上の”あるいは“服属上の”遥拝儀礼の行われた事実を示す」その墓場だからである、と。

つまり、ヤマトの古墳の大きさは、天皇家の権力の大きさに比例するのではなく、九州王朝に対する服属意識の現われに過ぎない、と言うのである。

この古田説を論破するのは、中々骨のおれることであるが、一応その反対論旨を以下に披露する。反対論説は、多数の東洋史・日本史学者等からの批判である。

「魏志」倭人伝の載る「三国志」は3世紀末の編纂だが、原本は現存せず、12世紀以後の刊本が残り、その中には確かに「邪馬台」ではなく、「邪馬壱」となっている。ところが、「後漢書」や「隋書」などには逆に、「邪馬壱」ではなく「邪馬台」となっていること、つまり、11世紀以前の「三国志」には、多分「邪馬壱」ではなく、邪馬台となっていたはずで、その証拠に、8世紀に編纂された「日本書紀」は、卑弥呼の国を「ヤマト」と読んで自国歴史に組み込むことができた、とされるのである、と。

また、九州王朝説では、王朝は相当長期間にわたって健在で、5世紀の「倭の五王」は九州王朝の王者とする考え方であり、「磐井の乱」では敗北したものの、その後も命脈を保ち、最終的滅亡は663年の「白村江の敗戦」のダメージだとする考え方で、4世紀後半から7世紀後半までの約300年間におよぶ朝鮮半島での軍事作戦の展開、新羅・高句麗・唐との戦いの主体は、すべて「九州王朝」ということにしている。

これらの論は直ちに消去できる性質のもので「九州王朝」論は成り立たないと反論するのが鷲崎氏等である。古田武彦氏の「九州王朝」論では、中国側と日本側の記録の食い違い問題から、「倭の五王」を九州王朝の王者群としている、しかし話はあべこべなのであると。

「日本書紀」の編者にとって、中国側の記録に表れる「倭の五王」が大和朝廷の天皇群と「合致しては困る」「一致してはまずい」のである。「日本書紀」の編者は、「倭の五王」に関する中国側記録を手元に置きながら、これとあまり一致しないように「日本書紀」を

編集したのである、と。なんだかよく分からない理屈だが、この反対論いかなものだろうか。

下に記紀の年譜と中国・韓国史書の年譜の二つを並列に並べてみた。右側の青字が中国・韓国史書によるものだが、この表で明らかな通り、五王の一人一人の活動年数は該当するであろう各天皇の活動年数と一致しない。例えば、中国史書の倭王「武」は記紀で言う雄略・清寧・顕宗・仁賢・武烈の五人の天皇の時代を一人で活躍している。これは何を意味するのであろうか。

また、青字に記す重要な外交交渉あるいは戦争が進んでいる時、記紀に記されている事柄はいかにもノー天気な国内のことが多い。二つの事が本当に日本で同時進行したのであろうか。皆さんも一度考えて頂きたい。

第10代天皇以降、白村江敗戦までの年譜（生存年ただし括弧つきは在位年）

右欄青字は中国史書等による年代

10 崇神 234-318

大田田根子に大物主神を祭らせる。疫病の流行が終焉する。

四道将軍を派遣し、戎夷の平定に乗り出す。武埴安彦の反乱が起きる

戸口を調査し、課役を課す。崇神天皇「御肇国天皇」と讃えられる。

11 垂仁 243-320

狭穗彦王の反乱が起きる。

倭姫命、天照大神の社を伊勢に立てる。 313 楽浪郡滅ぶ

殉死を禁止し、墓の周囲に埴輪を立てる 314 帯方郡滅ぶ

垂仁天皇、田道間守に命じ常世国に非時香菓を求めさせる。318

垂仁天皇が逝去する。翌年、田道間守、常世国より帰還、殉死する。

12 景行 268-337

景行天皇、熊襲を征伐するため九州を巡幸する。 330

日本武尊、蝦夷を征伐する。 335

日本武尊、東征の帰途、伊勢の能褒野で逝去する

13 成務 307-355

14 仲哀 310-364

仲哀天皇が筑紫で逝去する（52）。神功皇后、神託に従い新羅を征伐する。凱旋後、筑紫で応神天皇を生む。

この年を神功皇后の摂政元年とする。

「晋起居注」によれば、この年、倭の女王が朝貢するという。

15 応神 329-394

応神天皇が即位する。

諸国に海人と山守部を置く。

350 高句麗から新羅・百済分離独立

369 倭百済連合軍、新羅を攻め破る

371 百済高句麗を攻める

372 七支刀百済より倭へ

応神天皇、菟道稚郎子を皇太子に立て、大山守命に山川林野の管理を、大鷦鷯尊（仁徳天皇）に国政の補佐を委任する。

391 倭が新羅百済に進出、服属さす

393 倭新羅を攻める

応神天皇が逝去する

392-96 広開土王が百済破り近肖古は熊本へ

皇太子菟道稚郎子、兄 仁徳天皇と皇位を譲り合う。その間に大山守命の反乱が起きる。

1 6 仁徳 385-427

菟道稚郎子が自殺、仁徳天皇が即位する。難波高津宮を造る。

仁徳天皇、皇后磐之媛の留守中に八田皇女を宮中に召す。皇后、激怒して帰らず。

397 百済腆支王子を倭の人質へ

399 倭の攻撃を受ける新羅へ高句麗援軍

400 高句麗倭を破る

402 新羅末斯欣王子、倭の人質となる

404 倭新羅を攻める

407 倭新羅を攻める

410 筑紫王国、大善寺へ遷都

413 「讃」 貢ぐ 東晋

皇后磐之媛が死去する。

421 「讃」 安東将軍へ 宋

八田皇女を皇后に立てる。

425 「讃」 貢ぐ 宋

1 7 履中 400-432

履中^{りちゅう}天皇が磐余稚砂桜宮で即位する。

428 倭 貢ぐ 宋

1 8 反正 407-437

1 9 允恭 415-454

允恭^{いんぎょう}天皇が即位する。

430 倭国王貢ぐ 宋

438 「珍」 安東将軍へ 宋

443 「済」 安東将軍へ 宋

「讃」

「珍」

- 444 倭新羅を攻める
- 451 「済」 安東将軍 宋
- 皇太子木梨輕皇子と同母妹の輕大娘皇女との姦通が発覚する。
- 允恭^{いんぎょう}天皇が逝去する。木梨輕皇子の反乱が起きる。 「済」
- 2 0 安康 450-478
- 安康天皇が石上穴穗宮で即位する。
- 大草香皇子の乱が起きる。
- 462 「興」 安東将軍
- 安康天皇、眉輪王に殺害される。
- 2 1 雄略 427-489
- 雄略天皇、市辺押磐皇子を謀殺する。雄略天皇が泊瀬朝倉宮で即位する。
- 雄略天皇、吉野で狩猟、怒って御者を殺す。天下の人、「大惡の天皇」と 「興」
- 恐れる。
- 雄略天皇、葛城山で一事主神とである。雄略、「有徳の天皇」と
- 讃えられる。
- 478 「武」 安東大將軍 宋
- 479 「武」 鎮東大將軍 南齊
- 雄略天皇、葛城山で狩猟、舎人を殺そうとするが、皇后に諫められる。
- 雄略天皇が逝去。星川皇子の反乱が起きる。
- 2 2 清寧 (480-484)
- 清寧天皇が即位する。
- 播磨の縮見屯倉で仁賢天皇・顕宗天皇が発見される。
- 清寧天皇が逝去する。仁賢・顕宗兄弟、皇位を譲り合う。
- 2 3 顕宗 (485-487)
- 顕宗天皇が即位する。
- 顕宗天皇が逝去する。
- 2 4 仁賢 (488-498)
- 仁賢天皇が即位する。
- 497 倭新羅を攻める
- 仁賢天皇が逝去する。平群直鳥親子の乱。
- 2 5 武烈 (498-506)
- 征東将軍
- 500 倭 新羅を攻める
- 武烈天皇が逝去する。 502 武 征東将軍 梁
- 2 6 継体 (507-527)
- 応神天皇の五世孫、継体天皇が越前三国から迎えられ、河内で即位する。

- 2 7 安閑 (528-535) 528 磐井没
安閑天皇即位 528 532 金官加羅、新羅に降伏
- 2 8 宣化 (535-539)
宣化天皇即位 536
537 大伴狭手彦を任那に派遣
- 2 9 欽明 (539-571)
欽明天皇即位 539 562 新羅により任那滅亡。
- 3 0 敏達 (572-584)
崩御 584
- 3 1 用明 (聖徳太子の父) (585-587)
崩御 587 (物部・蘇我戦争、蘇我氏が勝利)
- 3 2 崇峻 (蘇我馬子の甥) (588-592) 589 文帝 (隋)、全国平定統一
蘇我馬子、崇峻天皇を殺害 592
- 3 3 推古 (聖徳太子の叔母) (592-628) 600 倭王、阿每多利思北狐、隋に国書奉呈
聖徳太子、憲法十七条を制定 604 冠位十二階制定
「日出ずる処の天子」小野妹子を隋に派遣。607 (第二回遣隋使)
聖徳太子死亡 622 618 隋滅ぶ、唐、建国
推古天皇崩御 628
- 3 4 舒明 (田村皇子)
田村皇子即位し舒明天皇となる。629
- 3 5 皇極 (37 斉明) 女帝
宝皇后即位し皇極天皇となる 642 飛鳥京建設願望強し
- 3 6 孝徳 (軽皇子)
中大兄皇子・中臣鎌足ら蘇我入鹿を暗殺。蘇我蝦夷自殺。皇極天皇の弟軽皇子即位し孝徳天皇となる。中大兄皇子 (のちの天智天皇) 皇太子となる。645
大化の改新 646 公地公民、天皇が直接民を支配する
- 3 7 斉明
孝徳天皇崩御し、皇極女帝重祚し斉明女帝となる 655
百済救援のため筑紫の天津に本宮を設営、朝倉の朝倉橘広庭宮を館とする。しかし斉明天皇崩御 (九州朝倉にて)。皇太子中大兄皇子による称制 661
663 白村江の戦い、大敗
- 3 8 天智 (中大兄皇子) 662-671
中大兄皇子即位天智天皇となる。大海人 (後の天武) 大皇子となる。668
668 高句麗滅亡
大友皇子を太政大臣に任ずる 671
天智天皇崩御、大海人皇子近江を出て吉野に退く。 671

大海人皇子、吉野を出て美濃国に入り挙兵。「壬申の乱」始まる。
3 9 弘文（大友皇子、追諡されて弘文天皇となる）壬申の乱で敗死

崩御 672

4 0 天武（大海人皇子）672-686

大海人皇子、天武天皇となる。

崩御 686

4 1 持統（天武天皇皇后）

天武天皇皇后 即位し持統天皇となる。 687-697

4 2 文武 697-707

4 3 元明 707-715 ++ 712 古事記選上

4 4 元正 715-724 ++ 720 日本書紀選上

4 5 聖部 724-749

「邪馬台国」論争はまだ終わっていない。九州なのか、大和なのか。筆者は九州説であり、それが東遷して大和朝廷の前身となった、とする立場である。古田氏ほかの「九州王朝」説の場合、邪馬台国は九州に留まり、東方から勃興した大和朝廷に滅ぼされるか、併合された、となる。

ここで敢えて「九州王朝説」に利することを付け加えておく。

中国の宋書は5世紀から6世紀初頭にかけて、讃・珍・済・興・武の五人の倭王が上述のとおり中国南朝に朝貢したことを記し、そして次の梁書倭伝には、これら倭王の居所は後漢代や三国時代と同様、邪馬台国であったとしている。したがって、5世紀～6世紀初頭の倭の五王の時代になっても、倭の首都は邪馬台国から遷ってはいなかったことになる。つまり、継続して九州にあったことになる。

ただし、邪馬台国がはじめから畿内に興ったのであれば、話はまったく別であるが。

2. 邪馬台国遷都後の九州（騎馬民族系人の渡来つづく）

九州邪馬台国連合の国々から精鋭が近畿へ移動したあと、残った王国の一つが北九州の覇権を握り、朝鮮・中国との外交交渉もある程度継続していたとするのが本稿の趣旨であるが、その中心となる都は甘木から大宰府に遷されたと見る。距離にしたらずかなものである。その場合、新しい王には誰がついたのであろう。これらの点については再度触れるとして、連合国を形成していたいくつかの小国の様子を見てみる。

4世紀末、甘木に作られた古墳の一つに「神蔵古墳」がある。それは全長41メートルの前方後円墳で、そこからは三角縁神獣鏡が一面、鉄剣が二本、出土している。彼は、邪

馬台国時代の小国を支配した首長の子孫であろう。この時代、他の武蔵国や相模国などではすでに少なくとも100メートルを超える古墳を残している。考えられることは、彼は筑紫一帯を治めていた筑紫氏の下で甘木・朝倉地区を支配していた者で、明らかに和人であろう。

ところが、九州には相変わらず韓国より移住してくる人々がいた。甘木の地も例外ではなかった。彼らの住んだあとと思われる場所には騎馬民族特有の遺物が多く出土している。

馬具が日本へ初めてもたらされたのは、4世紀末、伽耶と呼ばれた朝鮮半島南部から渡ってきた集団によってである。3世紀にあった弁韓（弁辰）の地域が、4世紀に伽耶になっていた。彼らが残した代表的遺跡に、福岡県甘木市「池の上墳墓群」がある（甘木中学の場所）。

4世紀末から5世紀にかけて、倭国の兵は幾度となく半島で戦闘を経験した。倭国の強みは水軍であった。一方、新羅・高句麗の戦力の中心は騎馬隊であり「三国志」「新羅本紀」の対倭線の内容をみても、そのことは歴然としている。そして苦杯をなめた倭国はなんとかして馬を手に入れ、戦術を身につけようとした。日本で出土する最も古い馬具の例は、4世紀後半から北九州にみられるが、それは朝鮮半島に出て行った将兵の多くが、この地域の出身だったからである。

応神天皇の頃、百済の昭古王＝近肖古王が馬を送ってきたことが日本書紀に記されているが、この頃から馬の導入が始まり、伽耶などから僅かずつ輸入して、ようやく5世紀に何とか安定した馬の増殖が可能になったという経緯であろう。

池の上墳墓群は、4世紀末に出現した。そして、そこには何世代にもわたって、同じ集団の手になる墓が設けられた。

そこからは、多量の陶質土器が出土している。それは、朝鮮半島の伽耶で作られたものである。5世紀に入ると、日本で伽耶式土器に習って須恵器が生産されるようになる。たとえば、直径8メートルの円墳、池の上5号墳からは、ジョッキ形土器が出土した。それは、とつてのついた珍しい形をしたものである。大型のコーヒカップを思わせる形状である。日本国内に類似品の少ないその土器と同形式のものが、韓国の昌寧・桂城のB地区古墳群から出土している。このことは、朝鮮半島南部で作られた土器が、池の上墳墓群に持ち込まれたことを物語っている。

さらに、多量の古式須恵器が池の上墳墓群から出土していることは、その集団は、日本に来てまもなく須恵器の生産を始めたことを意味している。

さらに、池の上墳墓群の馬具は、その首長が日常的に乗馬を行っていた有様を示している。たとえば、池の上6号墳には、鞍金具、銜（馬につける轡の馬の口に当てる部分）が副葬されていた。それは、被葬者が生前に用いたものであろう。

銜^{はみ}は、直径約4ミリの鉄棒を二本ねじり合わせて馬の口にかませたもので、その両側には手綱をつける環が作られていた。鞍の金具は、金銅張りの豪華なものであった。

池の上墳墓群を作った集団は、日本に乘馬と朝鮮風の陶質土器とをもたらしたのである。そのほかに、池の上6号墳から鍛冶工具や金製品も出土している。朝鮮半島からのこの頃の渡来者は、鍛冶に長じており、金の装飾品を好んだのである。

池の上墳墓群ができてまもない時期に、その周辺にいくつもの渡来人の集落が作られている。

そのことは、池の上墳墓群のある甘木・朝倉地区に、伽耶系の遺物を出す遺跡が多く見られる点からわかる。

そのようなものの一つに、甘木市の「古寺墳墓群」がある。それは、池の上墳墓群のある丘陵のすぐ北方の尾根に作られたものである。土壇墓10余基で形成された、池の上墳墓群よりはかなり勢力のおとる集団の墓地であった。古寺墳墓群の中の6号、9号、10号の三個の土壇から、陶質土器がでている。それは、池の上墳墓群から出土した最古の土器より少し新しいものとされる。また、6号土壇から、伽耶で流行したものと思われるジョッキ型の土器が出土していることが注目される。古寺墳墓群には、多量の鉄器が副葬されていた。それを残した集団は、古墳を築く力は持たなかったが、きわめて多くの進んだ道具を保有していたことになる。彼らは、伽耶から日本に鉄製品を持ち込んだのであろう。

伽耶から早い時期に渡来したと思われる集団が残した遺跡は、いまの甘木市の中心部を核とする約4キロ程度の範囲内に分布している。

たとえば、甘木市「柿原古墳群」からつぼなどの陶質土器が出土した。そこには少なくとも20基程度の小型の古墳と、80基あまりの墳丘を持たない石室墓（棺の周りに石の囲いを作った墓）があるとされる。この古墳群を残した集団は、前にあげた池の上墳墓群を作った集団よりはるかに有力であったらしい。

このほかに、甘木市「上浦遺跡」から陶質土器が出土し、杷木町で見つかった石棺からもジョッキ型陶質土器が出ている。

甘木市の「小田茶臼山古墳」は、5世紀半ばの全長63メートルの前方後円墳である。その調査によって、多くの「騎馬民族」的遺物が発見されている。轡一点と轡の破片数点があった。さらに、そこにあった環鈴も、馬に飾るものだと考えられている。

これまであげた考古資料によって、伽耶から日本にきた「騎馬民族」系の文化を持つ人々が、甘木・朝倉地区に住み着いた有様がわかる。

宇佐地区について述べよう。

豊後の宇佐、豊前の京都地区も「騎馬民族」の文化をすばやく受け入れている。福岡県行橋市に「石並古墳」がある。全長68メートルの前方後円墳である。まわりに24基に円墳がある。古代の京都地区を押さえた首長の墓が集中して築かれていたのである。円墳の集まりは、稲堂古墳群と名づけられ、番号がつけられているが、その中に、5世紀半ばもしくは末に作られた稲堂21号墳がある。そこからきわめて多数の鉄製品が発見された。

冑1点、短甲2点をはじめとして刀剣類、鉄の矢じりなどの武器や馬具が多く見られた。倭が朝鮮半島に盛んに出兵していた頃に円墳は築かれている。他の8号、15号、20号も同じような武器を多数出土しているが、これらは筑紫国王と共に朝鮮半島に出兵して活躍した豪族のものであろう。

宇佐地区では、宇佐市の「葛原古墳」に「騎馬民族」的性格が強く見られる。この古墳は、5世紀なかばのものである。鏡が数面、勾玉、短甲などが出土、その短甲は馬上で着用する形式のものである。宇佐の首長が朝鮮半島に出兵して、騎馬で戦っていたのであろう。

このように5世紀半ばには、北九州に須恵器が広まり、馬具や馬上の戦闘に用いる武器も各地に見られるようになる。

カマドつき住居跡

4世紀以前、つまり弥生時代から古墳時代前期にかけての日本の住居は、家の中心部に小さな炉を設けるものであった。それは、穴を掘っただけの簡単なもので、そこで煮炊きや室内の暖房が行われた。

ところが、その時期の朝鮮半島では、中国の風習にならった、住居の中に土製の作り付けカマドをもつ形をとっていた。

福岡県志摩町「御床松原遺跡」は、日本での炉の住居からカマドつき住居への変化を物語る貴重な事例である。

御床松原に、もともからいた住民が渡来人に滅ぼされたり追い払われたりしたのではあるまい。陶質土器とカマド作りの技術をもつ人々がやってきた時、御床松原の住民はすすんで朝鮮半島の文化を取り入れたのであろう。

カマドつき住居は、早い時期に北九州に広がっている。福岡県吉井町の「塚堂遺跡」からは、5世紀半ばごろのカマドつき住居と陶質土器が出土している。また、それよりやや時代の下った時期、福岡県夜須町「柿ノ上遺跡」で出土した60件の住居址の大半に、カマドが付設されていた。

このように5世紀半ばから末にかけ、西日本の各地にカマドつき住居が広がる。それはカマド作りの技術を持った人々の移動なしには広がらない。このことは、渡来系の人々が九州から近畿地方まで入り込んでいった様子を示すもので、北部九州では、多くの渡来人

の流入が続いていたことを示している。

農家である私の生家にも当然カマドがあった。焚き口が二つあって、子供の頃、その前で藁束や薪をくべさせられていた。当時、たしかクドと呼んでいたように思うが、その上にハガマと呼ばれる釜を載せご飯を炊いていた。カマドが電気釜の時代になったのは左程昔のことではない。

4世紀末に筑紫に持ち込まれた「騎馬民族」系の文化は、九州東部から次第に中四国へ、そして5世紀中ごろには近畿へ広がり、5世紀末には大和朝廷とそれに従う首長たちが「騎馬民族」系文化を全面的に受け入れる。そして、5世紀末に大量の移住者を近畿地方に受け入れることによって、朝廷での「騎馬民族」系文化の地位が一举に高まることになる。

福岡県行橋市の「稲堂古墳群」から、冑、短甲はじめ刀剣類、鉄の鏃など武器や馬具が多く出土したことは上述したが、こういった遺物は筑紫王と共に朝鮮経営に活躍した豪族の姿を示すものであろう。

3. 三国（三韓）時代の半島情勢と日本

先ず、三韓の歴代大王を述べる。日本の神話と違い、年代もしっかりしている。

高句麗

①東明王(BC37) ②瑠璃王(BC19-AD18) ③大武神王(18-44) ④閔中王(44-48) ⑤慕本王(48-53) ⑥太祖大王(53-148) ⑦次大王(146-165) ⑧新(165-179) ⑨故国川(179-197) ⑩山上(197-227) ⑪東川(227-248) ⑫中川(248-270) ⑬西川(270-292) ⑭烽上(292-300) ⑮美川(300-331) ⑯故国原(331-371) ⑰小獸林(371-384) ⑱故国壤(384-392) ⑲広開土王(392-413) ⑳長寿王(413-491)・・・

高句麗の始祖は東明王、百済の始祖は温祚王だが、その始祖伝によると、扶余・高句麗・百済はつながった同祖同根のようである。

高句麗が成長して中央集権国家としての姿を整えるようになったのは、太祖大王(53-148)の時からである。このとき、高句麗は東海岸に進出し、物資が豊富で土地が肥沃な沃土と東濊を征服し、遼東地方へも進出を図った。そして高氏が王位を独占的に世襲する王権が成立した。

4世紀のはじめ美川王のときには、南は大同江流域を確保した後、遼東地域に勢力を拡大していった。しかし、その後高句麗は、西北の前燕と南の百済の侵略を受けて国家的な危機を迎えた。

このような状況を克服するために小獸林王(371-384)は仏教を受け入れて、王室の権威を

高め、大学を設立して人材を養成し、国家組織を整備し中央集権体制を強化していった。

三国の中で高句麗が最大の強国として登場するのは、広開土王(392-413)と 長寿王(413-491)の時である。長寿王(413-491)が父王の業績を後世に伝える為に建てた広開土王碑はつとに有名である。

百濟

①温祚王(BC18-AD28) ②多婁王(28-77) ③己婁王(77-128) ④蓋婁(128-166) ⑤肖古王(166-214) ⑥仇首(214-234) ⑦沙伴(234) ⑧古爾(234-286) ⑨貴稽(286-298) ⑩汾西(298-304) ⑪比流(304-344) ⑫契(344-346) ⑬近肖古王(346-375) ⑭近仇首(375-384) ⑮枕流(384-385) ⑯辰斯(385-392) ⑰阿莘(392-405) ⑱腆支王(405-420) ⑲久爾辛王(420-427) ⑳毗有王(427-455) 蓋鹵王(455-475) 文周王(475-477) 昆支 武寧王(501-523) 聖王(523-554)

百濟が中国勢力の干渉と侵略をさけながら国の基礎を固めたのは、古爾王(234-286)のときであった。百濟が全盛期を迎えたのは4世紀後半の近肖古王(346-375)のときである。百濟は、372年に東晋に朝貢し、百濟王余句(近肖古王)は鎮東將軍・領樂浪太守に任じられている。386年にも東晋に朝貢し、百濟王世子余暉(近仇首王)が使持節・都督諸軍事・鎮東將軍・百濟王に任ぜられている。高句麗は百濟の近肖古王親子の攻撃により平壤城の戦いで故国原王が戦死している。

しかし、百濟は高句麗に比べて小国で、高句麗の長寿王が427年に王都を集安から南下して平城に移して以来、百濟に対する圧力はいよいよ強まる。そして475年には漢山城に対する高句麗の攻撃を受けて蓋鹵王(455-475)が殺され、漢山城はその占領下に入ることになる。そして王都は錦江流域の熊津(公州)に移される。後の時代、公州の地からははずかずの武寧王(501-523)の遺物が出土している。

聖王(日本では聖明王として知られる)は日本に初めて仏教を伝えたことでなじみ深い。538年には王都をさらに熊津から扶余に移した。この地は百濟が滅びる660年まで120年間にわたる王都として百濟文化の精粹を集めた。

新羅

①赫居世(BC57-AD4) ②南解王(4-24) ③儒理(24-57) ④脱解(57-80) ⑤婆娑(80-112) ⑥祗摩(112-134) ⑦逸聖(134-154) ⑧阿達羅(154-184) ⑨伐休(184-196) ⑩奈解(196-230) ⑪助貴(230-247) ⑫沾解(247-261) ⑬味鄒(261-284) ⑭儒礼(284-297) ⑮基臨(298-310) ⑯許解(310-356) ⑰奈勿(356-402) ⑱実聖(402-417) ⑲訥祗(417-458) 智証王(500-514) 法興王(514-540) 真興王(540-576)

新羅が中央集権国家の姿を整えたのは、4世紀後半の奈勿王(356-402)のときであった。このとき新羅は辰韓諸国を征服して洛東江流域にまで領土を拡張し、高句麗広開土王の助けで倭軍を撃退した。従来は朴・昔・金の三姓が交代で王位を占めていたが、このときから金氏が王位を継承するようになった。

王号を使い始めたのは智証王(500-514)の時からである。新羅は高句麗や百済に比べて、長い間土着的な色彩を濃厚にのこしていた国であった。つづいて法興王(514-540)のときの520年に律令を頒布し、535年に仏教を公認している。

さらに真興王(540-576)の時代になると、国勢は飛躍的な発展を遂げて、もっとも遅れていた新羅が高句麗や百済にとって驚異的なライバルとして登場する。

鉄の国、伽耶

洛東江下流域の弁韓の地で伽耶諸国が興きた。三国が中央集権国家として国家組織の整備に力を傾けている頃、伽耶は連盟王国をつくっていた。初期には金海の金官伽耶が、後期には高霊の大伽耶が連盟を主導した。

金官伽耶は、洛東江下流域の海上活動に有利な立地条件と、鉄の生産および交易を基礎として成長した。特に、金海地方は質のよい鉄に恵まれ、各種の鉄製武器を作ったり、鉄の小さな塊をつくって貨幣のような交換手段に利用したりした。

伽耶は洛東江の東側に進出する試みが新羅によってたびたび挫折させられると、百済と密接な関係を維持しながら新羅を牽制した。高句麗が倭軍と戦う新羅を助けるため5万の軍隊を送って伽耶地域を攻撃すると、金官伽耶は大打撃を受け、盟主としての地位は動揺した。

その後、洛東江西方の伽耶諸国は高霊の大伽耶を中心に再び連盟隊を作った。高霊の大伽耶は質のよい鉄をたくさん生産し、よい農業立地条件を整えていた。しかも大伽耶は戦争の被害を受けなかったため、5世紀以後金官伽耶にかわって伽耶連盟の中心勢力として浮かび上がるようになった。

6世紀になると伽耶連盟は百済と新羅に挟まれて両国の圧力を受け、勢力は後退した。これは漢江流域を失った百済がその代替地を伽耶地域に求め、新羅もこれに刺激されて伽耶地域に積極的に介入したからである。

伽耶連盟は両国の侵略によって領土を次第に縮小する中で、新羅の法興王(514-540)の時には金官伽耶が(532)、真興王(540-576)の時には、大伽耶が滅亡した(562)。

しかし、豊富な資源を土台に発展していた伽耶文化は、後に新羅文化に影響を与えた。また、伽耶一部勢力が日本に進出し、日本の古代文化発展に貢献した。

4. 日本書紀などに見る日韓関係（謎の4世紀）

3 世紀末の倭寇

「新羅本紀」によると、3 世紀末に「倭兵」の来襲が頻発し、捕虜を連れ去ったり、城を攻め落としたりを起こしていたことが記されているが、3 世紀末は、「魏志倭人伝」でも、卑弥呼の魏および楽浪への遣使（238－247）の後に、卑弥呼が死に、13才の女王壱与が立った、というところで記事は終わり、その後、邪馬台国は歴史の暗い波の中に消失してしまう頃である。

この頃は半島側だけでなく、九州側でも世の中が相当に乱れていたらしいが、半島側では、その乱れが楽浪郡の滅亡（313年）へとつながっていくのである。

294年、⑭新羅王儒礼(284-297) は、倭兵の跋扈に我慢ならず、百済と図って「一時浮海、入撃其国」、海を渡ってその本拠地を直接たたこうとまで思い立つが、側近から「吾人不習水戦」、自軍は水戦に不慣れで危険すぎる、と諫められて思いとどまっている。

そして次の王⑮基臨(298-310)の代になると、隣国伊西国と倭国の挟み撃ちを回避しようということであろう「与倭国交誼」と、倭国と友好を通ずる政策に転じている。さらに次の⑯許解(310-356)王になると、倭国王が王子の妻を求婚してきたのに応じて大臣格の阿滄急利の娘を送っている（312年）

仲哀天皇と新羅

「仲哀天皇は九州の熊襲の反乱を平定のため西下し、穴門（長門）の豊浦に狩の皇居を設けたが、朝鮮半島の新羅国の塵輪が熊襲を扇動して豊浦宮に攻め寄せた。皇軍は大いに奮戦するが、黒雲に乗って海を渡ってきた塵輪が空から射かけたので苦戦し、宮門を護る阿部高麿、弟助麿も相次いで討ち死にした。天皇は大いに憤って自ら弓矢をとって塵輪を見事射落とした。そこで賊軍は色を失って退散した」。さらに、つづいて、

イトテは下関の彦島に仲哀天皇を迎え、三種の神器と同じ組み合わせの曲玉と鏡と剣を天皇に捧げる。王権を象徴する宝器を献上したのだから、これは降伏である。仲哀天皇は豊浦宮の防衛に成功し、今度は下関を陥落させたのである。恭順を誓ったイトテを天皇はほめる。

「天皇、即ち五十迹手（いとて）を美めたまいて、「伊蘇志」と曰ふ。故、時人、五十迹手が本土を号けて、伊蘇国（糸島郡伊都国）と曰ふ」

古墳築造開始と楽浪郡の滅亡時期

高句麗には紀元前から古墳が存在していたが、半島南部で古墳が作られ始めるのは、日本とほとんど変わらない3 世紀末～4 世紀初ぐらいのことである。それは313年に楽浪

郡が高句麗によって滅ぼされたことと無関係ではないらしい。

この時、高句麗は捕虜として住民を連れ去るが、戦火を逃れて南へと避難していった人々も少なくなかったようである。そうした人々のうち技術者は特に歓迎され、各国で迎え入れられた。こうして古墳築造の波及、土木工事の波及がすすみ、日本では崇神天皇の頃の320年ごろと思われる末年の池造り、330年と伝える碧骨堤の築造につながったと見られている。

百済と倭の初めての交流（364年）

日本書紀神功46年の条に、倭の使者が伽耶諸国の案内を得て百済に至り、百済の肖古王（近肖古王の誤り）に手厚いもてなしを受けた、としている。接触の理由が47年の条に記されており、新羅攻撃のための共同作戦を取るためであったようである。戦いには百済の将「木羅斤資」が参加した。

この頃の倭の侵入は前後三回あったようで、第一回が⑩新羅王許解(310-356)の頃の346年、第二回が、⑪奈勿王(356-402)の頃の364年、そして第三回が同じ奈勿王のころの393年であった。倭と百済の協力による新羅侵攻である。なお、この頃の倭の侵攻が、日本書紀にいう神功皇后の「三韓征伐」の元ネタであろう。

ここに登場する「木羅斤資」は油断のならない外交手腕に長けた将軍であったようであるが、彼と敵方の新羅女との間にできた息子「木満致」について日本書紀は「其の父の功を以って、任那の専なり」とし、全体として敵意に満ちた表現で書かれている。この父子の戦闘で、結局一番馬鹿を見たのは倭で、十年以上かけて準備した遠征軍を、何の成果もなく引き上げさせ、自国の将軍を自殺に追い込み、それまで多少あったであろう伽倻への影響力も、百済（木羅斤資）にとって代わられてしまう。得をしたのは新羅と百済で、新羅は戦わずして倭の遠征軍を壊滅させ、敵の将軍を自殺に追い込み、百済もたいした苦労もなく伽倻への影響力を増大できた、のである。

高句麗の興隆と倭

高句麗の広開土王は18歳で王位につき、大規模な征服を開始した。まず、契丹族の一派である稗麗を征服し、遼東を占領した。その後、念願であった百済征伐を開始している。百済に対しては即位初めから積極的な攻勢を取った。壬辰年（392年）には石硯城（黄海北道開豊郡北面青石洞）を含めた10城を奪取し、閔彌城を陥落させた。甲午年（394年）には水谷城（黄海北道新溪郡）を築き、乙未年（395年）には現在の礼成江まで侵攻して来た百済軍を撃破して、百済との接境に7城を築いて防備を強化した。

この高句麗の勢いをみて、新羅王奈勿は高句麗に王子実聖を人質として送り同盟を結んでいる。一方、百済の内部には⑫近仇首(375-384)の死後、跡目争いがあった。近仇首王の

死後に即位した枕流王がわずか一年で死に、その子の阿莘はまだ年が若く、叔父の辰斯が385年に即位した。この時、王子阿莘を推す一派と対立を生んでいた。392年、高句麗に攻められて辰斯王率いる百済軍が敗北すると、その敗戦責任の追及という形で、王子阿莘派が巻き返しに出て、辰斯王が殺されて阿莘王が誕生する。

高句麗はその後の丙申年（396年）には漢江を越えて進撃して百済の58城700村を攻略し、百済王に多数の生口や織物を献上させ、永く隷属することを誓わせた。

しかし丁酉年（397年）、百済の阿莘王が王子「腆支」（直支ともいう）を人質として倭に送って通好し（後述の高良大社の項参照）、新羅は相変わらず倭の侵攻を受けていた。このため庚子年（400年）に高句麗は歩騎五万を派遣し新羅を救援した。

このとき新羅の王都は倭軍に占領されていたが、高句麗軍が迫ると倭軍は退き、任那・加羅まで追撃した。ところが402年に奈勿王が死んでしまうと、先に高句麗に人質として送られていた実聖が高句麗の後押しもあり即位した。

実聖が「親高句麗派」の王だとすると、高句麗への従属的地位を好まない「新羅独立党」の人々が前王奈勿王の遺児を担ごうとした。それに倭が介入を試みる。この倭の介入を防ぐ為に実聖の打った手は、極めて巧妙と言うべきか、狡猾と言うべきか、冷徹なものであった。402年、奈勿王の王子「未斯欣」を、人質として倭国に送って通交しようとしたのである。

未斯欣が倭国に人質として送られてきたことは、とくに彼が倭国から逃げ帰るときの劇的な物語として、形こそ少しことなるが「日本書紀」「三国史記」双方に詳しく記載されており、史実であろう。勿論、こんな人質では倭国が新羅を信じないのは当然で、405年には倭は新羅を攻めている。さらに407年にも倭人が辺境を侵している。我慢ならない実聖王は、対馬の倭人の根拠地を攻撃して禍根をたうと思いつくが、謀臣にその危険を諫められて思いとどまっている。このように抗争の絶えない敵国にあった新羅の王子未斯欣の立場は、まったく針の筵に座った心地であったであろう。未斯欣はじつに16年間もの間、倭国に暮らして、ようやく警備の目をかすめて帰国に成功している。

実聖王は、奈勿王が自分を高句麗に人質として送ったことを恨み、奈勿王の王子の一人ト好を412年に高句麗に人質として送るとともに、別の王子訥祗を殺そうとする。これは失敗し逆に討たれ、⑱訥祗王(417-458)が誕生している。そして訥祗王の頃から新羅の国内体制は次第に整い、後年の朝鮮半島の強国、新羅の基礎が固まっていくのである。

再度高句麗の話に戻るが、結局百済の⑰阿莘王(392-405)が降伏し、高句麗は臨津江以北の地域を完全に占領し、新羅も服従させた。嵐のように吹きまくった広開土王の対外膨張政策は、同王が413年に没し、子の長寿王が即位することから風向きが変わる。在位80年の長期政権であるが、若い頃にも領土拡張事業に手を出した形跡がない。そして同王の事蹟として記されているのは、毎年のように、北中国の覇者北魏に対する朝貢、すなわち外交使節団派遣のことである。

応神天皇治世の後期（410年ごろ）から仁徳期の日本では、上述高句麗平和の時期に呼応するように充実・安定期に入っている。

そして高句麗は中国のみならず、ユーラシア大陸諸国、内陸アジアとも外交関係を開始した。これが日本への西域文化伝来の足がかりとなった。

高句麗はその末期になると、日本とも外交関係を結んだ。日本の使節が高句麗を訪問することがあったが、彼らの目的は発展した高句麗文化を学ぶことであった。595年に日本に渡ってきた高句麗の仏僧恵慈は、聖徳太子の顧問として活躍した。610年に渡日した仏僧曇徴^{たむちん}は、儒教の五経を伝授した。また、法隆寺金堂壁画も彼が描いたものと伝えられている。日本の装飾古墳の中央アジア的彩色法は高句麗古墳壁画にある彩色法と同じであり、高句麗から伝えられたものという。

九州では高句麗人の墓と見られる装飾古墳が多く発見されている。全国で800基余りあるとされるが、その大部分は九州、それも福岡県から熊本県にかけてにある。年代は4世紀から6世紀にかけてのもので、装飾古墳と呼ばれる高句麗系壁画古墳である。それなりに高貴な人達の墓なのであろう。

5. 筑紫神社と筑紫王国

筑紫君の祖は筑紫神社域を中心とした領域、現在の筑紫野市周辺に本拠を持つ豪族で、弥生時代中期、倭が百余国に分国していた頃の一国の首長であったことはほぼ間違いないと見られている。

先に叙福が有明海沿岸に上陸し、その子孫が筑紫平野を中心に拡散し、さらにその一派は出雲まで出張ったことを述べたが、筑紫野のこのあたりにはその一団の一つ羽田氏（秦氏）が集落を構えたところと見ている。当然のことながら、羽田氏は出雲との関係も深かったのである。

筑紫神社は現在の筑紫野市原田町にあるが、日本最古の法令書「延喜式神名帳」に、「名神大」の神社と記録されている社格の高い神社である。社伝によれば祭神は主神に白日別命・五十猛命、相殿に宝満大神（玉依姫命）・田村大神（坂上田村麿）の霊を祀るとある。



筑紫神社

祭神白日別神を主神として祀る所以は、「記」のイザナギ命とイザナミ命の条「島々の生

成」に、「子淡道の穂の狭別の島を生みたまいき、次に伊豫・・次に筑紫の島を生みたまいき、この島も身一つにして面四つあり、面ごとに名あり、かれ筑紫の国を白日別といい、豊の国を豊日別といい・・」とあることによる。つまり九州全体を示す「筑紫」がまずあり、その中の北部九州の一国として筑紫（白日別）があるという構図になっている。なお、豊日別神の豊国は現在の行橋市（古代の美夜古）に都を置いた。豊日別神を祀る「闇無浜神社」が中津市の福沢諭吉の旧宅の近く龍王町にある。由来は古く豊日別神の他に志賀の白水郎（あま）の祖、安曇の磯良を合祀しており、末社に住吉、厳島、金比羅、船曳、恵比寿の名が見えることから海神である。明らかに安曇氏や海部氏が奉斎していた神社である。宇佐八幡へも近く、山国川を遡り耶馬溪を越えて九州内陸部へ向かう分岐点でもあり、海路・陸路の要衝でもあったと思われる。

「白日別」は筑紫神の本号で、筑紫の国の名を神の名とした神である。この神は筑紫の国、つまり筑前と筑後の国の守り神として、国魂（国つ神といわれる地方神）として祀られてきた。筑紫神社は筑紫の国魂を祭る神社ということになる。

それでは次に、チクシ、の語源を見てみよう、「筑後国風土記」に筑紫の語源を語る説話がある。

筑後の国はもと筑前の国と合わせて一つの国であった。昔この二つの国の国境の山に険しくて狭い坂道があった。馬に乗ってその坂を往来する人は、馬の鞍下の敷物が摩りつぶされるほど大変難儀をしたので、ムラ人はこの坂を「^{したくらつ}鞍轡尽くしの坂」（ツクシの坂）といっていた。

また国境に亀猛神（アラブル神）がいて、往来する人に神の言いつけに従わない者がいると無礼なやつだといって苦しめるので、多くの人がなくなるといって苦しい往来だった。それでムラ人から「人の命尽くしの神」といって恐れられた。死んだ人を葬るため山の木は伐られ棺桶が作られたので、山の木がなくなり「ツクシの国」とも言った。時に筑紫君・肥君らはこれを心配し、筑紫君らの祖^{みかよりひめ}甕依姫を祭神として祀らせたところ、その後往来する人は神の災いを受けなくなった。そこでアラブル神を「つくしの神」といって恐れていたが、後には「筑紫の神」というようになった、と。

筑紫神社はこの亀猛神（アラブル神）を祀った社だったのであろう。ただし祭神には白日別神またの名を五十猛神を当てた。

祭神としてあがめられている五十猛は、「紀」の一書（第四）に、スサノオが高天原から追放され天降り之時、御子五十猛命を従えて新羅の国に降り、ソシモリに行ったが、スサノオはソシモリが居心地の悪いところだといって、埴土で船を作り出雲国簸の川上に降った。すなわち出雲はスサノオ命降臨の地で出雲の国づくりが始まるのである。五十猛命は樹々の種を持って父に従い新羅に降ったが、その国では種をまかなかつた。また父に従い新羅を出ることになるが出雲に留まらず筑紫に降り、持ってきた樹々の種を筑紫から大八

州の国中にまいたので、大八州国中の山々は青々とした樹々に覆われたという。

五十猛命（出雲系）を筑紫神社の神として祀ることになった謂われは、この神が樹々の種を筑紫からまき始めたという「紀」の説話によるといわれている。国の緑化運動の開祖とでも言うべき神で、その緑化を筑紫から始めた功績を讃えて神としたのであろう。

ここで注目したいのは、筑紫の神が出雲系であることである。さらに、先述「宇佐八幡」の項で述べたように、意外にもこの神社の祭祀者は新羅出身の「辛嶋氏」ということになっている。『辛嶋勝姓系図』によれば、辛嶋氏はスサノオを祖とし、その子五十猛命を奉載し、新羅を経由し筑紫国筑紫神社に五十猛命を祀り、次に豊前の香春岳で新羅の神を祀り、さらに宇佐郡に入って宇佐大社の祭祀者になったという。

6世紀初頭、筑・豊・肥を傘下に治め北九州政権を誇る石人文化圏の王者筑紫君磐井も、筑紫神社の祭祀者であった。

筑紫神社から200メートルも離れていない旧国道沿いに筆者の親戚がある。「柿原衣料雑貨店」として長年地元にお世話になってきたが、銀行員になった息子の代に店は閉めてしまった。さらに国道の付け替えで立ち退きにかかり、20メートルほど移動することになり補償を元手に家を新築したので、古き良き時代の名残は全部なくなり、今では余り興味のない地になってしまった。学生時代の思い出が一杯詰まっていたところなのに。裏山の「五郎山古墳」（装飾古墳）は毎日の犬の散歩でよく中をのぞいたものである。この装飾古墳は、5世紀ごろの騎馬民族系渡来人のものと思われ、あるいは筑紫神社の祭祀を行っていた「辛嶋氏」に関連する人かもしれない。

ここは筑前である。筑紫の国は奈良時代からか、筑前国と筑後国に分割される。最初の線引きがどのように行われたのかは不明であるが、大体佐賀県の基山と福岡県甘木の秋月の地を結ぶ線が境界線とされる。その以北が筑前、南が筑後で筑後川は当然筑後の国にある。私の生家は筑後川の川沿いである。

6. 北部九州内での中心地の移動と王朝の筑後遷都説（古田史学）

5世紀前半の丸隈山古墳（全長85メートル）などを最後に、糸島・福岡平野の古墳が急激に小型化する。これと対比的に、筑後平野の東部（浮羽郡）や中部（久留米市・八女郡）および宗像郡に大型古墳が出現する。この現象は多少の時期差はあるが、九州全体に見られることで、宮崎県西都市西都原古墳群・同児湯郡高鍋町持田古墳群、佐賀平野西部地域の台頭が目覚しい。

さらに、西日本全体として捉えると、奈良県大和において、北部の佐紀盾列古墳群と南部の古墳群が4世紀末から5世紀前半に、大阪府の河内と和泉において、超大型墳の古市古墳群と百舌鳥古墳群が5世紀前半に、岡山県備中において、総社古墳群の造山古墳と作山古墳が5世紀前半と後半に台頭し、逆に初期大和政権誕生に関係ある纏向古墳群に続く、天理市南部から桜井市の天皇陵を含む大型古墳群が5世紀初頭に衰退している。大和東南部古墳の衰退は、初期ヤマト政権における政権の交代ではなく、より大きな平野である河内への進出であり、北部九州勢力の筑後平野への進出的移転と同じような意味があるであろう。

ここで、九州東南部宮崎、西南部熊本への騎馬民族の進出に触れる。

古代から、大きな平野である宮崎平野は、農業生産力が高かったと思われ、宮崎県には、総計923基の古墳があり、うち、前方後円墳125基、円墳725基、横穴墓68基がある古墳王国である。

これらは北九州に上陸した扶余族の次の世代あたりが、より高い農業生産力を求めて、九州東海岸沿いに南下し、大きな平野である宮崎の平野に到達したものであろう。

こうして、4世紀代に多くの古墳が作られやがて5世紀前半になると、西都原古墳群内に盟主墓と目される男狭穂塚（全長153メートル）女狭穂塚（全長174メートル）が造営される。これらの墓は扶余族の人々の墓であろう。田口氏が指摘される扶余王扶羅に率いられた数千名の扶余族の子孫たちであろう。

記紀に「日向から神武東征が行われた」とあるが、卑弥呼や台与の時代にはまだ、日向には左程の大きな勢力はなく、仮に記紀に示すような人の移動が日向からあったとしても、それは後の時代仁徳天皇の太子である履中天皇の時代くらいのことであろう。

熊本県玉名郡に有名な「江田船山古墳」がある。5世紀後半から6世紀初頭の造営と見られている（全長62メートル）。熊本の古墳は高句麗系のものではなく、どちらかというところと百濟系とされる。これら古墳の分布は、熊本県中央沿岸部であり、一部福岡県に及び、点的には岡山県千足古墳につながっている。

このように北部九州から筑後・日向・熊本などへ、勢力の中心地が北から南へ分散したことを示している。この傾向をとらえて、大宰府にあった当時の王都も南の筑後へ遷都したとするのが、古田史学である。

筑後遷都説は「九州王朝説」に示されている極めて示唆に富む説であるので、ここではそれをそっくりそのまま紹介する。（古田史学会報44号）

九州王朝とは、志賀島の金印を貰った委奴（いど）国王、邪馬壹国（やまいち）の女王卑弥呼、中国南朝に朝貢した倭の五王、筑紫の君磐井、日出ずる処の天子として国書を隋に出した阿每多利思北孤（あめたりしほこ）、白村江戦で敗れ唐の捕虜となった筑紫の君薩

夜麻と、弥生時代から7世紀末まで連綿と続いた日本列島を代表する倭王の王朝である。

その主たる都は太宰府だ。太宰府とは本来、中国の天子の直轄行政府のことだが、その太宰府が九州島（福岡県太宰府市）にあることこそ、この九州島に天子が居た証拠でもある。また、太宰府都府楼跡には「紫宸殿」「大裏（内裏）」など、天子の居所を意味する字地名が現存する。

ところが4世紀から5世紀にかけて、九州王朝（倭国）は高句麗、新羅と交戦状態に入り、糸島・博多湾岸まで戦火は広がった。こうした異国からの攻撃の伝承が北部九州の神社縁起などにも頻出するが、この時期、九州王朝はより安全な筑後地方へ遷宮したようである。筑後川を天然の大濠としたのだ。装飾壁画古墳が筑後川以南の水縄連山や阿蘇外輪山に現れるのも、この筑後遷宮の時期に一致しているようである。また、三潞の大善寺には「天皇屋敷」という屋敷があったことが『太宰管内志』に紹介されているし、九州王朝の末裔とされる稲員家系図（高良玉垂命の子孫）には、「○○天皇」「○○天子」といった名称が見える。さらに、久留米市山川町には高良玉垂命の九人の子供が「九躰皇子」という尊称で祀られている。これらは、九州王朝筑後遷宮説の傍証ともいえる史料である。



御塚・権現塚古墳

万葉集にも次の歌が見え、三潞に都が置かれたことを示しているようである。

「おおきみは 神にしませば 水鳥のすだく水沼を皇都となしつ」

『万葉集』巻十九 四二六一

作者不明

大善寺にある「御塚・権現塚古墳」の写真を掲載したが、三潞にはこのほかに大正元年に破壊された「銚子塚古墳」もあったという。100メートルを超す前方後円墳で御塚・権現塚とともに九州王朝の王墓であろうとされている。

以上は、九州王朝説論者の一人古賀達也氏の記述である。筑後遷都のアイディアはなかなかのものと思う。本稿もその説を採用することにするが、全面的にこの九州王朝説に傾斜するつもりはない。特に気がかりな点は、卑弥呼の邪馬台国が九州王朝として白村江敗戦まで存続し、その王朝が日本を代表していたとする点である。

筆者は、邪馬台国は台与の時代に東遷し、その後を筑紫王国が邪馬台国の九州での覇権を引き継ぎ、磐井の敗北まであったとする考え方である。さらに、その筑紫王国が古田史学のいうように日本を代表するものであったかどうかは意見保留のままである。

7. 筑紫王国最後の磐井王朝

「九州王朝」ではなく「筑紫王国」については、それを記録した史料が存在する。筑後風土記である。

筑後風土記自体は他の多くの風土記同様散逸してしまったために、現存はしていない。しかし、筑紫の磐井について記述した部分が「釈日本紀」に引用されており、その部分は今でも読むことができる。



石人

引用文には、筑紫君磐井の墳墓に関する記述がある。この墳墓には石人と石盾が並べられ、東北の隅にある衙頭という区画には、「解部」と「儉人」の石人、石猪、石馬、石の殿、石の倉と、石で作られた造形物があることがわかる。福岡県八女市の岩戸山古墳にはこの記述通りの区域が存在し、ここから石人・石盾・石馬が出土している。この記述によって、筑紫の磐井の墳墓は岩戸山古墳に比定することができた。皇族以外での被葬者の確定は、飛鳥朝以前では筑紫の磐井唯一人である。

「筑後国風土記」逸文の岩戸山古墳に関する記述は次の通りである。

「筑紫君磐井の墓墳あり。高さ七丈、周り六十丈なり。墓田は、南北各六十丈、東西各三十丈なり。石人、石盾各六十枚、交陣なり行を成して四面に周匝^{めぐ}れり。東北の角に当たりて一つの別区あり。号けて衙頭^{がとう}と曰ふ（衙頭は政所なり）。その中に一の石人あり。縦容に

地を立てり。号けて^{ときべ}解部と曰ふ。前に一人あり、裸形にして地に伏せり。号けて^{ぬすびと}偷人と曰ふ（生けりしとき、猪を偷みき。仍りて罪を決められむとす）。側に石猪頭あり。臈物あり。」

要するに、磐井が生きて政治を行っていた時の組織が集中していた場所の様子を示しているのだといえる。^{ときべ}解部というのは、「風土記」が出来た頃概念では中央の役所の治部省で裁判を司っていた役人のことである。ここで示された^{ときべ}解部とその前の^{ぬすびと}偷人と猪は、^{ぬすびと}偷人が猪を盗んできたために裁判にかけられている様子を示している。注目すべきは^{ときべ}解部の存在である。これは現地で裁判組織を持っていたことを示している。したがって、その前提として筑紫君磐井が支配している範囲で共通に適用される法律があり、それを担当する役人をおいていたことを示している。

それにこの近くには甲をきた石人も多くあるので、筑紫君磐井は、武官群、裁判に当たる役人を含む文官群を従え、軍事・行政制度を整えていたことがわかる。

また、その石人石馬が破損している由来について、「磐井の乱」のなかで言及している。書紀では磐井は斬殺されたとしているのに対し、筑後風土記逸文では豊前国上膳(不詳)へ逃亡し、よその土地で死亡したと記述している。それに激怒して兵士が石人石馬を破損したのために、この地で重病人が多く発生したという話が紹介されている。

ここで語られる磐井は、あたかも義経伝説の如き判官びいきの筋の流れとなっている。また、磐井に関わる造形物の破損によって、呪いまたは祟りの物語が出来ていることも面白い。おそらく後世の人は、磐井の物語に呪術という要素を見出していたのかもしれない。

磐井遺跡のほか、八女には「八女」の名の起こりとなった八女津媛神社がある。

岩屋権現ともいう。祭神は八女津媛で、創建は719年とある。祭神名は、景行天皇が熊襲征伐のため九州に下られたとき初めて出てくる。「日本書紀」に、景行天皇18年7月7日に八女県にいたり、藤山（久留米市）を越えて南の粟岬（大牟田市）を望まれて「美しい山々が重なり、連なって、とてもすばらしい。あの地に神はおられるのか」と、お尋ねになった。傍にいた水沼県主大海が「女神が居られます。名を八女津媛といい、常に山中におられます」と申しあげた。媛の名によって「八女国」の国名が起ったとされている。

磐井君、すなわち磐井王は筑紫国の王であった。磐井が王であったのは西暦500～520年ごろとされており、それ以前に筑紫国そして筑紫王が存在したのか、確たる史料はないが、いろいろな状況史料的なものは存在する。

磐井王とその皇太子葛子が存在していたことは確定しており、それぞれに即応する古墳および磐井に先立つもう一人の首長の墳墓とみられるものが考古学者によって解明されて

いるので、少なくとも三代が認められている。そして武官群も文官群も従え、一定の裁判制度も整えていたことが判るが、それらの役人を通じて人民支配をしていたと言うことであれば、磐井はすでに王権の統治機構を構えていたといえる。

制度の整備は簡単に出来ることではない。磐井が筑紫王になる以前、最初の筑紫王国は大宰府に中国の西安の都を模して作られたはずである。その建設は、単に建設技術の模倣だけで出来るものではない。当然、中国の幅広い文化の導入、人の導入が事前に行われたであろう。秦王国挙げての大事業であつたに違いない。

次に、王権の支配領域はどこまでか、ということであるが、東の大和朝廷が岡湊と宗像神社のあたりまでは渡航の手がかりのため早くから押さえていたかも知れないが、少なくとも那津（博多）やその西の怡土郡の港や、さらに西方の肥前国の松浦津（のちの唐津）は大和朝廷からはまったくの手付かずであつたはずで、筑紫王国は、領域の北辺は少なくとも怡土郡の港まで支配下においていたはずである。

一方西方は、有明海に港を持っていた。このことはある史料が傍証となる。雄略天皇紀十年条によると、大和朝廷から中国に派遣された使いが、帰ってくるとき漂流して筑紫のこのあたりへ上陸したところ、持ってきた呉が献上した鵝二羽を地元の水間君（水沼君）か嶺県主泥麻呂かの犬にくわれてしまったという話がある。つまり、筑紫王国の領域の西側は有明海あたりにも及んでいたことである。

東はどこかというと、それは宇佐八幡の周辺である。

現在の宇佐八幡は誉田別尊（応神天皇）・比売神・大帯姫命（神功皇后）を



祀るが、元来は御許山の巨石信仰や農耕神、それに渡来の八幡文化が加わり、さらに神職の宇佐・大神・辛島三氏の信仰が混合したものとされる。ところが、「紀」では、日神（天照大神）とスサノオ神との誓約で生まれた市杵嶋姫・甕津姫・田霧姫の三神を道主貴という人が祀らせた。その道主貴は「海北道の中」一韓半島への海の北の道と呼ばれていた海路の途中一に在すとされるが、この人を祀ったのが筑紫の水沼君らであつたとしている。筑紫の水沼君と宇佐との間には、こうゆう関係もあつたのである。

筑紫国と宇佐地方の関係はさらに国造本紀にも、「豊前の上毛郡も磐井の配下であつた」と記録されていることがある。

では、南はどこまでかということ、それは火（肥後）との接点である。

火（肥後）国は、太刀の銘文で有名な江田船山古墳がその北限と見られており、南は八代郡の野津古墳群の諸前後円墳を中心とした地域と見られており、筑紫君の勢力は火国の北

限の北、菊池川流域の手前（北）—おそらく矢部川流域—までであったと見られている。

筑紫王権の存在を裏付ける証拠として、この地域が他と違った独自の文化・信仰をもっていたことがある。後述する高良山の玉垂命信仰の特徴、また、考古学的には独特の石人・石馬の存在もあり、もう一つの大きな特色は装飾古墳の存在である。これらは、関東、あるいは近畿の、時代が下る高松塚などの壁画とはまったく異なったものである。どう違うかといえば「大陸的」なのである。韓からの渡来でなく、中国の文化の影響が強いということである。

以上の条件を勘案すれば、この筑紫の地は、少なくとも五世紀後半にはすでに国家的条件を整えていた。他の地域、南山背・河内・紀ノ川下流域の大和王権や吉備、出雲、丹波（丹後）の諸王国と同じような条件を備えた一つの地域王国であったといえるであろう。

九州「加唐島」で誕生の百済武寧王

この頃の日本と朝鮮の関係を示す具体話として「武寧王の加唐島誕生譚」がある。百済の武寧王は501・523年の人であるが（参考までに磐井が没したのは528年という）、以下にその誕生譚を引用する（JR九州ブログ 九州物知り情報 2002年6月号）

2001年の暮れ、サッカーのワールドカップを共催する日韓両国に一つの衝撃が走った。天皇陛下の「ゆかり」発言である。誕生日を前に、W杯共催国である韓国への思いを聞かれた陛下は、こう答えられたのだ。

「私自身としては、桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であると、続日本紀に記されていることに韓国とのゆかりを感じています」と。

皇室と古代朝鮮との結びつきを論じる学説は以前からあったが、天皇自らが、その血縁関係に言及されたのは初めてのことであった。この言葉をめぐっては、日本よりもむしろ韓国内が騒然となった。

金大中大統領は「歴史に対する正しい認識を示された」と、天皇発言を高く評価し、テレビ局は特番を組んでこれを紹介した。歴史教科書問題や首相の靖国神社参拝問題など、歴史認識をめぐっては、日ごろ日本に厳しい韓国のマスコミも、こぞって好意的な反応を示した。

そんな両国の関心が高まるなか、九州の一つの島が、日韓の歴史学者や古代史ファン、マスコミの注目を集めている。それは佐賀県鎮西町、東松浦半島の沖合約3.5キロに浮かぶ「加唐島」である。

周囲14.6キロ、人口240人余りの小さな島だが、古くから朝鮮半島との交通の要衝として知られる。

今から約1,500年前、この海の道で、古代朝鮮を代表する一人の王が生まれた。中興の祖といわれる、百濟二十五代王・武寧王（ムリョンワン）である。

九州の小島に生まれた朝鮮の王。この不思議な、武寧王生誕伝承は、8世紀に編纂された『日本書紀』にも載っている。

雄略4年の条に、(461年)「百濟の加須利君（蓋鹵王）が弟の軍君昆伎王を倭国に人質として献上する際、一婦人を与えて、途中で子が生まれれば送り返せと命じた。一行が筑紫の各羅嶋（かからのしま・加唐島）まで来たところ、一児が生まれたので嶋君と名付けて百濟に送り返した。これが武寧王である」としている。また、即位については武烈天皇紀4年条に「百濟の末多王（東城王）が暴虐であったので、百濟の国人は王を殺し、嶋王を立てて武寧王とした」としている。

この各羅嶋が、現在の加唐島であることは想像に難くないが、嶋君と呼ばれた王は一体誰なのか。実は、古代朝鮮の史書『三国史記』『三国遺事』は、武寧王の実名を表す諱を「斯摩（斯麻）」と記している。

この斯摩が嶋君で、加唐島で生まれたのは武寧王と考えられる。だが、あいにく、どちらの史料にも王が日本で生まれたという話はない。

また、没年齢から推定される生誕年の違いや異なる系譜、さらに『日本書紀』の上代の記述の不明さなども手伝い、長い間、武寧王の加唐島生誕説は伝説の域を超えなかった。

ところが2年ほど前、「武寧王の出世地は加唐島」とする説が、韓国の史学雑誌に掲載された。国内に物議をかもすのを承知で、論文の発表に踏み切ったのは、韓国・慶北大学校の文 鉉名誉教授である。

当時、文教授の論文は国内の研究者の間からも反発が上がったという。自国の王が日本で生まれたという説は、韓国の人々に強い違和感を与えたのだ。そこには、一衣帯水の地にありながら容易には埋まらない、両国の深い亀裂が横たわっている。それでも「学者として、真実を明らかにしたかった」と文教授は述べる。

王稜が証明する武寧王生誕伝説

昭和46年（1971年）、文教授が論文を発表する30年ほど前、韓国の忠清南道公州市の宋山里古墳群で、新しい王陵が見つかった。

それが、加唐島に生まれた武寧王の陵であった。この王陵の発見は二重の意味で関係者を驚かせた。

その一つは盗掘を免れたため、（レンガ）を敷き詰めた美しい墓室や豊かな副葬品が残されていたこと。もう一つは、墳墓自らが墓主を明らかにしたことである。玄室につながる道に置かれた墓誌石がそれで、これは土地の神から土地を買い取った契約書「買地券」とされている。

誌石には「斯麻王」の文字とともに、在位二十三年（523年）に、62歳で崩御したことが刻まれている。その数字から逆算すると、武寧王の生誕は461年。これは『日本書紀』の記述と同じである。

買地券には次のように刻まれていた。

「寧東大將軍 百濟 斯麻王 年六十二歳 癸卯年 五月丙戌七日壬辰に崩ず（中略）
錢一萬文 右一件 乙巳年（525）八月一二日 寧東大將軍斯麻王 以前件錢 訴土・
王土・伯土・父母・上下衆官二千石 買申地為墓 故 立券為明 不從律令」

これで少なくとも、この時代の『日本書紀』の記事は正確であったことが証明されたのだ。文教授はこの買地券を手掛かりに十年前から本格的な研究に着手。加唐島を現地調査した上で、武寧王の誕生は間違いないとしたのである。

この考証を受けて、今年一月、鎮西町で武寧王にまつわる国際シンポジウムが開かれた。日韓の研究者はいくつかの疑問を残しながらも、文教授が説く加唐島出生説を支持した。

シンポジウムのパネリストの一人、九州大学名誉教授の西谷正氏は「買地券が見つかったことで、王の名前や亡くなった時の年齢、生誕年などが裏付けられた。加唐島についても、韓半島から対馬、壱岐と島伝いに海を往来した当時の状況を考えれば、まさしく倭国と韓半島の架け橋の一つ。物的証拠はなくとも、状況証拠から十分考えられる」と語る。

西谷教授によれば、6世紀から7世紀、武寧王のころの韓半島はいわゆる三国時代。西の百済と北の高句麗が対立し、百済には、中国の南朝と倭国（日本）が、高句麗には中国の北朝と新羅が味方について、戦闘を繰り返す時代だった。倭国にとって、当時の百済は先進国。最新の文化も先端の技術も、多くは百済を経由して日本に入った。また、韓半島の東南部にあった加耶は、鉄資源の一大産地であった。このころ、原料の鉄と一緒に技術者集団が少なからず日本に移り住んだとされる。

そういった百済の貴族や加耶の渡来人の中には、政権の中枢にまでのぼる者も少なくなかった。ゆかり発言に登場する桓武天皇の生母も、そんな渡来人の一人であったという。

それだけではない。逆に倭国から百済の宮廷に入り、出世した倭人もいる。つまりこのころ、韓国と日本の間には活発な交流があり、官から民まで、玄界灘の島々を結ぶ海の道を自在に行き来していたのだ。

8. 磐井筑紫王国軍と近畿継体王国軍の戦い

奈良盆地に近畿圏部族連合による大和政権（三輪王朝）が建国され、日本列島は歴史的王朝の黎明期を迎えることになる。しかし、その政権の権力構図はまだ近畿圏を出るまでには至っていなかった。4世紀末三輪王朝は河内政権に倒され応神王朝となる。

この王朝時代になり、ようやく部族連合の原始国家の域から脱皮し、汎日本列島政治を

目指す古代国家の建設がすすみ、海外政策も積極的で、その勢いは他の多くの地域に影響を与えていくようになる。

一方、北部九州における筑紫君の勢力は際立ち、5世紀に入ったときには完全に筑紫を掌中に治め、豊・肥とは交友を密にしていた。5世紀中期には有明海沿岸諸国との連合もでき、北部九州政権としてようやく名実ともにその雄を誇れるに至っていたのである。このようにして、瀬戸内の吉備王国、裏日本の出雲王国、関東の上毛野王国、東海にも隠然たる勢力を保持した王国などがあり、大和政権と対峙する倭国の勢力構図がほぼ出来上がりつつあった。

5世紀後期になり大和王朝の内訌は皇族の女性問題に端を発し、それに王朝を支える貴族が加担し、血をみる大王の更迭が続き、住吉仲皇子・安康天皇・御馬皇子・市辺押磐王・星川皇子と相次いで殺され、応神天皇の子孫は五代の孫の武烈天皇が亡くなると跡継ぎが絶えてしまう。その武烈天皇であるが、歌垣の場で恋人影姫を平群鮪に奪われ女性不信となり、暴虐をほしいままにして崩じたので、皇子をもうけることはなかったのである。

そこで、大和朝廷では次の大王をきめなくてはならなくなり、大連の相伴金村はまず、丹波の桑田郡に仲哀天皇の五世の孫の倭彦王がいるというので迎えに赴いたが、王は迎えの兵に驚いて山谷に逃げ隠れしてしまったと「日本書記」は述べている。そこで今度は越前三国にいたオオド（男大迹）王を迎えに出向いた。時に57歳であったオオド王は天皇即位を引き受けるのにはきわめて慎重で、まず、山城の樟葉の宮で即位し、ついで筒木の宮に移り、さらに弟国の宮で年を重ねて、即位から20年後にやっと大和の磐余の玉穂の宮に入ったと記されている。それには、当時の大和では、オオド王の受け入れに反対な勢力が強く、別の人物を天皇として擁立していた可能性もあるという見解も示されている。

ともあれ、「書記」によると、継体天皇の即位は、507年であり、526年に大和の磐余に入り、531年に崩御し、二年の空位時代があつて、534年には尾張家のメコ媛が生んだ皇子の勾大兄が安閑天皇として即位し、536年にはその同母帝の檜隈の高田皇子が宣化天皇として即位したことになる。

そのころ、東アジア朝鮮半島南部三国の動静は流動的で、新羅と百済の確執は伽耶諸国の蚕食を伴いながら熾烈の様相を現していた。百済から救援要請のあった大和政権もようやく宮廷の内訌から立ち直り、男大迹王（継体）を迎え倭国の中央政権として、倭国統一への統制作業も最終段階にさしかかっていた。

継体大王は大和磐余の玉穂宮に入った翌年継体21年（527）6月、新羅の圧迫を受けている南伽耶・喙己吞^{トクコトシ}を回復するため（伽耶の洛東江沿いには、その上流に大伽耶国、その下流に喙己吞^{トクコトシ}があり、河口近くに金官国があった）、近江毛野臣を任那救援軍6万の大將として前進基地北九州へ派遣したのである。

しかし救援軍6万編成予定の大部は北部九州豪族と海人部隊の協力によってなされるも

ので、その中で筑紫君磐井は肥・豊を傘下に治め強大な勢力を有し、大和政権にとって吉備王国に優るとも劣らぬ地方勢力であり、筑紫君との外交折衝には周到な策を用いるべきであった。にもかかわらず、百済の要請を優先し、あまりに事を急ぎすぎたため、結果的に九州諸豪族に負担だけを押し付けることとなり、不満を募らせることとなった。これに対し磐井は、諸豪族の不満を聞き、また、新羅の懇請を承諾し、瀬戸内から玄海への長門の瀬戸を遮断するよう海人部隊に命じ、先ず恒例になっていた高句麗・百済・新羅・任那（伽耶国のこと）から大和伺候の貢船を欺き奪う行動に出たのである。

話は少し遡るが、北九州連合体の盟主の座に就いた磐井は早々に墳墓の築造にかかっていた。竣工後傘下部族へ、大和政権内に筑紫を討つ不穏な動きがあること、それに朝鮮三国にも不穏な動きがあり、これらに対処するため早急に戦備にかかるよう激を飛ばした。懸案であった港の整備、特に筑後川の津には力を入れた。当時は有明海は、現在の筑後川河口大川市（福岡県）・その対岸諸富町（佐賀県）付近まで入りこみ、その付近が河口港として朝鮮・中国への渡航有明海ルート筑後の津であった。

ここ筑後の津を有明海軍事基地とし、本拠に近い矢部川中流今の船小屋には、主として商船を配して筑後川河口基地に次ぐ要港としていた。玄界灘沿岸方面は博多湾に注ぐ多々良川河口地域を那の津として、玄界灘からの襲撃に備え軍事基地を兼ね朝鮮との通交に備えていたのである。

古代から、九州は軍事技術に長けていた。当時の九州には軍事的環境が整っていた。北野町は、奈良時代まで続く南九州の隼人征伐のための軍事拠点であったし、大城の邑もその名の通り大伴旅人が隼人征伐を行う際の軍事拠点にしていたと考えられている。どうしてこの場所が拠点になったかは、前にも触れたが、邪馬台国の高天原に近く、船に乗り筑後川を下り、有明海に出て球磨の国や隼人の薩摩の国に出発する大きな港だったからである。また、朝鮮半島へ渡る出発地でもあった。北野町に近い小郡市三国丘陵からも夥しい数の馬の墓が発掘されているが、これも当時磐井の時代に軍馬が活躍していたことを示すものの様である。

当時九州が目を向けていたのは大和朝廷だけではない。東シナ海のすぐ向こう側には百済、新羅といった朝鮮半島勢力があり、その後ろには中国大陆の力が見え隠れしている。既に九州は朝鮮半島との交流や争いを経験し、当時の九州は国家勢力がどのような位置関係で動いているのかといった国際的視野を養っていたのである。筑紫は航海技術に長け、磐井もまた朝鮮半島と交流を持っていた。また、この頃現在の釜山近郊に、日本府が存在していたという話もある。

近江毛野指揮下にある大和政権遠征軍の北九州上陸作戦が始まったが、待ち構えていた磐井軍の海陸からの攻撃はすさまじく完全に行く手を阻まれた。

大和の政庁では、大連大伴金村・大連物部麿鹿火・大臣許勢男人らが召集され、筑紫君磐井征討の軍議が開かれた。継体大王は声を大にして、

「先遣大將近江毛野軍は不首尾のまま停滞している。このまま親新羅政策を採る磐井の抵抗を放置しておいては、大和政権の威信にかかわる重大問題である。磐井は討たねばならぬ、その征討將軍たる適任者は誰か」と諮問した。大伴金村らは知略に富み豪勇の大連物部麿鹿火こそ大將にふさわしいと推挙した。継体大王は秋8月大連物部麿鹿火を磐井征討大將軍に任命し、「大將は兵士の命である、国家の存亡はこの戦いに懸かっている。死力を尽くして天誅を加えよ」と、極限の事態に臨んだ悲壮な檄を賜った。

大王は自ら斧鉞を操り大連に授けて「長門（下関）より東は朕が治めよう。筑紫より以西は大連が支配せよ」と、すでに大王は勝利宣言とも受け取れる占領地分割案を指示しており、また「賞罰は自ら行いわざわざ朝廷に奏上する必要はない」と麿鹿火に論功行賞の権限を与えていた。この宣旨によって明らかであるように、磐井の権力支配が現在の山口県にまで及んでいたことがわかる。磐井は完全に長門の瀬戸（関門海峡）を掌握していたのである。そこは高句麗・百済ほか瀬戸内へ出入りする船の航行を遮断した、磐井支配の海人部隊の海域行動の範囲であった。

継体大王は近江毛野派遣について、大和政権の驕りによる作戦の甘さを痛感していた。北九州海人部隊の強靱な勢力の打破に作戦を練った。北陸の知友海人部隊を持つ敦賀の海部直・丹波の海部直に連携を取り、また尾張から太平洋側の水軍を、磐井征討軍の海人部隊として編成したと言われる。いわば譜代大名へのお声掛けである。敦賀・丹波の水軍は日本海より、尾張の水軍は瀬戸内より長門の瀬戸で物部麿鹿火本体と合流し、玄界灘の磐井配下北九州海人部隊に攻撃を加えたのである。さすがの北九州海人部隊も日本海側と瀬戸内からの挟撃を受け、力つき那の津へ敗走を始めた。ついに玄界灘の制海権は大和政権軍の手に陥ちた。

物部麿鹿火の率いる磐井征討軍は緒戦の勝利に勢いづき、粕屋地区へ上陸を開始した。磐井の粕屋地区守備軍も海人部隊の敗退により後退を余儀なくされた。大和政権軍は磐井政権の八女本拠地へ向かって進撃を開始したのである。

尾張の太平洋海人部隊編成の情報を得ていた磐井は、粕屋基地方面と有明基地方面からの表裏作戦を予想し、それぞれの基地に守備兵を配置していたが全くその予想がはずれた。確かに磐井にとって緒戦の敗戦のダメージは大きかった。しかし磐井は陸戦には自信があり、地上作戦に強い本隊を直ちに北上させ筑紫野へ向かわせ、有明基地部隊に後方防衛を命じ陣頭に立った。筑紫野の陸戦は地理に明るい磐井軍に有利に展開し、一進一退雌雄を決するに至らず大和政権軍も疲労も重なりしばらく膠着状態が続いた。雨季を迎え磐井連合軍は南下を始め高良台で陣容を立て直した。大和政権軍は好機の到来を待つのであろうか動く気配を見せない。梅雨が空け九州の暑気に兵士の戦意喪失を恐れていた。稲の刈り入れが始まる頃になりようやく大和兵の南下が始まり各所で小競り合いが起きてきた。

冬を迎えようとする11月初頭には既に両軍戦闘状態に入っていた。筑後川の北部平野

御井（三井郡）あたりで激戦となり、丁度その頃ヤマト軍に強力な新手の的臣（いくはのおみ）の率いる武力集団の援軍が加わった。

的臣は巨勢氏系統で（巨勢氏は葛城氏一門であるから葛城族ということもできる。すなわち、武内宿禰の五男、許勢小柄宿禰が巨勢氏祖である）、太古は九州の佐賀県と浮羽県に拠点をおいたことがあるが、ヤマトへ進出した後大豪族に成長した。たびたび朝鮮に出兵しているうちに再び浮羽地方に定着していたのである。

今回の合戦に巨勢氏が急に顔を出す背景は、継体天皇の母親が巨勢氏出身の「振姫」（絶世の美女と言われた）であり、加えてヤマトからの征伐軍の中心人物には物部麁鹿火のほかに大臣許勢男（巨勢氏）が将軍の一人として参加しているといった按配であった。

磐井にとっては、近在の味方勢力と思っていた浮羽が敵方の拠点の一つだったのである。この脇腹からの新手軍団の参戦により大和政権軍は勢いを盛り返し激戦となった。「紀」に「旗鼓相望ミテ、埃塵相接」とあるように、敵味方の兵が入り乱れ黄塵万丈となる激戦が続いた。援軍的臣軍団の出現によってさしもの磐井連合軍も敗色が濃くなり、磐井は苦戦の末ここ高良山麓で戦死し戦いは終わった、というのが「紀」に見る終戦の状況である。なお、高良山麓に「岩井川」が残っている。水源は弘法山の下で、しばらく流れて下弓削川と名を変え、そして筑後川に合流する川である。

巨勢の名に由来した巨瀬川が、耳納連山の東端の浮羽地区山間から流れ出し、連山の北麓を西に流れ北野町で筑後川に合流している。全長24.8キロの中級河川である。

水源は鷹取山の東麓で、古代豪族星野氏の本貫地八女は目と鼻の先であるが、そこに妹川という集落があり、水辺の小さな祠の鳥居の額には、「高西（こせ）郷水天宮」と記してある。

「当地は古くは巨勢（こせ）氏の領地にて高西（こせ）と称されていた。時代とともに高西（こせ）から九十瀬（こせ）になり巨勢（こせ）となって（現在では巨瀬（こせ）という）川の名前のみが残った」と説明が施されている。

この川には、やたらとカップが出没したという。旧田主丸町（現久留米市）は、JRの駅からしてカップが占拠しているし、お隣の旧吉井町（現うきは市）でも町中にカップ（像）がうじゃうじゃ。九千坊が威張っていた川である。今に残る祠の水天宮は、かっぱを鎮めるため久留米の水天宮から招聘したものであろう。

戦いが終わりその年の暮れ磐井の息子・葛子の糟屋屯倉献上によって筑紫君家の存続は保証されたが、その後7世紀後期まで約1世紀半の筑紫君家およびその一族郎党の消息は全く不明である。ただ八女丘陵に残る大小300余基の古墳群が考古学によって、筑紫君磐井の祖ならびに後裔の墓であることが証明され、筑紫君一族によって築かれた権威ある九州王朝の足跡をしのぶに過ぎない。

この事件は多くの謎を秘めている。それは、①磐井は何を目的として大和の軍の新羅攻撃を妨害しようとしたのか？ ②磐井の子がわずかの賠償だけで許されたのはなぜか？ ③そもそも筑紫君の磐井は「国造であった」というが、その支配権はどれほどのものであったか？ ④この事件の三年後には継体天皇が亡くなるが、それは乱と関係があるのか？ ⑤「豊後国風土記」に、磐井は死を免れて「豊前の山に逃れた」とあるが、その記事は信用できるか？ ⑥磐井が滅ぼされた頃から、九州では装飾古墳が増えるが何かわけがあるのか？ などである。

「磐井の乱」については、一般的には大和王朝の全国支配の強硬な政策に対して「九州の土豪が民衆の不満を基盤に反抗を試みたものである」と考えられている。しかし、磐井のことを「国造」と記したのは一種の擬制であって、六世紀前半の時点でこれだけの古墳が造れる勢力のことであるから、「筑紫の国」は「豊の国」と並んでほとんど完全な独立国であったと思われる。

そして、そのどちらも海の彼方の朝鮮の国と密接な関係があり、おそらくは「豊の国は、任那すなわち加耶（金官加羅）国のいわば出張国であり、筑紫の国は新羅国の利益代表であった」と考えてみたい。一方、時の大和王朝は高句麗と新羅に挟まれて苦しんでいた百済を援助・強化しようとする立場にあったので、伽耶や新羅と親しい反独立国的な筑紫国や豊国の存在は許せなかったのであろう。

いずれにしても、「安閑紀」に筑紫から豊・火国にかけて穂波など八ヶ所の屯倉が設置されたとの記事が意味するように、大和王朝が九州を統制下に置くようになったのは、磐井の死後のことであって、それ以前には筑紫・豊・火（肥）の一带は中央の支配がほとんど及んでいなかったことがわかる。つまり、「崇神東遷」や「応神東征」の後の九州は、大和王朝の権威があまり届かない地域になっており、東国以上に独立性が強く、磐井が大和王朝の命令に屈服すべきではないと考えたとしても不思議ではないと解すべきなのであろう。

学生時代、粕屋郡を流れる多々良川でセルフオアに乗り、毎日毎日ボートの練習をしていた。この多々良の意味を考えるようになったのは、ずっと後のことであるが、物の本によると、この地は砂鉄の産地であつたらしい。多々良の由来は、古代の日本に製鉄技術を持ち込んだ北方騎馬民族系のタタール人で、その名が多々良として日本各地に残っているとのことで、間宮海峡は英文の世界地図ではタタール海峡となっている。

上述の磐井の領土の中に「粕屋郡の多々良」の地名が顔をだすが、筑紫君磐井も砂鉄の産地のこの多々良川周辺を握っていたのである。筑紫君の本拠地は現在の福岡県八女市付近である。古代で言う八女県であった。だが、筑紫君は博多湾の東側にあたる粕屋の地を所有し、そこを対外交渉の窓口として南朝鮮の新羅と深く結びついていた。また、この粕屋の地に流れる多々良川の周辺では、その名が示すように^{ふいご}鞴による製鉄が行われていたのである。

一年有余の戦いの結果、磐井が物部鹿火の率いる朝廷軍に破れると、磐井の子葛子に

贖罪として粕屋の地を献ずるよう命じ、直ちに「糟屋屯倉」として朝廷領に編入するのである。

9. 百済の滅亡（660）と斉明天皇の朝倉行幸

筑紫王国は西暦528年、磐井の敗北によってすでに崩壊し、それから100年以上経過した663年、大和王朝が国運をかけて戦った対新羅・唐との海戦の経緯をここに記載しておく。

朝鮮半島では、半島北方と大陸方面を領土とした高句麗、半島南東部の新羅、南西部の百済の三国がしのぎをけずっていたが、中国が五胡十六国の分裂の時代が終わり、隋による統一国家が成立すると、朝鮮半島への出兵を行うようになった。

隋は高句麗に対する三度の遠征に失敗し四度目の出兵を計画するが、中国国内に内乱が起こって自滅した。

次の唐も高句麗へ三度の出兵を行うが成功せず、新羅と結んで先に百済を滅亡させる作戦に出た。

660年、唐は水陸13万人の大軍を動員して山東半島から出発し、武烈王配下の新羅軍も5万人の兵で出陣した。新羅軍は黄山之原（現在の忠清南道論山郡）で勝利し、唐軍は白江（現在の錦江の中流扶余邑付近の別称）の伎伐浦（ぎばつぽ）で百済軍を破り、百済の王都の泗沘城（しひじょう・錦江下流域）を攻めた。

百済王はいったん旧都の熊津城（錦江中流域）にのがれたが、皇太子らとともに降伏し、660年、百済は滅亡した。



朝倉橋広庭宮跡記念碑

百済の滅亡後、664年まで、王族の福信・僧道琛（どうちん）・日本へおくられていた王子豊璋などが、高句麗や日本の大和朝廷の支援を受けて執拗に唐・新羅連合軍と戦っている。日本からは3万7千人余りの軍を送り、663年に、錦江河口で二日間にわたって唐・新羅の連合軍と戦ったが大敗した。古名をとって、「白村江（はくすきのえ）の戦い」と呼ばれる。

なお、このあと多くの百済人が日本へ亡命した。

日本側の対応（斉明天皇、朝倉に宮を移し司令塔とする）

660年7月、百済はついに新羅・唐の連合軍に亡ぼされ、同年10月、かつてから親交関係にあった日本へ使者を遣わし救済の要請をしてきた。斉明天皇と中大兄皇子らは、その要請を受け入れ、救済軍を派遣することを決定した。

翌661年1月6日、天皇は、中大兄皇子（後の天智天皇）、大海人皇子（後の天武天皇）、中臣鎌足らと共に難波の港から海路筑紫に向かい、1月14日四国の石湯行宮に到着し、3月25日那大津（博多）に至り、磐瀬宮（三宅）をへて5月に朝倉橘広庭宮に遷られた。しかし天皇は滞在75日（7月24日）御年68歳で病の為崩御された。

現在、朝倉橘広庭宮の所在は分かっていないが、地元の伝承では、「天子の森」付近だといわれており、本町恵蘇宿の恵蘇八幡宮の境内付近には、中大兄皇子が喪に服したといわれている「木の丸殿跡」や斉明天皇の御遺骸を仮安置したといわれる「御陵山」が存在する。

斉明天皇が橘広庭の宮でおなくなりになったあと、天智天皇は母君のご冥福を祈られ、筑紫の大宰府に観世音寺を建てられたのと同じ頃、朝倉に朝闇寺を建てられたのが筑紫の尼寺と呼ばれていた。

その昔は、朝の闇と書いて「ちようあん」とよばれていた。朝倉の地名のおこりは「朝闇し」がその起こりともつたえられている。いずれにしても文字の意味にはいろいろなことがらがふくまれているようである。



長安寺（朝闇寺）跡

寺跡からは基礎となる木組や敷石・礎石のほか、特に祝部土器の破片には、「大寺」「朝」などしるしの入った証拠の遺物が数多く発掘されている。

なお付近には鐘突・馬乗りなど寺に因んだ地名がある。また、部落の北には朝闇寺の境内にあったといわれる毘沙門堂が残っている。

長安寺跡のすぐ背面には「朝闇神社」があり、これも「ちょうあん神社」と読むようだが、祭神は「高皇産霊神」となっている。

斉明天皇については、この文を書くにあたり書物で初めて知ったが、大変な傑物だった模様で、要するに実力女帝だったようである。そうでなければ二度も天皇を務め（一度目は皇極天皇として、二度目が斉明天皇）、出来のよい中大兄皇子（後の天智天皇）とともに、飛鳥時代の創世期日本の骨格を作り上げることは出来なかったのではないか。

彼女が目標としたことは三つあったようである。一つは、和京つまり飛鳥に新しい都を建設すること、二つ目は、北の夷敵を抑えること、そして三つ目が、風雲急を告げつつあった朝鮮半島で助けを求めている百済を救うことだったという。

その間に身内から反逆者がでて（有間皇子）一時は危いときもあったようだが、氣力こもった人生を送られたようである。特に、百済救援のため、都を一時的とは言え、九州の朝倉に移されたことは、並みの天皇では出来ることではなかったであろう。

中大兄皇子についても触れておきます。母は宝皇女（のちの皇極天皇）。中大兄の皇后は異母兄・古人大兄皇子の娘・倭姫王。中臣鎌足らと謀り、クーデターを起こして蘇我入鹿を殺害し、叔父・孝徳天皇を即位させ、自身は皇太子となった（大化の改新の中心人物、乙巳の変）。そして大化という元号を制定し、様々な改革を行なった。また、有間皇子などのちのちクーデターを起こしそうな勢力を厩に嵌めて死刑とした。

百済が660年に唐・新羅に滅ぼされたため、朝廷に滞在していた百済王子・扶余豊璋を送り返し、百済復興を図った。百済救援を指揮するために筑紫に滞在したが、661年、斉明天皇が崩御した。その後、長い間皇位に即かず称制したが、663年、白村江の戦いで大敗を喫した後、667年、大津へ遷都してそこで即位した（668年）。白村江の戦以後は、国土防衛の政策の一環として水城や烽火・防人を設置した。又、冠位もそれまでの十九階から二十六階に制度改革などを行なっている。また、670年には我が国最古の全国的な戸籍「庚午年籍」を作成させている。

天智天皇は、第一皇子・大友皇子に皇位を継がせたかったと日本書紀は伝える。しかし、天智の死後に起きた壬申の乱において 弟・大海人皇子（天武天皇）が大友皇子に勝利して即位した。以降、天武系統の天皇が称徳天皇まで続く。称徳の死後、天智の孫・白壁王が光仁天皇として即位し、それ以降は天智系統となる。

大海人皇子から額田王を奪ったので、罪滅ぼしとして（自分の）娘4人を大海人皇子の元に妃として送り込んだと言われている。

第十二話 高良大社の歴史と役割

1. 筑後国一ノ宮高良大社

先述の「九州王朝説」を裏付ける有力な証拠が「高良山」の伝承であった。そのことについては最後の部分で触れるが、まず神社の由緒など紐解いてみる。



高良大社

高良大社の鎮座まします神山として知られる高良山、別名を高牟礼山と呼ぶ耳納山脈の最西端の一峰である。標高312メートル。さほど高くないが、筑前、筑後、肥前の三国にまたがる広大な筑後平野の真ん中に突き出し、眼下に筑紫次郎（筑後川）の悠々とした流れ。この大河や、大穀倉地帯を一望のもとに収めることの出来る展望の雄大さは他に類がなく、高良山が古代より宗教、政治、文化の中心、軍事、交通の要衝の地として、その歴史上に果たした役割は極めて大きかったのである。

高良大社は1600年ほどの歴史と由緒がある。1600年前といえば、5世紀初頭の西暦400年ごろの建立となる。ところが、祭神は社伝に藤大臣というところあり、また、武内宿禰というところもあるが、この高良大社は不思議なことに日本書紀にも古事記にも記録されていない。ということは、この高良の玉垂命という神様は11世紀に編纂された「日本紀略」の西暦795年の条に記録されるまで、まったく不明であったということになる。

日本書紀や古事記は、何故この神様を抹消してしまったのだろうか？ おそらく大和朝廷にとって、大和朝廷が祀る神様と異なる神様が存在することは、不都合なことが発生したか、あるいは発生する恐れがあったからであろう。詮索しだしたら限がないことではあるが、筆者の推測は、おそらく祀り始めたのが葛城族であったこと、その葛城族は本分中で繰り返し述べてきたようにヤマト王朝によって滅亡させられる運命であったことに関係あるのではと思う。その後、古事記、日本書紀などにも記録されるようになると、高良さんは筑後の歴史に必ず顔を出すことになる。

古く肥前風土記によれば、景行天皇は、西狩の際四隣を経営され、神功皇后も山門の田油津媛討伐にあたり、高良山麓旗崎に陣をされたと伝えられている。継体天皇の時、筑紫

君磐井はこの山に拠って、肥筑豊三州六国に威を振るったという。なお大化改新以後は、御井町の旧称府中が示すとおり、筑後国府が山下に置かれ、ほど近い国分町に国分僧尼寺が建立された。下って南北朝時代には、征西将軍宮懐良親王はこの山を本陣として北敵少弐氏を筑後川北に破り、後ここに征西府を移されたこともあった。さらに戦国時代に入ると、豊後の大友氏はしばしばこの地に陣して肥筑の諸豪を制圧し、豊臣秀吉も九州征伐の際、吉見ヶ岳に陣を構え大軍を指揮采配したものである。

これらの史実を考えると、高良山が九州の要であり、全九州の勢力を制する地であったことを推察することが出来る。

高良山には高良大社を始め遺跡も多い。高良山の西斜面を取り囲む大規模な列石が、古来高良の神が鎮座まします霊山の神籠石で、五つの峰を取り囲んでおり、西日本に数多い神籠石の中でも珍しい。神籠石は九州に多い。女山、杷木、雷山、帯隈山、おつぼ山、石城山などである。高良山はその代表的な神籠石として著名である。6世紀から7世紀の初め築城されたと言われる朝鮮式古代山城で昭和28年史跡指定を受けている。

神籠石の築造伝説を物語として紹介する。大昔、高良山にはたくさんの鬼ともが住んでいて、村人を散々に悩ましていた。高良大明神は何とかしてこの鬼どもをこの山から退散させたいと考えられた。あるとき、大明神は鬼どもを集め「お前たちが三人で抱きまわす石で、この山を一夜のうちにぐるりと囲んでしまったら、この山はお前たちに与えてよい。若し夜明けの一番鶏がなくまでに仕事が終わらないときはお前たちの命はもらうぞ」と大明神は鬼どもと約束された。

「何だたやすいことだ」と鬼どもは一生懸命になって英彦山から大石を高良山に投げ込み山の周囲に並べ、もう一息で工事が出来上がるばかりになった。大明神はこれを見てびっくり、里辺におりて、鶏の啼き声の上手なものを集め、一番鶏の啼きまねをさせられたところ、里辺の鶏どももいっせいに啼きだし夜明けをつけたのであった。

鬼どもは一番鶏の声に驚き投げた石をそのままに退散してしまった。英彦山の天狗も投げた石に力が抜けて途中で投下してしまった。大城の小学校近くのお宮の境内の石はそのときの投げ落としの石といわれ、また近くの塚島古墳の石が高良山神籠石「てんぐどり」の落とし石との昔話も残っている。

また高良山の神籠石が北面途中で僅かな距離を残して途中で切れているのも、一番鶏の声に驚き、作業の途中で退散した鬼どもの仕業の結果であるという昔話もある。

伝説はさておき、何のために、誰が神籠石山城を築いたのか、物の本によると、それは渡来人の要塞施設だったという。つまり、渡来人集団は敵襲を避けるため、最初は高地性集落を作って住んでいたが、次第に見晴らしの良い山の裾野で農耕に適した平地に住居を移し始める。そして、もし敵襲があればすぐに逃げ込める彼らの山に要塞を築くようになる。これが朝鮮式山城である。それら施設は次第に頑強に作られるようになる。城壁に相

当する部分に70センチ前後の四角い切石を積み重ね、帯状に数キロにわたり列石を並べるのである。これにより人が容易く城壁を登れないようにするためである。

次に、山城は一つ以上の溪谷を抱き、周囲の山頂から少し下った外側を城壁で囲む、これにより水不足の不便を失くし、内部に家屋と倉庫を作って多くの戦闘員を収容できるようにし、城内からは外部を監視できるが、外からは内情を伺えないようにする。また、水門を構築して梅雨時期、急に水かさが増しても壊れないよう工夫したのが朝鮮式山城である由。

高良さんには子供の頃、正月には兄に連れられ、あるいは友達と、よくお参りにいったものである。たかが300メートルほどの山だが、皆かけっこをしながら登るので結構きつかった思い出がある。旧御井、御原、山本郡（三井郡、小郡市、久留米市）などでは、生後1ヶ月以内に高良山に参拝し、帰路善導寺（浄土宗大本山）に詣で、これで初めて氏子と認められるという風習があったようだ。善導寺にも市が立ち、そこにも結構楽しい思い出が残っている。高良さんは最も参拝者が多いのは正月の初詣で、例大祭をしのぐ活況を呈する。

例大祭（高良山おくんち）は10月9－11日の3日間。末社水分神社、大学稲荷神社は、それぞれ「奥の院」「大学さん」と呼ばれ、本社とは別に厚い信仰を集めている。

当時は老木木の杉に覆われ、昼なお暗い山道であったが、バブル経済の頃か、老木が切り倒され、品のない山になってしまった。

高良山には、3つの霊地が存在する。

- 1つは、奥宮である水分神社。
- 2つは、表参道にある神籠石（馬蹄石）。
- 3つは、味水^{うましみず}御井神社のある朝妻の泉。

御井または三井（郡）の呼称の謂れについては諸説があるが、伝えは次の通り。

高良山には三つの井戸と泉があった。この三井と三泉が神聖なる神の水として自然発生的に“御井”の集落と呼ばれるようになったと。

- 三井
- ① 北井河（きていがわ）－高良大社本坂下に向いて左折れしたところ
 - ② 大井河（おおいご）－蓮台院飛雲閣の前と稲荷神社の道に面する
 - ③ 西井河（にしんご）－祇園山古墳の下付近

高良山には北谷と南谷の二つがあるが、北井河が北谷、残り二つは南谷にある。

- 三泉
- ① 朝妻の清水〔朝妻、味清水神社の場所〕
 - ② 磐井の清水（弘法山の下）
 - ③ 奥の院の清水（上記奥宮）

玉垂神とは誰

日本の古代歴史をつづった古事記、日本書紀に「玉垂神」についての記録があれば簡単だが、残念ながら一言の言及もない。ところが、神功皇后の新羅征伐のところにある説明を捕らえて、林羅山はその著「本朝神社考」に、「玉垂」の名の由来は、神功皇后が新羅に遠征して海上で戦ったとき、高良明神が潮の干満を操る呪力を持った玉を海中に投げ入れて戦勝をもたらしたことにちなむものとした。このように神功皇后の事業をサポートするそうした事績から、この神を武内宿禰とするのが通説になったようである。この神の神徳は武運長久で、試験や勝負事などには、祈願するといいい結果が期待できるといわれるようになった。

高良大社の祭神、玉垂神に関しては、武内宿禰説、藤大臣説、物部祖神説、中臣烏賊津臣説、新羅神説、綿津見神説、彦火々出見説、水沼祖神説、景行天皇説など多くの説があるが、明治までは、武内宿禰説が主流であった。武内宿禰説をとる井上正夫氏の論考を以下に引用するが、筆者はこれとは別の説をとる。それについては後述する。なお高良山に鎮座する神々は最上段の大社の三神のほか、以下のような神々がある。

大社祭神 ；玉垂神

右；八幡神

左；住吉神

境内摂社 高良御子社（九王子を祀る、既述）

境内末社 風浪社（綿津見神） 五所神社（九州五ヶ国の神々）

真根子神社（壱岐真根子神）日吉神社（大山津見神）

印 鑰 神社（高良神社の印を祭）

境外末社 愛宕神社、稲荷神社、天照御祖神社、琴平神社、巖島神社、

鏡山神社（物部公鏡山氏を祀る） 味 水 御井神社、水分社

境外縣社 豊比咩神社（日比生の豊比咩神社に同じ）

境外郷社 高樹神社（高御産霊＝高木神の別名、近年まで高牟礼神社と称した）

境外無格社 高良下社

2. 高良大社の祭神は？ 武内宿禰と高良山の関係、その時代背景（井上正夫氏）

4世紀から5世紀はじめの大和朝廷による全国統一の動きは、日本武尊と武内宿禰ぬきには語れない。

この時期、中国では晋が滅んで五胡十六国となり、朝鮮半島では新羅・百済と相次ぐ建

国の動乱時代であった。

ヤマトタケルは志半ば、30歳で病に倒れたが、武内宿禰は「景行・成務・仲哀に神功皇后をはさんで応神・仁徳と六代に仕え」「360才まで生きて終わりを知らず」という伝説を産んだ。彼の並外れの活躍と忠誠心の表れであった。

① 武内宿禰の誕生

武内宿禰は第8代孝元天皇の曾孫と伝えられている。「和歌山県安原にある武内宿禰誕生井には武内宿禰を祭神とする高羅神社があったが、寛政年間に安原八幡宮に合祀された」（御影史学研究会）とある。4世紀初頭に和歌山で生まれた。葛城氏の直系である。

葛城氏は、3世紀から5世紀にかけて奈良盆地南部から吉野川・紀ノ川流域に勢力を張った大豪族である。

その歴代統領の何人かが、綏靖から開化までの欠史八代と言われる天皇のモデルと見られている。葛城一族の墓は、九代開化を除いて、奈良盆地の南西部（葛城川流域）の馬見丘陵から御所・五条・吉野口に集中している。

また、葛城氏は佐賀県・鳥栖周辺の出身とも言われ、3世紀以前の葛城氏東遷のかすかな記憶が、神武東征神話の下敷きだったかもしれない。

武内宿禰は、13代成務天皇と同日の生まれと言うこともあって、二人は幼少期から仲がよく大変信頼し合っていたと伝えられる。ヤマトタケルと成務・武内の三人は、ほぼ同年であった。

② 3世紀後半の大和の情勢

大和の中小豪族達は葛城氏に圧迫されていたが、ニギハヤヒ尊の東征に協力して勢力を回復し、ニギハヤヒを頭領として担いだ。そのため葛城氏の勢力は弱まっていった。

それから30年程後の290年頃、その間に既にニギハヤヒ尊は亡くなっていたが、ミマキイリヒコ（崇神天皇）が大伴・久米の軍団を率いて東征してきた。ミマキ軍は、ニギハヤヒ配下の長髓彦（ながすねひこ）に生駒山麓で惨敗した。しかし、葛城氏の手引きと加勢によって、迂回して熊野川をさかのぼり吉野川へ出て再び攻勢にでた。

ニギハヤヒの子のウマシマジは戦うことの不利を悟り、父ニギハヤヒが降臨のときに持参した「十種の神宝」を奉って和睦し、ミマキの配下となった。

ミマキは、担がれて大和の大王となったが、土着の小豪族のゲリラ的反抗や疫病・凶作に悩まされた。そこで、崇神は、大和の盟主であった大物主神（ニギハヤヒ尊）を三輪山の神として祀り、天照大神を笠縫邑に遷して神の加護を祈った。

崇神時代には、叔父の武埴安彦（たけはにやすひこ）の謀反・出雲の振根の謀殺・四道將軍の派遣などが伝えられる。

次の垂仁時代には、皇后の狭穗姫（さほひめ）が兄の狭穗彦と謀反を策し、垂仁は危うく難を逃れ、二人を殺した。聖王と言われる垂仁は殉死を禁じて埴輪に替えたり、出雲の

勇士、野見宿禰や田道間守の説話などがつたえられている。田道間守というのは、新羅王子のことで、垂仁90年に非時（ときじく）の香果（かくのみ）を常世国から持ち帰ったが垂仁はすでにこの世になく、彼は後を追って殉死したので、垂仁稜のそばに葬られたと伝える。

③ 倭国統一の動き——4世紀

12代景行天皇の代になって、中国朝鮮の動きもあって、全国統一の気運が高まった。325年ごろからであろう。

まず、18才のヤマトタケルは父景行の命を受け、熊襲タケル兄弟を、次いで出雲タケルを騙まし討ちした。クマソには14・5才の乙女に化けて近づき刺殺した。出雲には仲良くなって二人で入浴し、遅れてきたところを斬ったと伝えられる。ヤマトタケルが西征した年の春、武内宿禰は東国から帰ってきて蝦夷の様子を景行に報告した。

タケルは、今度はエミシ討伐を命じられた。タケルは、途中伊勢神宮に参拝し、叔母のヤマトヒメから草薙剣と火打袋を授かり東国へ向かった。艱難辛苦の末、エミシを服従させて帰還の途中、伊吹山の神を成敗に行って、鈴鹿の野煩野（のぼの）で病死した。30才であったという。

日本書紀「景行記」はヤマトタケルの華々しい活躍で埋め尽くされ、景行の事跡は筑紫の巡覧と酒宴のほかはあまり伝えられていない。景行は、直情型のタケルを遠避へ、後継者は成務、その補佐は沈着冷静な武内宿禰を決めていたのかもしれない。景行はタケルに東征を命じると、入れ違いに武内を伴って征西した。

④ 武内宿禰の登場

景行の九州遠征は、景行12年から19年までの7年間とされ、330年ごろのことと思われる。

景行は高良山の本宮に日向襲武媛（ひむかのそのたけひめ）と日向髪長大田根媛（ひむかのかみながおおたねひめ）を迎え入れた。ソノタケ媛との間には国乳別皇子（くにちわけのみこと）と豊戸別皇子（とよとわけのみこと）が生まれた。オオタネ媛との間には日向襲津彦皇子（ひむかのそつひこのみこと）が生まれた。国乳別は高三瀦に御所を定め、筑紫の国造として数十世国を治めた。豊戸別は肥の国に封じられたと伝えられている（筑後誌・大日本史）

景行は九州遠征の後、皇居を纏向から志賀高穴穗（大津市）に遷した。景行のあと第四子が皇位を継いで13代成務天皇となった。

成務は高穴穗宮で武内を大臣に登用して内政に力を注いだ。武内は、国の境界の確定や国造・県主などの国の制度を確立して、景行の皇子たちを各地に配置して、大和朝廷の体制を固めた。

成務に男子が生まれなかったので、兄タケルの子が皇位を継ぎ仲哀天皇となった。仲哀は容顔端嚴・身長十尺の偉丈夫だった。筥飯宮（けひのみや、敦賀市）を建て、各地を転戦した。

熊襲が再び謀反したので、仲哀は筥飯にいた神功皇后と豊浦（下関市）で合流して橿日（香椎）へ移動した。このとき、遠賀郡芦屋の県主の祖熊鰐（わに）氏は周防へ出迎え神宝（満珠・干珠）を捧げた。

橿日宮では、皇后に「新羅を討て」との神託があったが、仲哀は神託に背いたため、武内のとりなしも空しく在位7年、52才で急死した。臨終の席に居たのは武内だけだった。仲哀は武内に皇后と応神の後事を託したのではなかろうか。仲哀の無念の死を悼んでか、彼を祀る香椎宮は官幣大社として、皇室から格別の処遇を受けて今日に至っている。崇神に始まり仲哀に終わる三輪政権は約70年で終わったと見られる。

⑤ 神功皇后と武内宿禰

神功皇后は息長宿禰（開化天皇の曾孫）の娘。母は葛城高額媛（たかぬかひめ）。息長氏の本貫は近江。神功と武内は遠縁で、二人の伝承は筑後に多い。

神功は、仲哀の喪を秘して小山田邑に斎宮を建て、神託に従って吉備鴨別に熊襲を討たせた。自らは夜須（松狭宮）に移り、古処山に巢食う羽白熊鷲（はじろくまわし）を服従させた。その後直ちに筑後川を渡って高良宮に入り、山門の土蜘蛛の田油津媛（たぶらつひめ）の成敗に向かった。このとき神功は朝妻に陣をとり錦の御旗を立てて、高良の神に祈願した。（旗崎という地名の由来）。[武内宿禰は言ってみれば神功皇后の家来である。その家来を神功が神として崇めるというのは矛盾する。つまり高良大社の祭神を武内宿禰とすることには疑問がでてくる。ただし、武内宿禰の先祖の葛城族が祀る祖神のことであれば、話は別である。](#)

山門攻めでも武内宿禰は大功を立てた。この戦いには神功とクニチ別も参戦している。「先年国宝となりし宮本玉垂神社の画像縁起中、高三瀦廟院に於いて皇子と武内宿禰大臣と軍議の図あり・・・」（久留米郷土史）とあるのはこの戦いのことであろう。

神功は田油津媛を成敗した後、橿日宮に戻って男装し、大三輪神社に刀や矛を奉って新羅征討の軍兵を集めた。また、高良の玉垂神に必勝を祈願して唐津湾の玉島から出港し、全軍対馬の和珥（わに）津に集結して新羅へと進軍した。

時は冬10月、古事記によれば、この時神功に憑いたのは住吉の大神と天照大神であったという。「大將軍には住吉大明神、副將軍には高良大明神也」と八幡愚童訓征韓記は伝えている。神々の加護と満珠・干珠の霊力により、2ヶ月で三韓を降して、12月に筑紫に凱旋、神功は宇美で無事去来紗別尊（いさざわけのみこと・応神のこと）を出産した。

翌年2月、豊浦宮で仲哀の葬儀を済ませ、武内に皇子を護らせて河内へ進み、腹違いの兄カゴ坂王と忍熊王（おしくま）の抵抗を退けた。この時武内は「皇子は死んだ」と偽り、軍船を喪船に仕立てて油断させ、寝屋川に上陸した。和珥臣の祖建振熊（たけふるくま）

は忍熊王を追い詰め、忍熊は宇治川に入水自殺した。

翌年、神功は藤井寺に仲哀を葬り、摂政3年3月、都を磐余（いわれ）に移して、3才の去来紗別を皇太子にたてた。和珥氏は仲哀以来の功績により三輪王朝の勢力圏の一部を譲り受けて、大和朝廷で重きを成す豪族と成った。

⑥ 応神天皇と武内宿禰

神功摂政13年の春2月、武内は13才の去来紗別（いさざわけ）を伴って、仲哀と神功の故地角鹿（つぬが・敦賀市）の筥比宮（けひのみや・気比神社、敦賀市）に参拝した。その時、気比大神の提案で「大神の菅田別（ほんだわけ）と応神の去来紗別の名前を交換した」。これ応神が正式に仲哀の後継者となった瞬間であった。二人が大和に戻ってくると、母の神功は大変喜んで、大殿で宴を催した。この宴は、新嘗祭の翌日群臣に賜る儀式で「豊楽（とよのあかり）」という大宴会の始まりと伝えられる。

応神・仁徳朝では半島から大勢の渡来があり、鉄製の武器や農具を初め技術革新が大幅に進んだ。特に、金属兵器の生産には武内が深くかかわった形跡があり、甲冑生産でも有名な明珍家は高良玉垂命を祀っていたといわれる。

さらに、武内の息子の葛城襲津彦は金属加工者を大勢半島から連れてきたと言われる。

⑦ その後の武内宿禰

応神9年4月、武内が筑紫の巡視に派遣されたとき、弟の甘美内宿禰（うましうちのすくね）が「兄に謀反の疑い有り」と讒言した。応神は刺客を送った。壺伎値（いちのあた）の祖真根子（まねこ）が身代わりになって死んだ。結局、冤罪は晴れたが、以後、武内は表舞台に出てこない。美濃の不破山、大和の葛城山、因幡の宇部山などに現れて居所がわからなくなった。甲州にも行ったとも言われている。

「因幡国風土記」に、「大臣武内宿禰御歳360歳にして当国に御下向あり、亀金に双の履を遺して御陰所知れず」「昔武内宿禰夷を平らげて宇部山に入りし後、終る所を知らずと言う」

いずれも金属鉾のある所である。最後に、思い出深い高良山中に入って波乱の生涯を終えたのであろうか。激動の4世紀末のことであった。

「高隆寺山中（高良山にある寺、後述）、毘沙門谷というところに古墳あり、何人の古墳と言う事詳ならず、里人の説には武内宿禰の墓なりという」（筑後誌略高良山事蹟考）

武内宿禰の墓と言われるものはほかにもある。

岐阜県不破郡垂井町表佐 勝神社裏の小さな墳墓

奈良県御所市大字室宮前 宮山古墳 全長238メートルの前方後円墳

3. 玉垂神とは？ 徐福集団が祀った秦の始皇帝（筆者）

最初この地に「神」を祀ったのは徐福集団の子孫で、紀元前100年ごろのことである。徐福集団には羽田（秦）・巨勢（許勢）・平群・紀（木）・葛城・久米氏などのグループがあったことは先述したが、その中の葛城氏である。

徐福の直接の子孫は羽田（秦）氏であり、彼らはすでに佐賀県の「金立神社」に徐福を祭神とする神社を創建した。さらに、のちに豊前へ進出する過程で宇佐の地にも先祖を祭る神社を創建した。このことについても先述した。

久留米の高良山に祖先神を祀ったのは、葛城氏の子孫である。かれらは佐賀県鳥栖から基山にかけての一带に勢力を張っていた。久留米とは目と鼻の先である。

葛城氏の祖は高産巢日尊、いわゆる高木の神である。この神は高牟礼神とも呼ばれ、現に今日でも地元の人は高良山のことを高牟礼山と呼び親しんでいる。この高木の神を高良山に祀ったのである。

しかし、一氏族の氏神としてなら「高木神」でもよいが、3世紀ごろ天孫族によって北九州一円に邪馬台国連合が出来上がると、その中心地に近い高良山の祭神も邪馬台国連合のための神である必要がでてきた。より公の神社とする必要が出てきたのである。そこで徐福集団出身地の秦の始皇帝を考えた。しかしいくらなんでも異国の地に秦の始皇帝を祀ることはあまりに恐れ多く、それは出来ない。



高木神社

そこで代案として考え出されたのが、始皇帝が着用していた冠を祭神とすることであった。始皇帝が着用していた冠というのは玉垂のついた独特の冠である。この玉垂を神として代用することにより、秦の始皇帝に代表される古代中国の権威を示そうとしたのである。このように特定の物で代用する思想は、宇佐神宮のご神体に薦枕を使ったことにも現れている。

なお、中国のかんむり「冕」（ベン）は、朝儀、祭礼などに着用されるもので、上に織物で覆える板を載せたもののことをいい、この「冕」の前後に垂れ下げる珠玉のことを「冕旒」（ベンリュウ）という。これが玉垂であり、これをつけた冠のことを冕旒冠（ベンリュウカン）という。筆者はこの「冕旒冠」が高良大社の祭神であると考えます。

なお、主祭神の左右に宇佐八幡と住吉神が鎮座されているが、「宇佐八幡神」については

既述した通り、徐福の子孫秦氏が、豊前宇佐の地に道教の最高神太一神、大元神を祀ったもので、八幡神は玉垂神の兄貴分である。つまり高良玉垂神は、八幡神の第一の随神とされる神なのである。また、住吉神は大綿津見神でこれも徐福集團の一つの代表神である。

鹿児島県串木野市にも徐福の冠に関する伝説がある。串木郷土史の頂峯院文書によれば、秦から徐福が来て、西岳で王冠をとどめたので山の名を冠岳と名づけたとあり、西岳より少し高い近くの山を紫尾山というのは、冠の紫の紐を収めたからだという。ここでも冠が重要なテーマになっている。

「冕」について更に敷衍すれば、玉垂の本数にも決まりがあり、天子の「冕」には十二本、諸侯は九本、上大夫は七本、下大夫は五本に決まっていたという。高良大社の玉垂の本数は何本か知りたいものである。十二本ではなく、つまり天子始皇帝の冠ではなく、七本かもしれない。その場合、高木神自身の冠を身代わりにし、高木神を祭神としたことになる。

4. 高良大社の創建

高良神社は、日本の古い史書には永く顔を出さない。767年に初めて勅使を以って大祭礼（御神幸祭）が開始されたとある。そして高良玉垂神が名神大社として列せられるのはなんと後代の818年のことである。

ところが、高良山の由緒を読むと仁徳天皇55年（367年）または78年（390年）の鎮座で、履中天皇元年（400年）の大社創建と伝えられている。

そして、高良山にはもともと葛城族の祖神高木神（高御産巢日神、高牟礼神）が鎮座していて、高牟礼山と呼ばれていたが、ある日玉垂命が一夜の宿として山を借りたいと申し出て、高木神が譲ったところ、玉垂命は結界を張って鎮座して居ついてしまったという。

これは極めて重要な伝承である。先に述べた筋書きとまったく同じである。つまり、高木神が最初にあり、次に玉垂神、そしていずれ武内宿禰と変遷することになることを意味する。玉垂神に乗っ取られた後は、高良山の中での高木神の位が下げられてしまったようで、鎮座の場所割で、玉垂神が山の最上段に祭られ、高木神は下の池の畔近くに位置する状態にされてしまった。高良山全体がもともとは高木神の山であったのであり、高木神が最上段の大社の中に祀られてしかるべきだったのにである。

いずれにせよ、その後の高良大社の祭神は玉垂神となり、1717年には武内宿禰へ変えられ、そして明治の1873年には再び、「玉垂」に戻したとされるが、それは時代ごとにいろいろな不都合が生じてきたためであろう。

高良大社の立て札には、武内宿禰の末裔紀氏が神官を務めてきたことが記されている。

これは、大宮司家が葛城氏であったことに由来するものであろう。武内宿禰には9人の子供がいたことは、すでに述べてきたところであるが、その一人に紀角宿禰がいて、その紀氏の子孫が高良大社の神官を務めていたものと思われる。高良の神裔を称する稲員くさかへ（草部）氏があり、同家には「草壁氏系図」があるが、その中で高良の神を武内宿禰とし、御子九男ありとし、その九王子を祀ったものだとする系図も上記の経緯を証明するものである。

杵島郡武雄市には奈良時代に伴朝臣行頼という者が営んだ武雄神社がある。その主祭神は武内宿禰で、その他に仲哀天皇・神功皇后・応神天皇を合祀している。その名前に、武内宿禰の父の屋主忍男武雄心命の名の一部がついていることも興味深い。この神社には総計239通もの古文書が伝えられていることでも有名である。武内宿禰の生地は間違いなく武雄だとここではされている。

5. 九州王朝説（古田史学）を支える稲員家文書

近年、八女郡広川町郷土史研究会より稲員家文書いなかず五一通（近世文書）が冊子として発刊された。同書巻頭の佐々木四十臣氏による解説「稲員氏の歴史と文書」いなかずでは、稲員家のことが次のように紹介されている。

「稲員氏の出自を同氏系図で見ると高良大明神の神裔を称し、延暦21年（802）草壁保只が山を降って、三井郡稲数村いなかず（現在は北野町）に居住したことにより稲員（稲数）を姓とした」という。

正応3年（1290）鎌倉幕府の下知により、稲員良参よしながが上妻郡古賀村（現在は広川町）に移り館所を構え田戸70町を領したことに、広川稲員氏の歴史が始まる。

南北朝時代の稲員氏の動静は不詳であるが、戦国時代に入ると一貫して豊後大友氏の旗下として行動し、在地豪族としての地歩を固めながら、高良社神管頭としても大きな役割を担った。稲員孫右衛門安則（1633～1707）の孫安綱が著した「高良玉垂宮旧傳祭祀神職略記」によると、（前略）八人神官の頭領にして、同社の諸式令の行務・御幸・遷宮ならびに神輿一件の司職にて、先駟の吏務あり。金鼓具の護人を司り、且つ当社の重器三種の神宝出納職たり（以下略）という」。大変な家系である。

（中略）

稲員氏は天正16年（1588）から寶暦2年（1752）に至る165年間、八代にわたり広川谷において大庄屋職を勤めた。中でも前掲した稲員孫右衛門安則は『家勤記得集』を著したのはじめ、数多くの記録類を書き残したことで知られる人物であり、広川

谷のみならず、あまたの水利土工を手がけて抜きん出た事蹟をも残している。はたまた寛文9年（1669）大祝保正・座主寂源ともに、絶えて久しかった高良社御神幸の復活を成し遂げたことは、同社の歴史においても燦然と輝く功績といえよう。」

（下図参照）

このように稲員家は時々の権力者からも崇敬を得ていたことが、同家文書の内容からもうかがいとれるのだが、なによりも注目すべきは、同家が高良大社の重器「三種の神宝」の出納職であったことだ。天皇家のシンボルである三種の神宝を持つ家柄こそ、九州王朝の末裔にふさわしいと見る。同時に高良大社が三種の神宝を持つ社格であることも重要である。伊勢神宮や熱田神宮でさえ三種の神宝すべてを持っているとは聞かない。しかも高良大社では三種の神宝を隠し持っているわけではない。御神幸祭ではその行列中に堂々と並んでいるのである。

「高良玉垂宮御神幸絵巻」に描かれた稲員氏(乗馬姿)の供奉のもよう。

原寸×㍶ （高良大社蔵）



康暦2年（1380）の奥書を持つ高良大（中略）社蔵書「高良玉垂宮大祭祀」にも「三種之神宝者、自草壁党司之事」「草壁者管長先駈諸式令職務也」とあり、稲員家が草壁を名乗っていた頃から三種の神宝を司る高良大社でも中心的な家柄であったことがわかる。ちなみに、高良大社は三種の神宝のみならず、「神功皇后の三韓征伐譚」で活躍する「干珠・満珠」の二つの宝珠も神宝としている（この珠については「宇佐への台与の遷都」の「香春神社と現人神社」の項参照、干珠・満珠譚はもともと海幸彦・山幸彦神話に始まっている）。更には七支刀も持っていたのだから、なんとも豪華絢爛、九州王朝の天子の居所にふさわしい宝物群とする見解もある。

さらに、この地が九州王朝の王都であったことを想像できる文書が高良大社文書『高良記』（中世末期成立）に記されていた。

「大并（高良大菩薩）、クタラヲ、メシクスルカウ人トウ クタラ氏ニ、犬ノ面ヲキセ、犬ノスカタヲツクツテ、三ノカラクニノ皇ハ、日本ノ犬トナツテ、本朝ノ御門ヲマフリタテマツルヨシ、毎年正月十五日ニ是ヲツトム、犬ノマイ今ニタエス、年中行事六十余ケトノ其一ナリ」

ここで記されていることは、百濟からの降人の頭、百濟氏が犬の面をつけて正月15日

に犬の舞を日本国の朝廷の守りとなって舞う行事が今も高良大社で続いているということだが、初代玉垂命がこの地に都をおいた時期、4世紀末から5世紀初頭にかけて百済王族が捕虜となっていることを示している。これに対応する記事が朝鮮半島側の史書『三国史記』百済本紀に見える。

「王、倭国と好（よしみ）を結び、太子腆支（てんし）を以て質と為す。」と。

「腆支王。＜或は直支と云う。＞……阿の在位第三年の年に立ちて太子と為る。六年、出でて倭国に質す。」

『三国史記』のこの記事によれば、397年に百済の太子で後に百済王となった腆支が倭国へ人質となって来ていたのだ。この397年という年は、初代玉垂命が没した390年の後であることから、倭王讃の時代となろう。なお、腆支は405年、父王の死去で、倭兵百人に伴われて帰国、王となったとされている。

一方、『日本書紀』応神8年3月条に百済記からの引用として、百済王子直支の来朝のことが見えるが、書紀本文には『高良記』のような具体的な記事はない。すなわち、百済王子が人質として来た倭国とは、近畿天皇家ではなく、九州王朝の都、三瀧あるいは高良山だったことを示している。

百済国王子による正月の犬の舞は、いわゆる獅子舞のルーツではないかと思われるが、七支刀だけではなく王子までも人質に差し出さねばならなかったことを考えると、当時の百済と倭国の力関係がよく示された記事と思われる。この後（402）、新羅も倭国に王子（末斯欣）を人質に出していることを考えると、東アジアの軍事バランスが倭国優位となっていたのであろうが、倭の五王が中国への上表文にて、たびたび朝鮮半島（百済など）の支配権を認めることを要請しているのも、こうした力関係を背景にしていたのではあるまいか。

このような東アジアの国家間の力関係をリアルに表していた伝承が、百済王子による犬の舞だったのであるが、現地伝承として、あるいは現地行事として伝存していた高良大社にはやはり九州王朝の天子が君臨していたことを示すようである。もう少し正確に言えば、現高良大社は上宮にあたり、実際の政治は三瀧の大善寺玉垂宮付近で行われていたと思われる。いずれも現在の久留米市内である。大善寺坊跡が「天皇屋敷」と呼ばれていた。

さて、最後に玉垂命の末裔についてもう一つ判明したことを報告しておこう。初代玉垂命には九人の皇子がいたが、次男朝日豊盛命の子孫が高良山を居所として累代続き（稲貝家もその子孫）、長男の斯礼賀志命は朝廷に臣として仕えたとされているのだが、その朝廷が太宰府なのかどうか、今一つはっきりしないが、高良大社発行『高良玉 垂宮神秘書同紙背』所収の大善寺玉垂宮の解説に次の通り記されている。

「神職の隈氏は旧玉垂宮大祝（大善寺玉垂宮の方）。大友氏治下では高一揆衆であつた。高

良大菩薩の正統を継いで第一王子斯礼賀志命神の末孫である」という。

玉垂命の長男、斯礼賀志命の末裔が、三瀧の大善寺玉垂宮大祝職（祝＝斎）であった隈氏ということであれば、斯礼賀志命が行った朝廷とは当時の王都、三瀧だったことになる。すなわち、長男は都の三瀧で政治を行い、次男の家系は上宮（高良山）で神事を司ったのを表しているのではなかろうか。

高良（こうら）大社は九州一の宮とされている神社があるが、1600年ほどの歴史と由緒があるという。しかし不思議なことに、この神様は日本書紀にも古事記にも記録されていない。

ということは、この高良玉垂命という神様は11世紀に編纂された「日本紀略」の西暦795年の条に記されるまでまったく不明であったことになる。何故、日本書紀も古事記もこの神様を抹消してしまったのだろうか？恐らく、大和朝廷にとって大和朝廷が祀る神様と異なる神様が存在することは不都合なことが発生したからだろう。

大和朝廷が西日本を統治始めたのは528年の磐井の乱の後からであることからして、西暦795年ごろから天皇家所縁の神社としたことが「日本紀略」に記されているらしいので、豪族磐井の筑紫国の守護神社であったと思われる高良玉垂宮を大和朝廷が認めた神社として一の宮に格上げたことは十分に考えられる。磐井にしてみれば、土地の守護神である神社を勝手に変えることは出来ない筈で、磐井が統治者となったあとも邪馬台国時代から続いた神社を引き継ぐであろうことは想像に難くない。

しかし、磐井が古代中国の呉国の流れを汲む異国の人間としたら、大和朝廷としては高良玉垂命の存在を認める訳にはいかないのではないだろうか？

大和朝廷は統合した国を始めるとき、その国に以前からあった神社（大抵、国または地域の一の宮）に神官を送り込んだ。当然、その神社には元からの神官がいる訳だから、住民たちとの無用な摩擦を避ける意味からも大和朝廷はNO.2の神官を送り込む訳である。現に、出雲大社にも現国造官司の千家とは別に次の位のNO.2として送り込まれた神官の子孫がおられるようである。高良大社にも出雲大社のNO.2の神官と同じ苗字の神官が昔おられたようである。

九州勢力は高良の神を中心として一体であった。また、一体にならざるを得なかった。なぜなら九州はひとつの島であり、北には本州（大和）、西には多くに島々とその向こうには朝鮮半島、そして大陸という大きな勢力に囲まれていることを知っていたからである。そして反乱を起こした磐井は、確認できる日本の歴史上、大陸的視野で事態を判断することを試みた一人の地方君主であり、筑紫の国は、中央政府、大和朝廷に大反乱を行った唯一の国となった。そしてその勢力は現在の高良大社（高良の神）を中心に団結された勢力であった事が考えられるのである。

そのことは、近世になってからも時々勢力がいろいろと高良大社を利用したことにも

現れている。

6. 高良さん関連事項

① 神と仏の山、高良さん

高良山は、玉垂神やその他多くの神々の社、つまり仏教とは関係ない神の山だとばかり思っていました。

ところが一昔前の高良山一帯には寺が林立し、お寺さんに支配されていたことを知りました。それを知ったのは「高隆寺」のことを調べてご覧と柏原萌氏に言われたことがきっかけでした。その高隆寺は現在跡形すら無くなっていますが、場所は「キテイ川（北井河）の横」（高良大社本坂下に向かって左手100メートル）で、住所は安在地（あぜつ）、現在の土地所有者は平木、渡辺両氏の私有地になっているとのことでした。

聞くとところによると、なんとこの高隆寺は一時期、高良山玉垂宮を支配し、九州では英彦山、阿蘇山と並ぶ天台の大寺であったのです。（高隆寺本坊が高良山蓮台院御井寺と号す。）そして高良大社とか高良神社とかの呼称は明治の神仏分離後の国家神道による呼称にしかすぎないということです。

そこでいろいろな文献をアサってみましたが、昭和9年に出版された倉富一氏の「高良山物語」が大変詳しく、以下に「高隆寺」を簡単にまとめてみました。

「高良玉垂宮縁起」では、高良社の創建は履中元年（西暦400年ごろ）となっているようです。そして歴史の表面に正式に現れるのは、平安初期の「延喜式」で、「筑後国四座大二座小二座」とあり、「三井郡に高良玉垂命神社、豊比咩神社、伊勢天照御祖神社の三社、」とあることによります。この段階では三社のみで、他の祭神は祭られていなかったようです。

一方、高隆寺については、「高隆寺縁起」では、白鳳12年（西暦660年ごろと推定される）に堂宇を作り、高隆寺（太神宮寺）と称するという、となっています。この創建までの事情は次の通りです。

大祝旧記によると、美濃理磨（みのうとしまろ）（武内宿禰の子孫と称する）の三男保依（やすより）が出家して隆慶（りゅうけい）と号し、後の座主家の基を開くとされています。

白鳳という年号は所謂私年号（偽年号）で正史に見えませんが、此頃の社寺縁起などの中に多く用いられています。従って一定した年次は求められませんが「高良玉垂宮縁起」に「白鳳十三歳癸酉^{きゆう}」とあったと云われており、此頃に最も近い癸酉（きゆう）年は第四十代 天武天皇元年（西暦 673 年）に相当します。したがって高良山関係の文書中にある白鳳は、天武天皇元年を遡る十三年、即ち第三十八代天智天皇元年（西暦 661 年）以降を称するようになったといえます。

以上より見て高良山中に一僧来たって仏教を始め、大祝の三男をして社僧となしたのは神社創立後三百年頃即ち天智天皇の時代であると云われており（つまり西暦 660 年ごろ、一方神社創立はそれより 300 年近く前の西暦 400 年頃とされています。その後、高隆寺を中心に高良山は隆盛を極めることになるが、神職と座主の血縁関係は、「旧大祝家傳」によると、「白鳳年間、武内宿禰の裔（子孫）美濃理麿（みのうとしまろ）保続（やすつぐ）の一男保義（やすよし）が初めて祝職（はふり）となり、二男良続（よしつぐ）は武臣となり、三男保依（やすより）は出家し隆慶と号して妻帯の僧となり、四男保通（やすみち）は大宮司職に任じ、五男連成（つぎなり）は日下部（草壁）を氏として神管領となった」と云っています。つまり神職と座主を一族から出す仕組みを伝えているのです。

高良山の場合は、明治新政府の下、神仏分離令によって神社は勿論残りますが、お寺の「高隆寺」がなくなってしまいました。

そして今度は昭和 20 年 8 月 15 日の敗戦により、武神で名高かった高良大社の賑わいはむなしく消えてしまいました。その後、山は荒れ、杉の大木も今は跡形もない状態になっています。

② 国府跡

味水^{うましみず}御井神社は JR 久留米大学前駅北側にあるが、この近くに筑後国府跡の一つがある。（筑後国府は計四回移転しており、その第三回目の国府跡がここ、第四回目跡が南筑高敷^{うましみず}敷地内である。最初の場所は合川町古宮、第二回目が合川町阿弥陀地区であった）。味水神社には朝妻の清水があり、今でもコンコンと清水が湧き出ているが、この聖水が御井または三井の名称の起こりとされる。一説には、この清水と北野町大城小学校校庭の益影に井、それに高良山の御手洗池（厳島神社が真ん中に鎮座されている）の三つの清水が三井郡の呼称発祥の地ともされる。第三番目の国府の時、その庭先に朝妻の清水を引き込み、曲水の宴に利用していたのであろう。

③ 祇園山古墳は「卑弥呼」の墓？

高良山山麓の赤黒山に「祇園山古墳」がある。一辺約 25 メートルの方墳で、高さ約 6

メートル、表面二段に葺石がめぐらされている。墳頂部に縦1.7メートル横0.8メートル、内面朱塗りの箱式石棺が埋葬されている。九州における十数基の方墳中最古のものである。まだ年代がはっきりしていないが、祇園山古墳の墳丘が、地山削り出しの際、周囲の埋葬主体（甕棺墓三、箱式石棺墓七、石蓋土壙墓二五、竪穴式石室一三、その他不明・未発掘のもの多数）を上面カットしたとみとめられることや、出土品に鏡・装身具・鉄器の他土師器・須恵器があることなどから、三世紀末から四世紀末にかけてのものと見られている。

ここで注目頂きたいのは、甕棺と箱式石棺が同一の場所から発掘されていることで、徐福の項で述べた甕棺の分布からすると、祇園山古墳の地に一番最初に葬られたのは徐福集団の中の誰か指導者の一人であった可能性もある。そしてその後に、箱式石棺墓の墓制を持つ天孫族を中心とした騎馬民族の中心人物が同じ場所に葬られたと思われることである。

高良山は高御産霊神（高木神）が地主神の山である。現に高良山中には高御産霊神社があり、台与を表す「豊比咩神社」もその近くにある。

更に天照大神神社もある。天孫族である。本稿では卑弥呼を記紀が記す天照大神として扱ってきた。もしかすると、祇園山古墳は卑弥呼の墓なのではなかろうか？倭人伝では墓の大きさを百余歩と伝えているが、中国には短里と長里の測量基準があり、短里だと1歩は約0.257メートル、100歩だと25.7メートルとなる。



祇園山古墳

最後の最後に、ようやく卑弥呼にたどり着きました。本稿の副題「卑弥呼と台与の姿を求めて」として追いかけてきた両姫のうち、台与は奈良三輪山の麓「箸墓」に眠り、卑弥呼は多分この高良山の「祇園山古墳」に眠っているものと判断しています。

墓のことよりも、両姫はなんと言っても伊勢神宮の内宮・外宮に祀られ、今日でも国民の深い崇拝の対象になっていることは、極めて望ましいことです。これで筆をおくことにします。

(附表) 古々代の動きとその推定年代

BC403	(中国) 晋が韓、魏、趙の三国に分かれ、それ以前の「春秋時代」の秦、齊、燕、楚とともに七雄の「戦国時代」となる。春秋戦国時代の500年間は戦争に明け暮れた。この頃、朝鮮半島への逃亡民や流浪民が多くなる。日本へはごく一部が移入し、また江南地方からの渡来もある。
BC400	佐賀・菜畑の水田跡 環濠集落つくられ始める。倭人渡来。
BC320	水稻耕作、北部九州に確立 弥生時代の始まり。江南起源倭人多数渡来。
BC256	(中国) 秦、周を滅ぼす
BC221	(中国) 秦始皇帝、中国を統一
BC209	始皇帝、徐福に命じ、東方に不死の薬を求めさす。 徐福、有明海から筑紫平野に上陸(三千人)、一団が吉野ヶ里・奴国・葛城邑・早良邑などを作る。 この頃日本全体の人口はわずか60万人で九州は特に希薄。
BC202	(中国) 劉邦、帝位につき漢王朝始まる。
BC200	北部九州で小国の成立、末露国など
BC194	朝鮮半島では衛氏が、殷の王族だった箕氏を討ち、衛氏朝鮮をたてる。
BC108	(中国) 漢武帝、衛氏朝鮮を滅ぼし「楽浪郡」など四郡を設置する
BC100-0	玄界灘に面した九州北岸に古代朝鮮より多数のツングース系渡来人、その中に天孫族も含まれ物部族を引き連れ上陸
BC100-0	「奴国」がいち早く頭角を現し、北九州の覇を唱える。(須玖遺跡) この頃、倭国は既に「百余国」に分かれていた。
BC37	朝鮮半島では高句麗建国
紀元前後	百余国のうち、一部は前漢の楽浪郡に朝貢していた。
5	「東夷王、大海を渡りて国珍を奉ず」(漢書)
9	(中国) 王莽 ^{おうもう} 皇帝となり「新」王朝始まる(王莽23年殺害さる)
25	(中国) 光武帝即位、後漢王朝始まる
57	中元二年春正月、東夷の倭奴国王、使いを遣わして奉献す。(奴国) (光武帝紀・後漢書) 光武賜に印綬を以てす。(東夷列伝) 「漢委奴国王」印(志賀島出土)
107	面土国王(末盧国王)帥升等、生口百六十人を献じ、請見を願う。 (東夷列伝) 数カ国の国王が謁見を請うた
147	(中国) 後漢王朝、桓帝(147-167)
168	(中国) 後漢王朝、霊帝(168-188)
178-183	倭国大乱「倭国乱れ相攻伐すること歴年」

- 210 卑弥呼を倭国女王に共立し、「倭国乱」終わる。物部族が主導権を握る
夜須「邪馬台国」の成立
- 215 出雲の国譲り神話（遠賀川物部が大国主と国譲りを交渉）。
- 216 （中国）曹操魏王となる。
- 220 （中国）曹操死す。その子曹丕、後漢の献帝より位を受け皇帝となり魏王朝
- 220－230
葛城氏などの徐福集団は、邪馬台国連合の一員とはなるが、主導権は奪われる。葛城氏は邪馬台国の先遣隊として奈良へ移動させられる。秦氏はその移動に豊前まで同行し、そこに前線基地を設ける（中津・宇佐）。
葛城王奈良にて順次即位（綏靖・安寧・懿徳・孝昭）
- 221 （中国）劉備、皇帝となり蜀漢王朝を始める
- 229 （中国）孫権、皇帝となり呉王朝を始める
- 234 （中国）公孫淵、魏より楽浪公に封じられる。崇神誕生、台与もこの頃。
- 238 （中国）魏、公孫淵を殺し公孫氏滅亡、楽浪帯方の二郡接收
- 239 邪馬台国の女王卑弥呼、魏へ朝貢し、明帝より親魏倭王の金印下賜さる
孝安帝（葛城氏）大和南部へ進攻
- 242 九州邪馬台国伊声耆・掖邪狗ら魏錦に生口・倭などを奉獻
- 243 狗奴国との戦況不利
を訴え魏へ遣使（邪馬台国卑弥呼）
- 245 九州邪馬台国、魏から軍旗を授かる。孝霊帝（葛城氏）大和中央に都を遷す
- 247 魏の軍使一行の来朝
- 248 女王卑弥呼の死
九州邪馬台国の盟主に水沼君をたてるが、同盟国従わず、台与が女王となる。
孝元帝（葛城氏）都を大和旧領域に遷す
- 250 魏の軍使一行の帰国。
倭の大乱後（狗奴国との戦い）筑紫邪馬台国の諸部族豊前へ移動開始
伊都→糸田、奴→中津
- 255 台与 豊前京都（福岡県みやこ市）へ移動する
- 260－265 ニギハヤヒの東遷神話
ニギハヤヒ尊が遠賀川物部族・中臣氏をつれ東遷。別隊として台与を含む天日矛族は周防灘から東遷する。奈良で台与の近畿邪馬台国が樹立され、葛城族もこの体制をサポートする。
- 263 （中国）魏、蜀を滅ぼす
- 265 （中国）司馬炎、魏を滅ぼし、西晋王朝興る
- 266 泰治2年、奈良邪馬台国女王台与の遣使
- 270 奈良邪馬台国の滅亡 邪馬台国より孝元帝に后・妃を献上

- 280 (中国)西晋が呉を滅ぼし天下統一 開化帝(葛城王朝)の即位
- 280-85 神武の東征神話。実態は水沼君(崇神)の東征。
「崇神東遷」ともいう(崇神=水沼君、大和葛城王朝へ婿入り)。
大伴・久米氏が従った。
秦氏が大宰府に「筑紫王国」を樹立し九州邪馬台国の統治を引継ぐ。
- 290 葛城王朝の滅亡、下記の大和王朝へ移行
- 290 崇神天皇の大和王朝の成立。
- 290-300 扶余王扶羅 数千人をつれて渡来し日向で王となる。
- 307 武内宿禰誕生、成務天皇誕生も同じ頃
- 313 高句麗、楽浪郡を併合、帯方郡滅亡
- 316 (中国)劉淵、西晋の都長安を陥落させ西晋滅びる
- 318 (中国)西晋残存勢力、司馬睿、帝位に就き東晋王朝を始める。五胡十六国・南北朝時代の始まり。
- 318 垂仁天皇、田道間守に命じて常世国に非時香菓を求めさせる
- 325 ヤマトタケル、熊襲を征伐する。その後エミシ討伐へ。
- 330 景行天皇、九州遠征。
- 350 高句麗から新羅・百済が分離独立する
- 364 仲哀天皇逝去、神功皇后、新羅を征伐。凱旋後、筑紫で応神天皇を生む。
- 367 高良神社鎮座
- 368 藤大臣、耳納山を開き、高村大善寺に御殿を作り、肥前川上に桃桜沈輪討伐。
- 369 倭・百済連合軍、新羅を攻めて破る。
- 370 神功皇后・応神の東征。応神王朝始まる。神功皇后が摂政
- 372 百済王近肖古、晋より「鎮東將軍・領楽浪太守」に任ぜらる。
- 385 仁徳天皇即位
- 390 藤大臣死。高三瀦塚崎に奉葬する。(御廟塚)
- 391 倭国の半島進出、百済・新羅、倭に服属
- 392 武内宿禰の息子達が朝鮮半島で活躍、日本書紀記述、実年と唯一合致
- 394 応神天皇崩御
- 396 高句麗広開土王、百済王近肖古を打ち破る。近肖古は九州熊本へ
- 397 百済 王子直支を差し出す
- 399 倭に攻められる新羅に高句麗が援軍を出す
- 400 (履中元) 始めて社を高良山に建てる。(高良玉垂命神社)
- 400 ごろ、馬はじめて西日本に導入さる。
- 404 倭寇 帯方に侵入、高句麗により壊滅さる
- 410 ごろ 筑紫王国、三瀦大善寺へ遷都、高良玉垂神社が守護神。

あとがき

「東京御井町会」という高良大社のある御井町出身の方々の集まりがあり、元「主婦の友」編集長、笠伊次郎さんの世話で、年に数回会合をもたれているようですが、平成20年9月13日のその例会で、私に「高良大社の歴史と役割」という題で話をしろということになり、以下のレジュメを用意して30分ほど話をしました。

当日、出席して驚いたことは、高良大社大祝（大宮司）本家のご子孫、厨大貳さんが90数才の高齢にもかかわらず出席されていたこと、その他、現在の宮司竹間宗麿さん、久留米市役所東京事務所の理事さん、また、久留米市在住の数名の役員の方も出席されており、総勢52名の錚々たる方が勢ぞろいされている中での講演となりました。

「飛んで火にいる夏の虫」とは、小生のことを表したもので開演前に冷や汗をかいてしまいました。始まってからは「めくら蛇に怖じず」を決め、何とか30分をこなしました。

会場は「音羽御殿」で名高い、鳩山会館の大和室で、たまたま鳩山邦夫氏も久留米への出張を前に慌しく皆さんに挨拶をして出発されるという最中でした。

その時に使ったレジュメはA4版1枚の以下のものですが、膨大な量の本稿の全体像を把握する一助として、ここにそれを転載します。

高良山の歴史と役割

鳩山会館 2008・9・13

伊藤 久

一、古代九州の様子

1. 縄文人口7－8万人。東北に多く九州は過疎地帯。南洋からも若干渡来人あり。
2. 倭人（江南人）朝鮮より渡来。稲作伝来、弥生時代始まる。BC300年ごろより。
3. 徐福集団、佐賀に上陸、吉野ヶ里邑ほか、筑紫各地に以下の邑を作る。BC200。
（筑紫野市・秦、博多・安曇、早良・平群、基山・紀、三根・葛城、佐賀・巨勢）
4. 満州騎馬民族系、玄海灘沿岸に渡来、天孫族・物部・宗像、天日矛族。BC100。
5. 天孫族は甘木に拠点（天照大神が卑弥呼）物部と宗像族が久留米・八女へも進出。
6. 伊都国王天日矛氏と秦氏が縁戚関係、子供の豊受姫が台与。海部・尾張氏の祖。
7. 台与は日矛氏と、その後、ニギハヤヒ尊は物部氏と畿内へ東遷。夫々王国を開く。
8. 邪馬台国連合西南部に熊襲襲来、吉野ヶ里や佐賀周辺の村々壊滅状態。卑弥呼死亡。

9. 宗像族の水沼君（三潯郡）卑弥呼の後任となり事態收拾するが、熊襲の来襲は続く。
10. 畿内進出を目指し、上記筑紫勢は豊国へ集結。水沼君も。（そして神武東征）。
11. 台与が近畿邪馬台国女王となる。水沼君は奈良葛城王朝に婿入り。のち崇神天皇。
12. 秦氏が九州邪馬台国を引継ぎ大宰府に都府楼を建設。筑紫王国を樹立。
13. 九州生れの応神天皇、成長して母神功皇后とともに近畿へ東征。応神王朝を始める。
14. 朝鮮不穩、筑紫王国は本拠地を大宰府から久留米・三潯（大善寺）へ遷都。
15. 奈良継体と筑紫磐井、対新羅政策で衝突、筑後で大戦争、磐井敗北。岩井川残る。

二、高良玉垂神社

16. 徐福集団、秦・葛城・平群・巨勢・紀・蘇我六氏に、久米・怒能伊呂姫・若子宿禰を加えた九氏が武内宿禰九人の子供の名と同じ。秦氏が徐福の子孫。佐賀金立神社。
17. 高木神が高良山最初の祭神、次に秦の始皇帝冠の玉垂（冕旒）、武内宿禰、玉垂神。
18. 高木神が葛城氏の祖。武内宿禰は葛城氏の子孫。紀氏は葛城氏の一派。
19. 最初の宮司は紀氏。後に物部公鏡山氏。邪馬台国を継承した秦氏は筑紫国王となる。
20. 秦氏豊国へ勢力拡大、宇佐神宮の元社創建（中津薦神社）。また御許山に先祖を祀る。
21. 三潯大善寺玉垂宮大祝職（祝＝斎）隈氏先祖は玉垂命第一王子（紀氏）。第二王子の子孫が稲員家（広川町）。玉垂神の九人の御子＝高良御子社。
22. 大善寺の御塚、権現塚および銚子塚古墳、八女の岩戸山古墳は歴代筑紫国王の墓。
23. 高良山神籠石は朝鮮よりの寇に備えるため。筑後川を第一防波堤とする。
24. 高良山には神々が集結。御祖・高樹・八幡・住吉・琴平（大物）・厳島（宗像）・大山津見（日吉）・真根・豊比咩（台与）。筑紫王国の精神的拠り所。海外折衝の舞台。
25. 高良山を制する者は九州を制す（五所神社）。磐井の筑紫王国、南北朝時代懷良親王、戦国期大友氏筑後制覇、秀吉の九州制覇、等々。

以上

引用参考文献

- 北野町史誌 北野町史誌編纂委員会 北野町
古代中国と倭族 鳥越憲三郎 中公新書
古代朝鮮と倭族 鳥越憲三郎 中公新書
倭人・倭国伝全釈 鳥越憲三郎 中央公論新書
女王卑弥呼の国 鳥越憲三郎 中公叢書
弥生文化の源流考 鳥越憲三郎 大修館書店
神々と天皇の間 鳥越憲三郎
中国からみた日本の古代 沈仁安 ミネルヴァ書房
邪馬台国の原点 甲谷忠義 文芸社
渡来人から倭人社会へ 片岡宏二 雄山閣
倭人と韓人 上垣外憲一 講談社
古代日本の渡来勢力 宗潤奎 街と暮らし社
「徐福」の謎 碓井静照 ガリバープロダクツ
徐福伝説 羽田武栄・広岡純 三五館
NHKビデオ「日本人」
日本の神話と地名のはなし 由良弥生 ランダムハウス講談社
大宰府は日本の首都だった 内倉武久 ミネルヴァ書房
卑弥呼と神武が明かす古代 内倉武久 ミネルヴァ書房
卑弥呼の幻像 富田徹郎 NHK出版
卑弥呼はどこにいたのか 西川正行 葦書房
卑弥呼の居場所 高橋徹 NHK BOOKS
邪馬台国の秘密 高木彬光 光文社
箸墓の歌 小椋一葉 河出書房新社
考古学からみた邪馬台国の東遷 奥野正男 毎日新聞
邪馬台国の位置と日本国家の起源 鷲崎弘朋 新人物往来社
邪馬台国研究事典 三木太郎 新人物往来社
邪馬台国は東遷したか 安本美典 三一書房
邪馬台国の真実 安本美典 PHP 研究所
封印された邪馬台国 安本美典 PHP 研究所
古代物部氏と「先代旧事本紀」の謎 安本美典 勉誠出版
卑弥呼の謎 安本美典 講談社現代新書
邪馬台国発見史 赤城毅彦 雄山閣
優曇華花咲く邪馬台国 原田実 批評社

神々の原像 大野七三 批評社
天皇家のふるさと日向をゆく 梅原猛 新潮社
天皇家の誕生 井上辰雄 遊子館
古代日本正史 原田常治 同志社
古代の日本と渡来人 井上満郎 明石書房
九州のなかの朝鮮 考える会 明石書店
倭国の謎 相見英咲 講談社
ヤマト国家成立の秘密 澤田洋太郎 新泉社
日本古代史の謎を解く 澤田洋太郎 新泉社
天皇家と卑弥呼の系図 澤田洋太郎 六興出版
古代日本の「地域王国」と「ヤマト王国」上下 門脇禎二 学生社
古代日本の謎 神一行 学習研究社
封印された日本創生の真実 関裕二 KKベストセラーズ
古代史「謎解き事典」 関裕二 三修社
おとぎ話に隔された日本のはじまり 関裕二 PHP
天孫降臨の謎 関裕二 PHP
東アジアのなかの日本古代史 田村圓澄 吉川弘文館
王権誕生 寺沢薫 講談社
天皇誕生 遠山美都男 中公新書
新・古代出雲史 関和彦 藤原書店
磐井の乱と九州王朝 中河原喬 同成社
久留米は邪馬台国の「ミヤコ」だった 広木順作
九州水軍国家の興亡 武光誠 学習研究社
騎馬民族国家 江上波夫 中公文庫
騎馬民族と日本人 武光誠 PHP 研究所
邪馬台国と卑弥呼の事典 武光誠 東京堂出版
九州古代王朝の謎 荒金卓也 海鳥社
九州王朝と日本の古代 田口利明 三一書房
古代葛城とヤマト政権 御所市教育委員会編 学生社
高良山史 大田亮 神道史学会
日本の神々 谷川健一編 白水社
九州人 房総にはまる 伊藤久 うらべ書房
福岡県百科事典 西日本新聞社
武内宿禰と大和朝廷と高良山 井上正夫
朝鮮の歴史と文化 姜在彦 明石書店
韓国歴史地図 韓国教員大学歴史教育科 平凡社

ブログ 古田史学会報No ; 24、25、26、44号 古賀達也
ブログ 新しい日本の歴史
ブログ 玄松子の記憶
ブログ 大城村郷土読本 野口治太郎
ブログ 邪馬台国と大和朝廷を推理する
ブログ 古代文明の世界へようこそ 倉橋日出夫
その他、ホームページ上の記事・写真